女學世界

四月一日發行

第十巻第五號



明治三十三年十二月廿五日 明治四十三年三月廿六日 印刷納本
第三種郵便物認可（毎月一回廿六日印刷納本）

呈

高等女學校卒業生諸姉

◎花嫁の試驗

目出度き御卒業を祝し併せて學校の試驗よりも更らに六ケ敷き花嫁の試驗が諸姉の御目前に迫つて居る事を警告致します。諸姉は定めてお嫌やでせう、けれども是ばかりは到底もお逃げになる事の出來ない最後の試驗であります。それとも學校を優等で御卒業になつたからとて花嫁の試驗は劣等でも好い。落第しても構はぬ、と思召すでせうか。

◎試驗準備

まさか諸姉は女子獨身論者でも又は社會主義者とか女壯士とかを御氣取り遊すでも有ますまい。して見ると昨日まで學校で御勉强になつた樣に今日からは早速、花嫁の試驗の御準備が御大切かと存じまして玆に御卒業御悦を兼ね其御準備に就て少く申上たいと存ます。

◎速成と本科

諺に、玉も磨かざれば光なしと申します通り天性お美い方でも皮膚の營養と化粧品の選擇に御注意遊ばさるゝ事が最も肝腎で、間にはお化粧と云へば何でも白粉を塗りさへすれば可いやうにお考への方もありますけれども、左樣な速成主義では玉の光りは輝くものではありません。彼の自然の花の生き〳〵として麗しき光澤を發輝するには本科修業でなくては可けません又花嫁の御試驗も滿足に御通過は望まれません。

◎合格疑ひなし

されば先づ生理的に皮膚の營養を能くするには乳白化粧水レートに限るので有ます、此レートは御手水の時とか御入浴後とかに小量づゝお使用になれば可いので特にレートはおつけになつても少しも目に立たずポーッとした櫻色の光澤が出ますので、夫が自然と皮膚の營養に爲つて肌理も濃かになり仍ち何時何時、花嫁の試驗に御逢ひになつても御合格疑ひなしであります。是れ理想的化粧品としてレートのレートたる特長であります。

◎玉椿の千代かけて

猶ほ終りに臨み重ねて諸姉の御卒業を祝すると與に更らに一層御目出度き御良縁の一日も速かならん事を祈り併せて花嫁の試驗御準備として一度びレートの御試用あらんことを玉椿の千代かけて冀望致します。

乳白化粧水レート發賣元　平尾賛平謹白

四月一日より

現代大家　半切畫展覽會（當店新美術部に於て）

第十九回新柄陳列會

懸賞裾模樣圖案陳列

寄せ切れ見切り反物大賣出し

懸賞少年選書及繪畫陳列

第二回兒童博覽會（新奇なる餘興有之申候）

内外玩具參考品分類陳列

懸賞寫眞優等印畫陳列（當店寫眞部に於て）

日本橋駿河町

三越吳服店

女學世界第拾





卷第五號目次

一品一効

!!純無鉛!!

●一品多能の望なきを主張する吾製造各種の化粧料は常に

●如斯美人を試金石とし着實に善良の効果を收めつゝあり

御料たつた白粉

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

御料あらいこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

欧羅巴宮殿式

御料クリーム

▲グリスリンにもあらず▼



▲アブラぶんにもあらず▼

化粧界新美御

東京市京橋區南傳馬町

電話本局三十番三千番○振替口座九二三九番

流行の平打　大西白牡丹

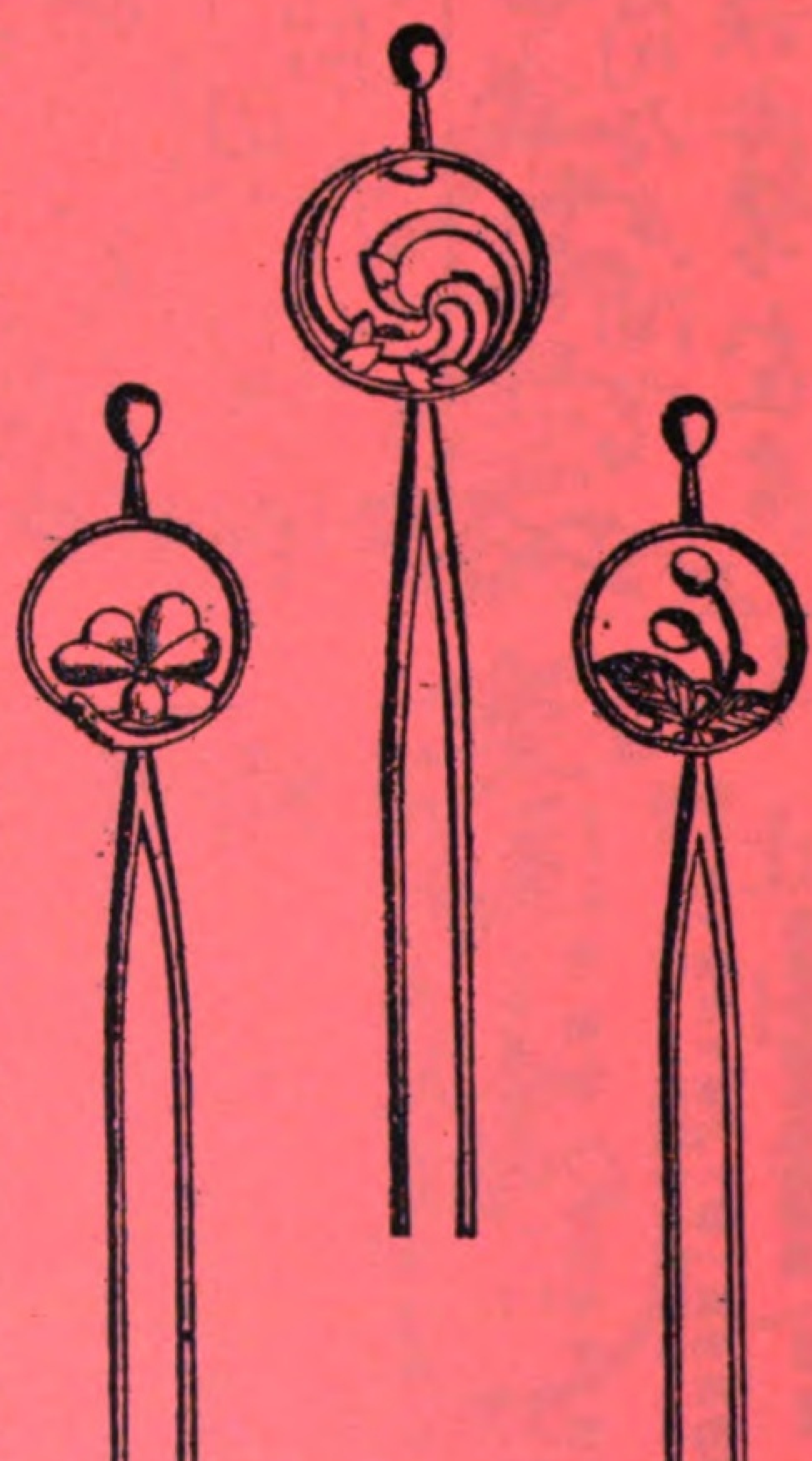
四月一日より

第三回髪かざり新形陳列會

三階　新作女子手藝品陳列

にて　新製美術工藝品陳列

右新案流行の品々夥多取揃候に付き同日より店内一面に陳列致候間賑々敷御光來の程伏て奉願上候



眞珠な櫻の實に應用せし十八金の彫刻　金貳拾圓

二十金巴水の透しにプラチナのさくら　金貳拾五圓

二十金のかたばみにダイヤモンド入り　金貳拾參圓

女(いの一)

四月一日より十五日まで

花見衣裳賣出し

破格見切反物、よせきれ

餘興福引

御買上げ高五圓毎に福引券一枚呈上

日本橋區通旅籠町（電車停留場人形町通小傳馬町）

大丸呉服店

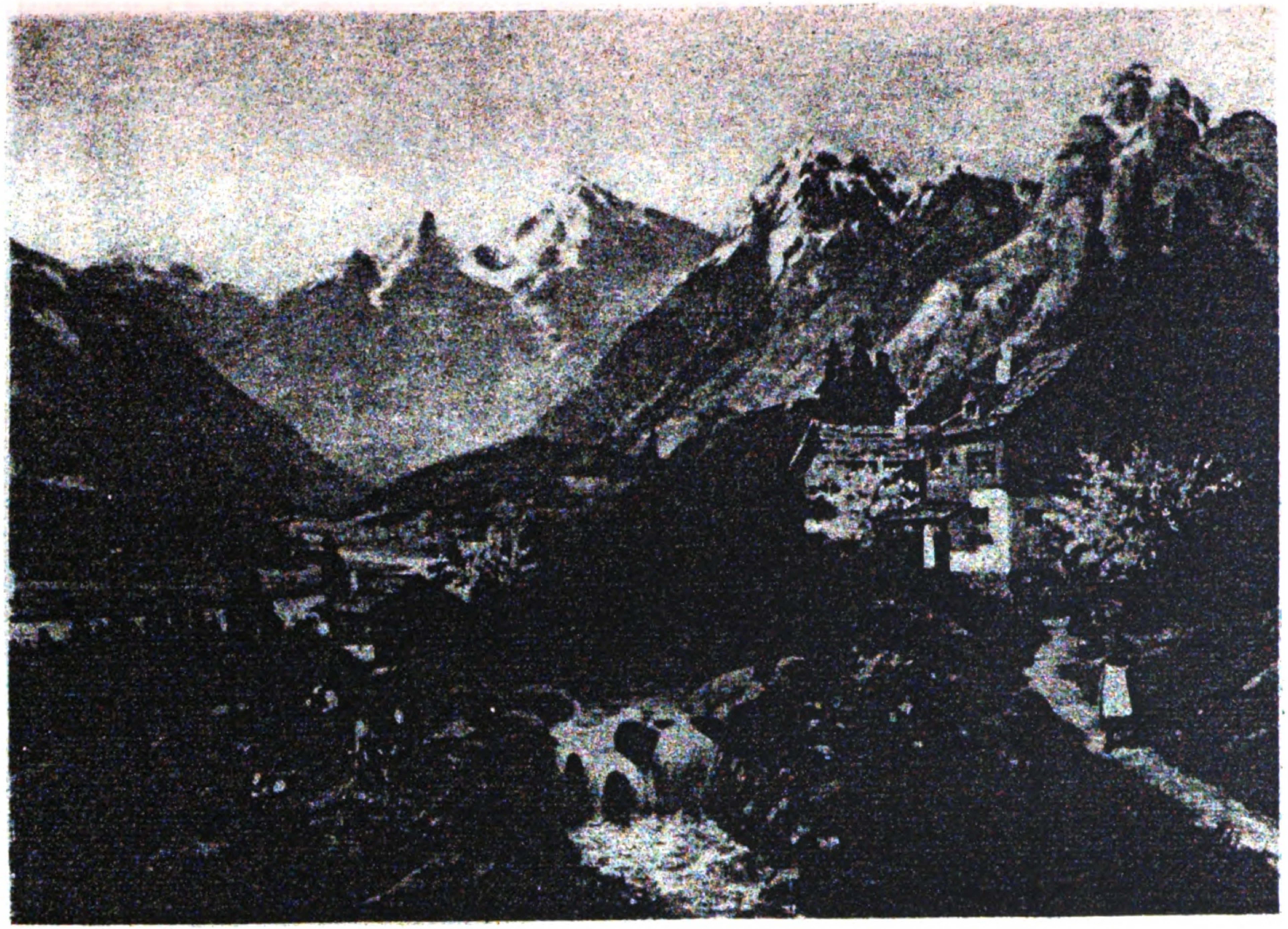
商品目錄書は御申込次第御送附仕候
本店にて御買上げ相成候と價格常に同一に御座候

郵便註文

女（いの三）


ネッスル
コンデンス・ミルク
ミルク・フード
育兒に
必要なる
最良滋養品
(いの四)

春たけなは



田中製版所三色版

●婦人一生中に最も心配な事實

政治上實業上に外交の繁き夫を持つ夫人と日々多數の嫖客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難產と流產と不姙症は必ず來るべし

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他人に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の膣子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感せば婦人は冷へ込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寶なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を內用する故遂に長引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病菌侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の衰れるは實際惡き土地の田畑に滿足の農產なき道理なり

婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益〻を告るに至る余は藥劑師にて衛生の天職上豈に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨乙伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥效を發揮すべく可要球（座藥にて內用藥にあらず）を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮內膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み子宮糜爛して痛み、子宮出血して褌を汚染し、厭な處に惡臭ありて他に嫌れ又は燃へ立つ搔痒を起し搔ば痛む症、月經時の疼痛と月經過多に惱み或は痳毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何も其の効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其の藥效を顯すを以て婦人の姙娠すべき局部と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を內用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治療す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、拾八球入壹圓、四拾球入貳圓

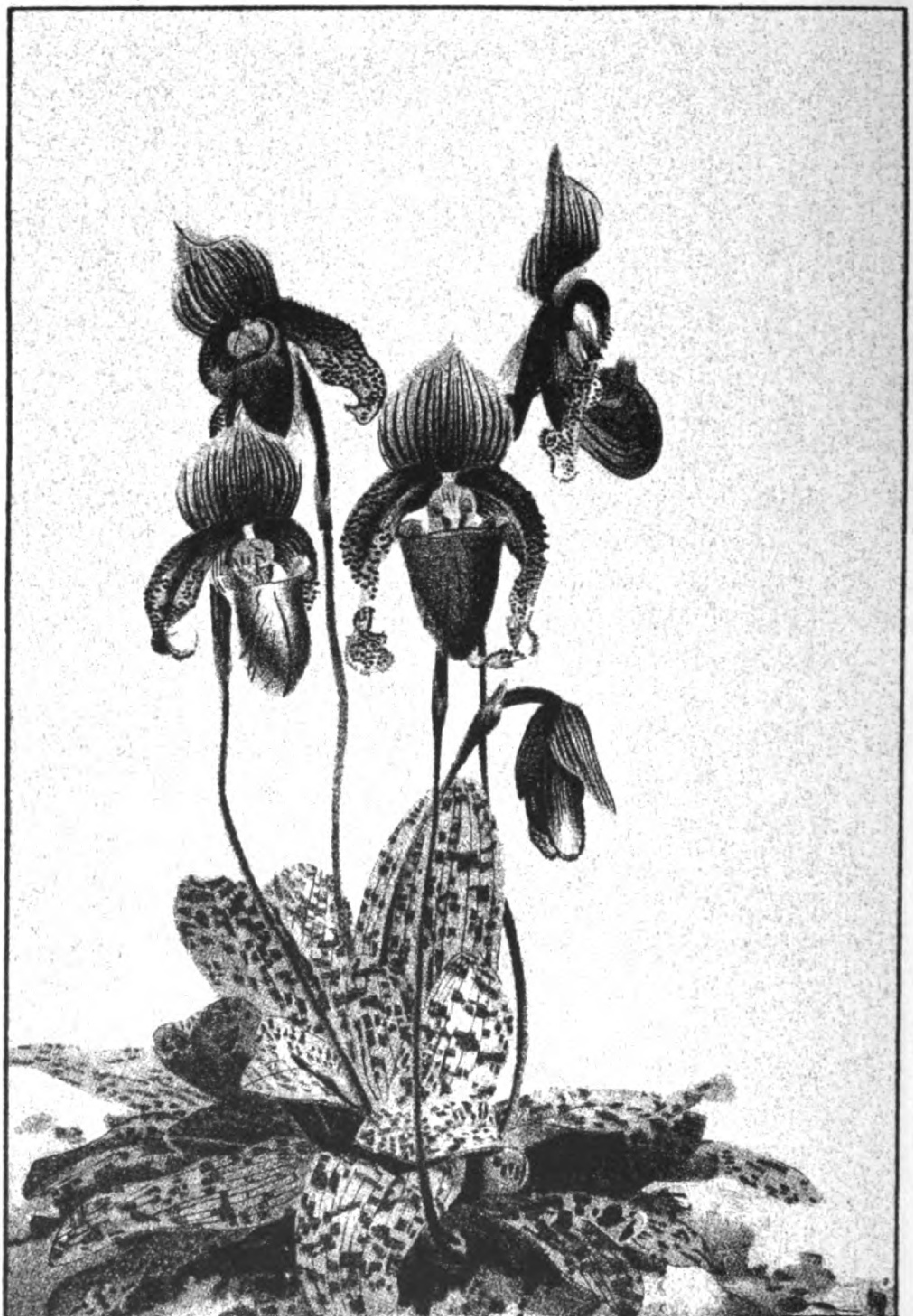
「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓（いづれも內地遞送無料）

發行所 東京市本鄕區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉**
振替貯金口座東京千五百番

女（ろの一）

女(ろの四)

（泰西珍草花譜）　鳥かぶと



四月一日より

新製品陳列會開催

○今様源氏振模様圖案陳列
○三都舞振人形陳列
○活動玩具各種陳列

寄せ切見切反物大賣出し

四月十日より

五月幟武者人形陳列

東京日本橋

白木屋呉服店

穩健にして摯實優美にして高尚

婦人画報

四月一日發行　四月の卷　一冊廿五錢　郵税二錢　六册税共壹圓五拾錢　十二册税共二圓八拾八錢

讀物

婦人の墮落　澤柳校長
幽しき婦人の態度　湯原元一
結婚の觀念　下田次郎
藝妓を要求の社會　宮田修
言葉と扮裝　鍋島夫人
主婦と召使　山脇房子
偉大なる女の勢力　原胤昭

◎花で養成さるゝ小兒　倉橋惣三
◎黒井繁乃の傳：遠山稲子
◎女教師と音樂家　尾島菊子
◎靈肉の救濟者り：女記者
◎デル孃訪問記
◎社交界への初陣：やち女
◎嬉しき卒業の悲しき分れ
◎東京名物喰物色々　紅蓮洞
◎夫と子供の嬉ぶ料理：吉村里子
◎年よりも若く見ゆる婦人の髪かたち…
◎臺所科學
◎陽春と眼
◎和歌入門　信綱
◎縁の婦人
◎捨られし妻

畫報は櫻讀物は梅。本誌の讀者は抑も何ぞ

畫報

花ふゞき　鏑木清方筆彩色入畫二頁大
久邇宮兩殿下と島津公爵と御會見
東伏見宮妃殿下最近の御眞影
皇孫殿下の御玩具
春の東京近事色々
最簡易にして壯嚴なる結婚式
華族女學校最初の卒業生風俗

▼名家の令孃と庭園
▼お茶の水小學校の草花栽培模樣
▼農商務省の玩具展覽▼尹致昊夫人
▼貴婦人の花見の花摘み
▼女學生の假裝と人形祭
▼好遊覽地としての桃の古河近郊
▼外山流盆石稽古▲第二米國觀光團
▼京華と双葉女學校
▼聖心女子學院
▼婦人履物
▼天覽の女生徒製作品
▼電話交換局
家庭懇話

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九　振替口座一一八一八

（其の二）


造花原料
東京九段坂
吉住商店
電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番
營業科目
一造花材料
一造花半製品
一造花用籠類
一造花標本
一造花装飾用達
一造花器具
一造花用染料
一適ミ細工材料
一御祝儀用造花
◉營業目錄御入用ノ方ハ二錢切手ト此切取ヲ添ヘ東京九段吉住宛申込マルベシ(女學世界四月號)

女(はの二)

(はの四)

スケッチ



水野秀方筆

特製水晶おしろい

新に賣出しました、『特製水晶おしろい』は、
皮膚の弱き人又あれ性の人にも少しも
志みることがありません



定價	
三十五錢	二十五錢

平生之を使用すれば皮膚がキレーにな
り天然の美白色を呈します

本舖 東京日本橋區通鹽町 大和屋

（たの一）

今後の讀賣新聞

◎親子兄弟と共々に讀み得らるゝ新聞は是也 試に一讀あれ見本進呈

高尚なる新聞

お伽脚本 **小公子** 巖谷小波

米國女流作家中の名花バアネット夫人の傑作『小公子』は若松賤子女史の譯にて大喝采を受く小波山人も亦其愛讀者の一人にて本篇は氏の新なる米國土產なり（三月廿五日ゟ掲載）

◎**舊藩と新人物** 黑頭巾

舊諸藩と出身の人物を評論して筆花燦爛たり▲四月一日ゟ掲載諸藩名士に關する投書歡迎

明治七年創刊以來新聞界の老舖として幾多の特色を有せる我讀賣新聞は今春來家庭及學校の教育なる一欄を設けたるが今般更に此種の記事を擴張せん爲め前文部次官澤柳政太郎君に教育顧問巖谷小波君に家庭顧問を囑托せるのみならず大に紙面を刷新して記事の精確嚴正を期せん爲め富井梅高田の三博士に乞ふて編輯上の評議員とし且法、理、文、工、醫、農等の專門博士及大家數十氏を贊助者として各方面の協力を得る事となれり讀者乞ふ其材料の如何に豐富にして趣味の如何に多方面なるやを見よ▲近日より連載の物別記の如し

家庭向きの新聞

通俗講話 **育兒談** 醫學博士 弘田長

弘田博士は小兒科の泰斗にして其講話の何人にも分り易きと恰も痒き所に手の屆くが如し兒を愛するの人讀ざるべからず

◎**長篇小說『家』** 島崎藤村

島崎藤村氏は文壇第一の大家にして本篇は氏が最苦心の大作也▲目下掲載中好評嘖々たり

五面六面

讀賣新聞の五面六面は趣味の頁てふ別名あり文學美術園藝人物評名流の消息碁將棊其の他一般の娛樂細大洩さず

日曜附錄

文學美術科學等に付諸大家の執筆を乞ひ五面六面の足ざる所を補ふのみならず附錄自ら附錄の特色あり趣味如湧

女（にの二）

見本進呈

（端書にて申込次第無代進呈）

一ケ月卅五錢郵稅拾五錢三ケ月郵稅共壹圓四十五錢半年貳圓八十錢

續きは物前に遡つて御注文に應ず

發行所 東京銀座一丁目一番地 **讀賣新聞社**（振替口座六壹貳番）

第八回

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勲四等 ドクトル 渡邊鼎

通信教授 產婆學講義錄

會員募集

規則要郵券二錢

東京市四谷區內藤町一ほの部

東京產婆看護婦講習會

產婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

私立

東京女醫學校

生徒募集

●五月一日新學年開始●願書提出期限四月廿八日
●入學資格高等女學校卒業者
●規則は郵券參錢を要す●監督寄宿舍あり
●東京牛込區市ヶ谷河田町電話番町貳〇一九番

營業目錄

袋物、造花、刺繍
摘ミ細工、果實、瓶細工
編物、器具并に材料

婦人技藝材料

東京市本郷區弓町二丁目

倉持商店

電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す

（○女學世界四月號）

女（にの三）

悪筆は一生の損



東京本郷區大學正門前
電話下谷　三〇壹壹番
電話下谷　三貳一〇番

速に入會して頗る能書家となるべし

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる惡筆にても最も短日にて上達すること全く機械的なり

▲本會書者兼講師
稻川雲谿先生
玉木愛石先生
小野鵞堂先生
外講師大家數拾名

▲見本　詳細會則無代進呈

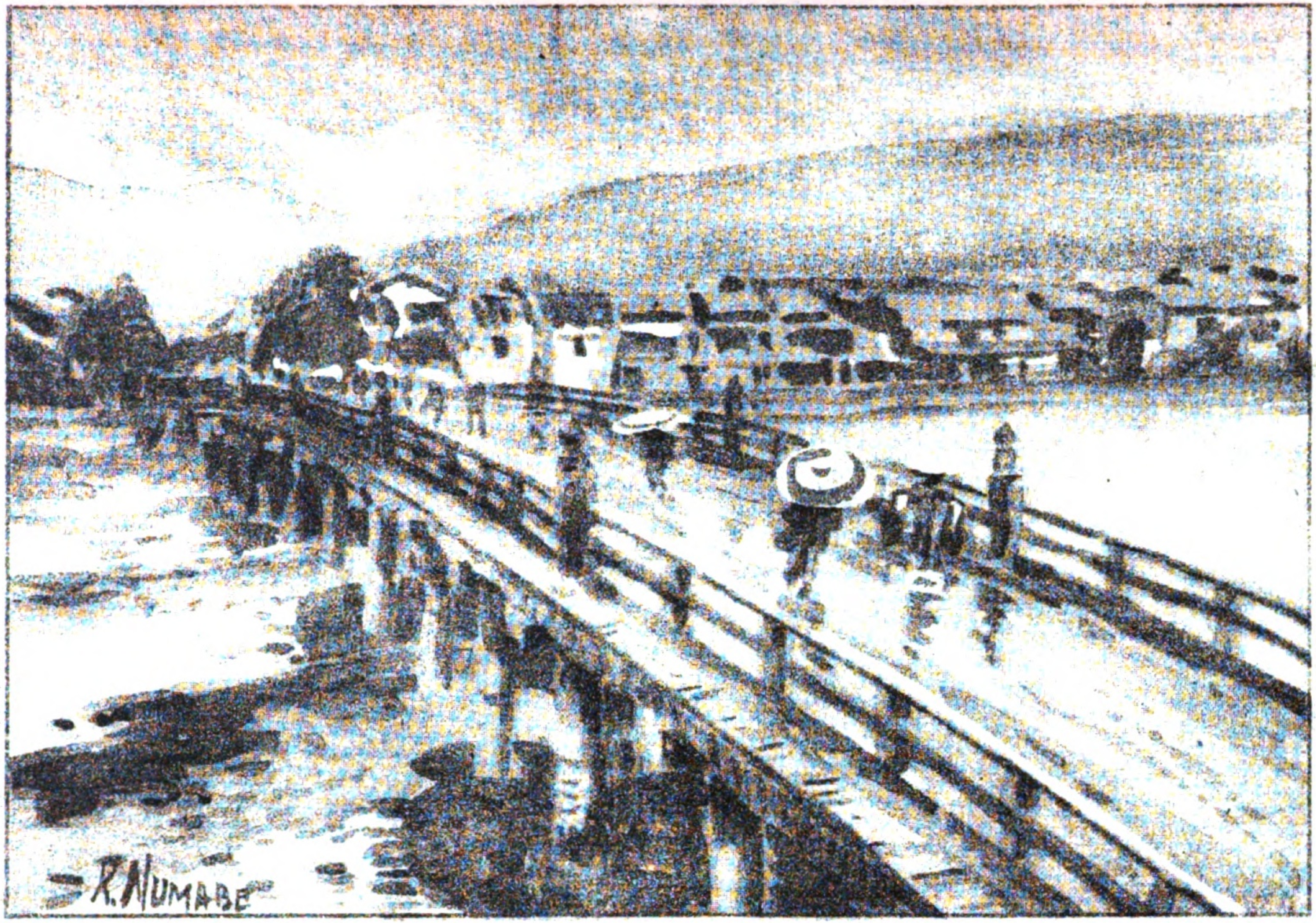
帝國習字速成學會

哺育



平福百穗筆

三條の大橋



沼邊强太郎筆



(その一)


大英國皇室
撰抜御用品
HONI SOIT QUI MAL Y PENSE
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
ヴィノオリヤアクリーム
皮膚をやわらげ
艶麗たらしむ
ヴィノオリヤア白粉
無鉛優良にして
清粛たらしむ
ヴィノオリヤア石鹸
自然美を發揮し
快濶たらしむ
ヴィノオリヤア歯磨
口中を
清潔にし
爽快
たらしむ
ヴィノオリヤア會社　倫敦巴里紐育

第一回

懸賞小說當撰者發表！

去月末〆切の懸賞小說募集は意外の好結果を以て机上に集りたる原稿百五十八通の多きに達したり之れ偏に大學白粉愛用者の依て來す處と本舖の深く感謝する處なり、之れが審査に本舖廣告部にては愼重を以て校閲し、左に數名の當撰者を發表す

一壹　等（賞金十圓）「嫁く人」　東京市神田猿樂町二ノ三　桑原方　にしき島矢錦吾

一貳　等（賞金五圓）「兄の情」　大阪市南區炭屋町　田尾方　杉山なみ

一參　等（賞金參圓）「其の夜」　横濱市北方町二九七番地　吉田かよ子

撰外佳作

「偸聽」　「粧ひ」　「美ちゃんと喜ちゃん」　「二人」　「許嫁」

の五章は例外として金壹圓宛を呈す

當撰者賞金交附は本誌發行一週内に交附す

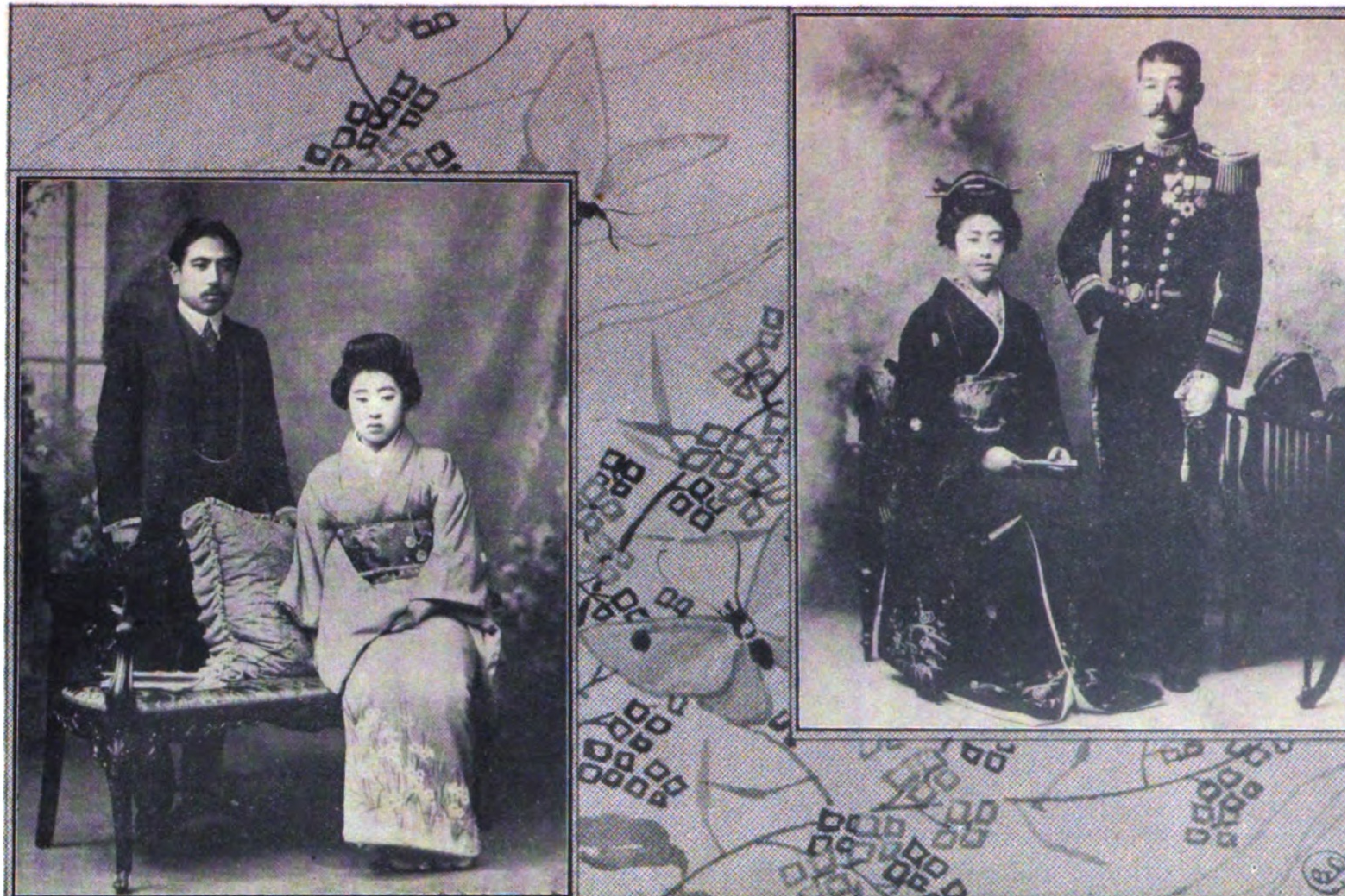
四月

大學白粉本舖

廣告部

「**大學白粉**」は專門大家が特に製煉せられたる最も完全なる無鉛白粉にして少しも鉛毒の憂なく、美容と衞生とを兼ねたる安全なる化粧料として夙に高貴の御愛用を忝ふし無上の光榮を得たる名譽の白粉にて、他の無鉛白粉の如く肌を荒らす事なく良く伸びて附よくお召物の襟に着す、芳香は頗る高尚にして今や此「**大學白粉**」は**貴婦人令孃間**に**愛用**せられ名優名妓の化粧料として專ら流行しつゝあり

新婚の春



右圖 子爵松平恒雄氏（倫敦大使館附武官）と新夫人信子（鍋島侯爵令孃）

左圖 岩崎政彌氏（男爵岩崎久彌氏令弟）と新夫人（韓國理事官能勢辰五郎氏令孃）

名家の令孃



右圖 一條公爵令孃朝子
左圖 毛利公爵令孃顯子（姉君）茂登子（妹君）


クラブ
白粉
オシロイ
姉妹品發賣
クラブ洗粉の姉妹品として三月中旬より
發賣せる新化粧品とは何？
北米の歯磨より優る
高等テンチフライス
クラブ歯磨
並に
日本白粉界破天荒の良品
無鉛トイレット
クラブ白粉
との二種
即ち是れなり

女(への一)

ムーレー及ランマン製

フロリダヴオーター

Murray & Lanman's
FLORIDA WATER

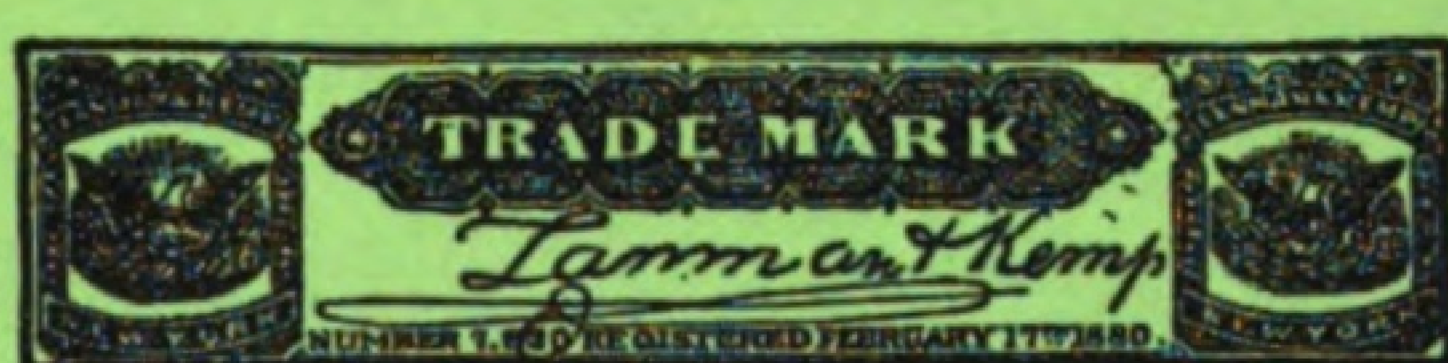
世界的流行の高尚香水

沐浴・洗手・髯を剃りたる後・疲勞せし時及び運動せし後皮膚に擦用すれば精神を快活ならしむ其他一般の化粧用



極上無比にして最も廣く愛用せらるゝ化粧用香水なることは毫も疑なし貴賤高卑を問はす又如何なる場合に使用せらるゝも神氣を爽快ならしめ恰も蘇生せしむるの快樂を得べし

登録商標



御購求の際は此の登録商標を御注意あれ
僞造品を以て瞞着せらるゝこと勿れ

北米合衆國紐育市

製造元 ランマン及キヤンプ

LANMAN & KEMP, New York
Proprietors and Sole Manufacturers

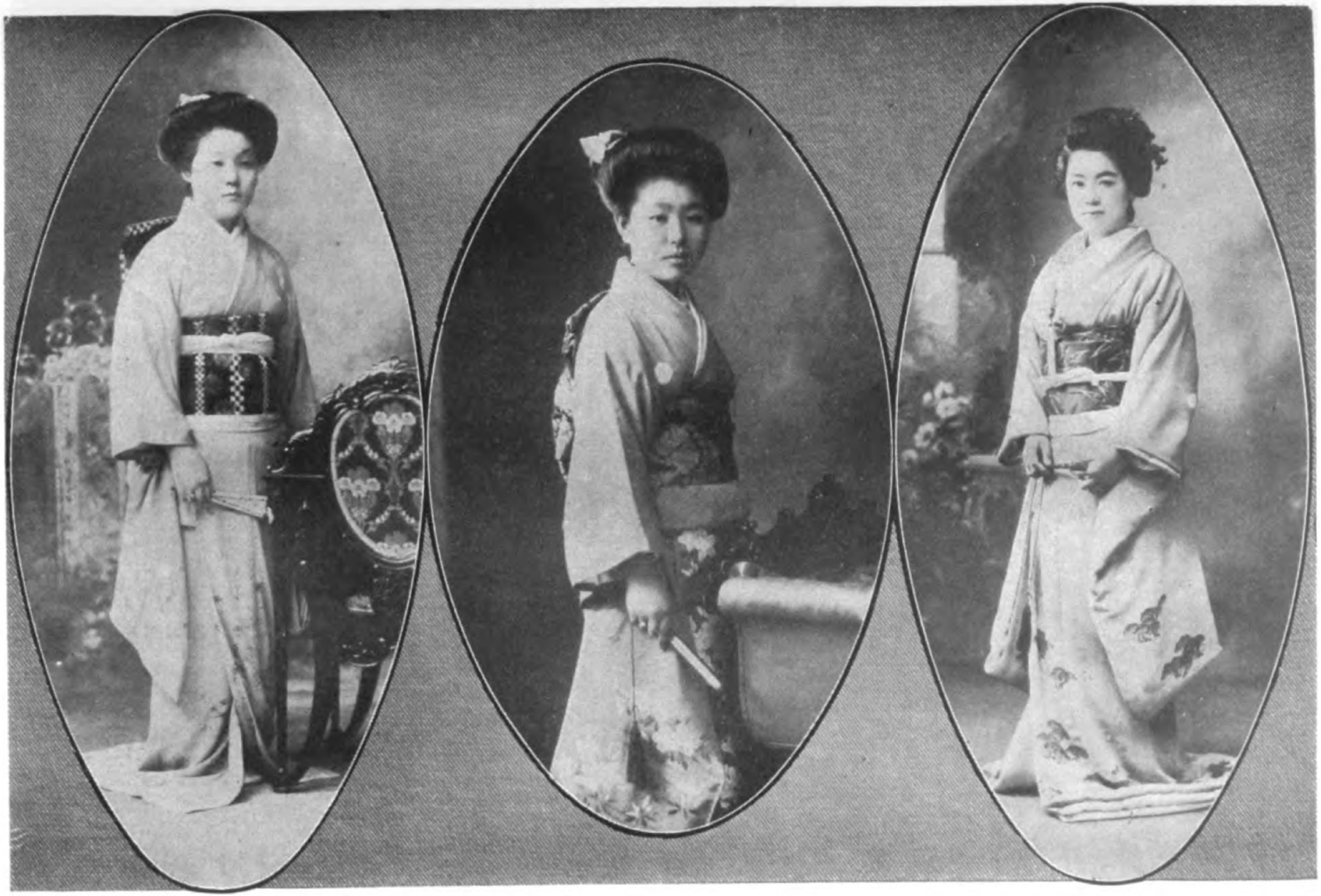
日本帝國代理店　日本支那貿易會社

女(への二

女(への三)


都の花石鹸
大阪
野村製
▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり
芳香の高雅にして
品質の純良なるは
紳士淑女の愛用と
名譽の金牌とに依り知らる
女(への四)

令嬢かゝみ



右圖中村謙子孃
中圖押川幸代孃
左圖藤竹さゑ子孃

令嬢かゞみ









右側上より(1)芝區加藤米子、(2)鎌倉内山元子、(3)麹町西山とも子、中央麻布伊達正子

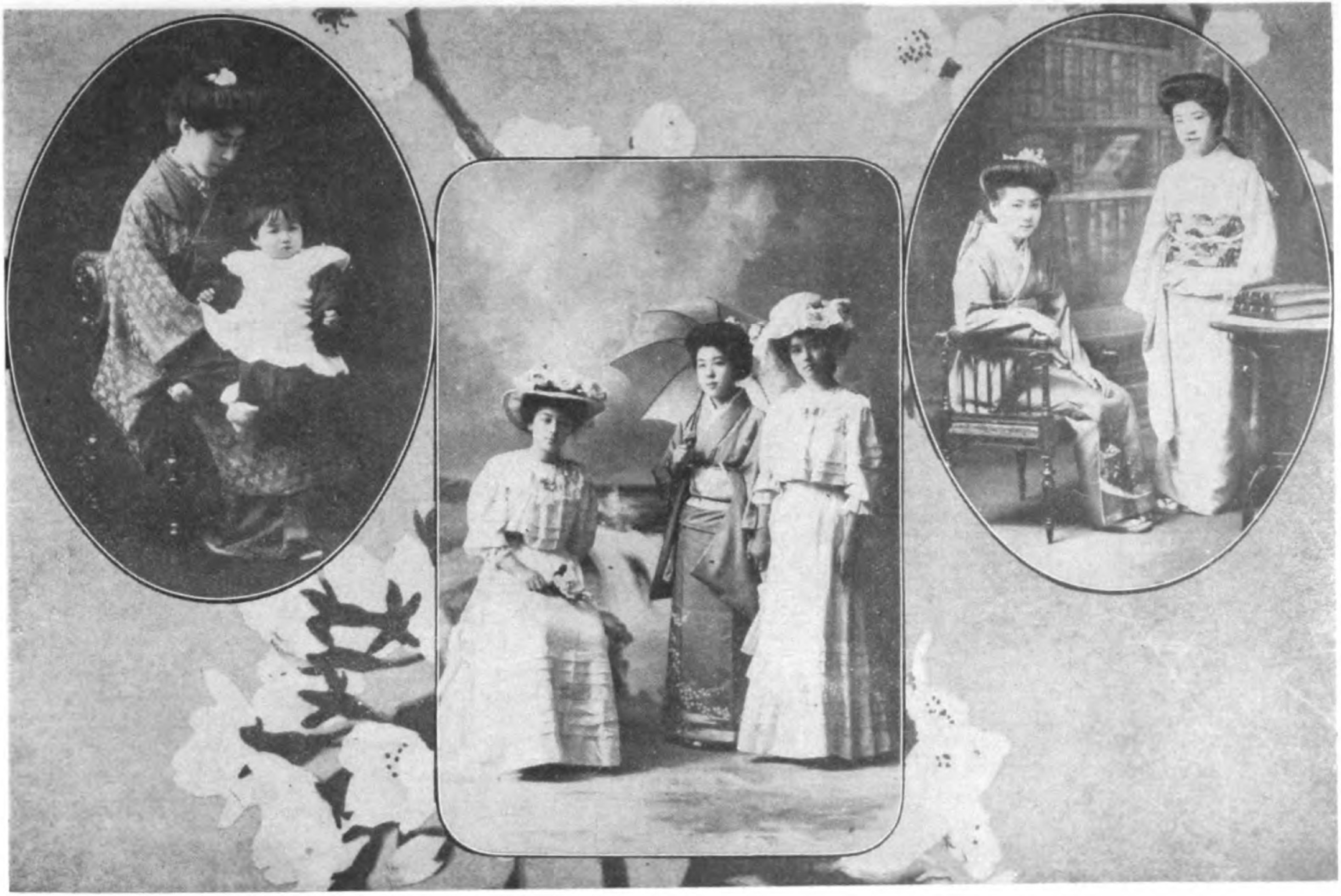
左側上より1赤坂北村斐子、(2)大森稲垣芳子、(3)麻布岡本捨子

女(との二)


櫻狩
菊の露白粉を
（お化粧には菊の露白粉に限る）
お使ひ遊ばして
お花見においで遊ばせ
本當に美しく櫻の花に
見劣りのせぬやうに
お化粧なさいますには
附着が好くて肌に調和の良い
卓絶無比の菊の露白粉に限りますよ
東京市日本橋區横山町三
本舗 平尾銑也商店
電話浪花一一一〇番
東京替振一一〇番
パール煉香油
スミレ黒香油
スミレ香水

女（その四）

クラスメート



少女かゞみ







右圖　陸軍中將落谷豐三郎氏令孃淑子
中圖　醫學博士長與稱吉氏令孃仲子
左圖　法學博士建部遯吾氏令孃文子



宮内省御用達

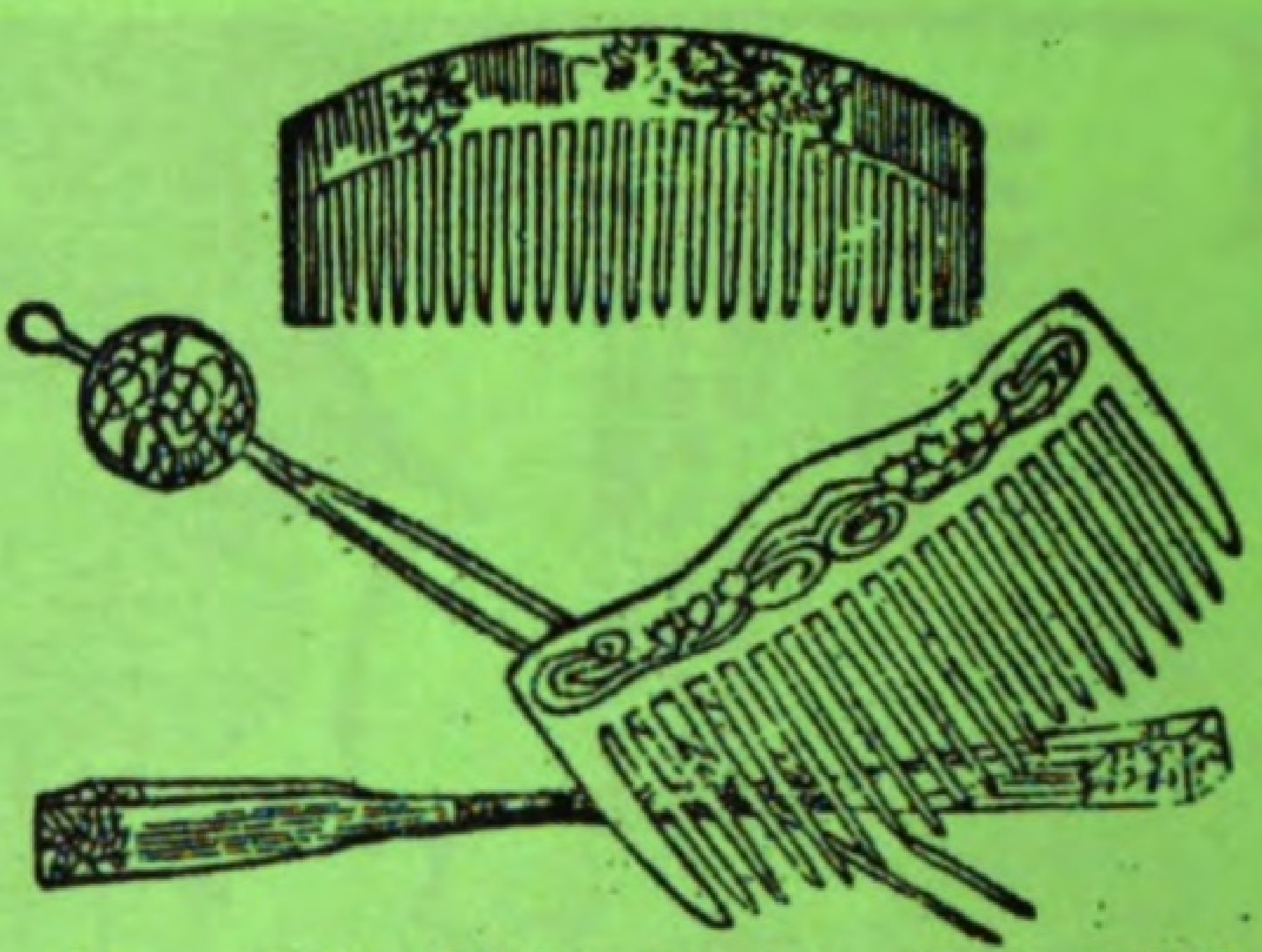
天下一品

最上醤油

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(ちの一)



鼈甲儀式用櫛笄
象嵌蒔絵櫛中差
金銀寶石入簪指環帯留
繡縫珍取紙入手提
花簪
化粧具

巴里府の生粋を直輸する高尚なるリボン
ハイカラの櫛ベーアピンは尤も市内女學校の諸嬢方の御愛顧を忝ふす

東京市神田須田町電車乗換場
婦人装飾小間物商 三井屋本店
電話本局二〇七六番
振替貯金口座東京二八一番
新橋際博品館内支店　神保町東明館内支店

破格の正札廉價なるは他店に不譲地方の御註文多く代金引換小包にて送荷しつゝあり

中村秋人君著

名媛と筆蹟

洋装四六判美本紙数三百頁　正價金四拾銭　郵税六銭

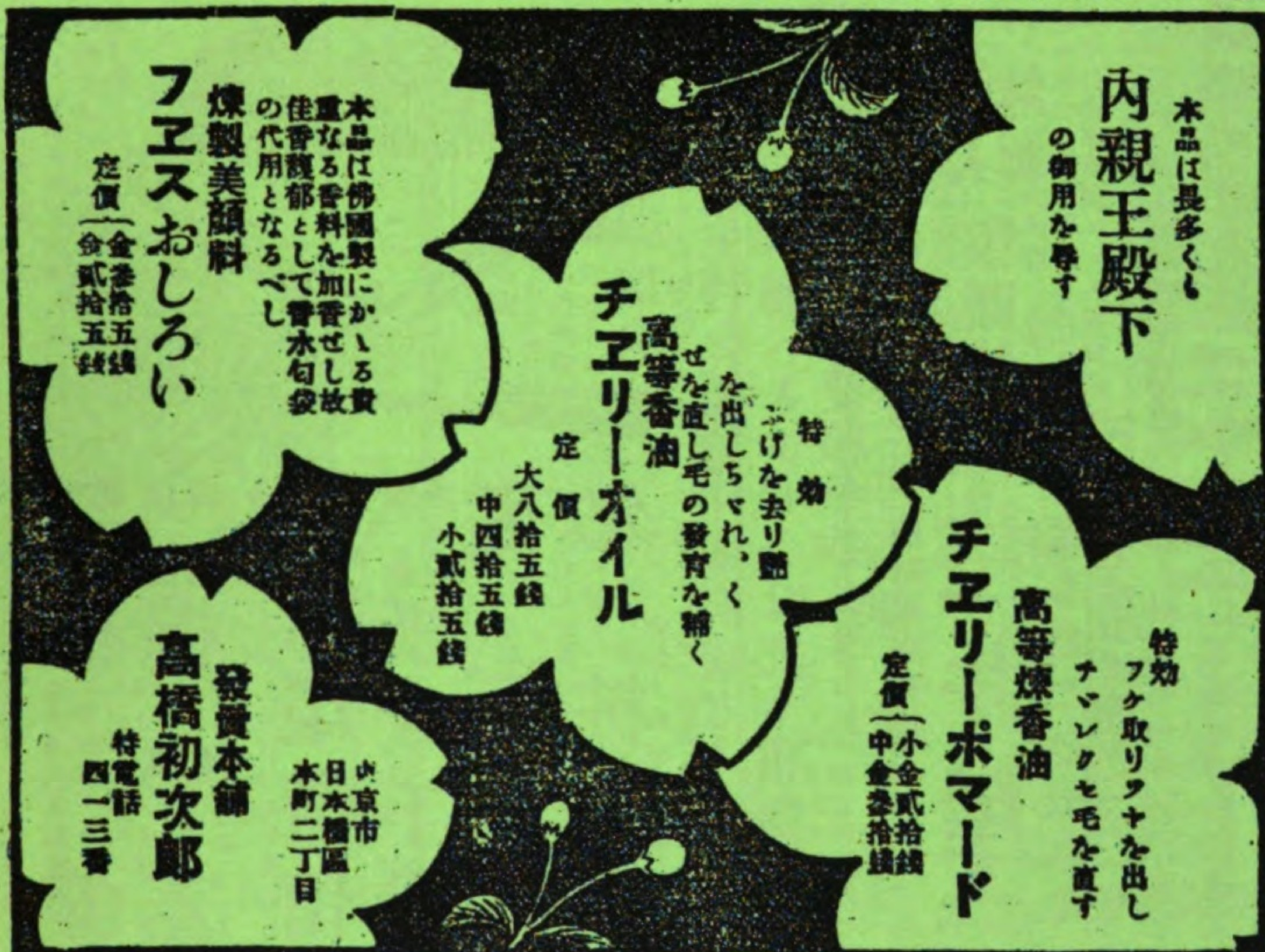
▲嬢ちやんも見るべし姉さんも讀むべし

東京本町

博文館

▲お母さんも味ふべし教育家亦一讀を要す

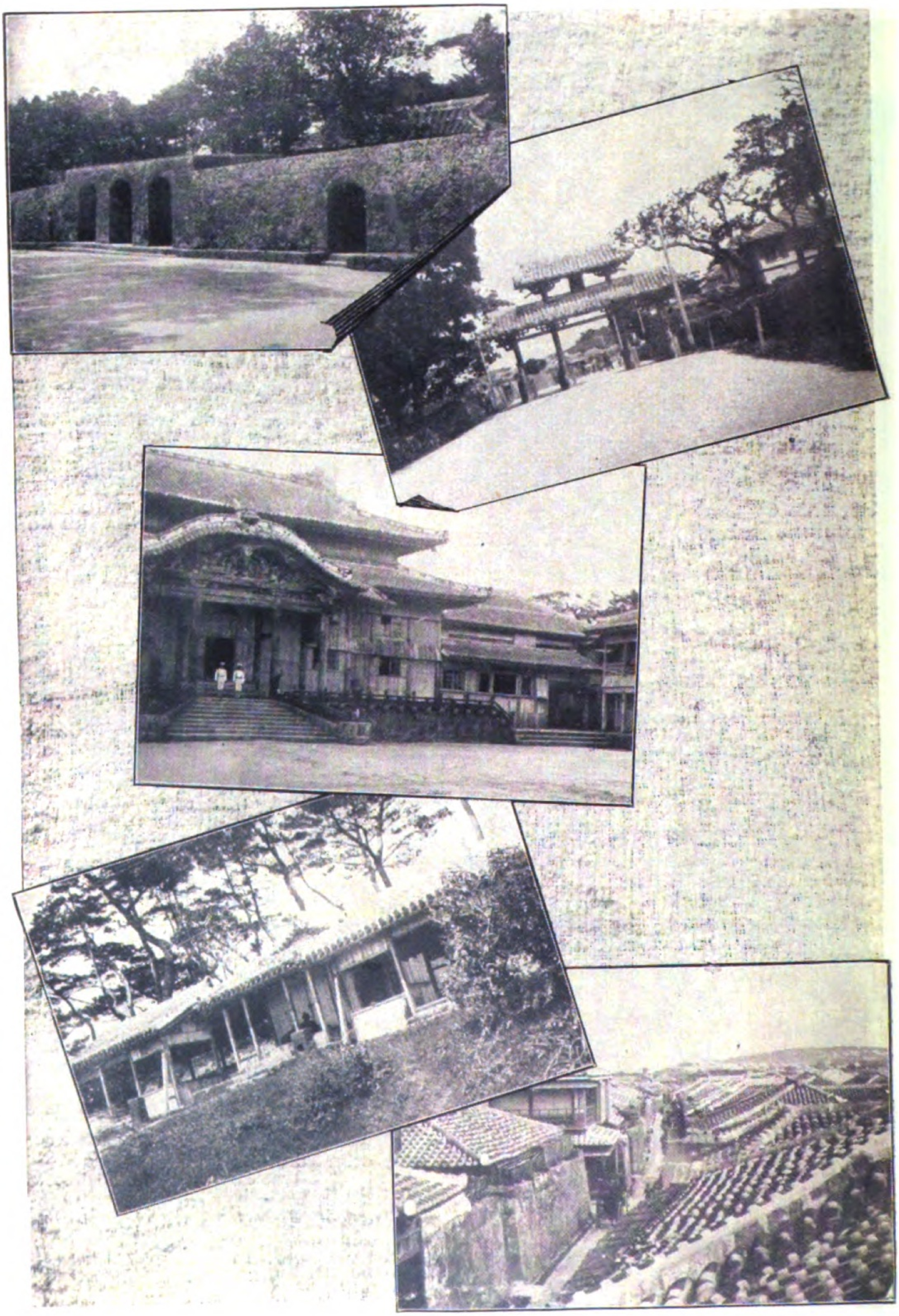
女(ちの三)


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
特効
フケ取リツヤを出しチヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價
小金貳拾錢
中金參拾錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顏料
フエスおしろい
定價
金參拾五錢
金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舖
高橋初次郎
特電話四一三番


於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronized by the Imperial Household, Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮內省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港

(ちの四)

沖縄の風俗



上より（1）琉球首里の名刹崇光寺の石門　（2）同首里中山門　（3）首里舊藩王の宮城　（4）首里觀音堂　（5）同狹斜の地

子供に似合ふ洋服



春の仕度

見渡せば柳櫻をこきまぜて都は今ぞ錦着る彌生の空の長閑さは花にあこがれ出で遊ぶ老弱男女の隔なく春の日あしをいとゞなほ短き思あらんと存候かゝる清遊の好時節に際し花の下に優美閑雅なる洋服姿を見るは花を愛する心の深きも思ひ遣られて一入見る目床しく春心地せられ候されば弊館此期節に於て弊店も獨得の實驗と技術とにより大方の需要に應じ申すべく用意相整居候へば續々御用命の程奉祈候

四月一日より上野勸業協會内に開催する貿易品博覽會に出品即賣可致候に付御遊覽の序に御用命願上候



東京市内御註文のお方は電話本局二九〇一番、端書なれば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下されば雛形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣調進致します、韓國にての御用は京城浦尾旅館内中野屋洋服店出張所まで御一報被下度候

前掲寫眞は本店の寄贈せる
もの本店の技術を熟覽あれ

〔本店　橫濱辨天通り（電話三四四番）〕

中野屋洋服店

〔東京出張所及地方掛〕東京市神田鍛冶町（電話本局二九〇一番）

（女りの一）

●本法は 女髪結師安部歌子女史

ちゞれもくせも
二大奇方劑
毛はへうけあい

●東京市麴町區三番町六十七

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

にきびとり化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢（但郵便切手は一割增）

化粧水パヒロン發賣元 東京市本所區緑町三の二九 小林榮進堂

蹄鐵印 シャターリヨン 白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱賛あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目 電本局長一四三五 鈴木洋酒店

▲婚禮に關する諸禮諸儀式は勿論結婚上何人も知らんと欲する又知らで叶はぬ秘事密件悉く此の全一冊中に在り

新編

日本婚禮式大全

詳細書入り美本全壹冊 正價三拾五錢 郵稅四錢

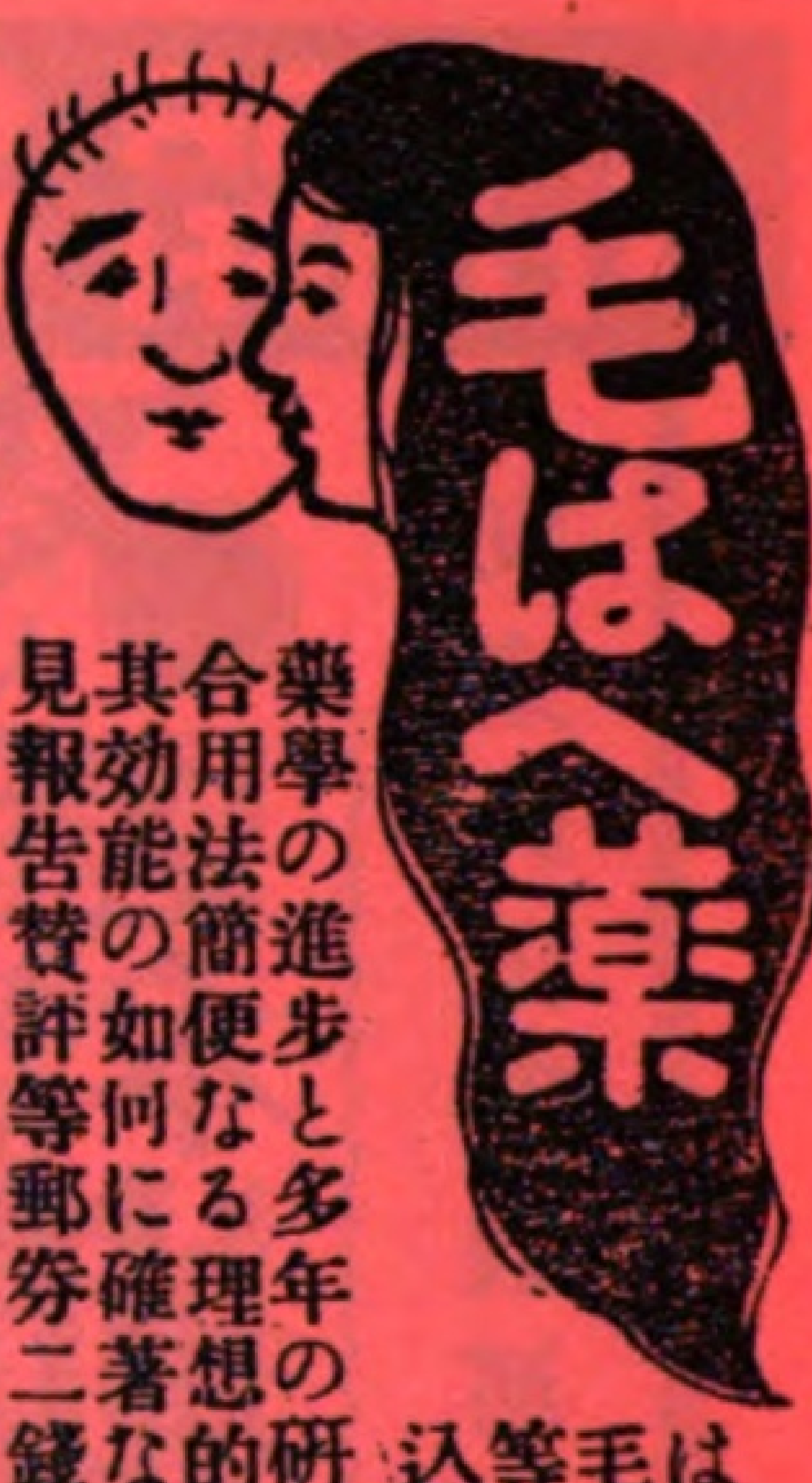
世間從來婚禮の書籍少なからず 小笠原流伊勢式など稱すも實は孰も二百餘年前の舊式に係り事々往々當世に適せず、又世の變遷につれ徒に華美を衒ふて禮の本意を誤る等如今婚禮の諸式一も其正を見ず 是れ弊堂が特に斯道の 大家篠田翁に囑して爰に本書を刊す所以にして一々故實に則り誤謬を 洩さず先づ見合の式より結納の式里出の式嫁入正し諸禮諸式**詳細** の式婿入の式里開の式媒人の心得等大綱七章細目百數十欵―― 細は物の折方包方から 贈答の仕様―― 密は床入 所の取り様まで――一舉中幾多の**圖畫**を挿みて懇切丁寧に記述し遺憾なきは勿論殊に本書の**特色**は意を最も實用の上に注ぎ貧富貴賤何れの資格の人の見給ふも克く之を採用さるゝにあり 尙ほ特に**附録**として婚姻に關する古今の沿革且は又伉儷に就ての根本的注意――即ち妻を擇び夫を擇む上に就ての心得を周到に個切に論究し猶必要上新郎新婦親和上の心得即ち 生殖作用の神秘及其衛生――さては妊娠中の注意まで殘る方なく教示せりされば 荷も將來婚を結ぶの才子佳人は勿論其が父たり 母たる人も亦必ず一讀すべき實に空前無二の大寶典也

發行元 大阪東區南久寶寺町一丁目 尙文館

但注文郵劵代用は一割增　振替貯金口座大阪壹〇參壹壹番

▲婚姻は一生の大事…… 愼重の人せひ本書を一讀あれ

女りの二)



はげ、うす毛、ぬけ毛、はへぎわ悪き等の人々は速に申込あれ

藥學の進歩と多年の研究は今や奏効請合用法簡便なる理想的毛生劑を發見す其効能の如何に確著なるか諸大家の實見報告賛評等郵券二錢封入照會あれ

東京日本橋通四丁目四番地　公仁藥院

東京市九段下　神田今川小路二丁目十一番地

隆鼻術（はなたかくするほう）

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

わきが

患者にて醫療賣藥有らゆる手を盡しても全治せざるの士女は獨逸醫學界の泰斗たるノートー博士の最近發見のわきが根治劑「フレード」を用いて速に其苦痛を脫せられよ○藥價は輕症用八十錢重症用壹圓五十錢蔓性頑固用特製三圓送費十錢郵券代用必ず二割增代金引換小包は一切謝斷…

◉發賣元　東京市本鄉區東片町十五番地　電話下谷二五六九番　振替口座東京二〇七四三番　市原製劑部

子のできる器及子のできない器

懷姙避姙自在器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

本器は産科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毒も無害なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により局所へ姙孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懷姙**することを得らる故に子の無き人は用て目的を達すべく又本器により局所へ姙孕素を消失する藥劑を入れる時は決て姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て**避姙**の目的を達し得らる而も共に衞生無害なるは發明者多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れ應用する時は**梅毒淋病**其他の病毒を傳染するこ　となく子宮を損傷する患なし又慢性子宮內膜炎膣炎等の**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れ應用せば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼の不快の念なく天然の感觸を鈍ひルーデサック及子宮サックの如き不理想的なものにあらず實に世界唯一の最新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る者（正價）ニツケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。但し詳細なる說明書及使用法并に應用諸藥劑處方書は人衞生上必ず携ふべき要用の具器なり。現品に添附し小包郵便密封にて送付す。郵券代用貳割增し。着金即刻送品す

醫學得業士

（齋藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許

アシトア

,atocia

（膣內挿入小器具）

世界一手專賣元　東京市神田區五軒町十九番地（電話番號下谷五二四十六番）

日新館藥房

振替東京壹九貳四六番

女（三の三）

第四回新學期開始

●入會の最好機は來れり

四月卅日迄は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義　言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員にて講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員　の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は部會牛月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

●見本つき規則書申込次第無代進呈

講義錄第一號は四月一日發行す

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二〇〇番、電話本局（三〇〇四番　三七〇〇七番）

女（りの四）

女學世界

四月號

第拾巻
第五號



男子十萬人女子七千人の新世界

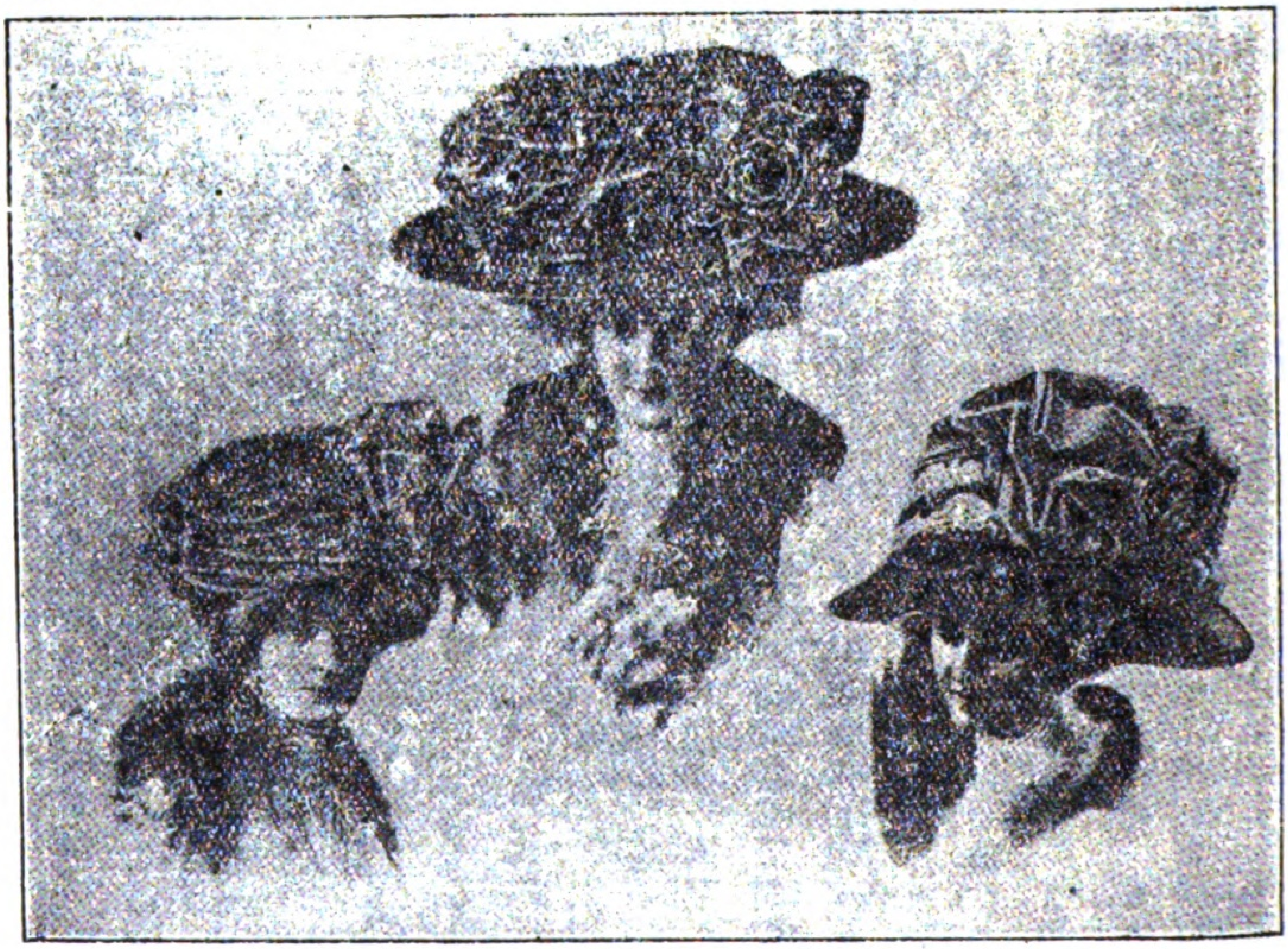
米國で理髪師を働いた私の經驗

米國理髪師　岡澤鹽子

渡米成功の婦人として近頃大評判の理髪師岡澤鹽子女史を巣鴨籠町島貫氏方に訪ひました。女史は職掌柄だけに束髪、服裝は彼地の流行を追ひダイヤの指環、黃金の鎖、ハイカラの粹を極めて居られたが、流石廣島藩封家の嬢様育ち、どこか鷹揚な氣品が具はつて居る、――滯在十二年間の習慣で語音の調子が悉皆洋化して居られたのには一寸をかしうございました。

▲女理髪師の內弟子

私は十五歳の時知人に從つて米國へ參りましたが、私の姉が彼地で裁縫師を致して居りましたので最初は此方に從事して見ました。併しこれではどうも收入が少いやうに思ひましたから目的をかへて女理髪師の內弟子となりました。內弟子と申しても日本の梳手のやうに下解しばかりして永い年期を入れるといふのではなく、結髪の道具や毛髪を染める繪具を師匠に手渡しするとか、髪洗の手傳をするとかいたしながら師匠の仕事を側で見て居つて其方法を覺え込んでしまへば何時でも獨立して構はぬのですから極自由なものでございます。理髪の需要の多いことゝ申したら驚くほどで、殆んど軒並位な所もございます。日本の婦人に理髪業をいたす方がないので珍らしいと云ふのと日本婦人は溫順しくて良いといふ點から私は非常に顧客を得ました。さうして此業は始終婦人方殊に上流婦人に接觸する仕事で、男子には近く事がありませんので若い婦人の職業としては誠に安全でございます。



當時流行の大きな帽子

▲仕事と收入

彼地の婦人床の仕事はヘアドレッサー（理髪）、フェースマッサージ（顏剃り）、及びメニキュール（指の爪を磨く）の三種に分れて居ります。普通理髪だけなら三十五錢位ですけれども大抵顏剃りや爪磨きもついでに望む婦人が多く先一弗（二圓）位は拂ひます。夫からジャンプー（髮洗）をいたしますが彼地の婦人は油を少しもつけませんけれども毛の根から自然に排出する脂肪を洗ふので、先づ石鹼を塗り付け手を以て丁寧に洗ひ上げてから夏は電氣仕掛の旋風器、冬は瓦斯で洗髮を乾します。この髮洗までいたしますと何樣しても一回に二弗五十仙から三弗までの料金を拂ひます。上流婦人は一度結んだ髮を三日も四日も保せることは決してなく、夜分床に就く時悉皆髮を解て寢まして翌朝又丁寧に理髮する習慣になつて居りますから得意先の五六軒も持て居る上に不意の客を迎へますれば可なり蓄財も出來るのでございます。私なども大抵一

日平均十弗（二十圓）以上の收入がございました。貴婦人の理髪は先方へ參つていたすのですが、時には一年二年と期限を定めて月俸七百弗位で旅行の伴をいたすこともありました。

▲色の配合を工夫するのも理髪師の役

彼國の女理髪師は前申上げた仕事の外に毛髮や眉毛を染ることもいたします。これは流行の服裝、帽子などの色合に應じて調和の良いやうな色で毛髮や眉毛を染るのですが尚夜と晝、出席先の模樣をも考へて美を發揮させるやうに工夫をいたすのが理髪師の役でございます。

▲短い毛髮と後れ毛止めの網

彼地の婦人は一般に毛髮が短うございますが、種々器用に出來て居る附髮をうまく載せてヘアピンで確り留めますと丁度自毛で結ひ上たやうに見えます。近頃流行の大きな周圍でも短かい自毛で自由に結べる趣向になつて居ります。彼地の婦人は一般に餘り自髮を大切にいたしません。と云ふのは多くつても長くつても他人が自髮だと思はないからでありませう。夫から生際の後れ毛を包む網が出來て居て、各自の髮色に合つたのを用ゐて居ります。が、これが極手際なもので少しも網で包んだのが分りません。外國から歸りますと日本婦人の後れ毛が見苦しく感じられますが、日本の婦人方も網をお用ゐになつたら如何かと存じます。直段は三十五錢位ですが此地で拵へる人がありましたらもつと恰好に出來ませうし、需要も餘程多からうと存じます。

女史のお話は大略右の通りでしたが島貫氏は傍らより左の興味あるお話を爲さいました。

▲日本に於ける今後の女理髪師

岡澤さんは知己ではなかつたのですが、今度貴重品を澤山持て歸られたので滅多の處へ宿泊も出來ぬ、と

云ふので私共の力行會を頼つて來られたのです。幸ひ力行會の女學校も昨年十一月から開いて生徒は皆渡米志望の婦人ですからこの婦人達に理髪を教へてもらふつもりであります。岡澤さんは生れ付こんなことが好ださうで第一手先も器用ですが妙齢にしてうまい仕事に眼をつけたのは實に感服の至りです。何しろ渡米の日本婦人中に未だ一人も行たものがないので非常に珍重がられたのです。日本でも神戸か横濱邊なら需要がありませうが、それも未だ僅かでせうから女史も今暫らく彼地で働くつもりで居られます。併し日本でも追々外國人との交際が盛になるに連れて貴婦人方には是非かういふ理髪師が必要になられるでせう。

▲日本の厢髪は十年も昔

彼地では丸ポチャの小さい顔が當世の美人型となつて居ますから、顔を小さく見せるために髪も周圍を大



後れ毛止めの網をかけたるところ

き出し帽子も電車へ這入りにくい位の大きいのを被ります。髪の結方は流行風の内にも種々様々なのがあつて劇場などの後側から見下すと實に髪の共進會を見るやうです。イヤ彼地の婦人の流行熱と云つたら非常なものですナ。左様皆本元は巴里で、米國では一ケ月位後れ、日本邊に流行するのは三年目位ださうです。今日本で流行る廂髪の束髪は十年も昔の風で當節では百姓の婦人にもこんな髪形は見ないのです。巴里には衣服、帽子、髪形等の意匠を凝して居る專門家があつて始終新奇な趣向を發表して居ますが一番先に女優がこの新案を裝ふのです。次に貴婦人がやつて夫から追々流行出すと云ふ工合です。女優は流行の魁で、車道に煙の上らぬ自動車が出來たと云へば眞先に乗り試みるのは女優であります。

▲男子でも爪磨の必要

男子でも交際家、銀行員、牧師などは握手を爲たり、客の前で計算を爲たり、樂器をいぢつたりする場合に手先が綺麗でなければいけませんから理髪師にメネキユールをやらせます。私なども握手をする際にまさかこんな手先も出されないから彼地に居る間は時々爪磨に行きました。爪磨は最初石鹸湯に指先を浸し爪が軟らかくなつてから悉皆爪側の汚れを截去り叮嚀に磨いて顔料をさし、手先の汚い皺を伸ばすのですが實に綺麗な手先になります。この皺伸しは心地のよいもので、フエースマッサージをすれば梅干婆さんでも若い美しい顔に作れるのです。

▲裝飾品賣場のガール

日本の三越とか勸工場とか云ふやうな場處には十八歳から二十五歳位までの美人の賣子がチヤキ〱の流行風を爲て顧客を迎へて居ますが、この賣子などに聞くと如何に婦人が流行に熱中して居るかゞ分るのです。かういふ賣店には本年十二月初旬にもう「來年一月の流行品」と記した札を附た物品がズラリと陳列してあります。米國では美人の身分や階級を穿鑿しま

せんからこの賣子の中で往々貴紳の夫人に選抜されるものがあるので彼等も却々野心満々上品に愛嬌をふり撒き車輪に働いて玉の輿の月桂冠を得やうと考へて居るものが随分あるやうです。

流行の外出すがた



▲二十女の總入歯

▲歯科醫の大繁昌

男女に限らず彼地の人は日本人より歯が弱いので私のやうな歯でも彼地の人に羨まれるのです。彼地では二十歳餘りで總入歯の婦人をよく見かける、随つて歯科醫の多いこと非常なもので、殆んど軒並に看板の出て居る街もありますが、皆相應に流行て居ます。これは全く果物と牛乳と砂糖の多食に原因するので、林檎などの酸液や、茶へ入れる砂糖で歯を弱らし、牛乳のかすが殘つて歯を腐らすのでせう。それから近眼も非常に多い、私があちらの女子大學を參觀した時、眼鏡の女學生が多いのには驚きました。未だその他の彼に勝る點はいくらもありませうが、一寸外貌ばかりで觀察されると日本婦人は彼



等の眼にチヽむさく、見すぼらしく、而して交際の手腕がないやうに見えるでせう、私共は何時もお客様で往くのではないので、古い知己から正直の批評を耳にするのです。左樣日本の衣服も随分彼地の婦人間に行なはれて彼等はキモノ或はカヒモノと云つて用ゐて居ますが、これは納涼其他慰の道樂着として居るのです。兎に角日本でも上流婦人間には外交上岡澤さん式の理容術が益々必要になるに違ひありません。

▲渡米花嫁の必要



目下太平洋沿岸の在米日本人は約十萬人ですが婦人は七千人しか居らぬ。それでこの人々の手から日本へ送る金額は一ヶ年に千五百萬圓でありますが、若し悉く妻帯して働らけば一億萬圓は大丈夫送れるやうになります。と云ふのは獨身者が無くなれば放蕩に莫大な金を散すこともなくなる。それに婦人も收入の道がいくらも在るから兩者相待て非常な收益が得られるのです。さうして彼地で生れた子供は彼地の籍へ記入する事が出來、その兒には選擧權が得られるのですから、將來多數の有權者が直接間接に日本のために利益を圖るやうになるのは必然の道理であります。排日などゝ云ふ忌はしい騷ぎで由々しき事件でも起つたと假定すれば一日に二百萬圓位消費するのですから婦人を彼地へ送つて有權者を生せ禍を未然に防ぐのは一擧兩得の策でありませう。在米日本人は種々樣々の職業に從事して居ますが兎に角働けば必ず目的を達し得る土地で、尚將來發展の餘地は見渡せない程あるのですから活潑な婦人は進んで往くべきだと思ひます。近頃は船便も一週間目にあるし十八日間で往かれる上に、カリホルニャ邊は日本と略々同じ氣候で少しも困難はありません。彼地へ住つた婦人は身體が丈夫になつて色が白くなり、子供もよく出來るのは事實です。此處の力行女學校では渡米結婚せんとする婦人のために語學、裁縫、料理、洗濯其他日用必須の科目を教へて居ますが今度又岡澤さんに理髪を教へて貰ひ、共稼の好材料とするつもりであります。

娘の爲めに選ぶ緣談

阿部泰藏氏夫人　阿部優子

私共は十二人の子持でございますが、女の兒は四人で、結婚しましたのは長男と娘二人だけでございますから御尋ねの經驗談もまだ乏しいのでございます。夫に主人が極書生風ですし、私も仰山な事が嫌ひですから至簡單に濟せました。結婚と申すものは前から種々考へて置きましても先方の望や其時の双方の場合に依つて變化いたさなければなりませんので同じ家の娘でも支度や式が樣々になるのでございます。嫁入は一生一度の晴れですから出來る限り立派に支度して遣りたいのは親の情でございませうが、此支度は實に際限のないもので彼も是もと氣を揉み出しては案外莫大な費用の掛るものでございます。嫁入りの際に常着まで一切新調して簞笥へ入れてお遣りになる親御樣もおありのやうで御身分に依ては是程結構な事はございませんが、私共などでは左樣々々行屆きませんから、儀式用の外の物は垢さへ付て居らなければ宜と致して是迄持合せた物で間に合せて置きました。結婚後若いものは矢張目新しい品を求めたいことも在りませうから一時に澤山な衣類を拵へて遣はすより婚資の中を幾分か殘して遣はして置いた方が却つて當人の樂しみとならうと存じます。

▲長女の結婚

福岡縣の安川へ緣付きました長女は華族女學校へ通學いたさせて置きましたが、十八歳の暮に緣談がございまして未だ卒業前でありますから私は卒業後にと存じたのですが、主人は良緣を斷つて迄も學問させると云ふ必要もなからう、末後に女兒もあるのだからと申して取定めました。婿になります人は其頃横濱の正金銀行へ出勤中でしたが婚禮は本國の方でいたし、直ぐに東京へ參つて二年程麻布に住んで居る内に本家の店

の方へ呼ばれて歸國いたしました。私は元來舅姑の別居說を賛成の方ですが、婚後の都合に依つては如何樣でもよろしいと思つて居りました。長女なども都合によつて本家と同棲する事となりましたが一家族が皆やさしくつて吳れますので誠に幸福でございます。長女は只今五人の子持になりましたが每年一度必らず出京



いたし、同窓のお方々に御目に懸つて樂しんで居ります。お友達と申しても皆上流なかたがたでございますから斯樣狹い家へお呼び申すより何處か借りてはと申しますけれども皆樣も此家の方が氣が置けないで宜いからと仰つて會日には粗末な茶菓おすし位召上つて終日樂しくお遊びになるので私までも心たのしくお相

手致ます。

▲次女の結婚

長女が通學時代には未だ下田さんがお出での頃で次女も矢張姉の後へ入るつもりに願を出して置きました處、姉の結婚後住居が紅蘭女學校の隣りで自然學校の方と御近付も出來ました關係で次女は是非此校へ參りたいと申出しましたから此方に更へました處、宗教學校では在りますが強ち之れに偏するのでもなく校風が極穩健のやうでございますから引續いて三女も四女も此方へ通學いたさせて居ります。(夫で次女は學校の感化もありませうが一體の性質が極質素な方ですから緣談も此性質に適するやうな向を撰び軍人へ緣付けました。

▲娘の性質と緣談

緣談は娘の性質を考へて取定る事が肝腎と存じます少し才智のある娘は、外交官とか實業家とかへ嫁つて少し位氣苦勞をいたす場合がありましても、地位とか名望とかの方で慰藉を得ませうから格別の苦痛もございますまいが、質素一方で智慧の廻らぬ娘は學者とか軍人とかへ嫁つて假令生活程度は低くとも家庭的の滿足を得た方が無難でございませう。(尤も家庭の清濁は職業にも關係しますまいが)學校の先生方は色々と仰つては下さいますけれども、娘の本當の性質は何と云つても親が一番よく知つて居るのですから、緣談は親の眼鏡で定めるのが安全であらうと存じられます。

▲一家の空氣と緣談

釣合ぬは不緣の基と申す事は身分や財產にも勿論關係はありませうが、第一番に兩家の空氣が適合して居るか如何かを觀るのが肝要でございませう。何處の家でも祖先から傳來した特殊の主義があるもので、此主義は職業が如何に變化しても何處にか必らず分子が殘つて居りこれが其家の空氣を成して居るやうに思はれます。手近の例を擧げますれば今日實業に從事して居

る主人なども儒者の家に生れて其感化を受けた人でございますし、私の生家も儒教で固まつた方でしたから唯今私共の家庭は自然此分子が在るのでございます。夫で長女の縁談が掛りました時も私共と同じ主義の士族だから心配は無いと存じて取定めましたやうな次第でございますが案の通り夫婦の間柄は勿論一家親戚の交際も誠に圓滿な和合を得られて居ります。長男の嫁も矢張り似寄つた家庭から貰ひ受けましたので一同滿足いたして居ります。皆様が貴女のお宅では如何して幸福な御縁組ばかりお出來になるのでせうと仰つて下さいますが、私共では別に撰擇に苦心いたす次第でもなく、唯皆様がお世話下さる縁談の中で前申上たやうに一番似寄つた向を撰んだゞけの事でございます。尤も一家族の内でさへ様々の氣風のある位ですから何も彼も自分の家の空氣と似寄つて居る次第には參りませんが、根本の幹さへ同じ様であれば枝葉は異つて居ても差支へないと存じます。幹が異つて居りますと家族同志の交際上に甚だ不都合を生じ、夫婦の間柄も趣味の不一致から不愉快な生涯を送る事にならうと存じます。

▲私の結婚時代

私の結婚でございますか。これは極簡單で唯今考へますと可笑しいやうでございます。私は十五歳の時兩親や祖母と共に郷里（鶴岡）から東京へ出まして、三田に（丁度唯今の慶應義塾の處）へ住まひましたが、郷里にをりました頃の國風で女子は獨り歩きをいたさぬ格式を守つて居つたものが、東京へ參つてから獨りで買物にも出歩き錢湯にも參ると云ふ境遇に變つたのでございます。其頃御近所にお住ひの福澤先生初め草郷様（目下小田原電鐵會社長）、朝吹様、小幡様などが唯今の主人との縁談をお世話下さいました。兩親は年もゆかぬ一人の娘を子供も一人あり年も大分違つて居るところへ遣るのは少し可愛想だと思つたのだ相ですが、私が六七歳の頃から側を離さず愛育して呉れました祖母が『本人が誠實であるなら繼子がある位何んで

もない、繼子を實子のやうに愛育するのは婦人の常道です」と申して易くお受けいたしたのでございます。私は其折丁度十六歳で未だ結婚の事などは夢にも考へて居らぬのに兩親から寢耳に水の命令で、加之式は明後日と申されましたので何が何んですか夢のやうな心地でございました。斯樣有樣でしたから支度も何も簡單なもので簞笥一棹に鏡臺針箱を持つて參つた位のものでございました。私が家を出ます時石の上にも三年と云ふ事を深く心に銘して居るやうに祖母から教訓されましたが、私は幸ひに姑も小姑も珍らしい優しい人達で實の親同胞に勝る親しみを得られ、義子も極良い出來で、石の上と云ふ感じを起した事はございませんでしたから、此戒も私に取つては別に必要もなかつたのでございます。併し一般嫁かるゝ若いお方は古臭い言葉ではありますが石の上にも三年のお覺悟を吳々もお勸めいたしたいと存じます。

▲忍んで學問した祖母

私の祖父は孝心の深い人で雷鳴の夜は雷嫌ひの母親の枕元に帶刀の儘終夜端座して守つた相でございます祖母も又八釜しい姑によく使へ子供達にも姑を敬はせまして、八つ時に一回與へる間食なども自分の手から渡さずに姑から貰はせる事に定てございましたので、其時刻になりますと四人の子供がゾロ〳〵とお祖母さんの居間へ頂きに出掛けます。夫れで時刻が少し早いとお祖母さんが「未だ早い」と云つて與へません、子供は仕方なしに又ゾロ〳〵と引返す樣子は全で千代萩の飯焚場のやうであつた相でございます。祖母は末子(夫人の叔父)を產んで枕直しの日に祖父が歿しましたので内外の用事を一身に引受け殊に子供の教育には非常に苦心いたしました。其頃漢學などは婦人に學ばせぬ風習でしたが我子の教育上必要を感じまして、自宅へ參る漢學の先生が長子へ教授するのを襖越しに聽き取り、裁縫をいたし乍ら書物を繙いて潜かに研究いたし四書五經を悉皆諳記して了つたのでございます。祖母は又非常な經濟家で其頃は未だ三百石の小祿の家で

ございましたが、倉を建てたいと申し暮して居た姑の志を奉じて勤儉力行の結果漸に倉を一つ建てました積善の餘慶で祖父母の徳行の爲に私の叔母達は皆良縁を得たのでございます。

▲私の少女時代

私は戰爭時代に育つたので唯今の少女のやうに落付て女の學藝を勵むと申す事も出來ず心持も餘程男性が交つて居つたやうでございます。其頃少女の讀物は女大學、女今川がお定りでしたが、お轉婆な私は是がつまらなくつて漢書が習つて見たく、未だ十歳位の頃兄達が日々學校から歸つて祖母の前で復習しますのを見て羨ましく、祖母にせがみまして針仕事して居る前で孝經論語など敎へて貰ひ、意味も何も知らずに唯門前の小僧のお經のやうに棒讀みを致したものでした。唯今は悉皆忘れて了つて本を見ても讀ませんのは誠にお恥しく存じます。



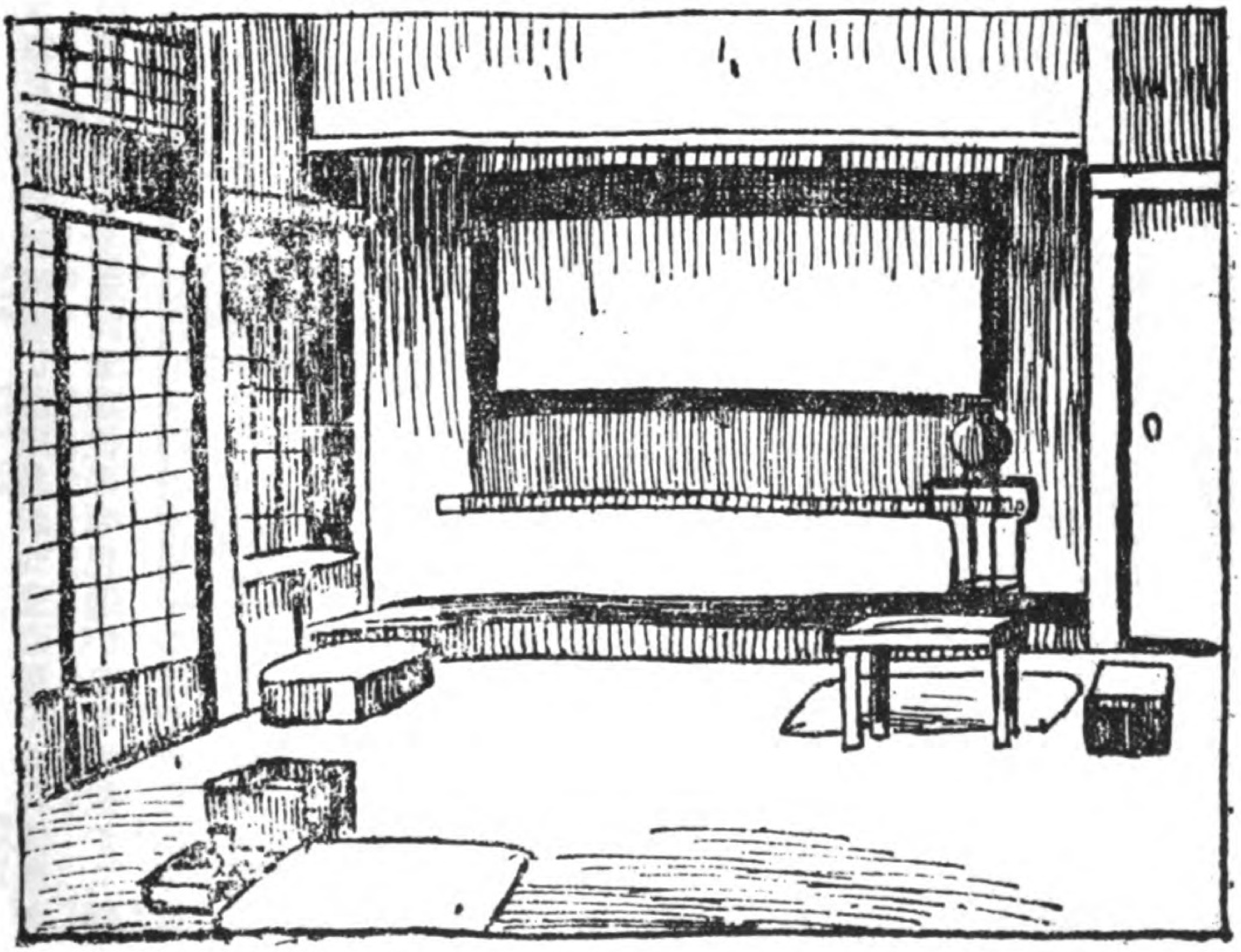
▲女の兒は盜難よけ

お話しが色々になりますが私共は世帯を持ちましてから盗難に罹つた事がございません。此處（三田松坂町）へ住ひまして二十年にもなりますけれども靴一つ盗れた事がありませんのは不思議だと主人に申しました處、主人が「夫は其筈さ、支那では三人の娘があると其費用で貧乏するから盜賊も窺はないと云ふ俚諺がある位だ、宅では四人も女の兒が在るのだから用心堅固なものさ」と申して大笑ひした事がございました。

▲晴の場所

私は娘達を晴の場所へ出す事は餘り好みません。妙齢のものが晴の場所へ度々出ますと追々他樣の盛裝が眼に沁みるやうになりますと宅の娘共のやうに智慧の足りぬものには將來に宜しくないと存じて居ります又呉服店などへも結婚前になりませんければ連れて參りません。彼樣場所へ參つて高價な品が惜氣もなく陳列してあるのを見ますと自分の持物は値打なき物のやうな心を起し其難有味を忘れ易いものでございます。

大隈伯爵夫人の居間



●東京淺草七軒町二●

男女生殖器科　明治療院

●梅毒　麻毒　生殖器障害　神經衰弱

●婦人科一般　ヒステリー　月經障害

●診察　午前　午後

●入院隨時●

ちゞれくせ毛

何程難毛も速に全治し赤毛を黑化し白毛を防ぎフケを去る實驗の新液あり卓効を保證す郵券二錢送れ說明書呈◉東京神田仲猿樂町十北澤定子

文やけ油



東京人形町通三宅堂本舗

村井弦齋先生御證明

最良髮油

●外にみやけ香油、香入みやけ油、精製すき油、びんつけ、洗粉島の春等…好評嘖々

●販賣所は全國信用ある店にあり

靈驗驚くべく最も進歩せる……且最も應用汎く大有益なる

▲最新催眠術案內▼

望の人葉書にて御申込あれ直ぐ送呈す●大阪東區南久寶寺町一　尙文館

●博文館圖書陳列所…館內にあり

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一壜の一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散　やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總ての肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓五週三圓廿錢送費十錢



◀偽物あり乞御注意▶

皮膚病專門藥

おまづ　いんきん　たむし

あか鼻　ざくろ鼻　あざ

ぜにがさ　ひぜん　わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

本舗　東京本郷區本郷三丁目　振替口座一二五八四四番　新宮藥館

電話下谷二二一九番

女(その二)

（女 その三）

女子大學講義

新に第三回の學期を開始す

會員には毎月雜誌「家庭」を無代進呈す

▼本講義は毎號雲上賢き邊に奉献すべき光榮を有せり
▼入會は至極簡便にして學科は女子大學家政科に據る
▼本講義は文章平易趣味豐富假名付なれば何人も讀得
▼講師は悉く女子教育に經驗ある博士大家の筆に成る
▼通信教育は簡便なる勉學方法にて家庭の婦人に適す

本月に限入會金を全免す!!!

▼全學期を修めば十八册の百科全書を備付せるに等し
▼本講義は石の如き基礎の上に立ち中途廢刊の愁なし
▼本月限り入會金を免除す會費は一ケ月僅に五十錢なり
▼會則は往復ハガキにて申込次第無代にて進呈すべし
▼會員には種々の優待方法を設けたり直に入會あれ

發行兼申込所 東京市小石川區久堅町百八 (電話番町九三二番) 精美堂

世界無比……最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 目に必ず美麗に除去す

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さずところ無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

●らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することゝ到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぽうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

●奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子は威嚴あり ▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

滋腎回春記臆增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボツト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大に增進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女(わの七)

▼一層の大發展▼四月雜誌界の花▼

婦女界

四月一日第二號　定價一册拾五錢　郵税一錢五厘　一年十二册郵税共壹圓七十五錢

▲皇后陛下御歌の御解

▲富美宮殿下御平生

▲私の最も感心したる三婦人……伯爵　土方久元

▲私が新に妻を娶らるとしたら斯んな注文がある……法、農學博士　新渡戸稻造

▲十年間歐米に於て獨立自營したる實驗……鈴木濱子

▲卅年間空閨を守り後顧の憂なからしめし私の妻の内助…山崎幾造

▲山縣公の聟君を育てたる賢女小林カメ子自刃

▲猛火の中から七人の子供を救ひし實驗……本多さだ子

▲私の觀たる婦人の犯罪……花井法學博士

皇后陛下御親筆

御歌金砂子色紙形本號附錄

▲空想に沈める女(三色版)……藤島武二

▲ゆく春(石版)……榊原蕉園

▲廿一人の子を生みて現に十二人を育てつゝある私の妻……鈴木梅吉

▲私はどうして良人の放蕩を矯正したるか……渡邊勝子

▲十六歳の少女で月給五圓の良人に嫁し五軒の家を建てし實驗……松岡げん

▲歯の養生を怠れば容貌を傷く……志村ドクトル

▲三十圓で一家を經營しつゝある實驗……某巡査妻

▲女の細腕で一萬圓を貯蓄した實驗……岡崎鹽子

▲前號第三版賣切

▲懸賞當選發表…

發兌　東京神田表神保町　振替東京一三五番

同文館

電話本局特四三七　電話本局一五三九

各地書林

天才肌の奥様

婦人記者



片山廣子女史の世間話

日本銀行調査局長片山貞次郎氏の夫人と御主人の肩書だけ拝見すると貯金簿を簞笥の底に仕舞ひ込んで二一天作ばかり考へて居らるゝかの様に想像されるが事實はそれと雲泥の相違で佐々木信綱大人の門弟中で第一流の天才と推されて居らるゝ片山廣子女史です記者は先づ御主人の御病氣を全癒させられたと云ふ評判を持ち出して質問を始めました

良人は私の嫁りません内に少し肋膜炎を患つたのださうですが、其後大した病氣に罹りました事もなく、唯今では滅多に風邪も引かず、至つて丈夫で居ります。何かのお間違ではございませんか。……尤もかういふ事はございました、私が嫁つて三年目かに良人が急性肺炎に罹つたのでしたが、御承知の通りあれは俄かな病氣ですし、殊に不注意な私のことですから大した病氣とも思はず、醫者から『今一人立合を頼んで呉れ』といはれて、急に狼狽し始めました。少し前には妹と一緒に入浴などして落ちつき込んで居た私が、夜中から看護婦だの氷だのと大騒ぎを始めました。それが丁度土曜日の晩でして、翌日の日曜にお友達の方がお出でしたので、私は良人が昨夜來四十度の熱で臥つて居ることを申し上げました。ところが其日は大隈さんのお邸で觀菊會がございましたので、片山は四十三度の熱が出たと傳へられ、それは大變だ四十三度、迚も助かるまいとの話になり、その觀菊會のお歸り掛けにシルクハットのお方が俥を二十臺も連ねて宅（其時は小石川）の門前で下りられたので、近所では何か宅に祝ひごとでもあるのだらうと噂が立つたさうです。それか

ら肺炎は經過よく一個月もかゝらずに全快して了つたのですけれども、一時皆樣に大騷ぎをおさせ申したので、ちよつと評判になつたのかも知れません。その後良人が都合により大藏省から日本銀行の方へ轉じましたところ、外國に居らしつたお友達の中に大藏省で病中の片山を迷ひ出した樣に誤解された方もあつたさうです。本當に間違へば間違ふものでございますよ。第一私も年のゆかぬ内で、前申上げた通り無茶でしたから、良人の助かつたのは看護婦の親切と氷のお蔭でして、苦心の何のと大袈裟に噂される程の手柄は微塵もないのでございます。

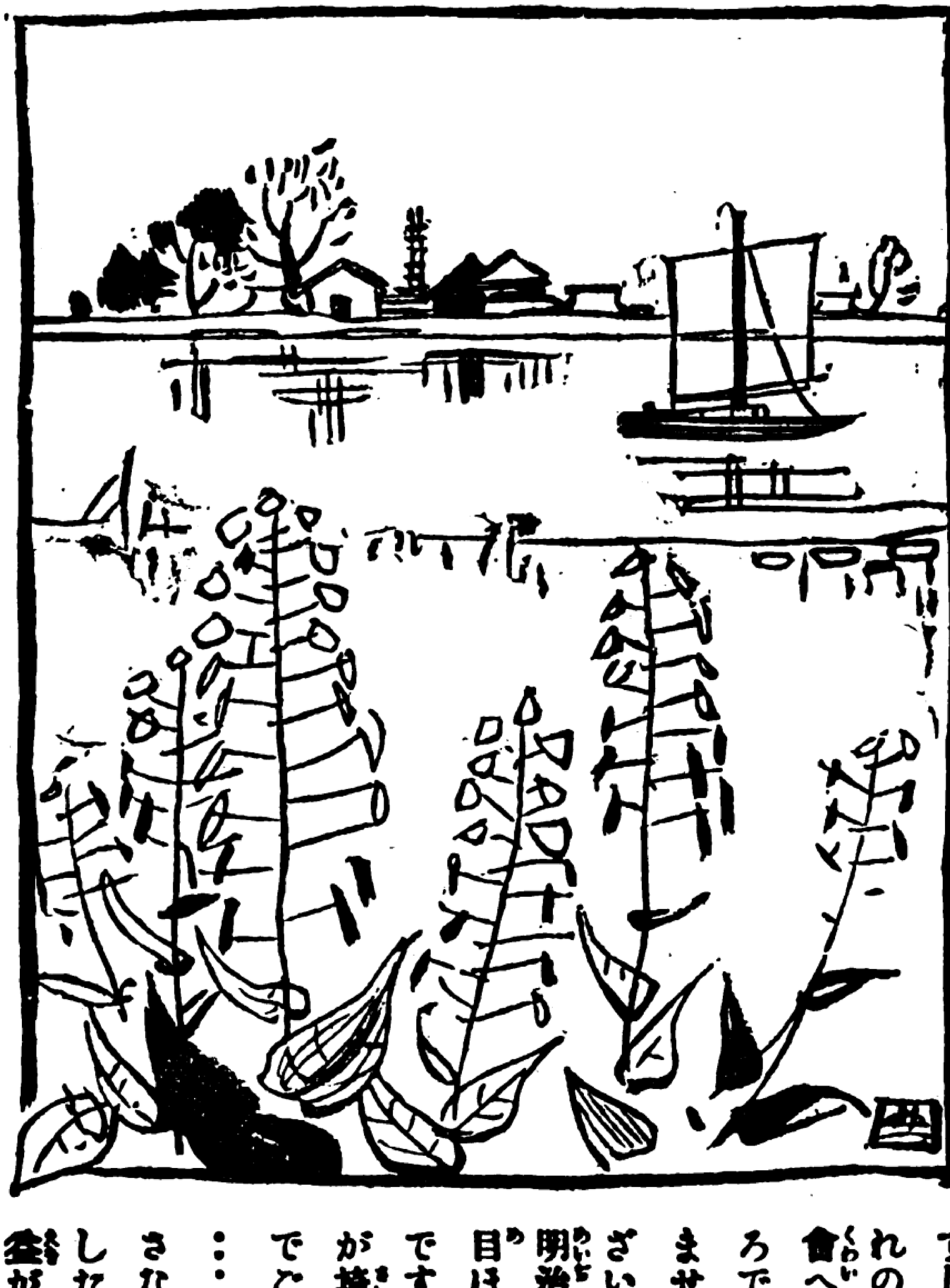
▲評判は當てにならぬ

三年ばかり前に私のことがある新聞に出たことがございました。何でも私が良人を能く看護した上に、田舍へ引込んで働いて負債を返したとか、私が良人の枕元で英文の小說を讀んで聽かせたとか、いろ／＼仰山に書いてありました。此地へ引移りましたのは、私の身内が此處に住んで居つたあとへ入つたと申すだけで別に深い譯はないのです。田舍へ引込んで負債が返せるなら東京に居たつて返せるでせうし、第一私は英書が達者に讀めるのでもなし、良人の枕元で英文小說を讀むなど云ふハイカラは大嫌ひで、そんな女を見たら擲つて遣りたい程なんです、私の性格をまるで反對に書いたものですから、私は聞き捨てにならないと申したのですけれども、良人が「何もお前が惡いことをしたと書いた譯ぢやアなし、打ちやつて置くがよい」と申しましたので、其儘にいたして置きました。私は一體時代後れの敎育を受けた人間で、今の若いお方のお話し相手にもなれませんし、雜誌に書いて頂くやうな柄ぢやないんでございますよ。

▲田舍住居が私の趣味

趣味と申して何もないのでございます。唯だ田舍に住つて華美な交際は一切いたしませず、東京へは買物に參るだけの事で、ハイカラ風に染みないで居られる

のが幸福だと思つて居ります。子供を遣つて置きます　この村の小學校なども、教師は手少ですべてが不完全のやうですが、餘り子供を鑄型に入れないでかへつてよいかと思ひます　それに宅の子供は少し陰氣な方ですから百姓の子供達と一緒に亂暴な遊をする方がよい樣でございます。私の趣味は田舎びた者でムいますネ。



▲私は根が百姓です

良人は表だつて會へ私を出す事は大嫌ひでございますし、私も時代後れの人間ですから會へ出ましたところでお役にも立ちません。左樣でございますネ、年は明治へ入つて十年目ほどに生れたのですけれども、根が埼玉の百姓なんでございますから……。實用向な小さな會でも出來ましたら、私共にも益があるのでございませうが、田舎者の私共は、大きな會へ出ますとまづ膽を潰して皆樣のお服裝を拜見して來るだけのこと

で、根つから詰らないやうな氣がいたします。併しこれも引込思案の食べず嫌ひなのかも知れません。母の會でございますか、唯今は如何樣になりましたか存じませんが、最初は大層善い會であつたやうでございます。此會を發起された松波夫人は、實に感心な方で、唯今の良妻賢母のやうに窮屈な鑄型に嵌つては居られませんし、お話しを伺つても別段非凡なところもありませんが、仰しやるより實行の方が先で御家庭でなさることを拜見しますと、一々感服することばかりでございます。此奥さんがミセス、コーツさんと御相談で母の會をお始めになつたのでした。私は英和女學校時代から御懇意に願つて居ります。イヱ學校つて私はロクに參つたのではございません。

▲机は子供の寢臺

年のゆかぬ内に妹と一緒にお世話願ひましたお茶と花の先生は誠に立派な御婦人でしたが不幸にして三年程でお別れ致しましたので、誠に殘念でございました。併し花はどうも私のやうな者に向きません。私共があんな綺麗なものをいぢりますのは勿體ない心地が致して厭でございます。本も若い内はくだらぬ物をよく讀みましたが、追々世帶染みて參りますと緣遠くなりまして、雜誌類でも一々買つては見ないで、親戚の者と交換して見るといふやうになり、小說なども七八十錢も出して買つたところで、一晩に讀んで了つて後で何にもならぬとおもふて求める氣になれませんし、人間ももうかうお金勘定をするやうになつてはお仕舞ひでございます。机を子供の寢臺にして了ふのですから、お話しになりません。ハイ和歌だけは絕え〲ながら佐々木先生に御厄介になつて唯今まで棄てずに居るのでございます。

▲頭腦を養ふ必要から

女は一家を持ち子を設けますと、何うしても家事にかまけ勝ちで、頭腦を養ふと云ふ機會が少くなりますから、何か一つ方法を見つけて、家事に用ゐる頭腦以

外に頭腦を使つて居ることが必要かと存じます。さうでないと、日々新らしい見聞を得つゝある良人と漸々懸け離れてしまつて良人に氣の毒のやうな心地がいたします。私もこういふかんがへから、和歌だけは引續いて少しづゝ進つて居りますので、これなら特別の時間も道具立も要らす、お針をいたしながらでも考へることが出來、さうして詰らぬ和歌でも一つ纏めて見やうとおもへば、多少心を落ち着けて考へますから、幾分か頭腦を働かせることができるのでございます。それで和歌をなさる令嬢方は何處かいはれぬ落着がありますし、小學卒業程度の方でも顯



脳が自然に働いて參るやうでございまして、佐々木先生へお出の令孃方に就ても此實例が見えます。さうして高等教育を受けた方でも小學卒業程度の方でも精力一つで同じやうに進んで行かれる様ですから、至極都合がよいのでございます。先生のお弟子に熱心な法華信者のお孃さんがございましたが、その方の和歌は實に立派なもので、皆さんが感心してをられました。和歌は實に善く其人のこゝろが映るものでございます。

▲歌題

先生のところでは、初學のものには歌題を下さいますが、少し解つて參りますと、歌題は自由におまかせになります。通例自分に接近したことの方が詠み易いものですから、女は先づ人事の方が多く、さうして佳いのも出來るやうです。景色の方になりますと、女は旅行の機會が少いためか、どうも男の方に及ばぬやうにおもはれます。上達すれば何を題にしても詠み得られるのでせうが、未熟な私共には、矢張り月とか露とかいふ類が詠み易いやうでございます。新らしい物の中でもコスモスなどは大分日本化しましたから、皆様もよくお詠みですが、ダリアは何うも餘りバタ臭くて不適當の感じがいたします。人事の中でも、我子の容子などは、非常に面白い愛らしいと自分で感じても、他人にさまで感興を起させぬものかと存じます。戀歌は女の優しい感じを表はすのに好いものですけれども處女の間に餘り熱烈な調子で詠みますと人に冷かされる事を氣遣ふと見え、お孃さん方は控へ目に詠む氣味がございます。私共の年輩になれば、そんな懸念も外飾もなくなつて、思ひ切つたのを作つて見る氣になります。

▲感情の迫つた時

歌は感情其儘をいひ表はすものでせうが、これを纒めやうといたすには、矢張り頭腦の中で工夫しなければなりませんから、餘り感情の迫つた時には、この工夫の餘裕がなくなつて纒りが付きかねるやうでござい

ます。私は親を亡くした時に歌が出來ませんでした。子を亡くした場合も矢張り同じですから、通常の女はとても歌など考へるどころではなく、又た子を亡くした場合を想像して詠むのは縁起が悪い心地がして、子持の女には厭なものですし、去りとて未だ子を持たぬ女には、其眞情が解し得られぬと云ふやうな點もありますから、何うも子を亡くした歌は餘り佳いのが出來ないものだと先生も仰しやいました。迫つた感情も少し程が經てば落ち着いて參りますから、詠み得られるものでございませう。



かねぐ敬愛して居つた師とか友達とかに數年間別れて居る際不斗その凶報に接した場合などは、歌を詠み出るに丁度好い感情が湧くのでございませう。

なみはほえ
風はいかりて
うなはらも
ゆきをわけゆく
こゝちこそすれ

支那婦人の生活

◎清國の婦人が習慣上引籠り主義である事は誰も知つて居りますが、その代り家庭に於ての實權は大したもので、家政に關する事は巨細となく悉く婦人の勢力で決めて了ひます。而して世間交際を爲ない割合には非常に交際が上手で、例へば奥様同志の交際などは實に驚く程圓轉滑脫なものです。夫れに彼の國の人は男女に限らず人の胸中を察する事が非常に敏く、對合つて話を爲て居ても言ひ難い話は夫れと言はないでも瞭然と對者が察して了ひます。男ですら然であるから、神經の一層過敏な婦人となると、言ひ度くても言ひ難い事などお互ひに胸の中で讀み合ふといふ風であります。

◎斯ういふところは清國婦人は寧ろ歐米風でありますが、更に其生活狀態から言つて見ても、總てが我邦に比べて歐米との類似點が甚だ多いのです。彼國では、中流以上になると、兒童を母親自らが養育する事は稀い、大概は兒童一人々々に娯母を附けて其れに養育を任せて了ふ。是等も歐米風な一例でせう。其他衣食住何によらず餘程歐米の風に似た點が多いが、是れは清國の生活程度が非常に低い爲め斯いふ貴族的の事をするについて便宜が多いといふのも一つの理由に相違ありません。例へば下婢といふ樣なものでも彼國では非常に廉い賃銀で雇入れる事が出來ます殊に今でも人身賣買といふ樣な事が盛んに行はれて居るので、小兒を生れ立ての時五十錢か一圓位で買入れ、而して養育して夫れを永久婢僕として使ふといふ習慣ですから、大概中流以上の家になると、婦人には女の召使、男には男子の召使といふ風に澤山の婢僕を使ふ事が甚だ容易に出來るのです。而して其婢僕も生れ立ての小兒から養育するのが面倒な場合には、相當な年配の者を雇入れる。夫れも一人五六圓も出せば好いから、婢僕と言つても眞に食べさせて衣させて行くだけで濟むのです。

◎元來が屋內に引籠つてばかり居るのですから、爲る仕事も甚だ單調で、重に刺繡をするとか文字のある者なら讀書に耽るとか、先づその位のものです。併し近來は教育といふ事が非常に重んぜられて來た結果、幼稚園から女子の小學校、高等女學校なども出來て居る位ですから、中流以上の家庭では大概の婦人は書物を讀む樣になつて居ります。而して近來は盛んに小說類が出版され、中には日本物を種に飜譯されたらしいものも澤山ありますが、讀書界に勢力のあるのは例の探偵小說で。此外には娛樂として賭博が盛んに行はれますが、併し是は單に婦女子ばかりでなく立派な紳士の間にも唯一の家庭娛樂とされて居るのです。夫から彼地では演劇即ち芝居が中々歡迎されるので、之も男女に限らず盛んに見物に出懸け、婦人達は殊の外之を喜ぶ樣子でありますが、劇場の中でも、男女の席の嚴重に區別されてあるのは一寸面白い現象です。（松本龜次郎氏）

卒業前の女學生

上原綾子



あゝもうたつた三日!!!雨の日も風の日も倦まずたゆまず五ヶ年間通學ひつゞけた母校で授業をうけるのも僅か三日になつてしまつた。

常ならば朝などなか／＼横着をきめ込んで「御嬢様御めざめ遊ばせ」と云つてくる女中に

「としや御願ひだからもうぼつちり‥‥可いわたまには少しくらゐ遅刻したつて‥‥」などゝ途方も無いことをよく云つたものだが此頃では一刻も早く學校に行つて殘り少い日を友と語り合ひたいといふ念が先に立つて不思議と早くから眼ざめる樣になつた。

人は現金なものと母樣がおつしやる自分もつく／＼それにちがひ無いと思つた。

卒業紀念として母校に遺す製作品――それは各自の勝手なものを選ぶので私は好きな道の水彩畫ときめた――が兎も角昨日出來上つたので一應先生に見て頂くつもりで持つて登校する。

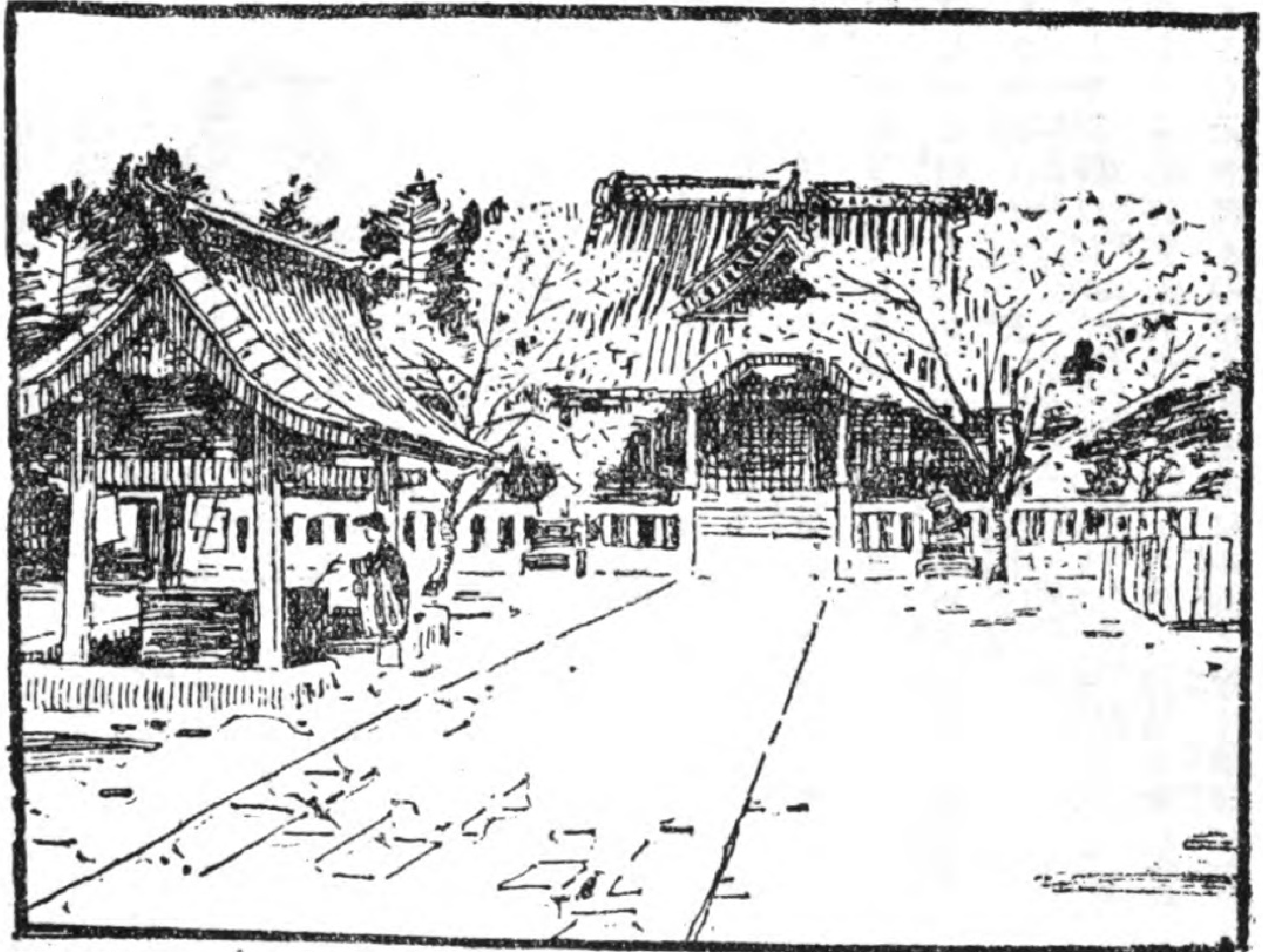
電車の中でB組の吉井さん東島さんと一緒になつた片手に更紗モスのスカラーバツグ抱へ右手を勿體らしくマツプに突込んだ吉井さんは他にも耳は澤山あるのに一向おかまひ無しのあたり憚らぬ高聲で、

「綾子さんあなたの級ぢや落第が二人だつて事實のことでせうか?」ときく

「どうだか私もよくは知りませんけれどもね、まさか二人なんてことは無いでせうと思つてよ」

「一體誰だかわからなくつて? あんな松岡さんみたいな人こそおつこちりやア好い氣味だのに‥‥でも糸瓜

湯島天神の櫻



があのとほり可愛がつてるからね……」

「糸瓜つて何のことよ吉井さん！」

「オホヽヽヽ糸瓜を御存じ無いの？だからA組はおめでたいつて評判はれるのよシッカリなさいな」

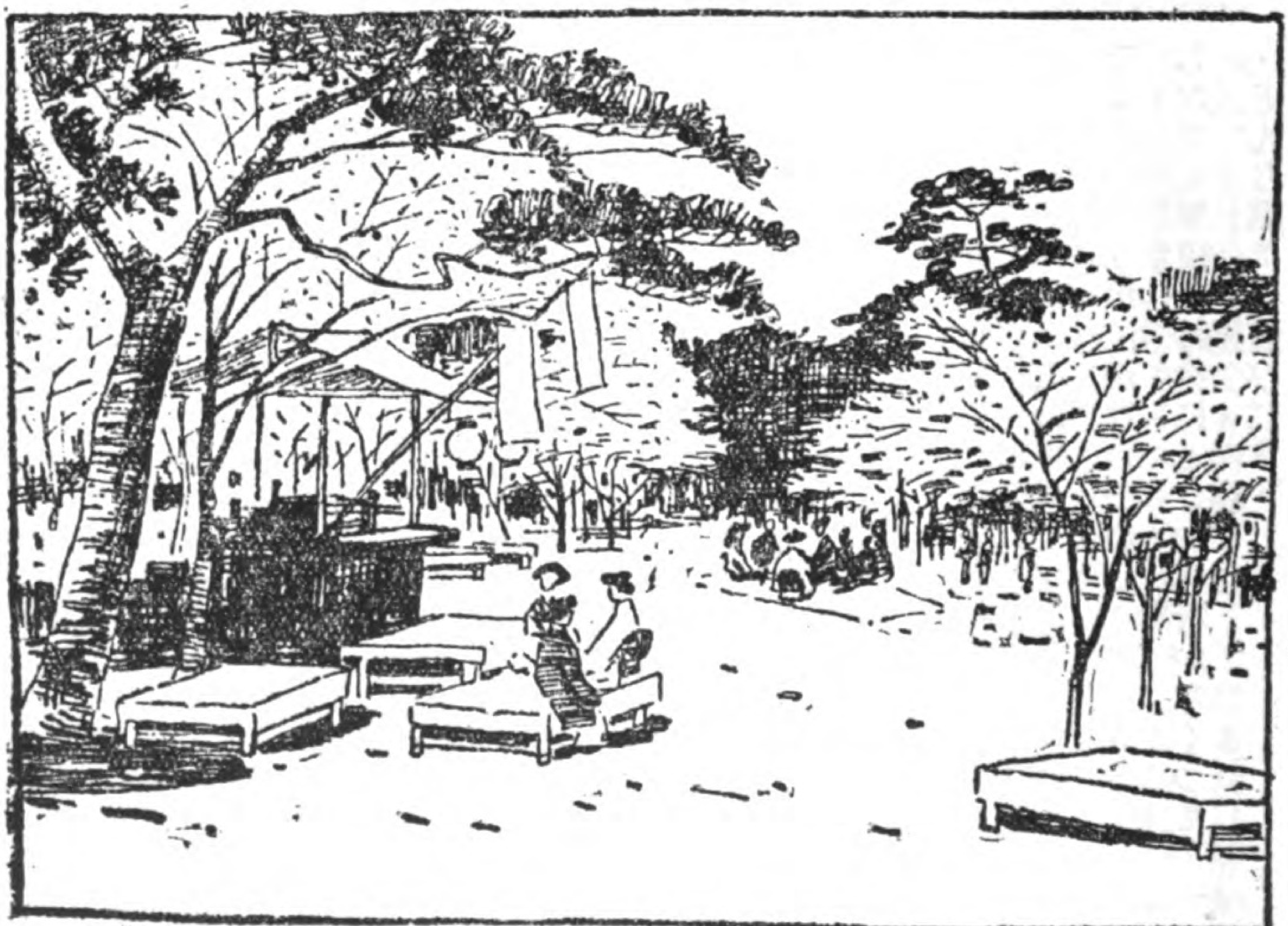
おめでたくても何でも私には糸瓜の意味がよく解せない、大抵先生の綽名だらうとは思はれるがそれと確かな心當りが無いのだもの吉井さんと東島さんとは袖を引張つて笑つてるけれども仕方が無い、但し此處に到つてA組は全く御めでたいナとそれだけは思ひ當つた。

授業が終つて次の授業に移るまでの休憩時間には大勢が一團になつて赤煉瓦の校舎に脊をもたれて日向ぼつこをするくせになつた私達は、今日も例の通りかたまりを作つた。

「試驗が濟んでしまふと何だか張合拔けがしてしまつてさつぱり勉強する氣にもなれないわ」

Sさんがこんなことを云ひながら其のよく似合ふ紫銘仙の羽織の衿先をいぢくつてゐるとKさんがこれも無

意識に紺カシミアの袴の紐を引張りつゝ
「全くよ以前にはホラ、、よく早く卒業してみたいの、試驗がなければ嬉しからうになんて言つてたけれど、今となるともうたつた一遍で可い腕にヨリかけてやつでみたい様な氣がするわ」と相槌を打つ
「羨しいわね、私なんぞ迚も難しいときまつてるんですものそんな暢氣なこと云つてられやしない、今日にも宣告されるかもしれないのよ」
「じやうだんでせう默つてらつしやいよ‥‥だけれどほんとに人間つて現金なものだわね、あんなに憎らしかつた○○先生でもいざとなればなつかしくも思はれるし‥‥」
「全くよいくら皮肉な問題を出されても何でも矢張りね‥‥そりやさうとMさんあなたいよ〳〵英學塾と極つて？」
こんなことを言ひ合つてるとベルがいそがしげになり渡つてまたSさんの所謂張合抜けのした――けれども何と無く以何となく名殘惜い次の授業の幕が明く。



飛鳥山の櫻

眞つ白のカラーに更紗羽二重の氣取つたネキタイ遊ばした若い△△先生が敎壇の上に御立ちになつて「皆さんを僕が御敎へするのもこれが最終になりましたね、」と沈むだ口調でおつしやつたので一級三十三人の面は言ひ合はさずして一樣に曇つて中には下を向いて眼をしばたゝいた人さへある位…私も何だか胸がつまつた。何故でせう？　師の君たちや友びととの別離が悲しくて？　何もこれで死別の何のといふでは無し卒業後とても每日の樣に母校に來て御目にかゝることも、御互に訪ひかはして語り合ふのも思ひのまゝでは無いか、然らば學校生活に別れを告げるのが悲しくて？　それもより高等の幾多の學園が門戶を開放して我等を迎へて居るではないか、さらば此の淚は何をかなしみの…？　あゝ何と言ひ得やうわれみづから經驗したことではないが乾度處女がその誇りに輝く若き胸をば振袖に包んで嫁ぐ夕べの言ひしれぬさびしみにもたとへられやうか…。

ヽヽヽフト氣が付くと隣席のKさんが手帖の端に何か記したのをポーンと投げつけたので開いて見れば「泪なんかこぼすのはおやめなさい、いくら大勢が泣いて上げたつて先生の頭の中にはTさんと別れるかなしさのほかは無いんだから」と走りがき、オヤ〳〵なる程先生の視線はその金緣の近眼鏡とほしてえも塔へられぬ樣な悲しげな風情のTさんの前髮のあたりに落ちて居るKさんは一寸橫眼でニッコリ笑つてみせた。

此の時間が終つて廊下へ出ると二年の美代さんがもう來て待ちうけて居たのでスイと列から拔けて無言のまゝバルコニーへ出ると（これはいつも私達二人の御きまりで）美代さんはあの大きい眼をうるませながら「姉さまほんとにもう僅かになつちやつたのね」と淚聲でいふ。

「さうね、でも卒業したつてまた學校へもちよい〳〵來ますしそれに二人は每日でも電話でお話ができるんですものどうか泣かないでね…あ、さう〳〵あのあしたでも學校の歸途にどこかへ行かなくつて？」

「どんな處？　遊びに？」

根津權現の櫻



「え、また妙華園でも何處でも…なるたけ靜かな人のない樣な木の陰でどつさり御話がしてみたいわ」

「えいうれしいわ私どこへでも行くことよ…あのこれねほんとに變なんで御氣に入らないでせうけれど御揃ひに…」

長い袂からとり出して私の手に持たせた紙包の中は六吋巾のタフタアリボン

「美代さん有難う、御氣の毒ねきつと／＼卒業式にかけてよ」

「さう？　うれしいわ、ぢやまた誰かに見付かるとうるさいから私もう彼方へ行つてよ」矢庭にあの細い柔かい手を延べて私の右手を握つて二三度強く振つて行つてしまふ、某女學校ではこの私達二人の樣なのをオメと稱して居るさうな、名稱こそちがへこれはいづこも變り無き事實で、我が校内だけでも幾組あるかしれない程だ、そして卒業前になるとそのいはゆる互にオメつたりオメられたりしてる二人はよく裏山の杉の木立の中だの遊戯用具室の片隅などに會して人目をさけ

つゝつきぬ名殘を惜しむのである
Yさんは昨日裁縫の時間に
「私の芳子はほんとに薄情よ今まではあんなに仲よくして居たのに今更B組の安川さんの御機嫌なんぞ取りはじめて……こらこの通りひどいことを言つて來たのあゝ口惜しいッ」といきなりふところから水色の細い封筒をとり出してピリ／＼引裂いてまるめてしまつた。それを思へば私なんかほんとに幸つて言ふのかしらあゝして戀しがつてなつかしがつて別れを惜しんでくれる美代さんが……可愛い人だ。

午後の休憩時間は井戸端ならぬ例の通りのストーブ會議、もう火の氣もないストーブの四周へ各目が椅子をもち出して圓形を造つて勝手なことをしやべり合ふその話題もけふ此頃では先生のあらさがしなどかつぎ出すよりはまづどうしても卒業後の方針とか何とかいふ方へ落ちて行く

「Tさんは御多忙だわね卒業式の翌日がまた直ぐあつちの入學試驗で……未來の籐井……オット柴田女史第



牛込見附の櫻

二世しつかり願ひますよ」

「聲樂家は美的生活だから高尚で好いわ、私なんぞ又チンチクリンの袴はいて若溪橋畔を永い年月うろついて揚句の果てが女學校の教師つまらないわね」

「ホヽヽホヽこの人は蟲が好いにも程が有つてよ、もう入學ができたつもりで自分免許の女教師とは呆れ返つてしまつてねエ」



「オホヽヽヽ」とうれしさうに御本人までが笑ひ出すこれは高師志望のHさん

「柳谷さんはね卒業すると直ぐ帝國ホテルへ親戚知友殘らず招待して本式に御披露していよいよ資田さんと名乘を擧げるんですとさ、そしてさんぐ御友達を羨しがらせ樣つて寸法なんでせう招待れても行くんぢやなくてよ皆さん!!!

鬼の居ないうちのお洗濯といふ格で常々から少々けむたい人の上を噂したSさんは一寸口をきつてからまた直ぐ

「そりやさうと卒業式の着物はどうして？　何ば戊申詔書の御趣旨を捧戴するたつて一生一度の卒業式に酒屋の小僧サン然たる黒木綿の御紋付も少々振るひすぎてるぢやありませんか」

例によつて例の如くこの人の長たらしい言ひまはし好い加減で願下げにもしたい處ながらこれも程無く聞かれなくなると思へば日常ほどは耳にも障らぬ…。

それにつけても氣の毒なのは××さん無論學課はよく出來る筈はないけれどあの優しいおとなしい氣質の人を――きけば及第點には一點五分不足なのださうな家には名題の御繼母が爪を磨いで…あのかたが學課の成績のあまりよくないのも一つはそれが原因と私達も衷心から同情していろ／＼先生にすがつたり運動もしてみたけれどそれも無效に終るのであらう今日しも愈々最後の宣告をうけられたものと見え眼を泣きはらして校長室から出て來るなり默つて歸つてしまはれた。

人ごとでは無いもしあれがわが身の上…と思へば何だか身がすくむ。あゝ斯くして我がA組は共に學び共に遊んで睦びかはした三十三人が揃つて卒業證書を握ることはできなくなつてしまつたのである。

あゝ××さん決して落膽あそばすな、そして來ん年こそは美事首席の月桂冠を頂いて今日の悲しみをとり返す樣にどうぞ勉學して頂戴！　私も祈つて居りませう。

めぐむ柳、ふくらむ櫻、翠色のカーペットを敷きのべた樣なあの校庭のクローヴアーは例年のとほり萌えそめても、もう私達はあの柔かい草の上に寢ころんで音樂室の窓から漏れるピアノの音にきゝとれることは出來なくなつてしまつたのである。

目前に迫つた樂しい花やすみも今年からは此の校の生徒としては過されなくなつてしまつた。

あゝなつかしき母校よさらば!!!



雜記帳

與謝野晶子

×

女子教育に携つて居られる方を見ると、（最も寫眞で許ですが、）男の方も女の方もたいてい險のある、親み憎いお顔をして居られる樣ですね。女の方で何刀自とか某女史とか云はれる婦人には、殊に血の氣の無い、萎びた、心持の僻んだらしい人相の人か、で無ければ、惡肥りに肥滿つた牛や豚を見るのと同じ感じを與へる人、執拗くて、强欲で、我意の劇しい、之が女性かと驚かれる許に獰猛な相好の人が多いのです。容貌の醜いのは生來で致方が無いとしても、隨分心掛次第で醜婦は醜婦丈の愛嬌のある表情が出るものですのにね。殊に教育のある御婦人になると、趣味と學識とが高い氣品と優美な表情とを顔に現して、生來の醜婦をも自然に美しく親み易くするものですが、今の女子教育家には俗物が多い爲でせうか。又口頭の學問ばかりで體達された何物も無い爲でせうか。私は然う云ふ女子教育家の寫眞を見る度に、失禮ですけれども、斯樣な面相の男子や婦人が碌な教育の出來るもので無からう、大切な人の娘を僞善者の生活の餌食にするに過ざなからうと、何時も厭な氣持を覺えます。

寫眞と云へば、近頃の婦人雜誌の口繪に澤山出る貴婦人令孃の寫眞には、兎に角美しい方が多い樣ですね 私は然う云ふ高貴な婦人方の水際立つて美しい、福福し相な寫眞を拜見する度に、うつとりと快い氣持になるのですが、今の貴婦人方よりも學問のあり氣な女子教育家が揃ひも揃ふて野蠻人じみた容貌をして居ら

れるのは不思議でなりません。

平安朝の才媛は和泉式部、紫式部、清少納言、何れも生來の容貌は美人で無く、又源氏物語の女も空蟬にせよ明石にせよ美人では無いのですが、其れが如何にも懷しい女性の樣に當時の人や後世の讀者を引附けるのは、人格の修養が美しく出來上つて居たからでせう。

昔は「でも坊主」と云ふ事がありました。今の女教師達も其れと同じで、最初は立派な文明國の女子になる爲に學問を修めたのでなく、此娘は容量が惡いから女教師にでもしよう。と云ふので教育せられた人が多いのですから、高等學校の入學試驗に堪へ無い低能兒を多く、收容する私立大學や音樂學校の出身者と同じく、元來人並の資格に缺けて居る所がありますとは云へ、容貌の缺點を補ふ丈の心の修飾がもつと完全に出來相なものですね。

今の女教師達の多數には、どうも不具者な婦人が多い氣がしてなりません。良妻賢母と云ふ事は其人達の本領の樣ですけれども、其人達自身には其れを實踐せられるのでは少しも無い。有名な女教育家は大抵獨身です。獨身で暮すと云ふ程婦人に取つて不具者な生活は無いと思ふ。私には、其人達の唱へられる賢妻良母主義が滑稽でならないのです。

若い多數の女教師達が獨身で居るのは、粧匳の資に乏しいと云ふ樣な理由許でなく、其性情が女らしい貞淑婉雅な所を失つて中性な者になつて居るため、一般の男子から歡迎せられないのです。偶には結婚する人もある樣ですが、どうも女教師の妻は良人と氣心は合はず家庭がしつくりと行かぬ爲に破鏡の憂目を見る樣な結果になつて居ります。寫眞を見た丈でも斯う云ふ風采容貌の人では、とても家庭は治るまいと想はれるぢやありませんか。既に妻となる資格も無いのですもの、然う云ふ女教育家が人の母となる心得を說くなどは、畢竟迂濶な空論に過ぎまいと思はれます。

又女教育家の中には、曾て人の妻であつた寡婦のお婆あさんが大分に居られるのですが、弘化とか嘉永と

かに良人に死別れたと云ふ様な、血の氣の無い、萎びた現象ではありません。粋さびたお婆さんが、いくらボアを巻いたり手套をはめたりせられたからと云つて其性情が今の若い娘達としつくり合ふものでは無からうと思ふのです。然う云ふ時代おくれのお婆あさん達が女子教育界に居られるのは決して頼しい



又女學校に居る時から料理とか家事とか、育兒とか娘として華やかであるべき時代に餘り必要で無い學課で苦められる爲に、地方の女學校などでは十六七の娘さんが最う一廉世帯窶れをした顔をして、艶と花の蕾の様な若々しい所

が見受られませんと聞いて居ります。
又お婆あさんの女敎育家は姑が嫁に干渉する態度で女生徒に臨みます。近頃批難のある「可からず訓」などが其一例です。あの内の一箇條でも女敎育家自身が守れるかと云ふに全く不可能の事許では無いでせうか。難きを他に强ふると云ふのは姑根性で無ければ時代の常識に缺けて居るのです。

何人にも自然に實行し得る道德で爲ければ、新代の人々には不用です。

敎育家と云ふ人々は一槪に無道德な世の中の樣に今日を考へて居る人種の集りですが、學校で說く樣な舊い道德の形骸を標準にして見るなら、如何にも最早舊い道德は亡んで居るかも知れません。併し學校以外の廣い社會では今日に適合した新しい道德が十分明かに守られて居ります。若し一日でも道德が存在しなかつたならば、立所に社會の活動は止まり、秩序は亂れ、五千萬人は餓えて、格鬪して、死ぬるより外は無い筈です。

今日の道德は「可からず訓」の樣な、こせ〳〵した消極的な、內容の貧弱なものではありません。「男も女も皆生甲斐のある生活をしよう、生を樂まう」之が新しい道德の基礎です。之を出發點として、互に自我の特性を發揮し尊敬し合はうとし、自由に思索し、自由に讀書し、自由に歌ひ奏で、自由に論議し、自由に勞働して居るのが只今の社會です。是程立派な道德は過去の日本には無かつた所だと存じます。但し學校に許囚はれて居る「でも敎育家」には、斯樣に自由で愉快な新道德は了解し難いかも知れません。

初へ戻つて申しますと、女學校の敎師には男も女も若い美しい人を擇ぶが好からうと思ひます。今の多數の女敎師の樣な醜い、品の乏しい容貌では、親み難く懷しげが無いのみならず、却て厭しい反感が起つて、良い感化を阻害する事が多からうと思はれます。勿論玆に美しいと云ふのは、生來の容貌が優れて居ると共に智識と感情の修養の行屆いて立派である事を申すのです。梅幸の樣な藝人の美しい顏を見てすら好い感じ

がするのですもの、美しい教育家に教へらるゝ娘は、何れ丈ほれぼれした心理状態になつて、自然に樂に教を受ける事が出來るか知れません。其れから若い美しい教育家と云つても獨身では世態に通せぬ嫌がありますから必ず既婚の男女に限りたいと思ひます。夫婦となり小兒を育てゝ一家を有つて居る若い人のする教育で無ければ、萬事が迂濶で實践躬行の趣意に叶はないでせう。



こんな話を昨日○○様として別れた。○○様は今度九州の方へ赴任する女教師で、さう云ふ職業の人にしては珍しく美しい人である。惜しい事には二十八歳で未だひとり身。

×

夜遅く傘を措いて良人と二人二階を下りた。子供達が踏み脱いで居るのに蒲團を著せて側の寢臺に一人腰を掛けた。子供の一人は怖い夢を見て居るのか、苦し相に呻き出した。

お伽噺の中の動物に追ひつめられて食ひ殺される所でもあらうか。

怖い夢を見て居る者は命掛けだ。併し傍觀して居る者は呑氣である。

自分には兩面がある。命掛にも成れる。傍觀も出來る。是迄は大分に命掛で色々の夢を見て心をも身をも疲らせた。之からは少し他人の命掛を傍觀しようと思ふ。

靜かに子供の蒲團をまくつて胸に載せて居る手を下ろして遣つた。

×

青と銀との千筋の縞。

それが自分の前に空から垂下る。

こんな夢を今日の夜明方に見た。何だか近頃流行る口語詩の句の樣で可笑しい。

×

四人の子供を女中に伴れさせて有樂座のお伽芝居へ遣りました。すると、子供達は次の樣な言葉を覺えて來ました。「拳骨で打つぞ」、「泥坊、警察へ一寸來い。」

×

夜の明がた、重き水腫の身に來りしを覺ゆ。死期の近きしを知ると共に、心の中の一つの心、「不安なきか。」と問ふ。われ答ふ。「少しも無し。六人の子は今父の手に縋るべき時の來りぬと思ふのみ。我は今、一枚の毛布と、更に一つの蒲團を上に重ぬるを得ば、樂みて死ぬべし。」

他の一つの心云ふ。「此朝は三月の六日なれど、冬の如く寒し。」

×

八歳になる光に木扁の字の解り易きを少し教へしに

二三日經て、二階より下りて見るに、狹き庭の植木の幹毎に、白堊もて、松には松の字、梅には梅の字、桃梨、檜、杉、柿など一々その字を白々と書けり。母は驚きぬ。さて思ふやう。此母も亦世の人により何々と白堊にて書かれつゝ立てる植木のたぐひにはあらじや。斯く思ひて心ふと曇りぬ。

×

「奥様、お泣きになりましたね。」

「つい泣いたのですわ。」

「珍しいですな。」

「わたし、叱られましてね。臺所の事で。」

「まあお互貧乏人の夫婦喧嘩は皆それですよ。」

「でもね、之は私が惡いのですがね。貧乏人とも云はれない事ですよ、一月に櫻炭を八俵も遣つてわね。」

「櫻炭を八俵、少々驚きますね。女中の所爲でせう。」

「然うなのですよ。コオクスだと思つて居たら、櫻炭を湯殿で焚いて居たんですつて。」

「亂暴だな。奥様は御存じ無かつたのですか。」

「其女中は先月の末に暇を出したのですがね。尤も私はそんな事位あると思つてたのですけれど、諦めて居たのです。私はそんな事位諦めるのは何でも無いのです。私は先月一ぱい身體の自由が利かなかつたでせう。二階へ上ると上つたきりで下へ下りる事も出來ませんでせう。私が行つて見ないと臺所で不經濟の有り丈を遣つて居ると、其れは知つて居るのですね。それで居て私は仕方が無いと隨分思切よく一人で諦めて居たのです。

　私はこんな事は主人には言ひませんがね、今一人でつく〴〵思つて泣いて居ましたのです。其れはね、私があんまり諦めが好くなつた事です。私の樣に幼い時から不自由な目許して大きく成つた者には諦めが何より先に發達したのですわ。其から此方へ參つてからも私は隨分といろんな事を諦めました。お見掛の通り私は齒が惡いでせう。實家に居ました時分に入れた齒は四五年前に皆落ちて終ひました。私の命は十年位早く

死ぬから歯を良くせよと御醫者様に云はれて居るのです。之などは大切な事だと人樣には思はれる事でせうが、私には貧しいから出來ないと諦めがついて、斯うして醜い儘に放任つて居ります。臺所で今月は餘計な掛りを四五圓も拵へるのか、などゝ思ひながら諦めて居るなんぞは、何でも無いのですわ。」

「なるほど、ね。」

「私は併し斯う思ひますの。諦めると云ふ事は自分の體を段々痲痺させて行く樣なものですね。私は今大切な自分の六人の子の中の一人が死んでも、平氣に諦めるのかと思ふと情無い氣が致しますわ。さうして段々と體が痲痺して來て、世間から何んな惡名を負はされても平氣で居る樣になり、其れよりもつと惡い事をしても諦めが附く樣にならないか知ら、と思つて只今泣いて居ましたの。」

「奥樣、御産後で大分神經が過敏に成つてお出ですね」

×

二月二十八日の午前三時に佐保子が生れた。其朝赤ん坊の寢顔を覗き込んで、光が「此兒は何處から來たの」と獨言ちて居た。此長男が中學を出る頃に成つてそろ〱此佐保子をも自分の重荷の一つに感じ出す事であらう。然うは感じさせたく無い、五人の弟や妹は兩親が處分して置いて遣らねば成らぬ、と思ふと、産後の痛みをも忘れて涙が頰を傳ふた。



結婚媒介の繁昌

倫敦で二十年來結婚媒介をなして居る者の談に曰く、

女子と言ふものは結婚問題に就ては想ひの外商賣的で又大膽で、男子の方が却て臆病なやうに思はれる。女子は自分の希望通りの夫を見附けて吳るゝならば、手數料の如きは幾等でも平氣で出すから妙である。數月以前例に依つて夫の周旋を申込んだ婦人が有つた。其婦人の曰ふに、浮世の荒海を渡るには迚も纖弱き婦人では駄目ですから、寧そ夫を有つて見たい考へが起つた。自分は別に收入も無いが、十分夫を助けて成功せしむる丈けの腕前は持つて居る積りであるから、少くとも一ケ年二萬圓位の收入ある人を欲いとの事であつた。其婦人は容貌と云ひ態度と云ひ貴婦人として恥かしからぬと見て取つたが、聞けば某貴族の家庭教師であつたさうである。尤も二萬圓からの收入を有する男子は却々六つかしいが、彼の婦人の美貌では大丈夫だらうと思ふたから、快く承諾を與へた。而して其後製鐵家を紹介したが、話は着々進行して、一週間も立たない內に結婚が出來て、以來幸福な家庭を作り夫なる人は二言目には細君の敏腕を自慢して居る。

元來二萬圓或は五萬圓もの年收を有つて居る男子と結婚したいなど云ふのは出來ない相談らしいが、それには貧乏貴族の令孃達などいふ又相當した婦人がある其他又右のやうな自分が富有の夫を助けて大に敏腕を振つて見たいと言ふ婦人も少く無いのである。或日一人の年若い後家が來て、夫を周旋して吳れと云ふから、早速周旋してやつて結婚したが、二三週も立つたと思ふ頃又やつて來て、其言草が面白い結婚後に夫の財產を調べて見たら、實際夫が以前に申立てたのよりも財產が少なかつたから離緣した。ドウカ今度はそんな間違の無い樣に前以て銀行の預金帳を取調べた上で結婚したいから其積りで宜しく周旋を賴むとあつた。さて其後再び一萬二千圓の年收ある夫を周旋したが、其婦人は二三週間の後に予を訪ひ來り、御禮にとて五千圓を置いて行つたといふやうな結婚の周旋には却々面白い所がある。商店の實子や下女等から結婚紹介の申込が每日幾十となく來るが、予の所で此邊からの申込は一切斷はつて、引受けるのは所謂上客筋許りである。今手數料の割合を示せば

年收	手數料
一千圓以內	二十一圓
五千圓以內	八十四圓
一萬圓以內	百五十七圓五十錢
五萬圓以內	五百二十五圓



墨田堤の櫻花



お産の時何人も心得て置べき事

産婆を早く呼ぶ必要

産婆　西尾きやう子

▲臨月になつた姙婦

臨月になられたお方の處へ診察にあがりますと何方も同じやうなことを仰やいますが、私も版行で押したやうな事を申上るのでございます。姙婦のお方は「お産は何日頃でせう。何卒輕く産たいもの、誰さんのお産は産婆が間に合なかつたさうですが、そんなに輕かつたら嘸良いでせうネ、間に合ぬために何か害があつても困るけれども手間のかゝるよりいくら良か知れません。誰さんはお産が重くつて醫者が器械で出したとか、尤も母兒共無事ではあるさうだが、どうかそんな事のないやうにしたい」と仰やいます。それで私は、「誠に御尤とお察し申上ます、併し産婆が間に合はぬやうにお産が輕くてもお子さんに害を受けたり親御様のお肥立が惡ければ安産とは申されません。又お醫者の診察を受る場合がありましても母兒に障りがなければ安産でございます。お産は人々の身體の工合に依つて痛の強い方もあり、お腹が痛まずに唯局部だけの痛で産れる方もあり、姙娠中度々痛む方もありいろ〳〵でございますが、何れにしても平常と違つたことがおありでしたら直に産婆にお知らせ下さい、幾度無駄にお呼になつても構ひませんから早く呼んで頂きたうございます。痛がなくつても時間を定めてお腹が堅く（子宮收縮）なるやうな時、水液或は血液が少しでも下る時は早くお知らせ下さいと呉々も申上げて置ます。

▲早く産婆を呼ばぬ事情

（年寄の經驗に依賴してはならぬ）

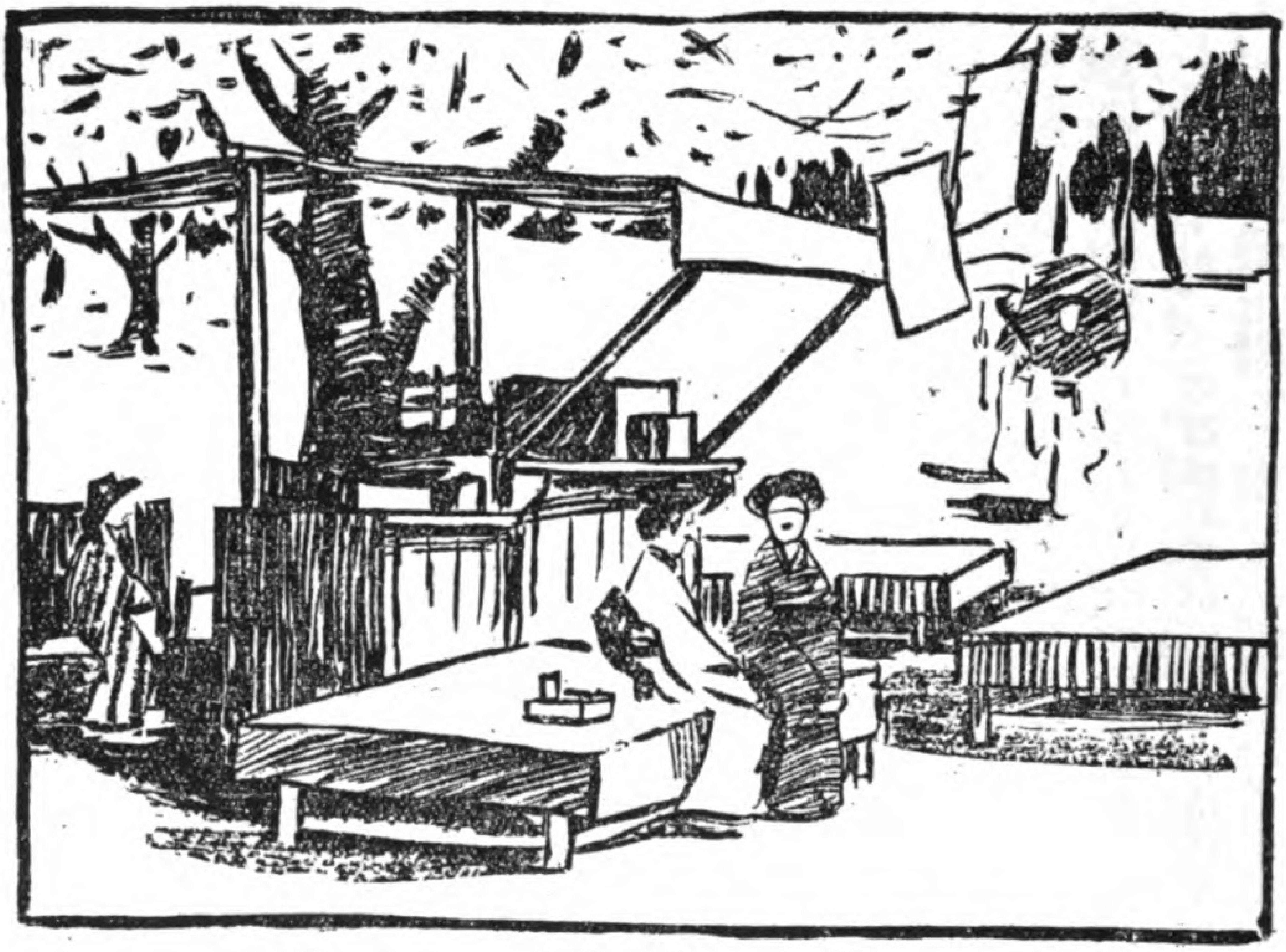
お産の場合に丁度お宅に取込事でも出來たとか、あるひは他にやむを得ぬ都合があつて産婆を呼ぶのが後

れるお宅もありませうが、先づ一般に早く呼ばぬ理由は餘り早くから產婆を呼び立てゝ仰山な騷ぎをするのは見苦しいとか、長い間產婆を待せて置くのは氣の毒だとか面倒だとか思召て最少し〳〵と我慢なさる方が多いやうに存じます。又中には御當人は早く呼びたいと思召ても側に居るお年寄が自分の經驗を擧げて落着いて居られるのに氣兼して我慢なさるお方もありませうし、初姙婦などは年寄の經驗談に依つて異常の徵候があつても安心して居られる事があるとも申されません。勿論年寄は決して惡かれと思ふのでございませんが、人に依り時に依り樣々の發作のあるものですから何は扨置き產婆を早く呼んで診察させることが必要でございませう。序に申上ますが姙娠中は心配事は大禁物、殊に臨月に入りましたら精神を安靜にし、消化良く滋養に富だ食物を撰び、大小便の快く通ずるやう、暑さ寒さにもよく注意してもし少しでも工合が惡かつたら專門醫に見て貰ふ事等は御自身は勿論、家族一同熱心に御注意ありたいものでございます。

▲結果の良否はお產の遲速によらぬ

私が御用いたした中で一番長いと存じたのは一週間かゝつたお產でしたが、母兒共丈夫に肥立ました。又早いと存じましたのは姙婦が初めて診察をさせに私の宅へまゐりましたから、これは產れさうだと存じて居る內、立派な男の兒を產み後產も直に下りました。で其赤兒に產湯を使はせて居りますと產婦は立ち上り帶を締めますから、起てはいけませんと申しても聽ず、「大きにお世話樣になりました、何れ子供は宅へ歸つてから取に寄越します」と云ひ捨てゝいくら止ても駒下駄を履てからころ〳〵と歸つて了ひましたのには驚きました。ところが三週間程經て大層工合が惡くなり三ケ月も病院へ入て漸と生命だけは助かりましたがこれ等の例を見ましても結果の良否はお產の遲速に依らぬことが分ります。

▲早く破水する場合



上野公園の櫻

胎兒は内卵膜と外卵膜との二つに包まれて居るものでございまして、内卵膜の中に羊水があつて胎兒の身體を滑らかに保ち、分娩の際はこの羊水が必須の用をなすのでございます。それで若し分娩前にこの羊水が漏出して了ひますと胎兒の一命に係はり、産婦も惡痛、或は痙攣性陣痛を起し易く、又は胎盤早期剝離のため出血を起すと云ふ心配がございますから、陣痛に先つて破水した場合には直に産婆を呼ばなければならず、産婆は又醫師に告げなければなりません。尤も子宮と外卵膜の間、若くは内卵膜と外卵膜との間に溜つた水液は假羊水と名げますので、この假羊水がお産氣前から下ることがございますが、これは左して心配はないのでございます。ところが羊水と假羊水との區別は素人方には分りませんから兎に角水が下ましたら早速産婆にお知らせになるのが肝要でございます。

▲早期破水を打捨てゝ置て胎兒を失ふた實例

可なり贅澤な事を爲て居られるお家の奥樣が、極若い時結婚して三十を越してから初めて姙娠されたので一同大怡びでお產を待ておいでゝしたところ、月滿ちて產氣づいたお知らせに急いで伺ひますと、奥樣はお腹を診察する事も出來ぬ程の烈しい陣痛で苦しんで居られます。お宅の方の咄しに三日前多量の水が下り、其後少しづゝ下りて居たが痛も起らぬので打捨おきしところ、今晩入浴後俄かに痛み出したのであるとのこと、私は吃驚してとにかく内診するため局部の消毒をいたさうとして見ますと已に大分の出血があつたものらしく、子宮口は分娩第一期の半過になつて居ります早速お醫者を招んでもらひ共に診察いたしました時は陣痛は少し薄らいで胎兒の心音が非常に悪うございました。で其内胎兒が出まして立派な男の兒でしたが丸で黑胡摩であへた樣になつて窒息して居りました。お醫者は直ぐに氣管ブーシーで口中の汚物を出さうといたしたのですが、この器械の管が通にくい位にカーパパと下り物を澤山飲んで居り、お醫者が人工呼吸に骨を折つた甲斐もなく、死亡いたしました。これと申すのもつまりは產前によく水の下るものだ位のお年寄の經驗談が初姙婦の參考となり、早期破水をしたのを私に少しも知らせず平氣で打捨て置かれたために羊水は盡く出盡し、胎兒は子宮壁に壓迫されて大苦悶の際汚物を澤山に飲んで窒死したのですから實に見るも無慘な有樣でございました。もし最初水が下た時直に私を呼でくださつたなら早速專門醫を招いて頂く間に產婦を安靜にして幾分でも羊水の漏出を防ぎながら子宮を温めて收縮を早める等の手當をいたし專門醫師の命令に從つて速かに分娩させますれば九分九厘胎兒は助かつたのにと殘念に存じました。しかし手後れとなつては六日の菖蒲、待ちに待つた初兒を失はれた御家族の落膽は勿論ですが私の口悔しさは申し盡せない程でありました。

▲明治三十二年の勅令

少しでも變つた事があつたら早く呼で下さいと執拗

〝いやうに前々から願つて置く私の誠心がなせお分りにならぬのであらう、私は口不調法のため誠心が通じないのであらうかと存じまして、前のやうな場合には實に口悔涙がこぼれるのでございますお年寄を非難するのではありませんが、前々から萬一の爲に怖い徴候の例をお咄しいたせば妊婦を威すと思召すので、唯知せてください位に申上げて置きますと、萬事御自分の經驗に依り素人判斷で若い妊婦を喩し、大切な場合にも打捨て置かれるために殘念な結果を來すと云ふ實例が多いのでございます。明治三十二年の勅令を拜見しますと異常ある場合に醫師を呼ばぬ産婆は罰に處すると云ふ掟がございます。何卒皆樣も大君の忝き御心にお戻りにならぬやうにお心掛ありたいものと存じます。

▲大出血小出血の場合に心得べき事



出血は姙娠、分娩、產後とも怖いことでございます尤も分娩時と產後に下り物のあるのは普通でございますが、其量が多くつて普通のと色がちがふのを出血と申しますのでこの際は必ず醫師の診察を要します。分娩時の普通の下り物は、胎兒が出た後に胎盤の離れた場處から出た血液が子宮内へ出で、それが卵膜に包まれ胎盤と共に下りるので、時としては卵膜に包まれないで外へ下りる事もあります。これならば心配はないのですが、若し胎兒が出ない内に胎盤が剝れかゝつて出血したり、胎兒が出かゝつて產道の側面から出血したりする場合が大變怖いのでございます。夫で胎兒が出たあと、子宮の收縮が惡く、胎盤の一部離れた處から出血するときは速にクレーデフ氏法を行ひ、後產が出ると出血は止むとが多いのですが、其後子宮の收縮がにぶいと内出血か、或は外出血を起すことがありますから其様な場合には直に醫者を願ます、又側面の出血はお醫者の治療で止りますが急場には消毒綿で壓してお醫者を待ちますのですが、大出血の場合には產婦は忽ち腦貧血を起し、手の裡をかへさぬ内危篤に陷るものですから醫師の來るまでに產婆は子宮に氷を當て興奮劑を與へ枕を低くする等の應急手當をいたします。若しか醫者の遲き場合には胎盤を出す事もいたさなければなりません。大出血は胎兒が出ましてから一時間内に起ることが多ふございますから分娩が濟んでもこの時間中は產婆が產婦の側に附切り不絕注意して居らなければなりません。こんな大切な場合に、子供は產れて了つたから、もう產婆に用はない早く歸つて呉れろと云ふ風に仕向けられるお家も折々ありますので誠に困るのでございます。

▲分娩時に腹部を揉みさする害

分娩の陣痛が起つた時、お腹を强くさすつたり押揉いたしますと胎盤の一部分が離れ易く往々出血を起すのでございます。私の呼ばれぬ内にお腹をもんだり押たりして出血を起こした方によく出遇ひました。陣痛が起ると兎角產婦がこの要求をいたしますし產婦自身


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

東京女子高等師範學校教授
文學士 下田次郎君著

女子の務

全一册 菊版半截洋裝美本紙數二百六十頁
正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

本書は女子教育專攻家下田文學士が、婦人界の廣き見渡しと婦人に關する多年の研究とに基き、婦人が時代の進步に後れず、世の弊風に染まずして、能く其任務を全うするの道を說かれたるものなり。其所說は多方面に亘りて、いづれも穩健中正に、文章は、豐富なる材料を、自由に驅使しつゝ、巧妙にして、しかも極めて平易に、何人もよく、理解し得るやう、物せられたり。されば一たび本書を手にせば、大なる感興の下に、强き刺激を受けつゝ、讀み畢りて、其早きを惜むや必せり。今や本書成る。切に一般婦人の愛讀を勸む。

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

根治確証 **わきが** 新治療藥 ラビヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ
可賣七合淺乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある**毒素**を清潔驅逐し惡臭を**根底**より**全滅**せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる 毛髮生養液 原名ヘグネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

有力なる**最新液**にして**毛**を**はやしたき人**早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をヘグネスと稱する現今最當用せらるゝ

化學製品 **色の白くなる** 紡ンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば**主性分の力**に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし**皮膚**を**漂白**するを以て全身次第に**白色艶美**となる男女交際上最も必用の品なり

最良 月ざらゑ **メソルピン**

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經のとまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ケ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に**流經**す又角に文前ゐて烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮**血の道**を全治し**古血**を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 **オリエンタル藥舘**

新案特許一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣

●丸髷拾五錢より七拾五錢迄 ●島田髷三拾錢より壹圓五拾錢迄 ●銀杏髷廿錢より六拾錢迄 送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを裝置せるにより舊式のもの、如く硬からず膚ざわり軟かなり
二 皮膚を摩擦することなきゆゑ頭のはげる憂なし
三 頭痛癖ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ
四 百五十度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介するの憂なし

●諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地（振替口座東京一八一八八番）田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹、本郷兼康、淺草駒形百助、淺草駒形紅勘、神田須田町三井屋、日本橋通二卯屋、外各地の小間物化粧品店に有

子を持つ親 病人ある家人は是非必要特許品

ね 小便袋



定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢 特別製品各拾五錢上り 送費八錢 引換注文廿五錢

衛生最良徳用輕便 小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、ねおきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

ルーデーサック（十二個 五十錢 三十個 一圓／五十個 一圓半 送料 八錢）

子宮サック（特製 七十錢 二個 一圓廿錢／三個 一圓六十錢 送料 八錢）

●發賣元祖 大阪市東區京橋二丁目 中川商店 振替口座大阪八六二番

御婦人は本書を一讀するの義務あり

◀大好評再版▶

産科婦人科 櫻井病院長 醫學士 櫻井郁次郎先生序文

産婦人科小兒科 吉田賢先生著

姙婦必讀 安産の心得

▲御婦人の一番大役なのはお産であります！

産前産後の心得及出産當時の取扱方並に育兒法等に至る迄細大洩さず懇切且つ丁寧に詳述せられたるものにして御姙娠の方は勿論一般の家庭には是非一本を備えねばなりません

▲本書は月經閉止後の狀態より

洋裝菊判頗美本 總ふりかな附 全一冊 定價四十錢 郵税金六錢

賣捌 各地書林

發行所 東京市神田區錦町一ノ十四 宇宙堂

女（るの三）

文藝倶樂部第拾六卷第六號增刊

落語講談 滑稽揃

四月十五日發行

全一冊洋裝菊判
紙數三百二十頁
口繪木版寫眞版豊富
正價金二十五錢
郵稅二錢五厘

猪屋の長松はいざ知らず、笑ふて損をなされし御方候や、恐らくは候まじ。福を得玉ひし御方は尠からず候べし、福を得んと願ひ玉ふお方もまた尠からず候べし。いざさらば爰にまかり出る滑稽揃ひ、ひた笑ひに笑はせて、あまたの福をお授け申さうずるにさふらふ。

演者氏名

眞龍齋貞水　三遊亭圓喬　西尾麟慶
柳家小さん　神田松鯉　田邊南龍
三遊亭圓右　錦城齋典山　橘家圓藏
猫遊軒伯知　蝶花樓馬樂　一龍齋貞山
柳亭燕枝　蓁々齋桃葉　三遊亭遊三
神田伯山



發兌元　東京日本橋本町　博文館　振替東京二四〇

女(ろの四)



少女世界第五卷第六號增刊　四月十五日發行

洋裝菊判美本
紙數百二十八頁
口繪石版寫眞版澤山
定價金拾錢
郵稅壹錢

少女世界 花の卷

花のやうに麗はしい
『花の卷』を御覽なさい！
花よりも美しい少女諸子はこの
『花の卷』をお讀みなさい！

【表紙】は本多穆堂氏の彩筆になつた花の裝いで【口繪】には『花をとめ』と題する三色版をかゝげ、なほその外に奇麗な寫眞版が八ページあります。何れも、少女世界獨得の美しいものばかりです。記事には

▼少女對話 **仲よし**……巖谷小波作

◎少女スケッチ◎少女小説◎卒業紀念◎新入學の記◎花の名所◎春七題◎學校案内◎少女日記◎少女の手紙◎誌友だより

右のやうな面白い記事をはじめとして讀者諸嬢の**短文、和歌、俳句**なども發表されます

想ふにこれは、花さく春の少女の讀みものとして、最も美くしくて、樂しくて而も有益なものと信じます。

東京本町 博文館

（ろの七）

久能木式 石油厨爐

厨爐の好季と相成候



春暖かに相成候へば常に不用の炭火を起し置くが如き不經濟はせぬものにて候然ればにやマッチ一本にて直ちに強烈の火力を發する簡便と且つ最も煮炊に經濟なる當『石油厨爐』は此期季に於て益々註文を重ね愈々好評を博しつゝ有之候間未だ御試用なき御方は御參考までに御遠慮なく目錄御請求下され其使用法を御一覽下され度候（目錄無代進呈）

製造發賣元 久能木商店 東京日本橋室町三丁目

長電話本局二八九番 振替口座一四五七番

Crème Simon

美！美!! 美容たらんとせば

开は實に目下世界到る處の貴婦人令孃間に尤も盛んに賞用せられつゝある佛國シモン會社製**シモン、クレーム**を常に愛用せらるゝにあり

衛生美顔

シモンクレーム

皮膚を白くし柔かにし又羽二重の如く滑かならしむ且つ手足のあれ唇のワレ、霜ヤケ、ヒヾ等に對しても亦無双の良劑なり

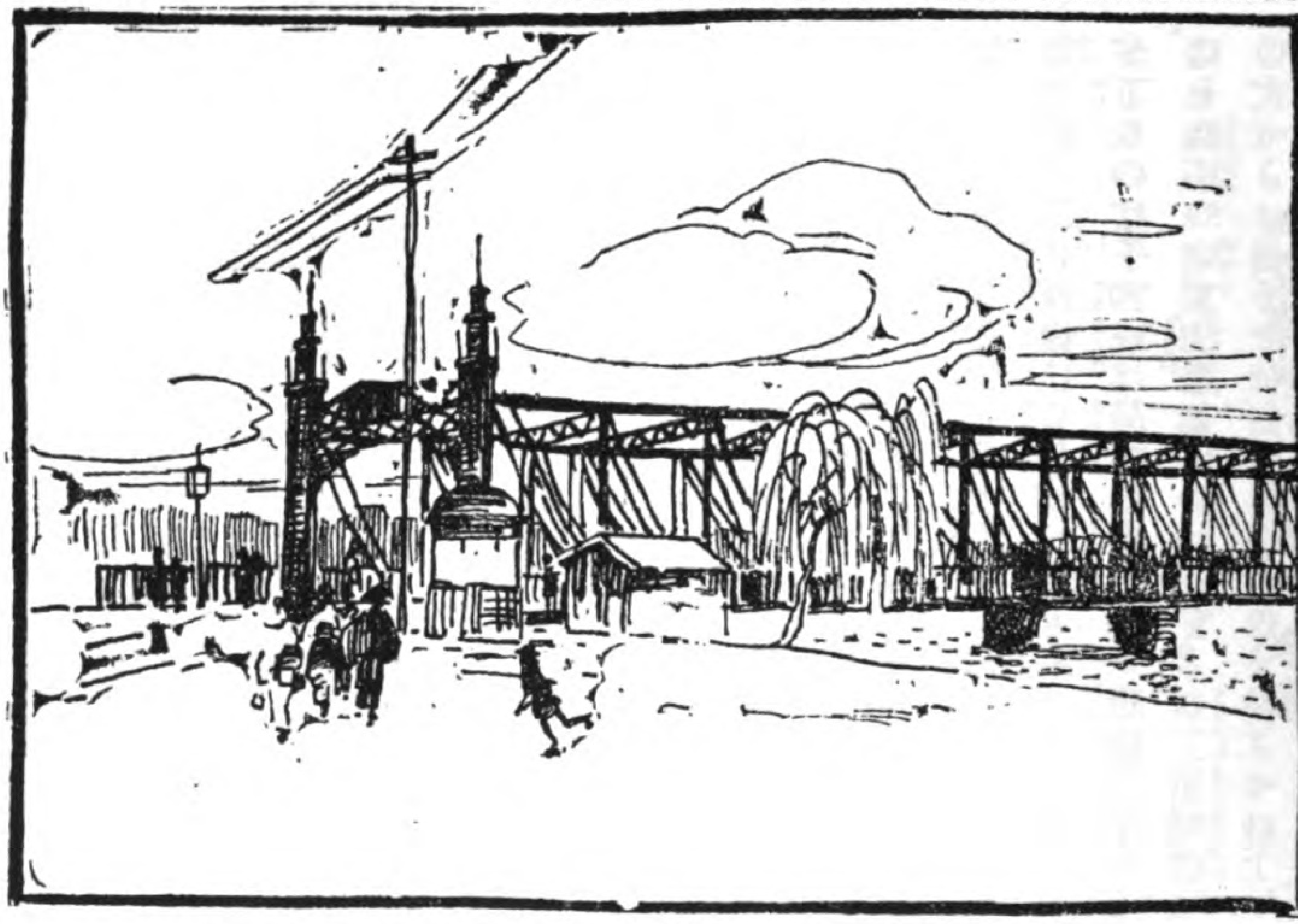
粉白粉（黄色、白、肉、とき色）及クレーム石鹼も共に御使用ありたし



日本代理店 橫濱市山下町七十番 エー、ハイム商會

三越始め各地化粧品店及和洋小間物店にあり

女(その八)



東京名所　（吾妻橋）

もつひお腹を押して堪へやうとするものでございますが、これは餘程注意しなければなりません。

▲妊娠中の出血

妊娠中膣カタルのある方が刺戟を受くる時又はポリープ其他腫物のために少量の出血があることがございますが、これ等は醫の治療で速やかに止るものでございます。併し卵膜が離れるにつれて子宮と胎盤と少しづつ剝れかゝるために起こる出血は流産の前兆で、これが妊娠二三ケ月に始まると大出血のある事が多く、醫師の間に合兼る場合も見ました。併しこれも始め少しづゝの出血ですからその際に早く醫師を招いて手當すれば大事にいたらずに濟み流産を免かれて十ケ月で安産する方がいくらもございます。

娠姙時、分娩時の出血の中で外へあらはれずに起る內出血と申すのがございまして、私は度々これにも出あひましたから其様子をお話しいたさうと存じますが餘り錯雜しますからそれは次回に申上る事にいたしま

せう。

▲産蓐中の下り物

昔は下り物が多いと古血の滞りが下りて良いのだと喜び、餘り少いと心配して服藥などすると云ふ風がございました、唯今でもどうかするとかう考へて居られる方がございますが、これは途方もない間違ひでございます。産後の下り物は胎盤の剝れたところから排出しますので、剝離面が癒れば止るのでございます。畢竟子宮の收縮が良く少くなることが早ければ剝離面は早く癒えるので下り物は少い程が良いのでございます早い方は一週間位で止りますが二週間目位に止れば良經過でございます。最初二三日間は赤く追々暗色を帶び、茶褐色から黄色となり終りに白色となるのが順當ですが、三日目後に少しづゝでも鮮紅色の交つたものが下るのは子宮或は局部に瘡のある證據ですから産婆はそれについて注意をいたします。

▲産蓐熱の恐るべき事

産蓐熱はペストよりもコレラよりも恐ろしいが、これは消毒の不注意に原因するので産婆の責任であると濱田先生から呉々も承つて居りますから消毒については注意に注意を加へて居ります。その所爲か幸ひに今日まで産蓐熱で心配した經驗はございません。産蓐熱は御承知の通り局部の疵口から黴菌が入つて忽ちの内に血液内に繁殖し全身にはびこり、産婦は高熱を發して十中八九は倒れるものでございますが、分娩の際には産婦も産婆も心づかぬ位の微細な疵が胎兒の出口に出來易いもので、黴菌は微細な疵口から入り易いものですから、局部に接觸する物品、或は産婆の手などの消毒は嚴重の上にも嚴重にいたさなければなりませんそれからこの産蓐熱は妊産婦に恐ろしい傳染力を持つて居りますから御注意が肝腎でございます。

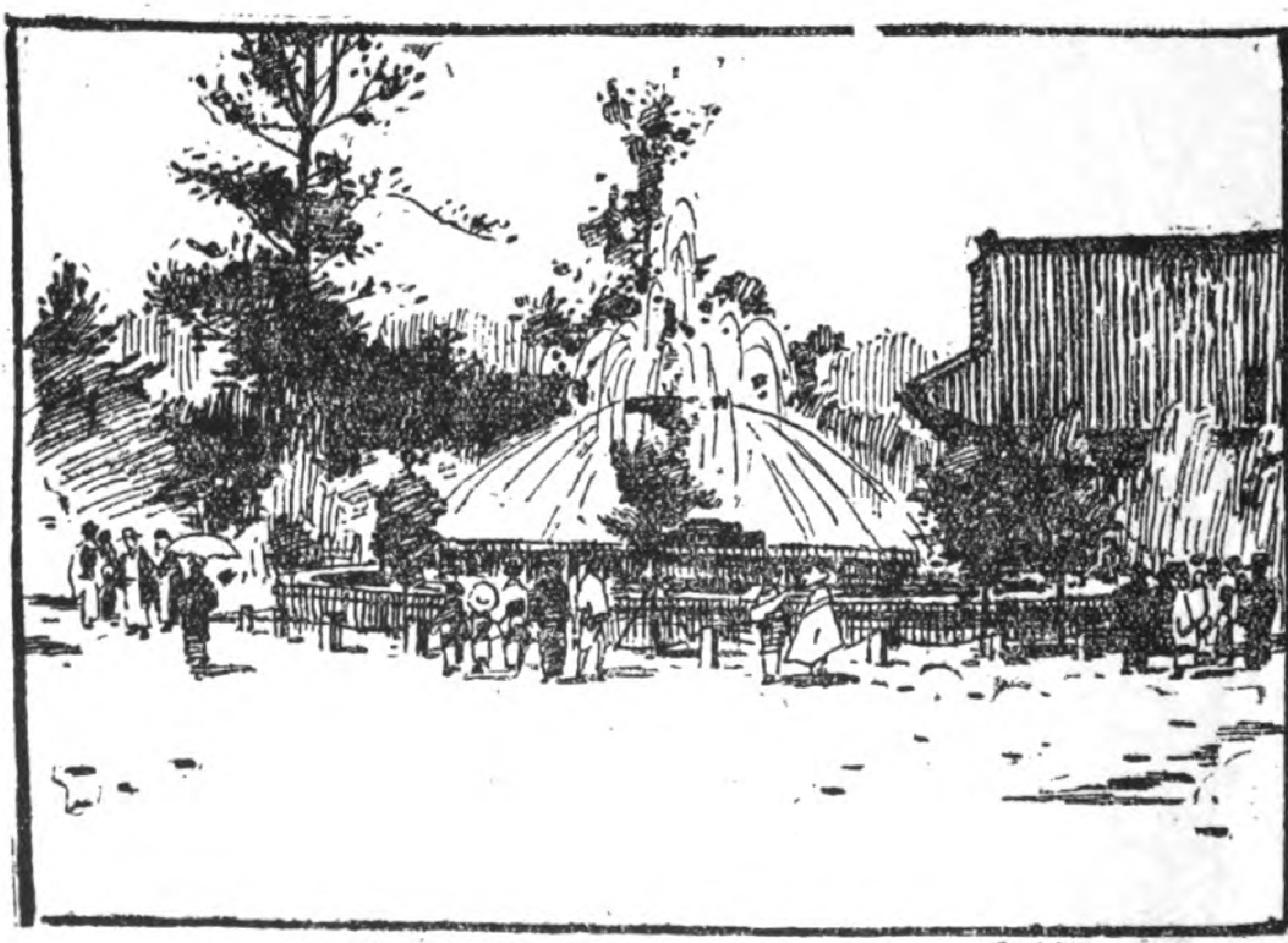
▲生兒の臍と黴菌

生兒の臍から黴菌が入りますと恐ろしい症狀を起して忽ち生命を失ひます。或るお家で分娩後五日目に私

の方からお湯をつかはせに參るのを待ちかねて、產婦のお友達が赤兒にお湯をつかはせる時丁度臍帶が辷りましたので、いきなりそこらに在つた脱脂綿を當てゝ置ました處、夜に入つてから泣きつゞけて苦み出し、醫者に見せますと臍から黴菌が入つたので、最早助からぬと云はれ遂に翌日死亡いたしました。臍帶の辷つた時には絲のやうな血管を引て居つて針の穴位の疵口がついて居るのですから嚴重に消毒を要すべきものを怠かせにいたして置いたために大事を引起したのでございます。

▲私が產家へ參る大荷物

私がお產に上ります時には人力車に積み切れぬ位の大荷物を持つて出ますので皆樣によく笑はれますが、これは消毒に要する道具が主なのでございます。尤も平生自宅で綿やガーゼ其他の物品を消毒して嚴重に密閉してあるのを持參いたすので、急場の際だけはこれを用ゐますが、參つてから少しでも時間があればこれ



東京名所　(淺草公園の噴水)

等の品を現場で今一度消毒いたします。一度消毒した物でも時日を經れば再び黴菌が着きはせぬかと萬一を氣遣ひますから、蒸籠でも味噌こしでも拜借して綿やガーゼを蒸して殺菌いたし、子宮ピンセット、カテーテル臍帶剪刀、膣洗滌嘴管、同ゴム管、イルリガートル臍帶を縛る絲などは私の持參した消毒釜で殺菌いたします。夫で前申上げました通り早く呼んでいたゞけば、この消毒もゆつくりと丁寧にいたす事が出來非常に都合がよろしいのでございます。



▲醫師の選定について

近頃の產婆は醫師と結託して產家を嚇し不正の利を醫師と分けるとか云ふ忌はしい風評を耳にいたしますこれは揣摩の臆說にちがひありませんが、この風評のために實際不自由を感ずるのでございます。一體私は大事取の上に實驗上醫師の效能を感じて居りますのでお醫者〳〵とよく申す方ですが、若し結託など〻云ふ誤解を受けますとお醫者樣方にも相すみませんから、醫師の選定は產家にお任せいたして居ります。併し達て選んで吳と私に仰せられる場合には信用すべき專門醫を十名程申上げその中からお選びを願ふやうにいたし決して私の方から指定はいたしません。

いろ〳〵の家庭衛生

深呼吸の仕方

食物がなくても人間は七八十日位は生きて居るし、水がなくても十二三日は生きて居れるが、空氣がなくては五分間以上は生きて居る事は出來ない。しかし吾等は此の何よりも大切な空氣を適當に呼吸する事を知らない爲に非常に不利を蒙つてゐるのである。

▲百人中九十九人までは充分に酸素を吸收して居らないから如何に滋養あるものを食べてもあまり効能がない。蒸汽汽罐に石炭が必要なる如く、人の身體に食物が必用であるが、石炭は酸素の爲め燃燒する如く、食物の消化して身體に溫熱と精力を與ふるも酸素である。酸素の不足より生ずる惡結果は皮膚の蒼白、血液の不潔、光のない眼、扁平な胸、圓い肩、濁つた聲、一般に元氣の銷沈である。世間幾十萬の人は空氣の缺乏の病氣に罹つて居るに拘はらず、徒らに心配して餘り効能もない藥劑を用ゐて居るのは不思議である。其よりは呼吸法を學んで新鮮なる空氣を充分に吸入するのが最善最良の法である。

▲呼吸法の第一要義は、身體を緩やかにする事である。身體を固く緊める樣な衣服を着て居ては、非常に呼吸を妨げるから、引緊まつた着物・帶、シャツ、を着ない樣にしなければならぬ。人の身體は充分に空氣を吸入した時は、すべての側に於て一寸宛伸びる。腰より頭、脊より腹、胸部の前後左右、皆一すつゞ擴張するのである。



▲十分空氣を呼吸するには、緩やかな着物を着、充分身體を自由にし、後兩足を揃へて眞直に立つて靜に空氣を吸入する、同時に兩手を側方より上方に兩手が合ふまで擧げ、暫時休止して空氣を漸次吸出しながら兩手を以前の如く兩側に下げる次に兩足を前の如く揃へ、兩手を伸ばして後方より前方に圓形を描く、同時に充分に空氣を吸入し又呼出する、兩手の前方に行く時は吸入し、後方に行く時は呼出するのである。

▲それから唯に胸部の運動ばかりでなく、全身を運動する事も必要である。それには左足を一歩前方に出し、體重を全く右足に託し、手も頭も體も前方に垂るゝ樣にして空氣を呼出する、それから漸次身體を擧ぐると同時に充分に空氣を吸入する、斯くの如く十回二十回自分の身體に適度と思ふ程行ふのである。

齲齒の豫防

▲齒の眞珠色を帶びて光つて居る部分は琺瑯質と申して、囓

へて言へば恰も私共の着て居る羽織に相當する。様の方も矢張琺瑯質と同じやうな質を以て包まれて居ります。次に齒の大部分をなして居る處は象牙質と云つて、これは私共の着物に相當し、其内には齒髓と云ふ大切なものがある。之は衣服で包まれた我々の身體と同じやうなもので、其内部には血管も神經も通つて居ります。

▲扨て齲齒の原因を極く簡易に申すならば、前に言ふ通り齒間の食滓が腐蝕して乳酸を發生し、其乳酸と口腔内に在る種々の黴菌との作用で、先づ初めに琺瑯質を腐らせ、着物に等しい象牙質を喰ひ破つて、遂に齒髓に達するので、そこで始めて疼痛を覺えるのです。斯樣にして齲齒が澤山に出來て食物を充分に咀嚼することが出來なくなるときは、餘儀なく食物を鵜呑にするから、其結果胃腸の病氣、癌腫、肉腫、或は神經衰弱などの諸症を起します。之を防ぐには、口腔内を常に清潔にして置く事が肝腎です。

▲口中の清潔を保つには、齒を磨く時に相應の注意をするのです。第一齒磨粉は齒の實質を損せず、口腔に存在する黴菌を殺すか、或は唾液の變化を防ぐとか云ふやうな要件を備へて居るものを用ひなければならない。

▲齒を磨くブラッシュはあまり軟い毛のものはいけず、さりとて又硬い毛でもいけず、硬軟宜しき毛を擇んで用ゐ、本來ならば起床後及び食後に必ず掃除するがよいのです。是れは誰方にしてもなか〳〵左うは参りますまいが、少くも日に二回は掃除をする必要があります。又ブラッシュを使ふことが出來ぬ子供ならば、脱脂綿とかガーゼとかを硼酸水を入た水に浸して齒牙の表裏を拭うて遣るが大切であります。

▲特に婦人方に注意して頂きたいのは、一體婦人は男子より齒牙は孱弱ですが、其上に姙娠すると胎兒の骨格を形成する爲めに其方に營養分を奪はれるので、齒牙が著しく弱められます。それのみならず姙娠中は唾液が酸性に變じ、それが爲めにも齒牙を弱められるから、婦人は男子に比して十倍以上も注意しなければならないのです。(ドクトル稲井虎次郎氏)



△新式化粧法　　藤波芙蓉著

家庭百科全書第二十五扁としての本書は化粧に就ての理論、方法、並びに實驗を說きたるものにて人身美術のあらゆる方面の解說なり。即ち顔面を美くする法、肌を美しくする法、手足の美、毛髪の美、並びに美身に用ふる化粧品の說明選擇調製等に至るまで細々と說きたるもの化粧に浮身をやつすといはれども一讀の價あるべし。(定價四十錢博文館發行)

△名媛と筆蹟　　中村秋人編

著者が曾て日本新聞社に在りて執筆したるもの、及び其の後になりたる現在の皇族、家庭、婦人の美談佳話を集錄したるものにして、其の文章の輕快なる上に各々其の幼時の筆跡を掲げあれば、よく各婦人の人格を窺ふ事を得て、なか〳〵趣味多き書なり。(定價金四拾錢、本館發行)



春の花の異なれる趣味

物集梧水

梅花…桃花…櫻花

◎花は櫻木、人は武士、諺にも申す通り、日本の代表花は櫻花であることは、今更申までもない、然し此の諺はつひ最近の事、上代に遡つて見て、果して櫻花が日本の代表花であつたか否やは一寸疑問です。

◎彼の大鷦鷯命と菟道稚郎子と互ひに御位をお譲りあひ遊ばされた時、王子の詠じた「なにはづに咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」は櫻花を詠じたものでなく、梅花を詠じたものであるとは、學者の説でございます。して見ると當時「この花」と申せば直ちに梅花を指し、實に代表花たるの勢ひがあつたことが分ります。

◎全體から云ふと、櫻樹は山木で、桃樹は畑木ですけれど、梅樹は何處にでも蕃殖します。例へば寒國でも暖國でも、海濱でも、山谷でも、そんなことには少しも頓着なく蕃殖する所を以て見れば、日本は櫻花國と云ふよりは寧ろ梅花國と云つた方が適當かも知れませぬ。イヤ上代は全く梅花國だつたのに違ひございませぬ。

◎その證據には、上代では梅花を歌つた和歌が非常に多く、隨分名歌が多うございます。一寸左に二三の例を擧げますれば、

萬葉集　春さればまづ咲く宿の梅の花ひとり見つゝ
　　　　や春日くらさむ　　　　筑前守山上臣憶良

古今集　人はいざ心も知らず故里は花ぞむかしの
　　　　香に匂ひける　　　　紀貫之

拾遺集　吹く風をなにいとひけん梅の花ちりくる時

ぞ香はまさりける　凡河内躬恒

◎然らば櫻花は、抑も何時の時代から其の勢力が盛んになつたのかと申しますに、之は如何しても武門の發達と共にしたやうに考へられます。即ち彼の八幡太郎義家が奥州征伐にゆきました途に勿來關を通りまして「吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」と詠じた時分から、そろ〳〵櫻花の美なることが認められだしたやうでございます。

◎何しろ櫻花は春風駘蕩たる季節に、一時に發き、一時に散る其の勇ましい有樣は、實に武士の俤そのまゝでございます。王朝時代即ち藤原氏の世ざかりには多く梅花が持囃され、源平兩氏の崛起と共に徐々櫻花が持囃されて來たのは、全く花そのもの丶性質の異る所以で、一寸面白い對照だと存じます。

◎されば櫻花を詠じた歌は比較的武家時代に多く、名歌も寧ろ其中から求めるのを至當だと考へられます。今二三の例を擧げて見ますれば、

續古今集　吹く風もをさまれる代のうれしきは花見る時ぞまづ覺えける　後鳥羽院

新後撰集　かづらきや高間の櫻ながむれば夕ゐる雲に春風ぞ吹く　鎌倉右大臣

玉葉集　花見にとむれつゝ人のくるのみぞあたら櫻のとがにぞありける　西行法師

◎斯うして梅花、櫻花の時代分をして見れば、主として王朝時代以前は梅花の全盛期、武家時代以後は櫻花の全盛期と區別することが出來るのでございます。然らば桃花は何れの時代に屬するものなるやと云ふに、之は最も近代に至つて其の趣味を認められたのでございます。

◎桃花は元來支那の名花なのでございます。桃之夭々たるとか、桃李斷腸花とか、其他或は桃園に兄弟の義を結んだとか、桃源の物語だとか、隨分桃花に就ての譚は多うございます。加之甚だ美しい花だとしてゐるので、美人を形容する時には必ず引合に出されます。

◎併し日本の桃花は梅花や、櫻花に比べて些か見劣りがしやしないかと思はれます。殊に近頃では菫花や

雛菊にさへ蹴落されやすまいかと思はれる位ゐ。餘程桃花の價値は危うございます。と云ふのも、思ふに此花は元來が支那の名花なので、日本では其れほどに思つてゐなかつたのを、支那かぶれのワイワイ先生達が、恰も今日矢鱈に菫花を持囃すハイカラ先生達のやうに、桃花を持囃したのではございませぬかと思はれます。

◎ですから桃花を詠じた和歌はあることはありますけれど、孰れも皆な苦しさうな歌であることは拾遺集に載つてゐる『咲きし時なほこそ見しか桃の花散ればをしくも思ひなりぬる』の一首を見ても判ります。



◎花を女に譬へれば、櫻花は榮華を誇る富豪の娘、梅花は氣韻を樂む清士の娘、此間に立つ桃花は恰も田舍娘の面影を備へて居ります。故に詩人や歌人が如何に桃花を詠じた所で田舍娘の趣味は一寸發揮し得るのに困難です。其點に至ると、後世俳句と云ふものが起つて、無暗に野趣を吟じた其の口に持囃されるに至つたのは、實に自然の結果ではございま

せぬか。

◎桃花は、日本では詩にも歌にも乘りかねてゐた所を俳人と云ふ者が出て來て、盛んに之を唱道したのが、今日兎にも角にも梅花、櫻花と相並んで春の代表花となつた所以でございませう。左に俳句の二三を摘記しますれば、

花さそふ桃や歌舞妓の脇踊　其角

桃咲くや牛のよだれもやまと歌　蓼太

よき雨のたれて戸口の桃の花　蒼虬

木母寺の先は桃さく在所かな　梅室

◎桃花の趣致は野趣であり、即ち無邪氣なのですから雛祭に桃花を挿すも甚だ温順しくて、相應しいやうなものゝ、これが梅花だつたら雛祭の少女らしい所が缺げ、櫻花だつたら白酒の瓶を倒して、大に怒鳴つけねばならないやうに思はれます。

◎桃花は關西人が喜び、櫻花は關東人が喜び、從つて桃花の名所は關西に多く、櫻花の名所は關東に多うございます。蓋し梅花は海内到る處に榮え、到る所に名所を形くつて居ります。

◎桃花には牛を繋ぐに情があり、櫻花には駒を結ぶに趣があります。牛は關西の名產、駒は關東の特有、但し梅花には何を繋ぐべきか、一寸思ひ當りがございません。

◎櫻花は、之に朝暾が映じて愈々麗しく、桃花は、之に夕陽が照らして益々美しくなるのでございます。蓋し梅花は朝暾にも好く、月影にも好く、暗中にも更に好いのでございます。

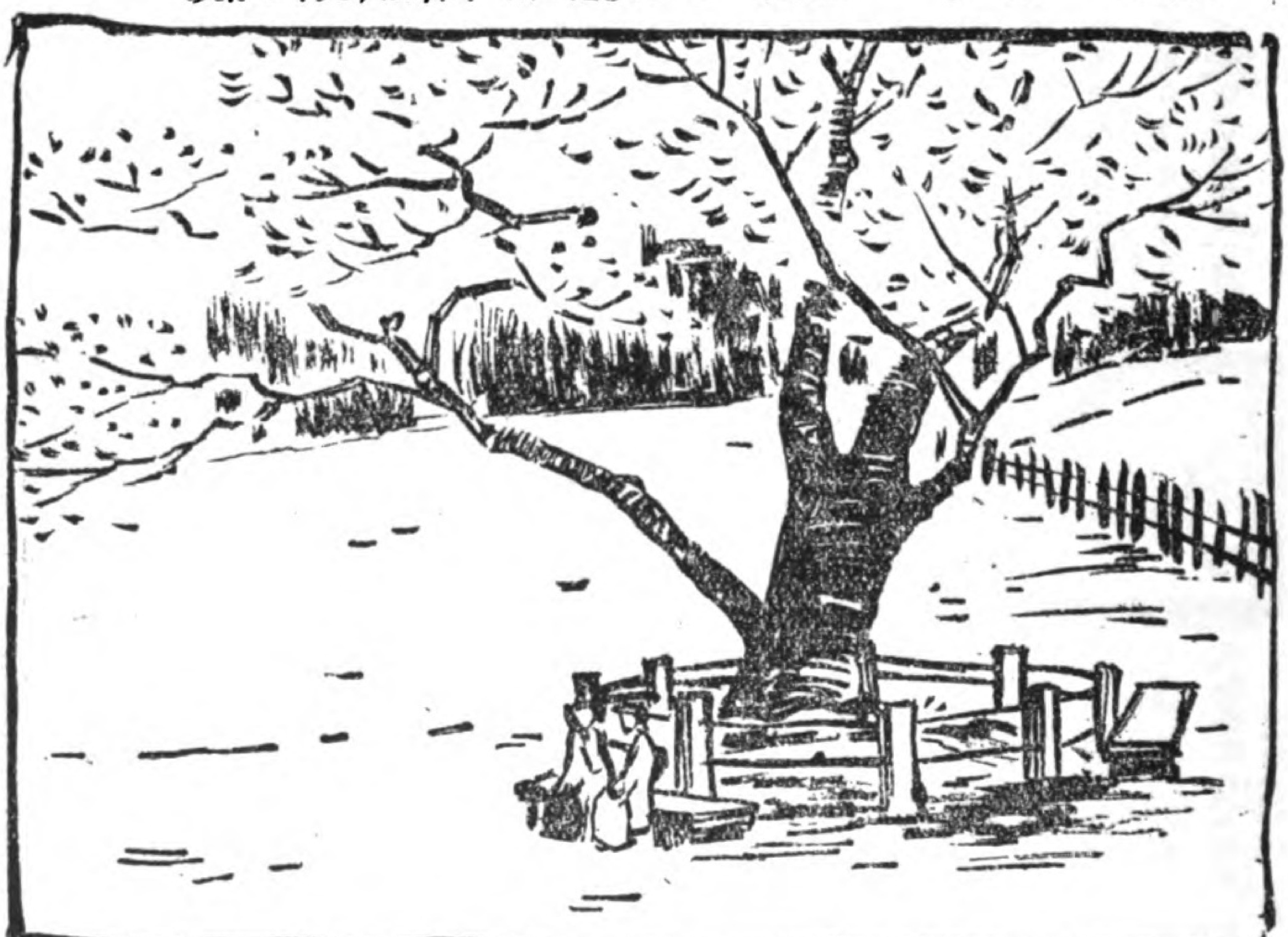
◎梅花は一二綻び初める時を以て最も見頃なりと致し櫻花は徐々散りかける時を以て最も風情ありと致します。但し桃は最も滿開の時が宜しいやうでございます。

◎梅花は探ぐるのに最も妙があり、桃花は眺むるのに最も昧ひがあり、櫻花は大觀するのに最も趣がございます。

◎梅花は僅に一本ありてこそ品位も氣韻もあるのでございます。之が所謂る梅園となつて數百本並んでゐては唯だ俗氣を益ばかりですが、之に反して桃花は數十

數百本咲き亂れ、宛ら紅霞を漾はせてゐるやうなのが最も美しうございます。此點に至ると櫻花は僅かに一本でも、或は數本でも、又は數十數百本でも各々その景趣を發揮するではございませぬか。

◎梅花の背景には溪流最も宜く、櫻花の背景には峻峰最も宜く、桃花の背景は千里の曠野最も宜し梅花に配するには月痕より可きはなく、櫻花に配するには翠松より可きはなく、桃花に配するには菜圃より可きはなし。月痕と翠松と菜圃とは、梅花と櫻花と桃花との友なると同時に、各々の性質を併せて能く代表致して居るやうに思はれます。



▲毛髪の洗料

毛髪を洗ふ髪洗粉は色々あるが何れも其原料は石灰、曹達、石鹼の粉などで其外には古から弘く用ひられて居る饂飩粉にふのり、鷄卵などである、單に油氣を洗ひ落すばかりならば石鹼を用ひるのが一番宜いが、併し石鹼で洗うと毛髪の表面に粘着して居る油氣を除き去るのみならず、毛の特質の脂肪分までも流して了つて、光澤もなくサワ／＼として擦り切れ易くなる、之に反してふのりの樣な粘氣あるもので洗ふと毛の表面に粘着した油氣だけを分解つて持つて往き、皮膚や毛髪の樣にある脂肪分までを流し去るやうなことはないから毛髪に取つては舊式の洗方の方がよい。

花の墨田川

高野　生

○吾妻橋を東へ渡ると、直ぐに目に着く大日本麥酒會社の大建物、是が墨堤の變遷を忍ばしむる第一の材料である。

○其時分のサッポロビールが、此藤堂様の御庭を文明化して仕舞つたのは、僅に七年前の事と思ふが、サテ其變りに變つた今の有様ひたすらに驚かれぬる事である。

○今の煉瓦の大建物の邊は、細々しい民家が軒を並べて居た事は、人の記憶に存する事と思ふ、懐かしいのが今も在る北角の菓子屋の太平堂、主人は變つたか如何か知らぬが、店の柱は太る許りと見受けられる、其南角には、お役所にしては優し過ぎる様な呼聲の建物があつた、即ち吾妻橋警察署！

○釣ざほや、餌屋が續く軒並の重なる者であつた、君知るや「隅田川鰻」の角行燈！、一升三十錢の籠入りの名物も、今は名殘りなく亡くなつて仕舞ふたではないか。

鰻屋や餌屋の中央に、嚴めしい黒門があつた、此に藤堂様の門標が出て居た事も、思ひ出さるゝであらう、そして其庭園の廣大にして、而も優雅なる事、此は今でも見られるのである。



○敢て昔と言はぬ、十年前には吾妻橋を渡れば、心は已に都鳥に通ふて、悠遊自適の感を起したであらう、今日庭園の側面に塀一杯に揭げられた、ペンキ塗ビールの廣告を見るもの、已に其俗氣に醉はされはせぬであらうか。

○彼のペンキ廣告は俗中の俗であるが、これも時勢の趨く所角行燈を忍んで許りも居られないからの事である。

○枕橋から左りに見ゆる大川の流れ、斜めに見ゆる金龍山淺草寺の塔、家形船やら猪木船の風流は、今尋ねんに由もなけれど、天然具はる地勢の美、巡航汽船もやがては畫中の物として仕舞ふのである、右手は大川から別れた曳船川！、薪積む船に悠長に煙草くゆらす船頭の姿、此に源森橋を背景とした趣、今も昔に變はらぬのである。

○只物足らぬのは右手の瓦燒く煙の、今は殆んど望む事の出來ない事である。彼の風なき日に、細々と揚る一條の煙こそ、瓦町の名にも知れ、此總に於ける閑人の眺めとしてあつたのである。

○枕橋の上から八百松の突出した構へを見た時、此料亭ありて、此橋後に架せらると思はぬものはなからう。八百松に入りて其風呂場から、橋げた越しに枕橋を見た時、此橋ありて此料亭始めてありと思はぬものはないのである、橋も橋、亭も亭．山川風物の變遷止むなしとするも．長しなへに離れざ

れ佳人才子！

○八百松樓は姿も心も昔に變はらない、變つたのは其前に在る水戸樣の下邸！

○御物見臺も前の通り、いばら垣も前の通り、御門も前の通りである、變つたのは淸閑として平人の入るを許されざらん趣のあつた邸内に、今や數多の小屋の作られてある事である、思ふに今日は平人と雖も、或はお庭の露にキッド靴をうるほしハイカラ雪駄に無名草をふみにじる事の出來るのであらう、斯くして隅田堤も、其調子を一段下したのである。

○八百松から二三町程の堤は、其巾を廣められ實に見宜く、歩み宜く變つたのである、殊に川に面する其側面は、雜草は手入せられ、傾斜は一樣にされ、吾妻橋のらんかんにもたれて一帶の長堤を眺め入る時、誰か其化粧したる姿に引入れられざるものあるべき！

○三圍稻荷竹屋の渡、變つたも變らねゝない、只管に今の淸らげなるを賛し、さて昔の由緒に猶ひを辣む許りである、三井家信仰の三圍社が、榮えるに何の不思議ぞ、花時日收百圓を下らざる竹屋の渡が、其小屋の新築されたは怪しむを要せず。

○變つたのは、此邊りの民家の數多くなつた事である、水戸邸のいばら垣の盡きた處に、ダラダラの小路がある、十五六年前は彼の坂から向ふは一面田圃であつて、三十年の大洪水の時は一面の湖水を現出した。



○墨堤の眺めも人樣々で、何れを何れとも言へぬが、竹屋の渡し小屋に佇んで、聖天の森、山谷の里を眺めた景色は實にいゝ。

○此景色こそ今も昔も異りはない、聖天の山も變はらぬ、山谷橋も變はらぬ、河岸の民家の樣子も變はらぬ、變はつたのは川浚ひの屆いたゝめ、中洲のよしがなくなつた丈け、幾多の繪の題目となり、紀行文の敍事となり、サテハ繪はがきの材料となつた山谷の景は、墨堤から見て始めて龍の全身を看得るのである。

○竹屋の渡を過ぎて一町行くと、右手に堤下へ通ずる道がある、有馬溫泉への巡路である、燈籠臺が建つて居るが牛の御前。それから一町行くと、堤下に在る朽ちた黑門の内が長命寺。

○長命寺の櫻餅、實に此名物こそは一錢の値がある、東京を外にして櫻もちは喰べられない、而も長命寺を外にして、東京にさくらもちなしである、餡と云ひ皮と云ひ、そして其葉と云ひ、長命寺で喫べて始めてさくらもちを知るのである。

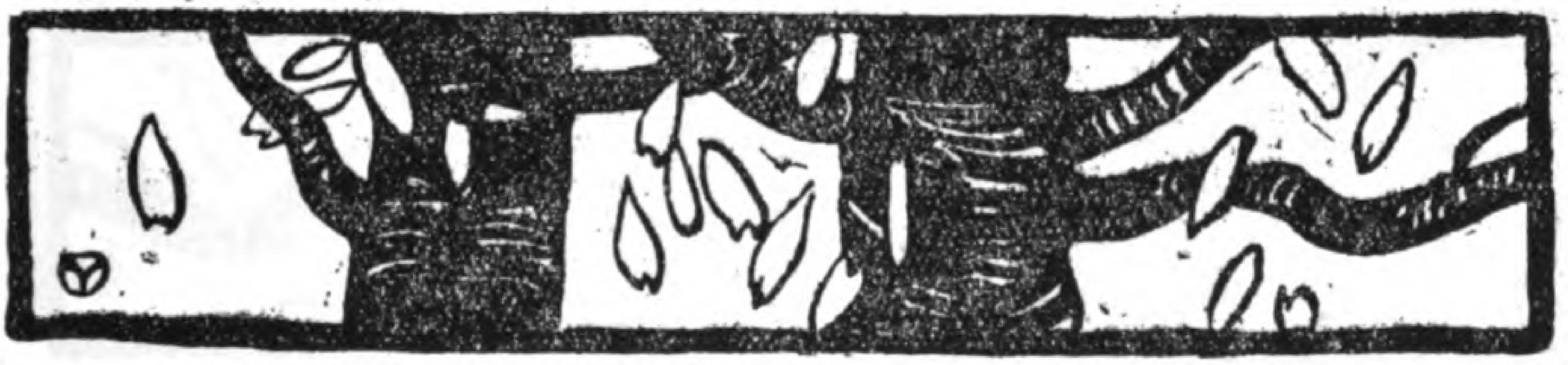
○製法に秘傳もあらう、價の高い處に難有味も知はらう、併し長命寺の境内で床几にかゝり、長命寺と燒印した菓盆を右

にして食へばこそ、其味が特別なのである、彼の少しも手を入れた事のない樣な庭の中で、人通多い堤から降りた寺内で喫べればこそ、美味いのである。

○花時のさくらもち敢て珍ではない、さくらもちの竹籠をさげて花間を逍遙するのは敢て珍らしくない、若し夫れ秋は樹樹の紅く彩るの時、人足稀れなる墨堤にたどり來て、掃除も行屆かぬ境内に腰を下ろして、徐ろに一杯の苦茗に伴はせたる時のさくらもちこそ、漫ろに數寄心に投ずる味があると思はれる。

○堤の突當りは言問である、白地に大きく言問だんごとかいたのれんは、今に其老舖たるを示して居る、いざ言問はん都鳥はなく共、業平に似た才子、小町に似た佳人を見るは日々の事である、地の形勝を占めた事は、墨堤中唯一のものであらう、樓に上つて「かけ出し」の上から左右を見ると、現代趣味の吾妻橋方面も見え、多少は曲雅な風を帶びて居る橋場方面も見える、一眸の中に隅田川の時代概念を養ひ得るのは此家だと思ふ、それに相變らず青梅がうまい。

○だんごは三色、白あん黒あん及び青梅である、青梅は中に白餡を入れ、うすひ青色の牛皮でくるんだもの、形が梅の實に似て味に一寸酸味がある、此がまた旨い、外に都鳥せんべいと、なくてならぬ筈のしるこ、近來い料理も出來る。



○ずつと以前の事とおもふ、言問だんごの主催で、燈籠流しの催事があつた、都鳥形の大燈籠に火を點じ、流れのまにまに大川を下した事がある、其一夕の言問だんごの訪客と今日のボートレースの時の客とを比べて見よ、墨堤の變遷もわかる、時代の變調もわかる。

○言問は墨堤の名所である、一度東京を訪はんもの、二重橋を拜したら、言問を訪へ。

○墨堤は遊子の目から見て三區に別たれる、枕橋から言問迄が第一區、言問から白鬚迄が第二區、白鬚から先が第三區である。

○婦人子供でも、歩んで興を催ほすのが第一區である、花見時の混雜は、殊に此區に甚しいのである、二區に入るに從つて稍々草深くなつて來る、從つて萬人向ではない、第三區に至つては、鐘淵以北は純京人でも、一生に一度步を運んだ事のない人もあらう、草深いでは物足らぬ、總じて哀れを催ほして來るのである、サても墨堤の長い事！。

○第二區に入ると右側の家屋の、建方、庭園の風情、面白いものが多い、此中には料理屋杯もある、大阪錦水の支店もある、仔細に見たら、隱士の富宅、文人の定居、名士の控邸等いろ〳〵である。

○然らば草深いとは如何、草深いとは鄙めいてると云ふ、向島

も言問までは都染みてゐるが白鬚近くなると、どことなく鄙びてゐる、堤の落葉抔も、場所に依つてはうづだかくなつて居る、「さけさかな」式の家も二三軒は數へる、葉櫻を見るには此方の方が宜い、殊に大倉の別莊から白ひげ神社迄の間に、川を見ては遠くなりまた近くなつて來る風情がなか〳〵よい。

○此間に古くから菓子屋がある、植半の少し先の隅田園である、今日でも盛んに行つて居る。

○白鬚の社に參拜して、右手の堤下に降りて二三度小曲りに横町を曲つて行くと、竹塀の廣い構へに出る、「四時花不絕」と一言言へば後言ふまでもない、四時人も亦絕えざる百花園が其れである。

百花園があるので二區も掉尾の趣がある。

○大臣も行き紳商も行き、茶人も行き書生も行き、櫻もあれば秋草もあり、西洋草花もあれば石碑もあり、加之瀨戸のかまもあると云ふ、溫故知新の花やしきー、青色に認められた、二行の聯句が門に揭げられる處、右手には馬繫あり、左にはゴム輪の自用車が待たされて居る、園內騷喧の聲を聽く事少なきに、微醺を帶びた訪客襲して出て來ると云ふ風な趣、「此より內車馬御入來御用捨」の札、其優しきは園婢のしとやかなるに相稱ふてゐる。

○雅びたと云ふのが昔の花屋敷、腰打掛くる床几と竝んで奥



れる茶とに在つたが、今日の樣に「御茶菓子附御一人前金十錢」の組織ではなかつた、併し此組織は、便利の方から見て時代に應じた方法であらう、ビールもありサイダーもある、繪はがきもあり自製の瀨戸物もある、何れも流石に凡ならぬ面影が認められる、燒印で向島花やしきと捺した繪はがきは一顧の價値がある、瀨戸物は銘を隅田燒と云ふのである、一枚五錢の皿。

○都下に名園も古來多い、新開の花園も少くない、併し花屋敷は確に超絕した點がある、其母屋の柱の太く、天井が蚊遣火の煙にくすんで居る處抔は、向島趣味を代表して遺憾ない、地の邃して居り往來の煩が少いに拘はらず、四時訪客の絕えないのは、抑々又所以ある事と思はれるのである。

○向島には七福神詣りと云ふのがある、三圍社の惠比須、大黑、弘福寺の布袋、長命寺の辨財天、白鬚の壽老人、多聞寺の毘沙門天、夫れに花やしきの福祿壽である、秋の小春日和に日曜日の午後から、ブラ〳〵と此六ヶ所を歩き廻るのは、眞に良い思ひ附きである、其巡路を古風な木版摺にした繪紙は、望みの人には百花園で渡して呉れる、是は花やしきへ行く者の忘れてはならぬ事である。

○白ひげの社は舊に依て小さい、舊に依て手入がしてない、併し神德のあらたかなのは、却て此る朽ちた處にある樣に思はれる。

○墨堤も吾妻橋から歩んで、此處迄來ると一時間半ばかゝる、無論言問や長命寺も、一寸のぞいた上の時間である、此から先が第三區。

三人の子女を遺して夫に先立たれし
七年間の悲しき奮闘史

故蟹江博士夫人　蟹江操子

故文學博士蟹江義丸氏夫人操子の君は、未だ二十三歳といふお若い頃から、夫博士に死別れて、三十歳の今日迄満七年間、夫の遺れ紀念の三人の兒女と共に、さまざまの苦難を凌ぎ、立派に寡婦として立通された方であります。

記者は頃日、四谷須賀町のお宅をお訪れして、いろいろと悲しい間に奮闘された歷史を承はりました。夫人は只今府立第一高等女學校に教鞭をとらるゝ傍、諸所に出張して教授をなすつてゐらつしやいます。

△病床に英語を教へし亡夫の心

私が蟹江へ嫁ぎましたのは恰度明治卅一年私が十八歳の時でございます。元々蟹江と私共の家とは親戚になつて居りましたし、未だ蟹江が學校に居ります頃から私等の間に婚約が成立つて居ましたので、お互はよく存じて居りました。

蟹江は非常に學問が好きでございましたが性來餘り壯健な體でない上に學校時代の勉強が過ぎましたものか、恰度大學の試驗が濟みます頃あの病氣に罹つたのでございます。卒業後も、いろいろ勉強はしたし、その中には洋行もして見たいと申して居りましたが、どうも體が弱くて思ふやうにならぬと非常に殘念がつて居りました。

學校を出てから、暫くの間京都の方へ參つて居りましたが、その頃にまた前の病氣が再發して、一時はなかなか重りましたので、そちらを引拂つて東京へ歸へり、死ぬ前は沼津の病院に入つて居りました。

何しろあゝいふ病氣のことでございますから、體は非常に衰弱して、起居も自由にならぬ位になつて居ましても、死ぬ間際まで氣は確かなものでございましたし、よく書物も讀みましたし、時々は私共を寢て居て、枕元へ呼びまして面白さうに笑話をいたしたり、それに非常に子煩惱でございましたから、子供等の顏さ

へ見て居れば、病苦も何も忘れると申すほどでございました。

然し夫はその頃から、もう助からぬものと覺悟いたして居たものと見え、時々は遺言じみたやうなことを申して私共を泣せまするしそして容體のよろしい時は私を枕元へ呼びまして、今の中に少し宛でも英語をやつ置くが可いと申して、自分でよく私に敎へて呉れました。私も元金澤の英語を主に敎へる女學校に居りましたことはございますし、生れ付きその方に趣味を持つてゐたものでございますから、夫も自分が亡くなつた後は、これで自活の道を得させやうと考へて



前列右長女信子、次女秀子、三女正子、後列右夫人操子、左母堂

居たのであらうと思はれます。

何しろ未だ夫も年は若うございますし、是れからといふ體でございますから、どうかして全快させたいものと神佛に祈るまでにして手を盡しましたが是も天命と申すのでございませう。未だ三十やそこらで、自分の思つて居たこと、望んで居たことの半も遂げ得ずに空しい恨を懷いて死んで行きました。今更返らぬ繰言でございますが、切めて兼々望んで居ました洋行だけなりとも遂げさせて死なせたかつたと、いつも母や兄妹で申すのでございます。

それに子煩惱の夫のことでございますから、可愛ざ

がりの三人の女子を殘して逝くことが、何んなにか殘り惜しいことでございましたらう。それを思ふと、いつも腸を千斷らるゝやうな心地がいたします。

△母も同じく二十一歳にて後家

夫が亡くなりました當座は、狹い女心にもう取のぼせて仕舞ひまして、賴りにして居た夫に死に別れては生きて居る甲斐もない、私も亡き夫の後を追はふかとまでに思ひ詰めまして、三人の娘を抱えながら、母子してたゞオイ〳〵泣く外はございませんでした。一緒に夫の看護に參つて居りました私の母も傍に居ていろ〳〵私を慰めて與れますが慰める母もやはり涙でございます。

亡き夫の知邊の方々がいろ〳〵と、お力添へ下さいまして、兎に角野邊の送りだけは濟ませ、小石川の宅へ歸つて參りましたが、その時の私の魂はもう藻拔けの殼でございました。女の纎弱い手で三人の女兒を抱えて、此先どうして暮らして行けやうと思ひますとわれ〳〵の前途は眞暗闇の氣がして、全く泣く外はございませんでした。
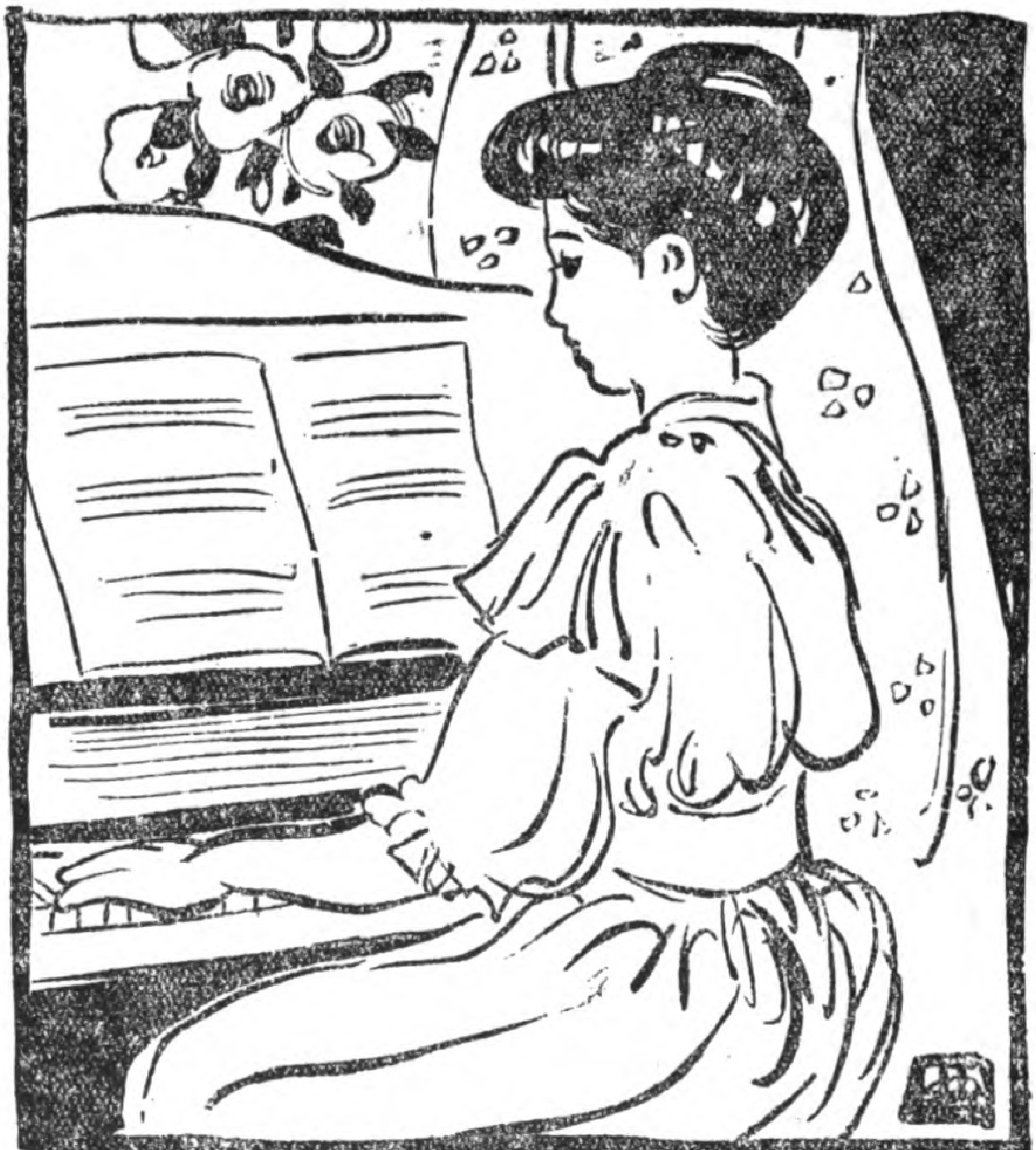
母もどんなにか力を落しましてございませう。私の母もまた、二十一歳の時、西南戰爭で父を亡ひましてからやはり年若ふして女孀。それから三十幾年といふもの三人の子女を手一つで育て上げ、先づ第一の姉を嫁がせ、次の弟は兎に角望みの學校に入れ次で私を蟹江に嫁がせて漸く安心と思ふ間もなく今日の始末。全く母には苦勞の絶間が無いのでございます。

私の不運は、延ひて母の苦勞。それを思ひますと、われ等母子はもう世にある甲斐もないやうな氣がいたしました。

△悲嘆の最中に兄の負傷

そのやうな具合で、殆ど半月あまり嘆き暮して居ましたが、元より財產とても無い身、この儘いたづらに過して居ては軈て母子共々路頭に迷ふやうな身にならうと、つく〴〵考へますると、亡き夫が臨終の際ま

で私に英語を教へて下さつたは何の爲め？　それはわが亡きあと、娘たちを立派に育てあげよとのお心からでは無かつたか。世には不運の人は幾らもある近くはわが母さへ、自分より二つも年若き二十一の頃より今日迄、われ〳〵を女の手一つで美事に育てゝ下すつた。それを思へば私とてこの母の子、決して三人の子が養つて行けぬ譯はない。いやこれは徒らに悲嘆に暮れて居る場合でになかつた、と漸くに心を奮ひ起し、この後はたとひ土に嚙り付いても、この夫の忘れ形見を立派に育て上げねばならぬと深く心に誓ひました。



母にもよく〳〵その決心を話しまして兎に角、私が一通りの自活の道を得るまで、不本意ながら、三人の子供は母の手に預つて貰ふことにいたし、私は母と子供を送つて郷里の富山へ參りました。

家財道具は申すまでもなく多少とも夫の紀念となるべきものは、殘らず取纏めて、その時すつかり郷里へ持つ

て參りました。世間では、その時私が夫の遺著の版權やら、家財道具を殘らず賣拂つたやうの噂がございましたが、決して賣拂ひますどころか、女の弱い心には、たとひ塵一つでも夫の紀念になりまするものは、どうしても手離すに忍びなかつたくらゐでございます。

さて郷里へ歸つて見ますると、流石、急には出にくくて、彼是と二月ばかり暮しました。

その時分、恰度日露戰爭に參つて居りました兄が、負傷をいたしまして、最初は廣島の病院に居りましたが、後に金澤の病院に移ることになつて歸つてまゐりました。

母も大層心配いたしまして、金澤の病院に參り四週間ばかり看護をいたしましたが、可成りに重かつた傷も幸に全癒しまして、兄は私共にゆる／＼會ふ折もなく、直ぐ又戰地へ向けて出發いたしました。

夫の死去に引續いて、兄の負傷、まあどこまで不運が私共に附き纒ふて居るのでございませう。然し一々それ等の世話もし、始末も附けてやらねばならぬ母の苦勞も一通りではなかつたらうと思はれます。

△津田氏の英學塾に入る

思はぬ兄の負傷で、つひ郷里の滯在も永びきましたが、愚圖々々といたして居るうち、折角の決心が鈍りでもしてはと、堪へ難き思を强て忍んで、いよ／＼東京へ出て參りましたのが忘れもしませぬ三十七年の秋でございます。

然しいざ別れとなりまするど、流石に親の情として後に殘し行く三人の娘が、父も母もなき孤兒の、どんなにか肩身狹く、心細い思をしやうかと、斷ちがたき恩愛の絆にひかされまして、思はず涙に堅い心も鈍らうとしますのを、奮ひ起し、奮ひ起して別れて參りました。何を申しても長女の信子が漸く六歳、次の秀子が五歳、末の正子が二歳といふのでございますから、それを引受けた母の苦勞は大抵で無かつたらうと思ひます。けれども母が決して後は心配するな、三人の子

供は必ず引受けるからと、力強く勵まして與れましたので、私も氣には懸りながらも、又安心して働くことが出來たのでございます。

上京して直ぐ私は津田梅子先生の英學塾に學ぶこと〻成り、自活の道としては、大森の山口といふ少將相當官の方のお宅へ家庭敎師として住はせていたゞくことになりました。

私のお敎へして居ました山口樣の御令孃は、その頃華族女學校へ通つて居られましたので、私はそのお伴がてらに每日汽車で英學塾へ通ひました。



何分道が違うございますので、朝は夜の引き明けに起きて用意をいたさなければなりませんし、夕は多く夜に入つて歸る始末で、歸りますと、もう體がぐつたりして、當座は何も手に付かぬ位でございました。

何分學生々活は久し振りのことでございますし、他所樣のお家に御厄介になつて居ます氣苦勞もあり、それにともすれば、亡き夫のことや、鄕里の子供のことを思出しまして人知れず袖を絞つたことは幾度でございませう。

學校へ參りまして、小さな女の兒など見ますと直ぐ自分の娘が思出されたり、途中の汽車の中で、父親や母親に連れられた子供などを見ると我知らず涙が出るのでございました。

△暑中休暇が何よりの樂み

山口樣のお宅には彼是一年ばかりも御厄介になつて居ましたが、間もなく其處をお暇して、今度は津田先生のお情で、學校の寄宿舍の方へ引移ることになりました。

寄宿舍へ參りましたところが、他の若い人達のやうに充分な學資があるではありませずいろ〳〵不自由もございましたが、然し如何な時にも、是非成業しなければならぬといふ執着心はございましたし、殊に語學の方は性來嗜きでございましたから、人樣が御考へなさるほどに苦勞も難儀もございませんでした。

寧ろ何としても亡き夫の形見の娘は、立派に育て上げねばならぬといふ責任を感じますと、却て前途に喜びがある心地いたしまして心も自ら勵みました位でございます。

その頃の樂しみと申しますと、一年一度の暑中休暇でございました。この休暇には、私毎年郷里へ歸ることにいたして居りましたので、いつも休暇前になりますると、もう幾日で國へ歸つて、いとしい娘たちの顏が見られると、それればかり樂しみ暮したものでございます。休暇になつて、いそ〳〵と國へ歸りますと、娘達の喜びは大變でございます、宛然で死んだ母親でも甦つたやうに「母樣々々」と毎日纏り廻るのでございます。

歸省の時はいつもいそ〳〵と喜んで歸りますが、休暇が濟んで又東京へ歸るときは、いつも泣き別れでございます。

弱い心ではならぬと思ひながら、殘して行く子供等の淋じ相な顏を見ますると、つひ泣いて了ふのでございます。

△六人の睦ましき家庭

まあ、さうした辛い悲しい三年の月日も、今から思へば、まるで夢のやうに過ぎ去りまして恰度明治四十年の、私二十七歳の春には、兎に角學校も卒業することゝなりました。いろ／＼と御心配下すつた津田先生のお喜び、知る邊の方々のお喜び、國の母の喜び、況して當の私の喜びは、宛ら幾百年の深い雲霧を拂つて、麗かな日影を仰ぎ見る心地でございました。

それから間もなく高等女學校の方へ奉職いたすことになり、國から更めて母や娘だちを呼び迎へて、曲りなりにも今日かうして生活を立てゝ居るのでございます。



兄も幸に、日露戰爭を無事に濟ませて歸り、只今では私共と一緒に住つて、毎日陸軍大學の方へ通つて居ります。

その兄と、母と、娘たちと私と、家族は都合六人でございます。

晝は兄も私も、娘達も皆學校へ參りま

すので、厨房のことなどは重に母が引受けて居て呉れます。

いろ〳〵娘の教育などにも心懸けなければならぬのでございますが、何分私は毎日大抵午後三四時頃に學校を退きまして、途中教授に二三軒立寄るところもございますし、家に歸りましても亦、近所のお娘達や、知人の令嬢方を集めてお教へもいたさねばなりませぬから、一日中殆ど身體の休まる折はないのでございます。夜には又明日の下調べなどがございます。ので床に就くのが時には十二時一時にもなることがございます。然し先づお蔭をもちまして身體も壯健でございますから何よりに存じて居ります。

△かくなりしも津田先生のお蔭

世間では私共ごときも、感心だとか、何だとかお噂なすつて下さいますが、何ともお恥しい次第でございます。私に取りましては、夫に死に別れゝば、後に殘つた子供を私の手で養つて參りますのは當然のことゝ存じて居りますので、そのやうな過分なお賞め言葉は却て痛み入ると、母にも申して居るのでございます。

全く私共が今日かうして兎に角暮して行けるやうになりましたのは皆樣の御盡力の賜物でございますので、就中恩師津田梅子先生は、彼是六七年の間、常に私共の陰になり、日向になり、有形無形にいろ〳〵御同情下すつたお方で、私共は決して先生の厚い御恩を忘れてはならないのでございます。

娘達も幸、皆々達者で居ります。秀子と、正子とは全然父の面影を知りませんでございますが、長女の方は、それでも幼心に薄々覺えて居りますと見え、時時ありし頃の思出し話をいたしては涙含むのでございます。

今後私自身に就て別に望みはございませんがたゞただ亡夫の形見の娘たちが無事に成人いたして呉れるのが樂みでございます。それが何より亡夫への手向でございませう。



四

スヰートホーム

無名氏

△

夜來の雨晴れて一天ぬぐふた樣な好天氣、萬物みな薄紅にいきいきと、雲雀は例の轉がすやうな聲を虛空から振り落して居る樂しげな番の白胡蝶はひら〳〵と朝露の中を舞踏して居る。私の氣持までこの芝生のやうにスク〳〵とのびるやうな朝である。力一杯の深呼吸して後裏庭へまはつて見ると、半開の桃が露を帶びた艶な風情‥‥母樣は花鋏鳴らしながら佛樣のお花を選んでゐらつしやる。あゝ、母樣は急にお齡がおより遊ばした、半白の切り下げに茶萬筋の道行。四十八と云へばまだ白粉つけてる人もあるのに‥‥。あの大丸髷で紋附召した頃を思ひ浮べると、可笑しいやうな悲しい氣がする、みんながもう「御隱居樣」と云ふんですもの。

お手紙がまゐりました、ときよが持つて來る。誰？あら、篤樣からよ…うれしい、胸を躍らせ急いで封をあける。とこんな事がかいてある。

「昨日赤門を出る途端不意に「おい」と大きな聲をかけて、僕の肩をたゝくものがある。驚いて振りむく間もあらせず快活な大笑ひして、「愛神の寵兒め、大いに妬けるぞ…」

「オゝ嫌、いやな篤樣…」

我知らず笑は口許に流れつ、手早くまきをさめてかたく懐に秘めた。

朝飯後お部屋で裁縫。

美しい彌生の空、障子には松の影縦横に枝をかはして氣の遠くなる程あたゝかい、額はしつとりと汗ばむやつと篤樣の袷が縫ひ上つた、丁度火がよく熾つて居るから、直ぐに火のしをあて初める。考へて見ると妙なものねヱ、私たつた十八ばかりで妻と呼ばれる身にならうとは、夢にも夢にも思ひがけなかつた。ましてや人も多かる中に、つひ六ケ月以前までは一面識もなかつた篤樣と…、思はず微笑んでそつと顔をあげると、パチパチパチッと炭がはねる。

百合子さんなんかに勿體ないやうな良人よ、とお京さんがのゝしつたさうな、まつたく過ぎ物だと思つて居るわ。足らはぬこの身を百合さん百合さんと、母樣にもお優しくよく仕へて下さるし、男らしくつて、溫和しくつて…美しくつて…オホゝゝ。

堪らず机の前に坐つて、また紀念の寫眞を取りいだした。

君はわざと大學の制服制帽のまゝ兩手を後にくんで凛々しくも立ち給ひたる傍に、つゝましう腰かけた我が晴姿、紅ぶさの扇子を手にして重い高髷を少し俯け、華手な黒紋羽二重の裾模樣、白を重ねた細い裾ぶき三筋ならんで、帶はきりゝと立矢の字。ホゝこのまア篤樣の澄してゐらつしやること…。

食ひ入る樣に眺めて居ると、

「百合、魚屋が來ました。何を買つておかう。」

母樣が障子をお開けなさる、おゝびつくりした。

午後からキャラコのお羽織を裁つ。紋は上げ羽の丸胡蝶、あまりやさし過ぎて引立たない、矢張り篤樣の——あの丸に鷹の羽の方が厭味がなくつていゝことねエ。

お勝さんがまはつて來た、相變らずお世辭がいゝ、私はやつぱり桃割に結げる。一寸の白丈長、紅薔薇の造花一輪、何だか子供らしい……。

「お勝さん、この次はね、土曜日のお午前に來て頂戴な、乾度よ……」

と云ふと笑ひながら櫛をふき〳〵、

「よろしうございます。今度はお丸髷に遊ばせな、ねえ、奥樣。」

「あら、厭？」

「何お嫌なことがありますもので。松原樣の若奥樣もこの頃はお丸髷にばかりお結げあそばします。若樣のお好みださうでしてね、まアどんなにお可愛らしうございませう。ほんとに奥樣はお島田は惜しうございますけれど是非——。」

凝と見られて私はにげて了つた。あとにはお勝さんの笑ふ聲がした、こんな可愛い奥樣をお持ち遊ばした旦那樣はお幸福ですわねえだつて。まア嫌——。

松原樣の……と云ふのは直き向ふの御別莊に來てゐらつしやる男爵世嗣の新夫人で、よくお二人お揃ひの散歩のとこなどお見受申す。私よか三ッお上とかきいたが、そりやきやしや立のやさしい美しい方、眞紅のお手柄に青貝ずりのさし櫛栄えて、白い襟元を俯けた初々しい若奥樣のスタイル、羨ましい？と思はぬ事のないでもないが……篤樣は何と有仰るかしら、止さう。

夕方一郎さん（篤樣の從弟で轉地療養に來て居る一高の學生）が來た。長いマントを着て柏葉の帽子横さまに冠つたまゝ遠慮なく部屋へ通る。肋膜炎の病後なので痛々しい程痩せて居るが御當人は一向平氣、いつも大氣焔だ。二ッ年下の私を可愛くも姉さんと呼ぶ。どうも下宿の飯が不味くて食はれん〳〵としきりにこぼすから、一つ晩餐を御馳走して驚かせて上げやうと

思つて、無理に引とめて置いたのにいつの間にか歸つて了つた。

ほんとに篤様の有仰る通り、病後の養生つたつてたつた一人、氣儘に旅館生活なんかさせといちや何にもなりやしない、家において上げれば兩爲なのだけれど……どうして義姉様（篤様の嫂）はあゝなんでせう。妙に保證人風を吹かし、何しろ年頃の青年ですから、若い女のある家へはあづけられない？　馬鹿にしてゐらつしやる。鵠沼館にだつて女中が大勢居るぢやありませんか、まして私は良人のある身、一郎さんと一緒に居たからつて、まさか――

△

一昨日から春期休暇、今日はいよ／＼お歸りあそばす日、朝飯後お書斎のお掃除する。窓ぎはの吉野櫻、黄金色せる若葉舒ぶることはや一寸、赤子の呼吸よりもなほ徐かなる風にさへ、花は吹かれて力なくちらちら／＼。

私は何度直しても／＼、姉様かぶりにした手拭が直ぐ目の上へ落ちかゝつて來る、しまひには癇癪をおこして了つたら、きよが笑ひながらうまくかぶせてくれた。

便所の手拭と水を代へさせ、それから一生懸命お机や床の間に空拭かけて、ピカ／＼にして居ると、お勝手の方に急ににぎやかな笑聲が増える。　勝さんが來たのだ、耳が熱くなつた。

はたして母様がお呼びになる、メレンスの座布團敷いて鏡臺の前に坐らせられた、白布を肩にかけた半身今朝はまだお化粧しないから昨夜のまゝの寢白粉、襟に糊にしたゝか殘つて、ほのかにローズの香がたゞよふ。

いろ／＼話しのうちに梳けて了つて、かもじが入つてやがて鬢や髱をつける。私ももう度胸を定めた、兩手で根の所をしつかりおさへて居ると、燃え立つやうな眞紅の手柄、ふつくりと觸れさうな番外大形の初丸髷が結ひ上げられた。平打一本根元に深くさしこんで

水を浴びたやうな黒髪の光澤、母様はきはめて御滿足縦から横からあまり念入に御覧なさるから、袖に顔をかくして笑はれた。

何だかワク／＼お晝の御飯は箸も取らずに下げさせ、身じまひして羽織だけ紫矢飛白のに着替へ、お火鉢に火を入れてお召を揃へて時計を見ればやつと二時、午後からつて何時の汽車でせう、ア、待遠な。

臺所へ出て少しきよの手傳ひしたり、また鏡の前に立つて見たり三時？　四時？　お迎ひに行きたくつても、こんな髪ぢや出られないわ。とうとう六時？、泣き度いやうになつて庭に下り立つ。空には薄紫や紅の雲が金色に縁どられて、ちぎれちぎれに飛びちつて居る美しさ、夕空を仰いで云知らぬ感に打たれる。



私も一度は文學熱に浮かされて、なまじ他人からもおだてられたまま、好こそ物の上手なれとか、紫式部の血を受けて來たのだとか、鬼才、天才、そんな聲の耳に入る度、熱い血潮を沸き返し、ひそかに未來の閨秀作家を以て任じたものだつた。詩集の代りに家計簿ひろげ、歌筆捨て小遣ひ帳、いまはもう野心もなく功

名心も消えた、たゞ良人の愛に縋つて……良人によつてすべての快樂、幸福、滿足をうる。

篤様はまたさう有仰る、僕は今まで讀書といふものが大嫌ひだつた、まして小說なんぞ讀むものでないと固く信じて居たが、百合さんを得てから妙に心がセンチメンタルになつて、文學を愛し初め、よく野暮なこと云ふては爭そうた友に對して恥かしい――。

がら〳〵がらつと門内に曳きこまれた俥の音、はつと思つて驅けよつた。

「篤様……」

「百合さん。」

車上から飛び下りてしつかり握り合つた手にハラハラと涙が――。

お書齋に入ると篤様は柱にお凭れ遊ばして、凝と私の顏をお見詰めなさる。顫へながらお膝に兩手を重ねてぢいとお瞳を振り仰いだが、堪得ず次第にうつむいて了つた。

きよが大鞄を運び入れる、と、つと身を起して折柄此室へはいつていらした母様に、お手をついて御挨拶それからお手傳ひして制服をお脫がせ申し、紡綢の綿入に同じお羽織、ふはりと着せかけ、角帽は違棚にのせて、外套を叮嚀にたゝむ。お茶をおすゝめして母様とお話しの中にお膳立、御飯にする。純日本料理そゝるやうな三ッ葉の香、お好な蒲鉾のお吸物もある、きよはお給仕いそがしい。

玉火室の空氣ランプ花やかに、ぱつと壁に映つた丸髷姿、篤様はこれについて何とも有仰らぬ。

食後は母様に失禮して二人差向ひ、リボンやら襟止めやら絹ばりの洋傘やら、お土產の品にならべられた貝入りの大きな鑑櫛が氣に入つて、何度もお禮申し上げる。

「ほんとにお見立上手ね、義姉様と御相談?」

と云つたら安からぬ色を動して、

「義姉様?――百合さんは義姉様を其様人と思つてるのかい。あのヒステリー患者を――」

少し激したお顏付、お歸省遊ばすについてまた何か

あつたに相違ない。ほんとにどうしたらいゝんだらう義姉様もあんまりな。いくら篤様が孤兒で十二の時から手許においてお育てなすつたにせよ、いまはもう金子家の人。金子百合子の良人です。うけた御恩は…忘れはせぬけれど、あんまりだと恨みまする。

日曜や休暇毎にこちらへお歸りなさるのが、お氣に入らないんだつて…。嫉妬…嫉妬と云つちや語弊があるが…、私は母樣との間にさへ一種の異なる感情が湧き出でたかのやうに思ふ。つまり…我子や弟の愛の一日〳〵夫婦間にうつし植ゑられるのを見ては、言ふべからざる淋しさと妬ましさとを覺えるのであらう野菊さんではないけれどまつたく別居論をおとなへなさる方を、夢さら御無理とは申しませぬ。姑小姑の苦勞こそ知らぬ養子娘の身も辛いもの…。



「篤樣……」私はそこへ泣き伏した。ぢつと見詰めてホツと太い息。
「僕が學校さへ卒業てしまへばね、百合さん？　いまのところぢや實に母樣にもすまないが……」
「そんな事ぢやないわ、私、私、百合のやうなものでも、それ程、思つて下さるかと思ふと、勿體なくて……勿體なくて……」
「何云つてるの、百合さん。」
　しやくり上げる肩に手をおき、
「そんな事思ふのは僕を愛せんからだ。僕ア僕ア百合さんのために男子の誇りをさへ捨てたぢやないか、甘んじて他家の姓を名乘つてるぢやないか、けれど……百合さん、百合さんさへあれば、それで、僕は幸福です……」
「うれしい？」
　强いられて顏を上げ、莞爾と笑ふと、
「あゝもうこんな話は止さう。どうです、一曲聞かさうかハヽヽヽ」
「えゝどうぞ。御褒美にお茶をいれますわ、あの母樣のお部屋へ上りませう……ね。」
　氣を取りなほし、涙拭きながら、先に立つて襖を開ければ、篤樣も机の上の尺八片手に立ち上られた。
　茶の間のあたり蟬時雨とばかり鐵瓶の沸騰り立つて浪音靜かな春の宵である。

△

「百合さん、百合さん。」
　かろく肩をゆすぶられてはつと目を開いた。玻璃戸に反射してキラ〳〵の金色の朝日、額を射るまぶしさに眉を攅めて寢返れば、篤樣は莨をくゆらしながら、床の上に坐つてゐらした。
「もう母樣はお起きになつたやうだから。馬鹿に寢坊しちやつたね。」
「母樣はいつもお早いんですもの、構やしませんわ……」
　鬢の毛をかき上げつゝ、ネルの寢まきの襟引合せて

（その二）

軌跡と其應用

▼數學世界第四卷第四號臨時增刊▽　四月一日發行

軌跡と云ふと、大層、むづかしいものゝやうに、思ふ人があるけれども、決して左樣に、むづかしいものではない。諸君が毎日學校へ通はれる道、それも一つの軌跡である、賊が逃げた路も軌跡で、これを新聞の雜報には踪跡を晦すと出て居る、と云ふやうな次第で。**軌跡**と**踪跡**とは、もと同じものであるから一時は幾何學でも之を踪跡と云つた時代があつた。そんなことは兎も角、軌跡の研究は非常に趣味のあるもので、少しこみ入つた作圖題の如きは、大抵軌跡の應用であると云つても可い位、頗る重寶なものである。今度現はれる『**ハレー**』**彗星**の如きは、**一周回**するに七十六年もかゝると云ふやうな大きい〳〵軌跡を持つて居る、面白いかな軌跡の研究、及び、其の應用、如何なる順序で之を學ぶものか、知らんと欲して其の解に苦しむ諸君は來れ〳〵、來つて我が**數學世界**の臨時**增刊**誌上に見よ。

▼全一册洋裝菊判紙數約百卌頁正價金拾五錢郵稅（本號に限）二錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館

第五巻第五號

少女世界

四月一日發行

本文紙數百廿八頁
口繪美麗なる石版寫眞版澤山

正價金拾錢　郵稅一錢

東京本町　博文館

口繪と表紙

⊙春の野…（高橋妙子筆）⊙溪流…（橋本邦助筆）⊙誌友の面影⊙女學校寫眞⊙春の日⊙和歌山少女會

本文の記事

▼お伽小說 怪牡丹…………巖谷小波

▼女學校歌集▼エジプト史談…武居教諭▼春待つ少女…小川文學士沼田笠峰▼村田春海の歌…佐々木信綱▼針の運び…

▼少女對話 花のふしぎ…生田葵山▼お人形の墓…水島雪子▼少女音樂家…黒田湖山▼腕輪の行衛…押川春浪

▼漂流少女…江見水蔭▼女學校だより▼第十四回筆蹟▼帽子の編方…石井とみ子

●少女會館…の賑はしさを見よ！



女（その四）


こんどの文藝倶楽部はどうドや
大そう面白ろさうでございますネー
第十六巻第五號
文藝倶樂部
（四月一日發行）
正價 金貳拾五錢
郵税 貳錢五厘
菊判本文三百廿頁 口繪……精巧木版數十度刷錦繪、三色版、寫眞版……婉麗花の如き者十數枚
彗星現はる！
七十六年毎に一度世界を見舞ふべく豫期されたる、彗星中の大王ハレー彗星は、本年四月光鋩幾萬哩の尾を曳きつゝ、吾人の肉眼に接せんとす、此時に當りて本誌卷頭にも亦山崎紫紅子作小說「痕」なる一篇表はるべし
これ實に文壇のハレー彗星ならざらんや
由來紫紅氏が脚本に於ける非凡の技倆は世の認むる處たり、若し夫小說の技巧に至つては奈何燦たる光輝を放つて文界に一美觀を呈せん事蓋疑を容れず
志かもこの篇子が小說の處女作たるに於ておや、次に小山集川子作「奉公人」長谷川時雨女史作「晴」松居松葉子作脚本「役者嫌」等を收す眞に之れ百花爛熳の觀!!!
雜錄に於ける活社會以下の諸欄の如きは世既に定評あり敢て之を贅せず矣
東京本町博文館
女（その五）

冒險世界の破天荒なる臨時增刊

世界未來記

四月廿日發行★冒險世界第五卷第三號增刊★正價金五拾五錢 郵稅金貳錢

百年千年萬年後の世界の有樣は如何になるべき。學者の快談あり、怪異小說あり、仙人の豫言あり。奇想天外より落つるものは此未來記にして、其要目

口繪の珍絕快絕は天下無比!!

の一二三を示せば。人間の未來は如何になるか。日米戰爭、英獨戰爭は起るべきか。地球は何時亡滅するか。黃金世界は出現するや。亞弗利加が文明國となるは何時か。日露は再び開戰すべきか。不老不死の時代は來るや否や。其他恐怖すべきラジュムの猛力。電氣界の大波瀾。理想的生活法。理想的都府。催眠術の驚くべき發達。海底戰爭。空中戰爭。人種戰爭等の未來。或は戰慄すべく或は驚愕すべく何人も一讀三嘆を禁ずる能はざるべし。

讀物の奇絕快絕は天下無比!!

東京本町 **博文館** 振替口座東京二四〇番

(その六)

産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近 婦人病心得

子宮病自宅療法

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論◉血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳說せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番）笹岡省三

東京婦人學會編

新刊

花嫁の準備と實務

洋裝美本全一冊 定價金四拾五錢 郵稅金四錢

如何なる家庭に如何なる花嫁を要求するか、是れ婦人たる者の大に研究すべき問題にして、人々職業の異なるに從ひ、家庭の狀態亦各其趣を異にし、隨て要求する花嫁の資格も、自ら區別あるは言を俟たず、本書は凡ゆる職業に就て其家庭の狀況と夫れに適應する花嫁の資格を細說して、妙齢の婦女が各望む所に嫁する準備を爲さしめ且つ婦人として必ず心得ざる可からざる實務を傳習する資料となす、苟も本書を讀んで其說く所に遵はゞ圓滿なるホームを形成して、破鏡の歎を見るが如き事なきを保證す

結婚の前後

定價廿五錢 郵稅金四錢 結婚は人生の大禮なり 結婚花嫁花婿に是非一讀を望む

發兌 東京神田錦町一ノ九 振替東京二四〇九番 一松堂書店

女（なの八）

起き直ると、ほゝ笑み乍らまじ〳〵と、私の髪ばかり見つめて被居る。

「嫌だわ、そんなに御覧遊ばしちや……」

両袖を顔におし當てやうとする手を執つて、

「素敵だね、實に……」

「いやよ――」

顔見合せて互に相笑んだ。

玉子のふわ〳〵にほうれん草のおひたし、樂しく三人が食卓をかこむ。思なしか篤様少しおやつれあそばした、餘計お鼻が隆準く見える、何處かおわるくてと伺つたら否とばかり。

東家にお友達が來てゐらつしやるつて、食後直ぐお出掛、何だか恨めしいやうな氣がした。

友禪の丸帯を縫上げてかちんと指拔を針箱に投げ、篤様のお書齋に這入つて、義姉様へのお手紙書く。

午後探し物をして長持を開けたら、まだ肩上げのおろしてないあのハイカラな、メリンスのお被布が出て來た。なつかしさにそつと羽織を脱いで手を通して見る、と、手首がニユーと出る、いやに肩がいからかつて……ホ、、、でもつひ此間まで平氣でこんな風して居たんだわ、笑みつゝ袂の丈をかへりみなどして、ふと顔をあげると、まア、篤様が後に立つて被居しやるお留守居の御褒美だつて、紙包みのビスケツトを下すつた。私まだ御飯食べずに待つて居ましたのよ、ときいてびつくりしたお顔――。お八つには羊羹を切る。

夕方不意に、海岸へ散歩に行かうと有仰る、嬉しくつて嬉しくつて、ふだん着のまゝお納戸紋織半コートを羽おり、出やうとすると母様は不思議さうに、オヤ何處へ？　まさか散歩にとも云へず、エ、ちよつと篤様と。直ぐ歸ります。

入日を浴びて花やかな相模連山、富士紫に暮れ行く春の夕空美しう、見渡す長汀人影もなく、沖の方には白帆三ッ四ッ、何處の蜑の影か宿か、相並んでスルスルと靜かな夕濱をすべつて行く。

打連れて冷たい砂に薩摩下駄と空氣草履のあとを殘しつゝ家路へと歩を返した時には、神秘でもさゝやく

如く大空に、銀色の星二ッ三ッ輝き出した。

△

いつになく早起した。篤様をおいてきぼりにして、ひとりそゞろに彷徨ひ出た。

日の出前の世界はまるで薄絹のやう。まだ花も露も蝶も深き眠をむさぼつて居て、只朝霞流るゝ中に告天子早くも朝の歌を奏でつゝある。

冷たい朝嵐に面を洗ひ、軟草の白玉ふみしだきつゝ曠々たる東の空を仰いで深呼吸一番……。と、後で急に咳嗽の聲がする、振り向くと、まあ……篤様が立つて笑つてゐらした。

今日は鎌倉の原戸別荘へ上らなければならない、昨日のお手紙、御相談致したき儀つて何でせう、老子爵には去年の八月お目に掛つたきり、まだいつかのお縁談でも出るんぢやないかしら。まさか私の口から、良人を迎へました、とはどうしても云へやしないわ、少しごはれて居るけれど、やつぱりこの髪で行かう。

朝飯後入浴する、玉の様な春の水、汲んで沸かした湯に磨いて、頰はぼうつと櫻色。御園の雪をうつすり刷いて、紅さした爪先に浴衣の裾を捌きながら、すいと姿見の前に立つ。

湯氣を浴びた黒髪露滴らむばかり、ぢつと鏡の中の濃い生きわを見つめて、思はず會心の笑をもらした。鬢搔とつてふはりと掻くと、ほつれた鬢がいつそよくふくらむ。

緋縮緬の長襦袢の上に、縫紋のある霞お召の二枚がさね、褪紅色の厚板を胸高に、大きな金金具の帯止めをぱちんとはめて、半コートに絲ねずみの無地お召。「氣をつけて行き給へ。」と有仰る篤様のお聲をあとに家を出た。

停留場で待ちあぐみながら、時計を出して見ると丁度十時。一時間あまりをゆられ〱て、極樂寺で電車を捨て、あそこから俥を走らせた。いかめしい御門を入ると、大きな木蓮が一朶の白雲虛空に掛かれるとばかり、今真盛りである。玄關へは四十あまりの袴を着

けた、執事風の男が出て來た。何誰様で入らせられますかと問ふ。

小さい名刺を取り出し、御前からお手紙でございましたから、と云ふと、

「あゝ貴女様でゐらつしやいましたか、よくこそ、どうぞ此處へ？」

應接室へ案内したそして、

「御前様は急にお人でございまして、先刻、逗子の芳川伯へお出掛遊ばされました。貴女様がお見えになつたら、是非お待下さいますやうにとの御申置で



はい。」

幾度か云わけして退くと共に、立派な茶菓がはこばれた。まア何のこと癪に障るわ、御前もわざ〳〵私を呼び付けておきながら……

水色緞子の椅子に身を投げかけたまゝあくびを二ツ三ツ噛み殺す、途端ドアを排して制服出立の男がはいつて來た。思ひもかけぬ四郎様、はつと驚く私を、

「ひどく變つたねえ百合ちやん。僕をおぼえてるかね。」

卓をはさんで椅子に着かれる。

四郎様は三田の理財

科の秀才だ。

「いま米田から話しをきいてね、たしかに百合ちやんに違ひないと思つたから……。何だね、もうすつかりいゝ奥様になつて……」

「まアあんなこと――」

菫色のハンケチを弄ぐりながら、

「いつこちらへお出あそばしまして？」

「つひ先刻、まだお父様にも遇はんのよ、僕も用があつて來たんだけれど……」

灰皿に葉卷をはたきつゝ、

「いつ御慶事があつたんだね、良人君は何處へ奉職居るの――」

「まだ生徒でございますもの……それどころでは………」

「學校は何處？」

「大學へ――あの工科へまゐつて居ります。」

「お望み通りの赤門だね。百合ちやんの理想は文學士ではなかつたかね。」

「存じませんわ、四郎様。」

「百合ちやんの好きな近眼鏡を掛けてるか、の、さぞ小説的の家庭だらう、のつて散々お冷かし遊ばした末ふと語を更へ、

「お父様と一緒に幸子も來て居るよ、庭へ出給へ、一ツ百合ちやんを見せて、ハ、、、。」

「さうやつて澤山お虐め遊ばせ。どうせ私は。」

「好ちやないか、まア來給へ。さ、百合ちやん、おい百合さん、さア。」

手を取らんばかりに成さるので、仕方なく立上つたこの室を出ると、鏡のやうな黄楊の廣縁、つと右に折れる。と、

「女は氣樂でいゝね。」

「えゝ。」

「僕は百合ちやんのホームが羨ましい！」

私はだまつて居た。

「幸子も直きにお嫁に行くよ。」

「四郎様のとこへ……」

「何を。馬鹿な……」トンと縁側を蹴て、

「僕は一生獨身だ！」

「御串戯ばつかり。」

「まつたくさ、幸子なんか仕樣がない。」

高島田に結ふた品のいゝ小間使ひが、縁の端に身をかゞめて、敷石の上に二足のスリッパを揃へる。眞青な芝生をふんで、はらり〳〵と散りかゝる落花の雪を浴びながら、四郎樣のお後について、築山の上の四阿に入つた。寄木細工の小さなテーブルを中にして、すすめられた青磁の丸椅子に腰かける。

「まア、好い景色、氣が晴々と致しますのね。」

日光を浮けて泉水の、蒔繪のやうな漣や。眼を放てば滿眸の春色融々、遠近に陽炎狂ひ、漸々たる麥畑は微かな春風にサヤ〳〵戰ぎ立つて、照る日も光るばかり鬱金の色の花一面、其處には一きわ蝶の舞ふこと多く、黄蝶白蝶ひら〳〵ひら。

遥か彼處の小川の汀、紫の洋傘かたげて立つ人の絲遊にかすみ立つたり。

日は正に午、鷄が鳴く。

先刻の小間使がうづ高く盛り上げたシユークリームの鉢と、九谷の茶器を捧げて來た、紫檀の扶盆から銀の茶托に載せたのを取つて二人の前に置く。玉露からゆるう湯氣がたち上る。

「道。」と呼んで、

「幸子はどうした。」

「今し方までこゝにお出あそばしましてございます、お離れへでも行らしたのでございますか……」

「此處へ呼んでくれ。」

「は。」

一禮して引退る後姿を見送つて居ると、

「兄樣、おほゝゝゝ。」

牡丹櫻の花の蔭からうらゝかな笑聲を先に立てゝ、石橋渡る庭下駄の音高く、疾足に築山をのぼつて來られた幸子樣、私を見るや、

「あら。」颯と紅くなつて御會釋遊ばすのを、

「幸さん。」と葉卷を唇から放して、

「丁度よかつた。御紹介しませう、これは金子男爵令夫人です、奥さん、これが奈良原幸子で‥‥」

「厭な四郎樣。」

立ち上りさま、

「幸子樣、御機嫌よう、お久しうございます、私はあの‥‥金子の百合でございます。先年原戸の御前がお還暦の園遊會の折、お目に掛りました‥‥」

「まア。」幸子樣も二三歩前に進んで、

「百合さんでしたか、まア。すつかりお見それしました。先刻伯父樣から今日お出になるとかつて、伺つては居ましたけれど‥‥」

四郎樣の傍の空椅子を手帕で拂ひながら、

「金子男爵‥‥つてまア何方のかと思つたわ。」

眞黒なお前髪を思切つて大きくふはりと出して、燃えるやうな緋の四吋のリボンを、きゆつとお結びになつたマガレツト、藤紫のお被布を召して、お納戸矢飛白のお召に白のお襟を二三枚重ね、黛の跡匂やかにお鼻の高い中高顔、乳のやうに白いお首筋の美しさ。

四郎樣は兩人を見くらべ、

「百合ちやんはいくつかい。幸子と同齢だね。何、一ツ下だつて、フム。」

卓を指先でたゝいて、

「來年の今頃は二人とも、小さいのを抱いてるんだらうな、女つてえらいもんだね。」

「兄樣つたら、よくつてよ。」

ぱツとお顔に散る紅葉、手を抗げて肩を打つ眞似、指環の珠が燦然と光る。

* * * * * * * * * * * *

お晝餐は三人で盛花匂ふ食卓に着いた。ナイフやフオーク働かしながらも、あゝ今頃篤樣はどうして被居しやるかしら、とつひ我家へ思ひが走せる。

御前はいつまで何をしてお出遊ばすんだらう。

四郎樣のピアノをきかせられたり、寫眞ブツクを拜見したり、四時までお待したがお歸りがない。幸子樣が氣の毒がつて電話でかけて下すつたら、もう直きに

もどるから待たせておいてくれ、晩くなつたら泊つて行くがいゝと有仰つたさうな。いまは……とお暇申し上げれば、幸子様は泣聲になつてお引とめ遊ばす、無下にも振り切れず困つて了つて、

「ありがたうぞんじますが……」

「駄目だよ幸さん獨身の時とは違ふからね、家にやハス君が待つて居るんぢやないか、思やりのない事を云ふべからず……」



執事の米田も出て來て、それでは私めが御前様にお叱りをかうむります、なんて云つたが、無理やりにお玄關へ出た。幸子様も仕方なく式臺へ立つてお見送り下さる、強ひらるるまゝ原戸家お抱へのゴム輪俥に乗り……、梶棒上ぐるや音もなく、肩をゆすつて一散に停車場へ――。

あやうく汽車の時間にも間に合ふ丈、私は白切符を買はせた。

大船で乘り替へる時、ふと本庄先生の後姿をみとめたが、あゝと聲かけやうと思ふ間もなく、驛夫が一等室のドアを開いてお辭儀する。仕方なく乘り込んでしまつた。

藤澤に停まるを待ちかねて下車した、

「先生、先生、本庄先生……」

人に押されてへだてられ、いま改札口を出やうとするのを呼びかけると、振り返つた人は吃驚して、

「や、夫人。」

足を止めて、押されて行く群から側へ退いた。

「何處へ行らつしやいましたの、お久しぶりね。」

「貴女は何處へ。夫人とは意外でしたな。」

並んで立ち添ふ二人を、人はちよい／＼と見ては行く。話しながら構外へ出ると、うるさく車夫が群がるので、その中の一人に一寸さゝやき、

「先生、これから直ぐおかへり遊ばすの、どちらへかいらつしやるの、私、少し先生に用があるんですけれど……」

「え、歸ります。何の御用ですか。」

「ぢやア丁度よござんした。御一緒に途中までまゐりませう――」

俥を後へ從へて歩き出す。先生は重い裳裾を捌き分けて私の歩行の早さ程に歩をゆるめながら、

「何處へいらしたのです。」

「それよか先生は？ オホ、好い顏色よ……」

微醉を帶びた色の白い丸顏をつく／＼とながめて思はずほゝ笑んだ。

黑七子のお羽織に仙臺平のお袴、眞黑な髮を淺く分けて、額の晴れやかな鼻の高い、濃い眉、一文字の口もと、何々伯の若樣と云つても恥かしくない天晴の好男子、月給二十圓の小學敎師と誰の目にか見えやう。鵠沼村の光る君、三年前御赴任當時は御同僚の女先生方が、白粉を月に二瓶づゝ空けるやうになつたとか何とか、大變な評判だつた。いつでも私を弄かつてばかり、いまに奥さんをお貰ひになつたら、思ふさま敵討ちをして上げやうと思ふ。

「お母さんはお健在ですか。」

「有がたう、いま篤麿が歸省つて居りますもんで、熱海の伯母のとこへ出かけました。」

「あゝ左樣でしか、篤麿君がでは、春期休暇ですね……それは〳〵。」

「厭ですよ、何がそれは〳〵。あのね……」

今度の土曜日は篤樣のお誕生日、その晩餐會に先生も來て頂戴と、お願ひして、やつと御承諾を得た。

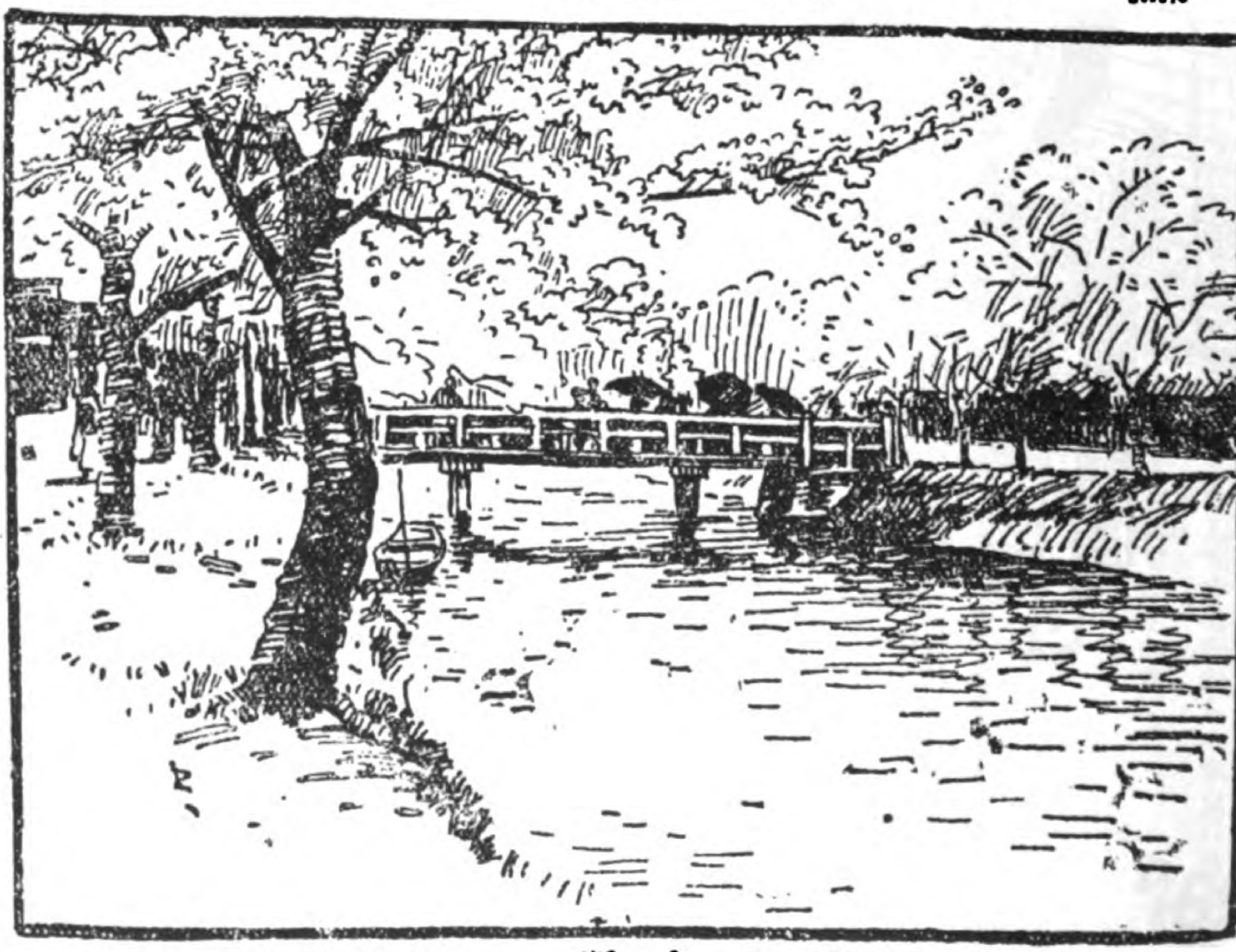
いつか村の道へ出た、白のボアーにうづめた頰を夕陽まぶしく射て、其處此處に立つ孤松の影長々と橫たはり、わら屋の夕煙諸々に立ちのぼる。

「ぢや、先生、こゝでお別れします、屹度お出下さいよ、御免遊ばせ……」車夫を手招き、

「お待ち申して居りますよ、先生。」

「有がたう……」「失禮します。」

會釋と共に雅健の掛聲勇ましく、夕風を切つて流るるやうに走り出す。行途の森の上に新月白し、あゝ訪問や、夫は待つらむ夕間暮、車夫を叱して家路にいそぐ。



東京櫻の名所　（江戸川堤）



社會觀察

一風變つた生活法

一記者

四谷見附の三河屋といへば、商賣が手がたくて客待遇が上品だといふので、牛肉屋として一寸名の知れてゐる家ですが、其處の女中の生活を聞いて見ましたところ、一寸變つてゐるやうですから、主人の話をこゝに少しく記して見ます。

△十一二から嫁入まで

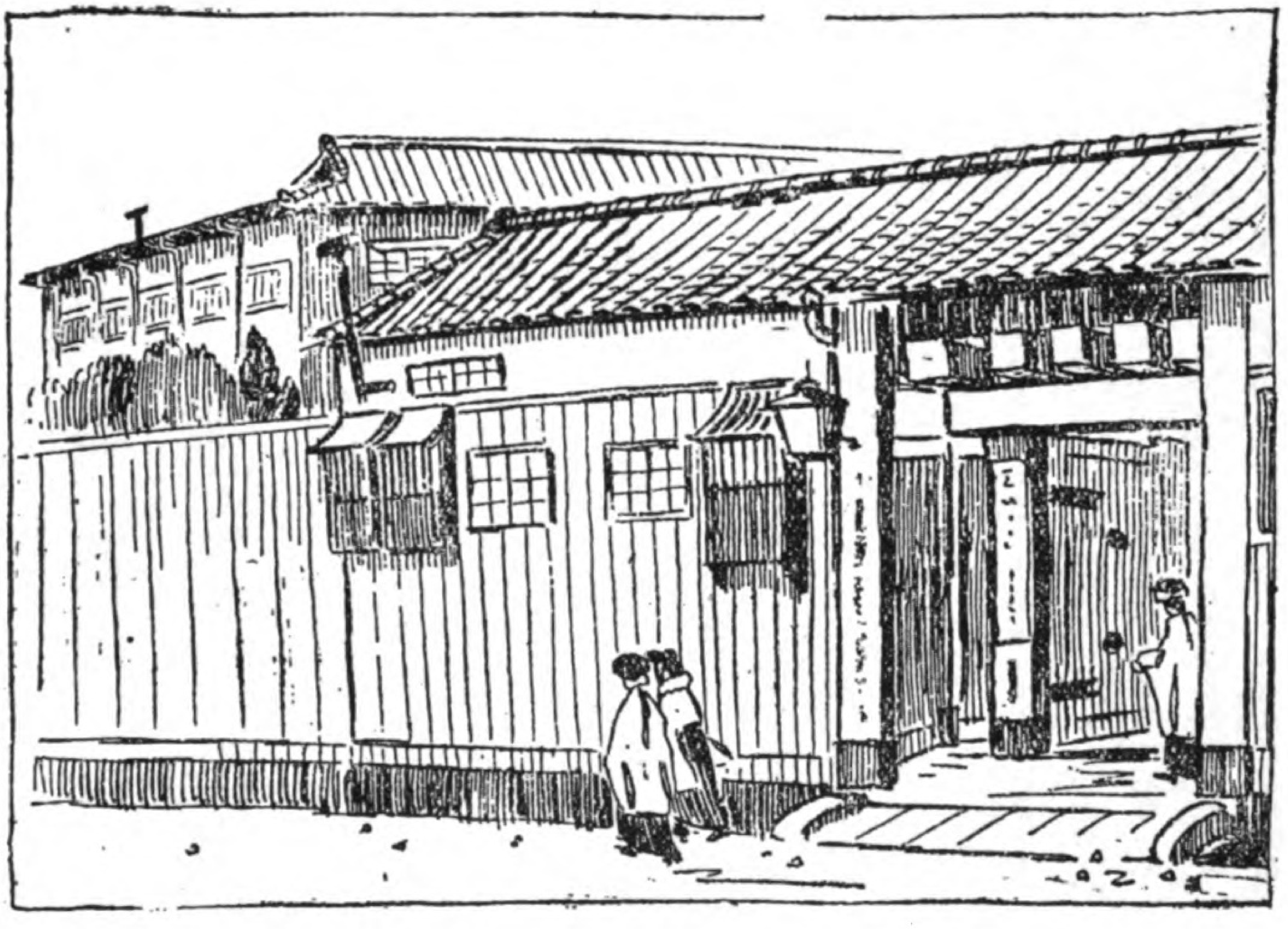
私共では、女中は渡りものを入れますと、それが爲に長く居るものゝ氣まで迷はせて、家の風儀を亂してなりませんから、普通の桂庵から雇入れる事は致しませんで、成るたけ十一か十二歳位の幼さい間から七年の年季で定めて預ります。けれども年季だけで歸る者はございません。年季丈では當人も詰りませんし、此方も眞正に使へる樣になつてからが餘り短かいので兩損でございますから、大抵は十年以上つまり嫁付くまでは家に居ります。只今はお客樣の前へ出るのが九人、出ないのが四人居りますが、出ないのといふは十五歳以下の子供で、小間使や勝立の手傳ひなどをして、見習をさせて置くものです。その見習を三年間致させて十五歳以上からは追廻しの役をさせるのですが、これは未だお客樣を受持たずに仲働きをするのです。そして十七歳から一本立に致しますので、つまり五年間程見習をさせる次第でございます。

△女中の嫁入仕度

最初は大抵前に居つた者の親類とか、知合の者の手を經て、彼方から頼んで參る者が多いのですが、之を預かる時にはよく詮議致し、いよいよ預かるとなれば、親の方へ相當の手當をやつて呼取ります。そして參る時には先づ着た限り、帶の締換の一筋もあり着換の一枚もあれば上等の方ですが、後は一切此方で見ますので、衣服でも帶でも湯錢の費用迄一切致してやります。

ですから決して服裝の有無などは構ひません。假令どんな貧乏な者の娘でも、親なり當人なりが正道な者で長く勤める氣さへあれば結構ですが、此方で何麼に嫁つても、當人に沈着いて長く居る氣がなければいけませんし、又當人はよくても、親の心得が正道でないと、兎角途中で退出したがつたりして不可ませんから、此れは十分注意致します。此の樣にして子供を此方へ預つた上は、四季折々の仕着は勿論與へますし、又愈年季を勤め上げた時には、嫁入衣の紋付の襲着と丸帶とを作へてやります。そして勤め上げた時には親元から暇を遣させ、此方の朋輩ともお別れをさせて、目出度く一旦は返すのでございますが、一週間位親元で休息すると、又出て參つて、それから大抵縁談の決るまで勤めて居るのです。愈嫁付く時には又箪笥、鏡臺、針箱などを整へてやります。

三輪田高等女學校　（麹町區四番町）



△世間の風に當てぬ

外へ出すのは四月と八月だけです。それも宿元へ返すので御座います其時には宿元から迎の者を來させてそれに付けてやり、歸る時も又宿元の者に送つて來させまして、決して若い女を一人では歩かせませんが、幸ひ宅の女中はちつとも外へ出たがらないやうでございます。宿元下りは一晩宿りで順繰に一人二人づゝさせて居ります。

その他年に四五回位、慰勞の休暇を與へます。この時は宅の商賣も休んで一同骨休めを與へますので、女中を皆演劇にやります。此間なども前から茶屋へ電話を懸けて場處を取らせておいて、もし老女が付いて行かれなければ、よく電話で賴んでやるとか致し、そして九人なり十人なり必ず一緒に行つて一緒に歸らせます。

以前は大抵四五人位を、私か老母さんかゞ連れて湯に參つたものですが、改築後は家で風呂を立てゝ居りますから、其の外出も無くなりました。郵便を出したり、その他の些々した外用は、十五歳以下の幼女が居りますから其れを使ひます。まあ這麼風で全然外出をさせませんから、其の代り眞實の世間知らずで、お客様に對しても氣が利がないでございませう他店のお客扱ひは何麼振合だか、宅の子供は其麼事は全然知らずに、唯宅の風儀で致して居るのです。

何時かも迎に來た老爺と一緒に宿へ歸ると言つて、青山行の電車へ乘るべき處を牛込見附の方へ乘つて行つて了つた女がありましたので、

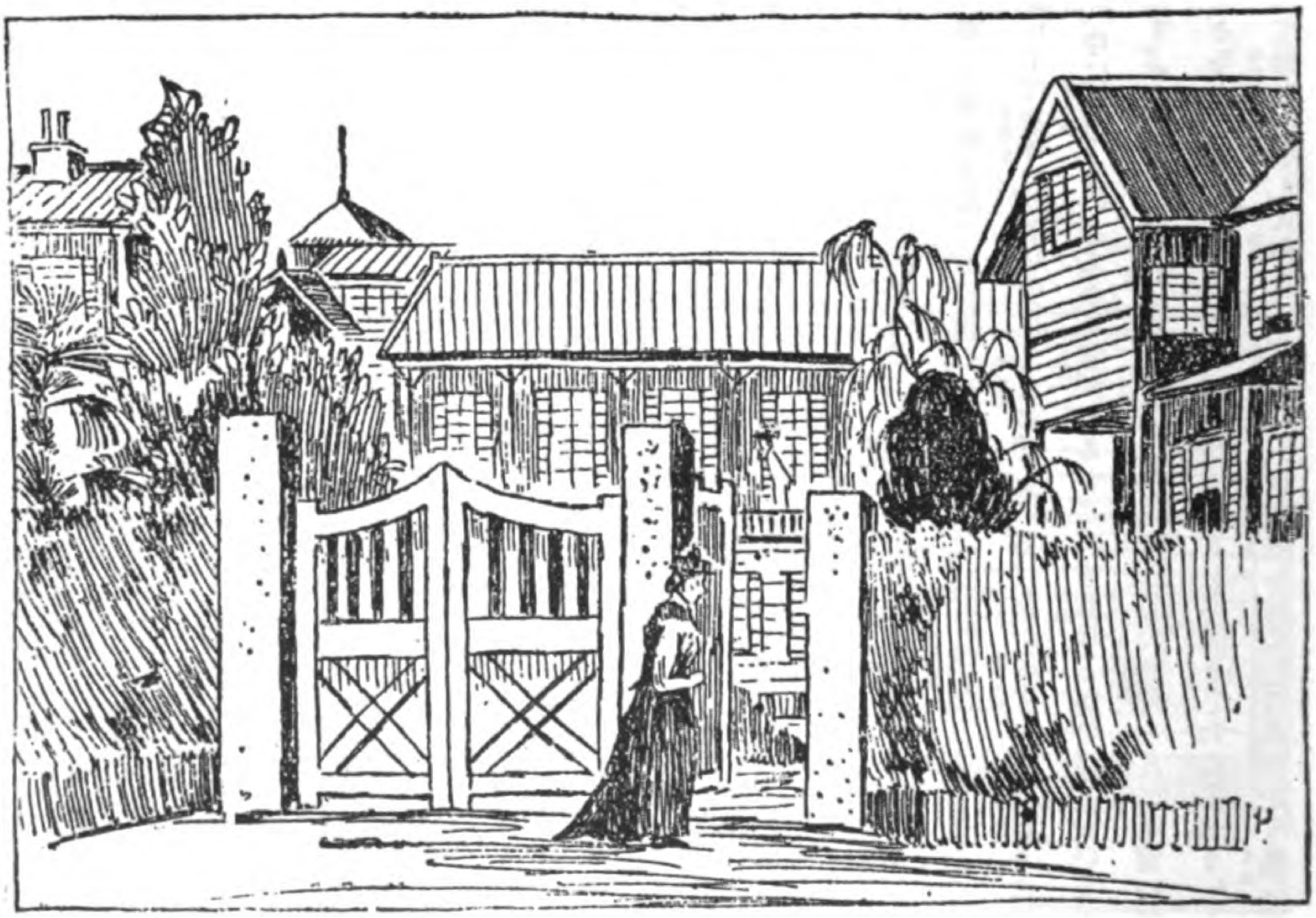
「其麽女があるものかれ」と言つて大笑ひを致しました。それでも嫁付いてからは直きに慣れて、格別困る事もないやうで御座います。

△嚴重なしつけ

お客様によつては、「女中はチト不愛想すぎる様ぢやないかれ」とお笑ひになる方もあれば、又「この方が瀟洒してゐてい〻」とお褒めになる方もありますが、私共で注意する事は、第一召食物の精選、次いで座敷や器の清潔といふ事で、長年稼業をしてをりますが、此の點に就ては幸ひまだ一度もお小言は戴きませんから喜んで居ります。そして女中は立つたま〻で火を入れたり、中腰で物を差上げたり伺つたりする様な事は間違つても爲ないやうに、行儀は嚴重に吩咐けます。甚麽お客様がいらして「一つ酌をして行かないか」と仰在る様な事があつても、「宅ではそれだけは」と確く御免を蒙らせ、唯失禮のないやうに起居を淑雅にするやうやうに注意させて居ります。

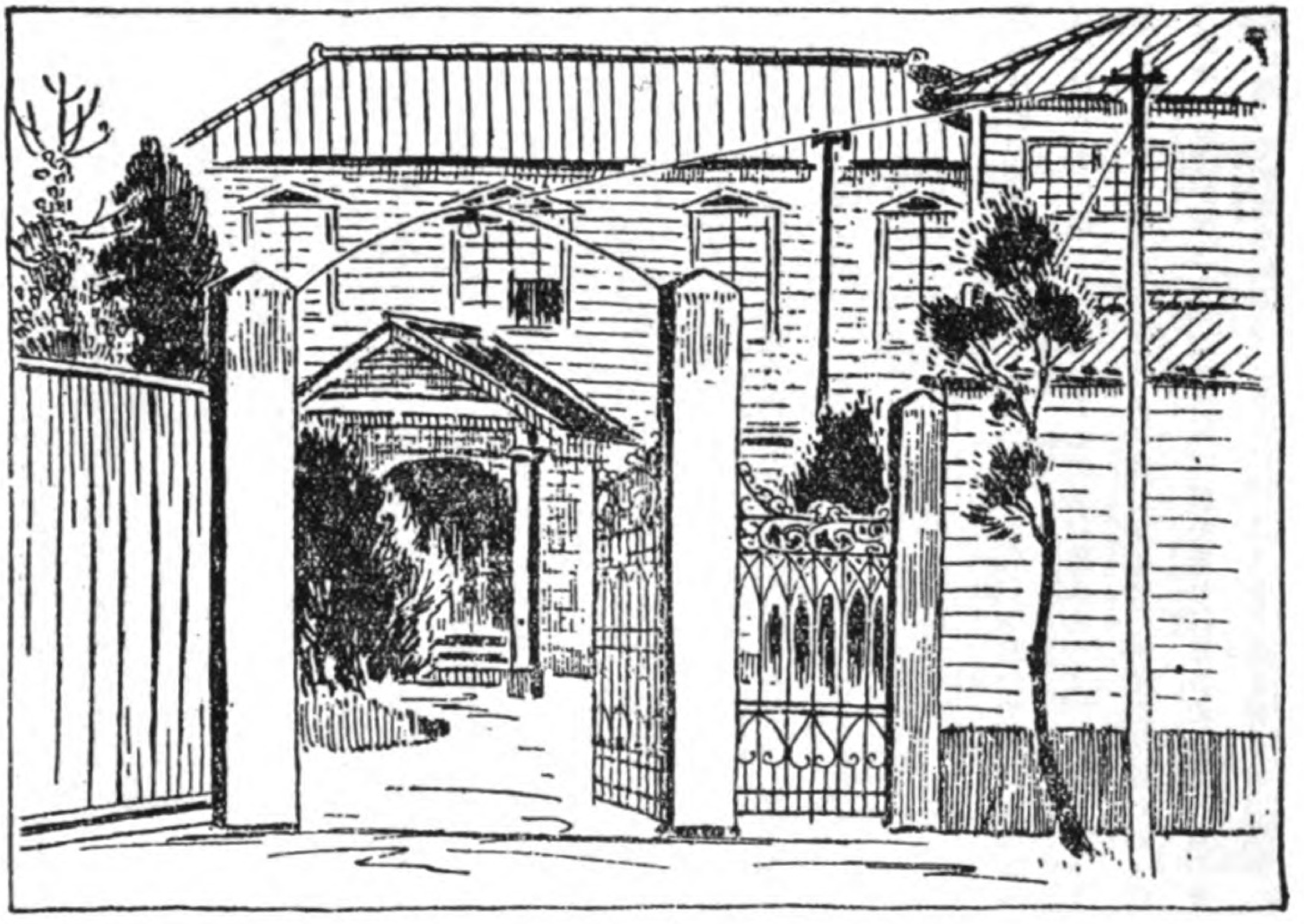
△働らき振り

女中の仕事の仕方を申しますと、お客様が廊下を通つてお好きな室へお入りになる、その室へ入いられたお客様は幾人あつても一人の受持として御用を伺ふ事にしてあります。此の方が番號順に何のお客様は誰と決めて、其のお客様が彼方へ一組此方へ一組お坐りになるのを、一人の女中が驅け廻つて御用を伺ふよりもよいやうで、女〻坐ながら御用を伺ひ



女子學院　（校長矢島楫子女史麴町上二番町）

淑徳女學校　(小石川區表町)



お客樣も亦受持の女中をお探しなさる樣な事がなくて、靜かで用が早く運びます。

立籠むのでお歸りの時も一々玄關までのお送りは出來ませんから、室の口までゞ御免蒙る事にしてあります。けれど幸にお客樣は不足を仰せにもなりません。そして殊に嚴禁しておくのは女同士廊下へ立つて耳こすりなどする事で、「其麼事をしては家の名前に係はるから決してならない、話があるなら帳場の前へ來てしなさい!」といふ位に申付けておきます。

△家内の取締

他人の娘を預かつてゐて間違があつてはなりませんから、家内の取締も嚴重に致し、用事の他は男共と一切冗話をしてはならぬと書いて始終室の壁に貼つて置く程にしてあります。長い間にはツヒ一寸冗戯口を利くやうな事もあるものですが、然ういふ時はウンと嚴ましく申してやります。そして男女の寢室はずつと離れた所に定め、女の方へは障子へ鍵を懸け、電燈も男の方は消しますが、女の方は終夜點けておきます。此の樣にして夜中に、男の方は主人が、女の方は私が必ず一度見廻るのですが、中に枕でも外してゐる者があると、一寸墨などを付けておいてやります。すると翌る朝「何うしたのだらう、何うしたのだらう」と言つて大騷ぎをします。それを見て私が笑つてゐると、「何うしたんでせう」と言つて妙な顔をして來ますから、「ナニ寢態を惡くしてゐたから墨を着け

てやつたのさ、極りが悪るいなら氣をお附け」と言つてやるのですが、これには閉口して段々よくなるやうでございます。

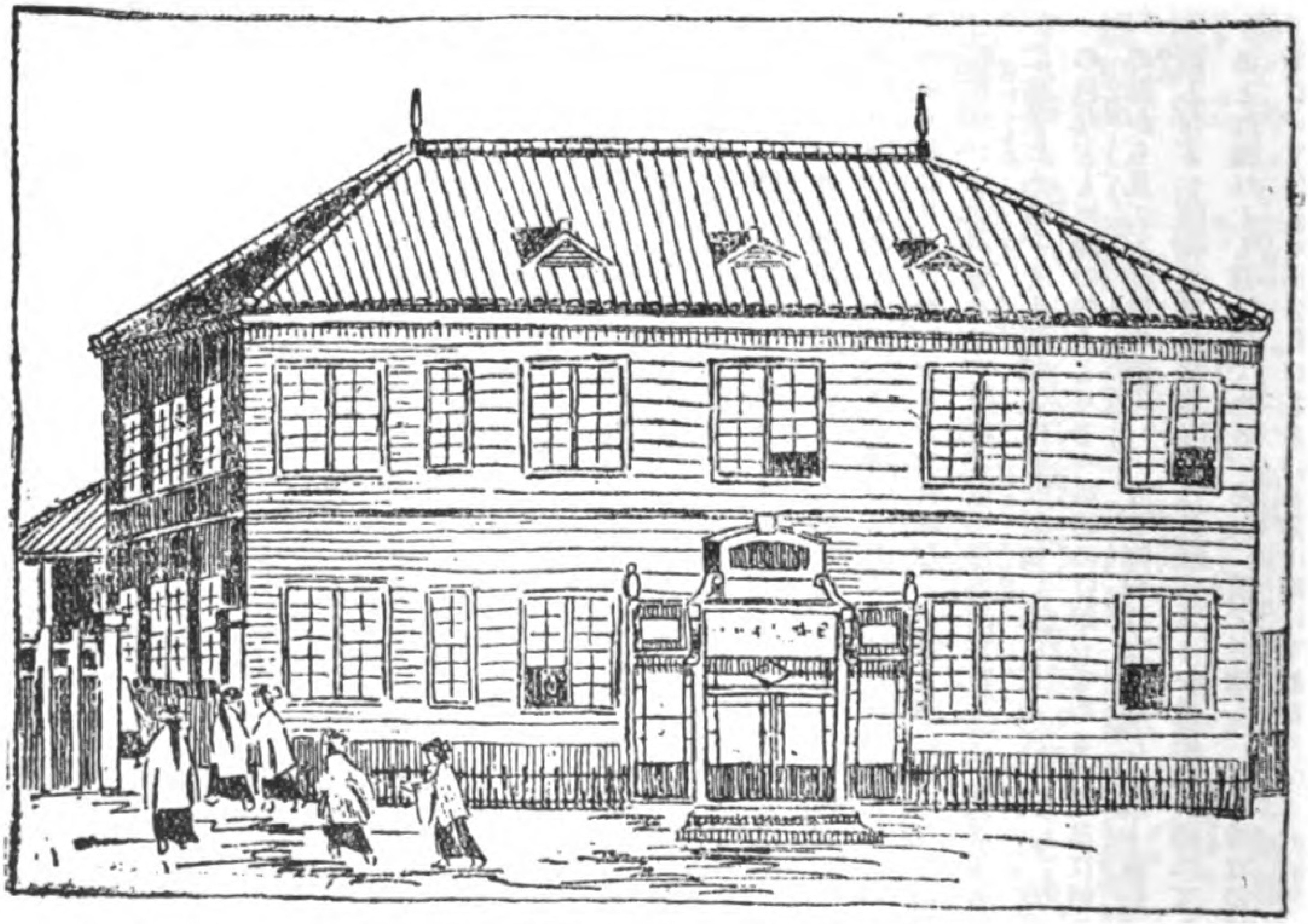
隨分嚴重な方で御座いませうが、その代に幸に從前猥りがましい事は一つも起らず、家名の出るやうな事もなく、當人達も身持を崩さずに極く好くなつて參つて居ります。

△貯蓄とお稽古

お客様から戴物でもありますと、一々帳場へ申させて主人の方で預かつてやります。そして成るだけ冗費をしないやうに言ひ聞かせておきます。「親や兄弟のために使ふのはよいが、自分の身のために冗錢を使つては濟まない。」と能く言ひ聞かせておきます。

そして私共では女中に申付けて、必ず毎日自分の會計を記けさせます戴物が幾何あつて、幾何を何うしたといふ事を何麼字でも、何麼に曲つて書いてもいゝから、帳面は記ける癖にして置かないと嫁付いた時困るからと言つて、各自に一册宛帳面を渡しておきます。そして何か使ひたい時には帳場へ來て「これ〳〵が欲しいから」と許しを得させて、其れだけを渡して遣りますのですが、それ等を皆記けさせて、月末には私が一一目を通して計算を檢めてやります。

その位にしないと何うしても若い女の事ですから不覺冗費をしていけません。此の樣に世話をやいて居りますと、塵積つて山となるで、長年の間には中々大きいものになります。



日本女子商業學校　（校長和田垣博士　麴町區土手三番町）

岡山後樂園



家を持つて女のする一通りの事は間に合はせてやらればなりませんから店は八時に閉ひますが、片付けた後で字を習はせたり、裁縫を習はせたり致します。貸本を借りて見る事などもさせておきます。これも長い間の事ですから、手紙の一本も書き、自家の衣服の裁縫をする位な事は出來て參ります。

さうしますと寢るのは何うしても十二時近くなりますが、朝は五時には必ず起きます。そして一日働くので、忙しい事は最う全く忙しいけれども、身體の爲にはそれが却つて好いと見えまして、初め弱かつた子でも不思議に壯健になつて參ります。

△巴里の繁華

紐育の雜閙にも慣れ、倫敦の繁華にも熟した者でも、更に巴里へ往くと、其の人馬車轢の殷んなのには必ず驚かされる、滿都至る處自働車と馬車と行人とで充ち〳〵てゐるの觀がある、居慣れたら然うでないかも知れぬが、大抵當分はマゴツキさうである、ボア、ドブロージュの公園の規模も設備も、紐育のセントラルパークやロンドンのハイドパーク邊りよりも、慥かに數等上にある、ベルリンのウンテルデンリンデン街などは隨分廣い立派なものであるが、シヤンゼリゼー街などは一層立派なもので、廣さも其の二倍位はある、そして婦人は皆化粧術に長けてゐて、姿形、皮膚の色なども何國の婦人よりも一番垢ぬけがしてゐる、巴里は何れの點から見ても世界の都で、一寸と飽かれない處だ、尤も演劇方面となると伯林邊りの新式なのに比較すると一世紀位は遲れてゐるとは誰れしも言ふ所である、それに演ずる物も、思想的なのは少く、て多くは藝を見せるといふ方に傾いてゐる。

色々工夫して一家を樂しくした經驗

鳩山春子

△男の子には絹物は嚴禁

私は御承知の通り男の兒ばかり持つたのですから可なり育て方に苦心いたしましたので、衣服なども子供には獨立の出來るまで決して絹物を着けさせまいと決心いたし、夫には生れ立から此主義を行はなければと存じ、祝に貰つた絹物も澤山あり、宅には可なり有合がございまして、始ての兒に着せたいのは親心の當然でしたけれども、我慢して一切肌に着けさせませんでした。有合だから宜いと云て着せますと、それが壹た時にも習慣で矢張同じ物を買て着せると云ふ風に勢ひ流れると思ひましたから、決心した事をキチンと勵行致しました。それから二人の兒が高等の學校へ參るやうになつてから注意しました事は不規則に勉强する事を決して許さないといふ事でした。そして試驗の成績に就ては決して彼是申した事はございません。平生規則正しく學課を勉强して居れば、試驗の間際に狼狽する事もなし、よし又不幸にして成績が惡くとも、平生踏むべき道を歩んで學生の本分を盡して居たのなら決して恥る事はないと、常に申し聞せて居りましたので、宅の子供は幸ひ試驗前に神經衰弱に陷るやうな事もなく、試驗時には平生よりは却つて早く寢る位に致しましたに拘らず、兩人共成績は至つて良い方でございました。私は自分の考で斯樣風に敎育しては見ましたが、今日誰れにでも是を手本にせよと講釋して聞せる事は好みません。親達の考に依り、子供の性質に依つて、何時も同じ樣な方法を執る事は出來ないものと存じます。私の子供達にでも、今度の女兒を育てる間に自然發明する處もあらうと思ひますから、決して干涉は致しません。却つて後に男の子の生れた時に其の育て方の研究にならうと思つて一切放任してございます。

△子供に女姉妹のない弊害

今女の兒だつたから次は男の兒をと期待されるのは嫁の身に取ては心配なものでございます。私は幾人でも澤山生で與さへすれば結構で、其中一人男の兒であれば尚更嬉しいと思つて居ます。結婚後數年間一人も子供がなかつたら、一寸心配なものですが、子を產む婦人と云ふ事を早く確め得られた私の滿足は非常なものでございます。一體男の兒ばかりと云ふのは萬事不都合なもので、一寸子供の客を致す時でも女子を交へにくいと申す窮屈な場合もあり、一家が餘り殺風景になつて、優美な分子がなくなります。又女同胞の無い青年は、女子の心が少しも分らぬ處から、却つて他の女子を買被つて誘惑に陷ると云ふ弊害があるやうに思はれます。さういふ事を切に感じて居りましたから私は二人養女を貰ひ、其の他にも宅で女子を育てたのでございます。私の家は只今は誠にお誂へ通りで、私は男のやうな性質ですから男の兒を得、嫁は又優しい性質で育てるのに極適當な女の兒を得ましたのは幸福な事と思ふて居ります。

△報酬を望まれない義務

私は吾兒の教育の爲には實に心血を注いだのでございますが、唯今一人前になつた吾兒から其の報酬として私を熱愛して貰はなければならぬと云ふやうな考は微塵もありません。それゆゑ嫁を迎へると同時に別居いたさうと決心して居たのですが長男の方で、父は公用上留守勝であるのに若し賊でも入つて危害を加へるやうな事があつては大變であるし、且今まで共に住つて樂しく暮して居たのに別々になつては物足ぬ心地がするから、と申して承知いたしませんでした。吾兒の方から斯樣に優しく待遇されますのは豫期せぬ報酬を得たやうなものだと存じて居ります。息子が嫁を愛して自分を粗末にすると愚痴をこぼす母親は、養育の報酬のないのを失望するのでせうが、子を育てるのは母として當然の義務ですのに、其報酬を得やうと云ふ

のは如何かと思ひます。

△近頃身體が肥つた譯

私は自分の部屋へ嫁の方から來るのは一日に何遍でも構ひませんが、私の方から嫁の部屋へ參る時には一應扉外で聲をかけてから入るやうに爲て居ります。

私もつひ此間まで嫁の身で在たのでよく嫁の心持を知つて居りますが、母親に突然度々部屋に來られては



嫁の心の休まる暇はないものです。併し孫が生れてからは孫の顏が見たさに嫁の部屋へ自然足が近くなりました。

私は嫁を貰ひましてから眞の親友が一人殖たやうで非常に樂しくなりました所爲か、身體がめつきり良くなりました。昨年は種々の出來事で過勞した爲か何となく衰弱して宅の門から玄關までの坂道を後押が付ないでは登られぬ位でしたのに、近頃は大層元氣が出まして、少しも苦なしに坂道も步け且つ餘程肥つて參りました。

△精神上の良師友

嫁の處女時代には私が本など教へて居つたので、互によく知合ふて居ましたから、唯今では長男と一緒にマヽ〳〵と慕つて與れるのです。嫁は私と違ひ靜かな女らしい性質に富むで居りますから、私は之に依て精神上多大の益を得る事と信じて居ります。未だ昨今參つたばかりの年もゆかぬ者にちと無理な注文か知れませんが、追々に私の缺點を遠慮なく忠告して貰ひたいと望んで居ります。人間は忠告者が側に居ないと不知不識驕慢に流れるもので、獨り天下は何より恐ろしいものでございます。

△文豪の良人待遇法

佛蘭西のマクスオーレルの著書には面白い事が澤山書いて御座いますが、其中に左の樣な事がありました、

「良人が放蕩をするのは妻の權力が弱いからだと云ふのは皮相の見解である。自由の利く男子は如何に細君が强くても幾らでも遊ぶ方法を執る事が出來る。且八釜しく言はれる程意固地に遊ぶのが男子の常である。一體男子が遊蕩するのは細君が厭になつたから他の花を求めると云ふ重い考ではなくつて、畢竟珍らしい事を氣晴しに一寸行て見るだけである。如何に旨い物でも毎日々々食て居れば飽ると同じ理窟で、所謂鯛もあるのに河豚汁を味つて見たいのである。故に細君の良人の遊蕩を豫防する方法は充分考へて實行すべきで、若し良人が遊び始めたら、心を廣く持て、餘りヤイヤイ躁ぎ立てぬが宜い。自分は已に正妻と云ふ貴い地位に坐つて居るのだから、妻の務を守つて居さへすれば決して地位を犯される氣遣ひがないと云ふ信念を持ち良人の遊びを極輕い意味に看過して居るに限る。そして何時もの通り良人を大切にして居れば、良人は厭になる處か、若し細君の身に害を加へる者でも在たら吾身を捨ても助けるに相違ない。細君に落付がなくて良人の顏さへ見れば厭味を並べたり、不平な顏を爲たりするから、良人は家に歸るのが厭になつて來るのであ

る」と云ふ事が書てありました。

△子供に寸分も容赦せぬ事

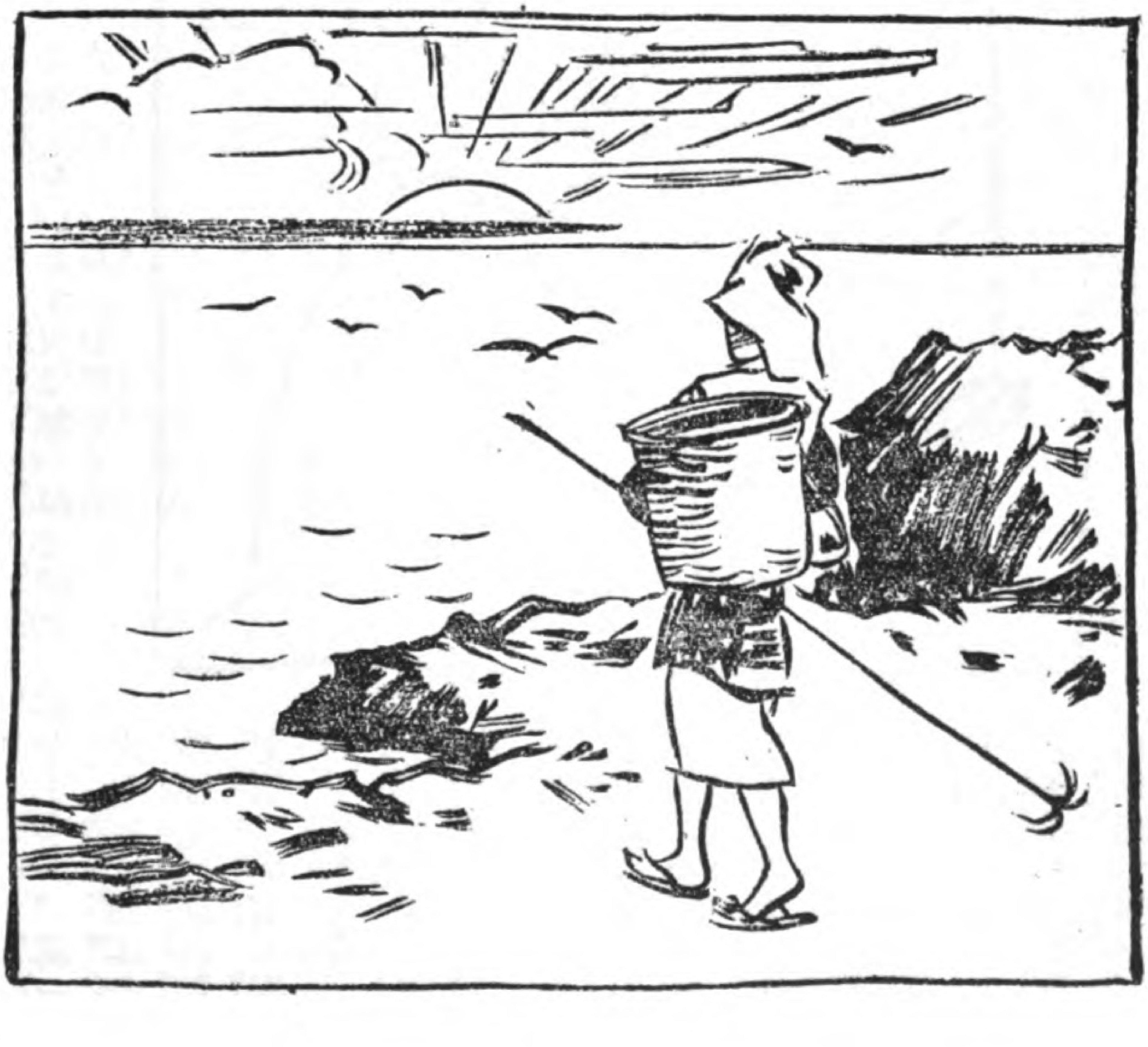
一應の道理があらうと思はれます。けれども是は長上に對する場合だけで、吾兒には決して之を許しません。吾兒には自分の血が籠めてあるのですから、私の目の黑い内は寸分も許さぬつもりでございます。私の兒は決してかゝる過失をいたす男で無い事は信じて居りますが、萬一之を行ふた場合には先づ私の首を切つて貰ふ覺悟で居ります。

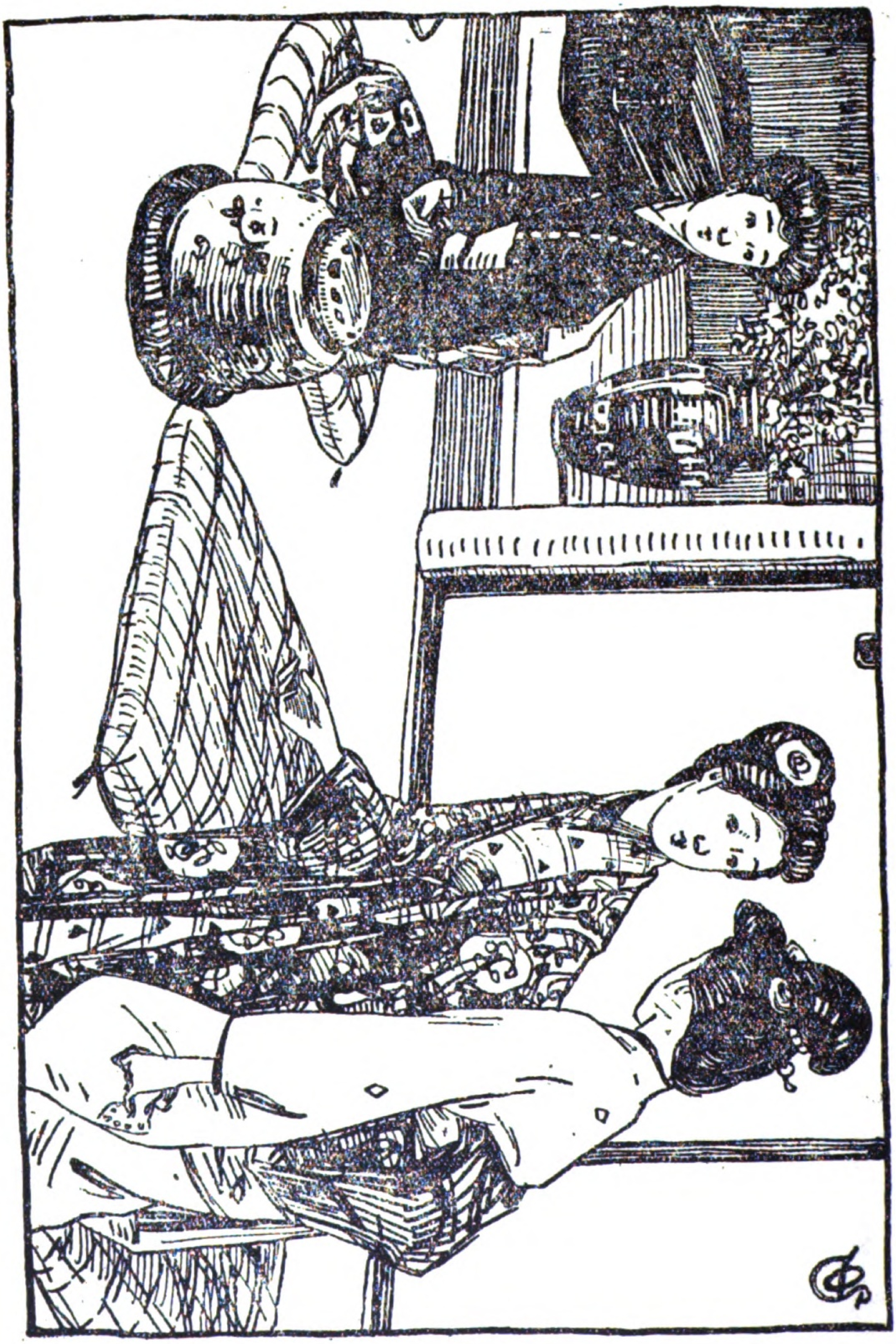


男子が愛する妻を差置て他を求めるやうになりますのは男子の母親の心得違ひから起る事が往往あるやうに思はれます。息子と嫁が睦しいのを喜んで居るのは結婚の當分だけで、息子が餘り嫁を愛する爲に自分に對する愛情が舊より減じた樣に思つて追々嫉妬心を起して種々妨害

を試み、嫁の言ふ事ばかり聞て居るのは洟垂だ、少しは遊んで見たら宜らうなど〻息子を煽動する母親がよくある樣でございます。そんな事をするから息子もいつか其氣になり、何かの機會でよからぬ所へ足を向け夫が病付になつて段々深味へはまり、夫婦の情交も冷かになり、家庭は暗黑になるのです。斯樣極端な母親は先づ少いに致しても、姑の嫉妬から良人の愛を失ひ難儀する嫁は却々多いやうでございます。

そんな心得違ひを止めて母は嫁の影武者となつて息子との愛を永遠に保たせ、清い家庭を續けさせるやうに致したいものと存じます。母親が始終嫁を褒めて居れば、息子は益々嫁を愛する度が深くなります。偶々嫁に失策があつても、母親が旨く掩護致せば圓く修るものでございます。私は嫁が產に向ひました際には長男に勸めて側に置いて介抱いたさせました。產室へ男子が入ると汚れるなど〻申して外出させたのが日本舊式の習慣でございますが、妻の產の苦勞を共に荷ふて慰めるのは立派な事と存じます。而して妻の產を見ますと益々妻に對する同情が深くなりますから、家庭の基礎がいよ〳〵堅固になる次第でございます。





来客



京のさまぐを讀みて

京 そんな

皮層ーと一口に云つてしまつては、あまり失禮かも存じませんが、ねえあの二月號にありました麗耶子さんの「京のさまぐ」つての。女でありながら人樣のお作をケナすなんて、とおしかりを受けるかも知れませんが、私どうも默しては居れませんの、何だか侮辱された樣でね。誰だつて自分の故郷をよいとほめぬ者はありませんけれど。だから京女もさうなんだとおつしやいますの？ しかし私どう思つても、極僅か一小部分を御あらはしなすつたばかりのあの記事で、京全體を律しやうと遊ばすのぢやあるまいかと思はれるふしもございますので。麗耶子さんおゆるし下さいまれ。

○いくらみすぼらしいつたつて、京は三條の大橋、遠くはあの橋にひざまづいて、あはれ君恩にむせんだ高山彦九郎あり、明治の御代に至るまで、東海道へ通ずるの街道として、幾多の名ある人々が往來をした事でせう、私どもは新式の立派なのより、四面の調和からしても負け惜しみぢやありません、東京に於ける舊日本橋と比較はできぬかと思ひますわ。

○京の着倒れ！ 實際むさい露路の奥からでも、お召の娘さん位は出て來ます。然しおしまひの「處が立派なのは上ばかり」おそれ入りますわね、正反對とお思召すのは、それは一部分、內部を知つた私共は大そう迷惑いたしますわ。上方は一體に衣服の柄が細かいと云はれるのは外ではありません。十歲位の子供にでも大方十七八歲位まで着られる位なのを作るのですもの(しかしおひ〱それも少い樣ですが)少しよい物なら何でも永く持つ樣にとなるべく上等を撰みますわ。

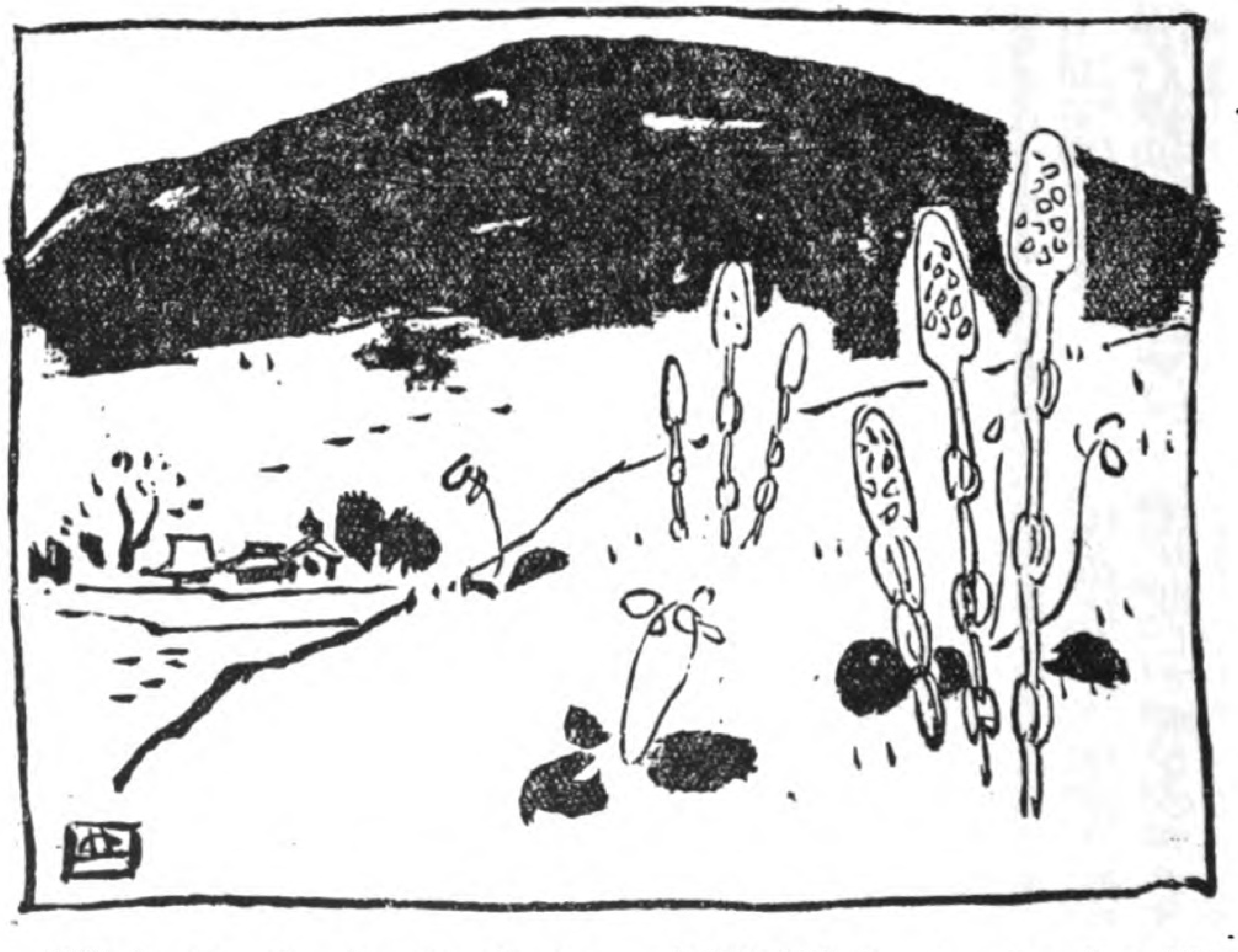
○着物を大切にして、見ては樂しむなんてそれはどこに限らず人々の氣性によりは致しますまいか。

○女學生といつても一口には申されませんが、府立などはなか〱質素な規則がありますし、また生徒の家庭も商家が多いのですもの、さう〱ハイカラが出て

は困りませう。履物は主に下駄、袴は府立二校淑女を初め主な女學校は皆古代紫の上品なの、海老茶は女子師範をのぞく外小さい私立のゴチャゴチャばかり。

○東京美人を見付けて崇拜してらつしやる方には、京美人はわかりますまいし、京都の者からは、何やら色が黒うてキリッと男にしたらと思ふやうなのがいゝのやさうどすな泣きたくなりますわ。

○「花いりまへんか―花や番茶いりまへんか」と來る花賣り女、あながち姿に風情があるばかりではありますまい。比叡山麓、八瀬大原あたり、



ぶら付いてごらん遊ばせ、絕醉の京美人がたくさん居りますよ。

○純京都式でも准京都式でもお客に行けば、お茶よお菓子よ、おすしよ何よとお餘りは折詰にまでしてくれますよ、折詰云々は町人一流でせうか私どもはあまりいゝ心地はいたしません。

○食物は質素です、これは昔の地勢上(今は汽車などゝたくさん來ますがやはりね)いろいろの都合上さうなつたのでせう、お肴といへば一日と十五日は必らず小豆の御飯に棒鱈と子芋の煮〆……然し少し大きな家ならばいくら舊家

とても肴屋の出入りは繁いのを見受けます。

○この加茂川についてはおもしろいお話しがあります私の兄が丁度東京の大學にいつて居りました時分、或夏休みに一人の友達をつれて歸りまして、あちらこちらと見物して廻りましてね、そしてあの五條の橋へ來て、辨慶の古事など話して、これが加茂川だ、と申しましたら「何あんだ、これが加茂川か、まるで谷川のやうだ」と申したさうです。

○けれども五條の橋の少し南手では、人も死ぬるさうですよ、あら嫌なこと！ 然し濁流滔々なんてちと形容過ぎはしますまいか、夏の餘ほどひどい雨でなければ、そんなことはよういにありません。上流高野川と合する、糺の森あたり……はさすが山陽が居を構へるだけのあたひはありますね。

○圓山公園の喧嘩、ホ、、、膝栗毛に丁度あんな處がありましたね。

○現今をごらんになつたか、或は人よりの聞きがきか私共の存じてる範圍では、下駄直し(エタ)からでもなるべくお釣りなどはとりませんよ。

○電車の速力はあれで結構、單線でこそ遲う御座いましたが今はもう大部分複線となつて、市中のとしては申分なからうと思ひます、只車體がきたなくて少さいのには困りますが、あまり通行も頻繁でない街を疾風の如く走るにも及ぶまいと思ひます、ノロマの京都人はケガばかりするかも知れません。

○京都で麵類はダメ／＼、東京のもあまり感心はできませんでした、やはり九州の佐賀、長崎のは甘味うございますね。

○ホ、、、、蛭や蝮を食べるのだつて？、大宮人ともあらうものが。

○まむしは蒲燒ではありません、蒲燒をば飯に入れたつまり鰻飯のことですよ。

○牛肉は強ち神戸に近いからとは云へません、一體これらの牛は、丹波、丹後、但馬邊のを京、阪、神等へ送り出して來るのです、そして神戸などは更にそれを暗室などに飼ひまして肉を柔かくさせるのださうです。

京都にも昨年市で屠牛場が出來ました。

○松茸も重に兩丹地方から出ます、東山北山のは極く僅かで、市中の人が茸狩に樂しむ位な物でせう。

○神社佛閣と玉突屋、ずゐぶんおもしろい對照ですこと。

○時雨に色ます紅葉の嵐山も亦格別これは人の好き不すきでございませう。

○實際はあの矢餾に大きい、一本の樹が眞の櫻ではありませんのですからおあひ憎さま、あれは何とかいゝましたつけ、あのそら、何でも日本中にもう一本北陸地方とかにあるばかりですつて、だけれど誰だつてあれは櫻と思ひます。



○京都といへば無暗に舞姫が鼓を鳴らしたり舞扇を翳したりして、うろついてる處と思つてゐらしやるからいけませんですよ。

○郡の名は愛宕ばかりでなく葛野とかつてカドノ、乙訓とかいてオトクニ。

○私共の近べんには、あんなのもありますけれど、それはムサクルしい湯屋のこと。少し氣のきいたのは藥湯もあります、手拭浸して無くなる湯桶とも限りません、深いのもありますわ。だから一軒の湯屋をごらんになつて京都全體をさうと思つてゐらつしやるのぢやなくつて？。

○古を偲ぶといふ祭りは加茂には限りません、十月下旬の平安神宮祭、五月中旬の豐國祭など、ありし昔がよくわかります。

○過去の京都人はいざ知らず、おそいながらも今や永い〳〵夢から醒めかけて居ります、日々の新聞を御らんなされぱわかることです。

○音樂といへば西洋音樂に限りますのかしら？

○小學校もまあ大抵、和洋折衷ですよ、それからピヤノ、これは決して自慢ぢやありません、御存じないからと申上げて置きますが、私どもの學校には千六百圓ばかりのがあります、外にも一つ古いのもありますけれども。

○摩耶子さんが御住ひの所は大方岡崎邊だらうと思ひますが？、あの邊は山手ですからね、でなければ南北の通りは一體に風通りがよろしうございますから、道もさして惡くはありませんけれどね、少し下……ステーション附近に行つて御らん遊ばせ？

○風や雪は地勢上少ない方ですけれど、夏暑くて冬底冷えのすること、これも地勢上大陸性氣候に似て居るのですつて、東京の風で寒いのとは一種ちがひます。

○生鮨など一向ありません、鹽鮨なら普通シヤケ（鮭のこと）と云つてたくさん賣つて居ります、生のは秋頃ですが、たまに見ますが、おもに料理屋ゆきでせう。

○終りの二鐘亭半山の京物語り、私もうをかしくつてひとり吹き出してしまひましたの、あれはおつしやる通り間違ひなく昔の西京それに違ひはございますまいけんども屋、ぐはんにん、生醉、飛鳥馳出し等、ホ、ホ、、、あゝ苦しい。

あら私がしたことが、まあ〳〵御めん遊ばせよ、つ

ひね、あまり事實に相違してゐたものですから、反抗心が起りましてね。

○人といふものはとんでもないことを云ふものでしてね、いつかも東京の人が來ましてね、主人が他國の者ですから、私もさうだらうと思つたのでせう。

「君、京都つて處はひどい處だね」つて申ますから私が、

「何で御座いますの？」つて云ますと眞面目な顔して、

「この京都の娘は處女といつても、おそらく嫁入り前でほんとうの處女といふのは無いさうだね」ですつて呆れて返事も出來ませんでした。

△虚榮心の利用

英國で實際あつた話ですが、劇場で婦人連が大きな帽子を被つて居て、後列の觀客に迷惑を懸るので仕方がない。そこで興行主は婦人の虚榮心を利用して立派に其弊を除いた。曰くそれは「チヾレ毛、若くは髪の癖悪き御婦人樣に限り、脱帽の必要無之候」と云ふ大きな掲示をかけたのであつた。

東京の櫻　（上野公園）



自修室（女子大學の寮舍生活）





大掃除（同上）



わが家の園藝

●趣味深き草花の栽培

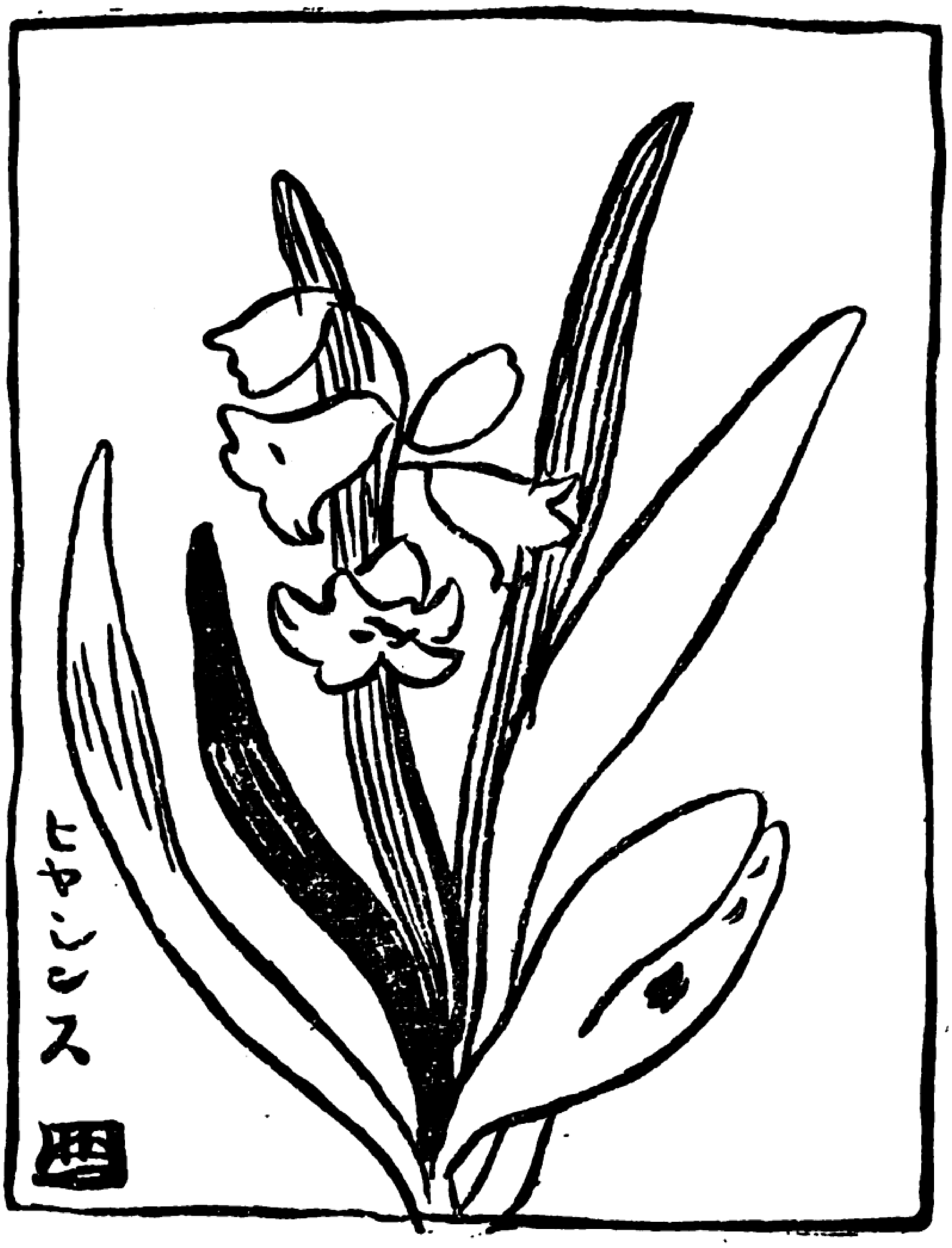
花守

園藝の季節は來た。苗床の處除も、取除ければならぬ。しばらく閑散に苦んで居た園藝用具は、これからは、また一時忙しくなるであらう。麗和な日影に老木の梅も若返り、春雨の裏に柳の糸も緑にかへつた。自然の愛にもれぬ三坪の庭には、我が手によつて花を植ゑよう。一家五人の手を集めれば、花壇の一ツ位はすぐにも出來る。先づ秋播の苗を移植して、更に春播の種を下さう。土臭いなどゝ笑ひ給ふな、園藝の趣味は、土の臭を知る人でなければ判るまい。

私は曾て或る園藝家の奥様から三色菫を惠まれた事がある。これが、また、非常によく出來た花で、蝶の舞ふ様な姿が、この上もなく愛らしかつた。暫くは机上に置し、床の上に据ゑて風にも當てじと珍重して居たが、ろく〳〵日にも當てなかつたので、十日程經つ間に、見る影も無いものにして了つた。私は切角の賜物を臺なしにしたのを悔んで、その奥さんに聞いてみると、「それは、庭におろして、潅水でもおやりなさい」と云ふのであつた。それから日當りのよい庭の隅に移植して、毎夕潅水を灌ぐと二週間の後には、瑞々しい枝葉が茂つて、以前よりも美しい大輪の花を見るにいたつた。のみならず、花の落ちたあとを見ると、豆粒程の實が出來て居た。虞美人草を一鉢貰つた。これは移植を嫌ふ花だから鉢播にして育てたのださうな。白絹の布片で拵へた様なやさしい花が、そよふく風にゆらぐ姿は、眞にその名にふさはしいものだと思つた。こんな美しい花が、鉢播でも出來るなら、自分も一つ栽培してみやう。これが私の園藝に趣味をもつ様になつた動機である。かくして例の奥さんの指導の下に、庭の一隅に小さな苗床を拵へて見た。(苗床をつくるには鍬が必要)床と云つても極めて粗末なもので、炭俵の圍をして、中の土を柔かにしたゞけである。河原の砂を二升ばかり運んでその中に交ぜてやつた。乾濕の度を調へるにはかうしなければならぬ。前に植ゑた三色菫は枯れたが、潅水のお蔭で土は肥えて居た。そこへ、ひとりでに零れた種から、草の蔭へ苗が三本ばかり生えて居た。かくて、翌年の春は、自分の育てた花で庭を一杯に飾つた。

●手數のかゝらぬ春播の花

秋播の草花には多少防寒の設備がいるが、春播のものなら、捨て作りにしてもよい。一度、秋播きに成功した自分は、其年から更に春播きを試みた、種類も大分集めた。栽培に關する著書も數種購入して、花の培養に心を碎いて居た。はじめは興味を持たなかつた妻なども段々釣り込まれて、水を呉れたり、稚苗をまびいたりするやうになつて來た。苗を仕立てることなどは女の細かい注意と、忠實に働く手とを借るが最も適當である。鍬で淺く耕した所も、丁寧に土を碎いて、種をおろせば、花となるべき二葉はすぐ其處に萌えて來る。雨露の情、天つ日の惠み、自然の愛の大なることは、生ひ立ち行く稚苗を通して絶えず認められる砂粒大の種子を見せてこの中から五寸の花が出ると云つたら、誰も眞と思ふ者はあるまい。けれども、この奇



は、花を作る人の手によつて行はれるのである、自分の所には三人の子供がある、何れも惡戯盛りだから、兩親の花作りは、忽ち彼等の眞似る所となつて、苗床の隣りに三人共同の小花壇がつくられる。（土いぢりには鏝一挺求むべし）

●庭を飾るべき　千紫萬紅

はじめて花を作るには、強健な種類を選ばなければならぬ。不完全な設備でも、相當の成績をあげるのはこれである。自分の經驗によれば

三色菫。　筑羽根朝顏、　金雞草。
金蓮花。　ヒメヒマハリ。　コスモス。　ダーリヤ。
鴈來紅。　撫子。　虞美人草。　百日草。　フロックス。



等が最もよからうと思はれる。これらの種子は、三田の育種場、赤坂溜池の興農園、内藤新宿の日本種苗會社、兵庫縣須磨の日本育種場、京都の京都農園のやうな信用ある種苗販賣店に注文すれば、すぐ送つて呉れる。價は一種三錢づゝ位と思へばよからう。で、之を播くには、日當りのよい所へ床を作つて、そこで種苗を養成するのだ。床の拵へ方なども、やかましく云へば、砂を交ぜるとか肥土を入れるとか面倒なことにしなければならぬが、前に擧げた植物なら、たゞ土を柔かにした位の床で十分である。床をつくるが手數なら、箱一尺の瓦鉢でも差支はない。播いた種は、一週間もたつと發芽するが、其間に雨などにあふと細微な種子を洗ひさらされる憂があるので、炭俵でも上にかけるやうにするがよろしい。また、土か餘り乾きすぎたら、如露のやうなもので水を灌いでやる青い愛らしい二葉が出ると、そこにわが樂みも芽ざすのである。

かくて、日一日と發育し行く苗の中から、末の見込の無さゝうなものは拔き捨てゝ、これならばと思ふ瑞瑞しいものだけを殘しておく。施肥と云ふことも、園藝上肝要なことだが、前に擧げた花などには米の泔水でも與れゝば澤山である。苗が三寸位に伸びると、大抵は移植して差支ないが、コスモス、ダーリヤ、百日紅、雁來紅の如きは秋の花で丈も大分高くなるから、花壇の背後に植ゑ、其前には、ヒメヒマハリ、フロックス、金雞草、三色菫のやうなものを配合するがよい。すると、夏の半から秋の末まで、庭園の一部は、艶麗なる花の簇々に埋められて之に對する人人の心は、無言の慰藉を得る。花壇への移植は、規律よく並べるよりも、寧ろ雜然と植込む方が面白い。一家挙つて花壇をつくり、最愛の子女とゝもに花を植ゑるは何たる愉快なことであらうぞ。八十八夜を中心にして、朝顏をつくることも、また趣味ふかいことである。破れし籬をつくろはせる、朝毎に新しい花に接するのもゆかしいが、わが丹精の幾鉢かゝ、眼の覺める程鮮かに咲き出たのは、云ふに云はれぬ趣がある。二葉の時よりの心盡しがやうやく莟となつて、一寸二寸と伸び行くのを眺めてる間には、何だか妙なる自然の囁きがきこえる様だ。それがいよ／＼花をつけて、筆の先程の蕾をもつと、今度は其色が心にかゝる。私はこの花故に曉の星を數へたことも度々ある。どんな朝寢の人でも、自ら作つた朝顏が咲き出づる朝は、とても圓かな夢は結ばれまいと思ふ。

兎に角園藝の利益は擧げきれぬほど澤山あらうが、自分は、どこ迄も、趣味のための園藝を試みたいのだ。手數のかゝるもの、六ケ敷ものと思つたのは、實際を知らなかつた時の誤り。園藝の趣味はどこまでも高潔である。味へば味ふ程興をまして來る。老人にも適すれば、少年にも適する。

●庭の隅でもトマトーは出來る

私は一昨年の春から、蔬菜をつくりはじめた。尤も、これは、畑がなければ出來ぬ仕事だが、私がこの頃借りた家には、二畝ばかりの畑が

ついて居る。そこで、見知越の百姓を呼んで鍬をいれさせ、甘藍と赤茄子と、茄子と胡瓜とを作つてみた。茄子と胡瓜とは、ありふれたもので、あまり人の眼も惹かなかなかつたが、甘藍と赤茄子とは、大分人々に注目された。筋向の老人は、「こんな菜を作つて、どうしなさる」と怪しんだ位。私は、「球になつてから食べるのだ」と答へると、眼を圓くして「これが喰へるものですか、私も先年欺されて作つたですが、煮ても漬けても食はれなかつた」と笑つて居た。「どうして召上つたのです」と聞くと、「かき菜と同じ様に下の方から度々と葉を摘んだのぢや」と云ふ。甘藍の外の葉を食ふといふのは笑話の外にはない事、この老人も御馳走の正味を味はずに風呂敷を食はうとした仲間である。「随分思ひきつた失策だ」とよくその事情を話したら、「それではその球が出來たら私にも一個わけて下さい」と改めて老人から所望された。こんな有様だから赤茄子と來ては、一層ひどい。「あんな物を食べると氣違ひになる」と嘲して居る。家内なども、この臭ではとても喉に通るまいと閉口の體だつたが、食べ馴れて見ると、捨てがたい味があるので、何時となしに、結構なものゝ一には數へる程になつた。子供なども、今では、すつかり味を占めて、色つきそめると、直ぐに採つて食べて了ふ。



思ふに赤茄子と甘藍とは大抵の所なら出來るであらう。畑の隅へでも床をつくつて、春の彼岸すぎに種をおろすと、一週間たゝぬ間に二葉が出る。赤茄子は二寸位に伸びたら本畑へ植出して二三回肥料をやれば忽ちすさまじい、發育をとげて花を持つ。花がついたら、心をとめて、倒れぬ様に支柱をたてゝやれば、

やがて、累々たる紅玉はその梢を飾るであらう。私は、ある農場で、庭に作つた赤茄子をみたこと

があるが、枝も撓むばかりに熟したのは、花にも優つて美しかつた。在來の茄子とは違つて、所嫌はずに出來るから面白い。

しかし甘藍はさうは行かぬ。球を見る迄には二三回移植しなければ駄目である。移植を怠ると、葉ばかり茂つて、結球しないから仕方がない。盛に茂つた所は壯快な姿でも、一番大事の球なしでは一向つまらぬことになる。で本葉が三葉位出た時に一回、三四寸に育つた時に一回、少くとも、二回位の手數をかけて、あとは、肥料を十分に與へたなら、必ず、相當なものが得られるであらう。昨年の秋は、丁度二十株ばかり結球したので、私は、成功を誇るべく悦んで居た。五つ程殘して、あとは、それ〴〵友人の家庭に贈らうなど〻心には定めて置いた。所が、好事魔多しで、何時の間に侵入したのか、隣家の鷄がやつて來て、其中の尤物を喙いて了つた。東半球の一部はこれがために缺損して、拳大の穴があいたのである。仕方がないから涙ながらにこれを採つて、夕飯の膳を賑はした。五日ばかりたつと、末の子が、また「お父樣の採つたのより、僕の採つたのがよいんだ、僕のくひあましではないんだ」と威張りながら、第二の尤物を囓つて來た。叱つた所でどうにもならぬ。友人が來たのを幸ひ、サラダを作らせて、麥酒の肴にしたことがある。友人は「坊ちやんはえらい、今度叔父さんが來た時は、また甘藍を御馳走して下さい」などゝからかつて居た。私は、不完全ながらも、こんな具合に園藝をやつて樂しんである。すこし、手をかけさへすれば、蔬菜の栽培も出來ることは確である。たゞ困ることは、自分で肥料を扱へ得ぬ一事である。妻は、魚類のアラなどを煮出して、そのスープを甘藍に吸はせたり、米の泔水を花の苗に灌いだりして居る。時々、肥料店から掃き寄せと云ふやつを買つて來て、水に薄めて施すこともあるが、これ位のことでも、赤茄子はみのる。甘藍も球をつくるのである。

十人の兒を丈夫に育てた私の實驗

弘田醫學博士夫人　弘田ます子

醫科大學教授弘田長氏夫人は、忙しいお家の用事や交際向を一身に引受られながら、十人のお子さんを御自分の乳で丈夫に育てられたお方でございます。左に夫人の御實驗談を御紹介申上ます。

▲婚約したのは三歲の時

私の鄉里は主人と同じ土佐でございます。緣族の親達が双方のまだ幼ない内に婚約いたしますのが昔の國風でございましたので、私が三歲の時に唯今の主人へ嫁る事に定り、十二歲の時當家へ參りました。尤も主人は其頃東京で修業最中でしたから、私はたゞ主人の兩親の所に居つて實子のやうに愛育されて居たのでございます。其頃鄉國の女子敎育は機織、糸取、裁縫などの手藝が主で、學問は女大學位のものでしたから、私などは子供を育てますにも唯今のお方のやうに一々學理に照らすと申すやうな立派な事は出來ませず誠にお恥しい次第です。たゞ主人が職掌柄子供の事については充分注意を與へてくれますから、其命を守つて實行してゐるまでゞございます。

▲姙娠中の徒步運動

私の初產は十九歲の時で、夫から二年目或は三年目に產をいたしましたが、姙娠中主人から八釜しく申されましたのは運動でございました。運動も唯家の内で立働らくだけではいけぬ、毎日一定の時間、外を步かなければならぬと申されましたので、ざつと唯今の宅（飯田町六町目）から小川町位までの道を毎日雨天でも缺さず往復いたしました。子供が殖え家事が忙しくなりましてからは、此出步きが却々臆劫でございましたが、胎兒の爲と存じて一生懸命に勵行いたしました。其のせいか仕合せに姙娠中消化機にも格別の障

りはありませんでした。唯姙娠中から出產後五ヶ月位丁度盛に授乳いたす頃までは、咽喉が非常に渇いて困りましたが、其折は白湯でも冷水でも自由に飲んで居りました。

▲ゴムの乳首を吸はせる習慣

私は自分の乳で子供を育てましたが、何の子も生後三十日位から一日に一回づゝ必らず牛乳を與へる事にいたしました。此のやうにしてゴムの乳首に慣らして置きませんと、母親が不時の病氣の時にどの位困るか知れません。是は皆様も御承知の事でせうけれども私が一度困りました經驗がございますから、切にお勸めいたします。

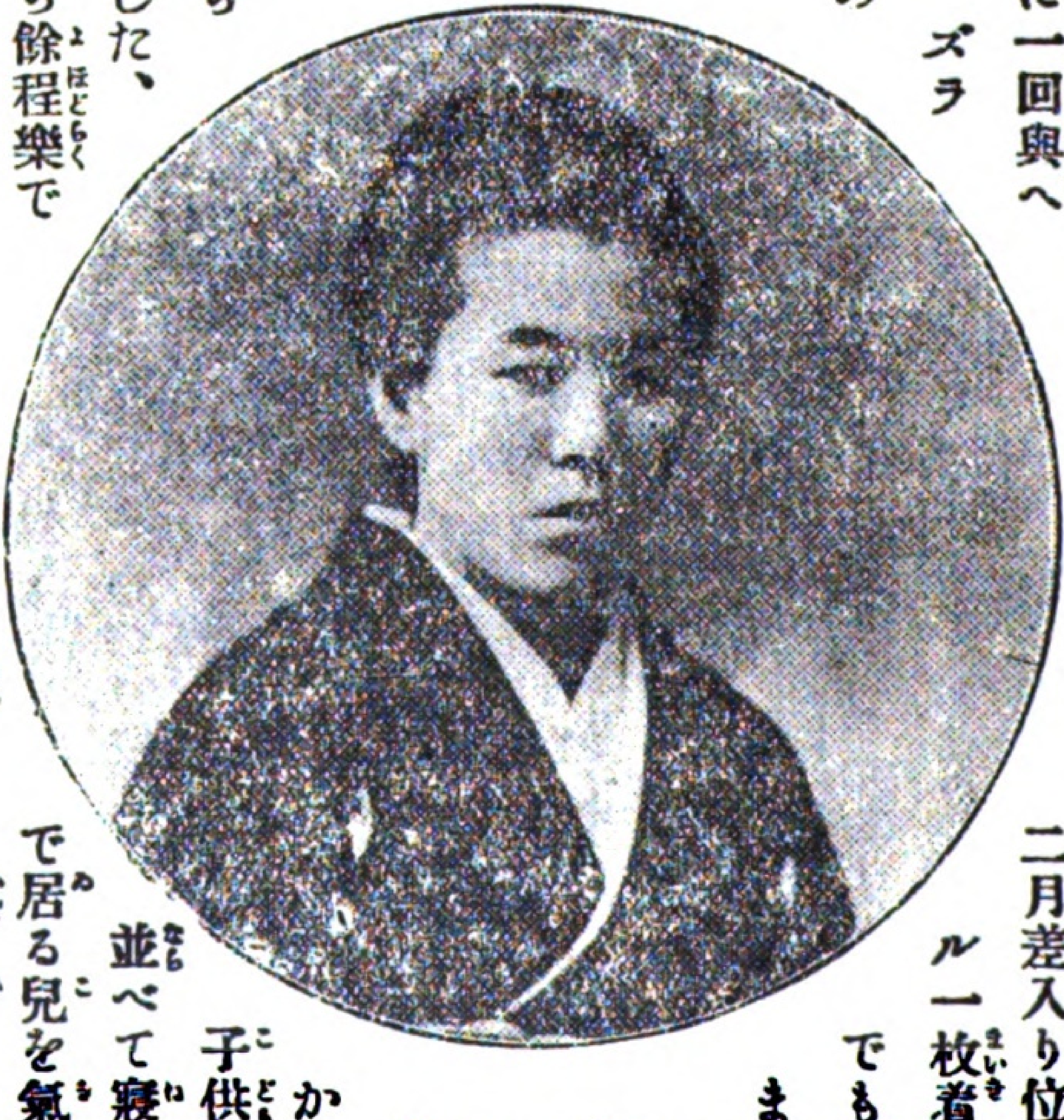
▲人手を煩はさせぬ設備

是までは別に子供の守は雇ひませんで、私の手一つで世話をいたして居りましたが、近來主人の事務が忙しくなり、從つてお交際向も殖えまして、私も可なり内外の用事が忙しくなりましたので、幼い子供四人に一人の下女を附ける事にいたし、四人の幼兒の食事の世話から着物の世話を受け持たせて居ります。勝手元の方は二人の下女に仲働と下働きを交代にいたさせて居ります。子供は成るべく自分の事を自分で始末をする習慣を附けなければならぬと存じまして、九歳頃から所持品は勿論、寢床の上下もいたさせて居ります。其の爲に夜着戸棚は低く拵へ、寢衣や枕など入れます行李を一箇づゝと、襦袢、足袋等を入れる行李を與へて置きますから、世話なしに自分で始末をいたします。少い女の兒の髮は年上の兒が順に結んで遣る事にいたさせます。良い鹽梅に餘り同胞喧嘩もいたしませんが、いたづらは可なり盛でございます。私が之を叱りますと、「子供の中のいたづらを制しては身體を丈夫にする事は出來ぬ」と八ヶ間敷主人が申しますから、大抵の事は放擲つて置きます。

▲食物の種類は制限せず

五歳位までは食物の種類を注意いたしますが、夫から後は病氣の際の他決して制限を設けません。其の爲か子供は皆壯健で、御飯の分量は中々多い方でございます。間食は二時か二時半に一回與へる事に定め菓子皿へ盛り分けて、ズラリと並ばせて遣はします。學校の辨當は餘程注意いたしまして、私か大きい娘が必ず詰めて遣はす事に定てございます。何に致せ多勢の事ですから、監督だけでも大體ではありませんが、是れがために、大きい娘達は、私の手助をいたしながら家事や子供の世話に能く慣れました、是だけは一家の主婦となつてから餘程樂であらうと存じて居ります。

▲放任の中にも注意



暴い風に當てぬやうにして子供を育てますと、一寸した事にも風を引くと云ふ風に軟弱になりますから、衣服など成る可く薄着に爲て置きます。寢衣も十二月差入り位までは單衣一枚　寒中でもネル一枚着せるだけで、腹卷は腸加答兒でも起した時でなければ用ゐさせません。唯腰卷は男女共に始終いたさせてございます。私共の育て方は極放任の方ではございますが、放任の内に要所々々は注意を離されませんから、私は夏冬共毎晩二回づゝ子供の寢部屋（子供は廣間へ床を並べて寢かします）を見廻はり、踏拔で居る兒を氣を付けます。又幼兒は入浴の際によく風を引くものですから、私が四人五人位づゝ世話をいたします。主人が「子供の病氣は突然に發するやうだが、毎日仔細に注意して居ると何か兆候

の分るものである、殊に食慾の加減が少しでも變つた際は發病の前兆だと思つて氣を付けなければならぬ」と申して居りますので、是等の事は始終心を許さず觀察して居ります。

▲是迄患つた事のないわけ

多勢の子供と一緒に御飯を頂きますと、何處へ御飯が入つたか分らぬやうでございますから、平常は食時を二段に分けまして、大晦日、お正月又は祝日だけ家族打揃ふて食事する事に定めてございます。女の兒は十五歳位から衣類の縫直し見つもりなど迄一切自分自分で致させますから、世話なしでございますが、私の手がけます小さい子供達の衣類も可なり澤山で、積り物をする際は丸で古着屋の店のやうでございます。其樣折に不時の御客來ですと、慌てゝ片付けて了ひ、又新につもり直すと云ふ騷ぎで、何ですか日々用事に追れて居ります。夫れに私は用事を後廻しにいたすのが嫌ひで、脫捨た汚れ物はズン〳〵ほどいて始末を付けて了ふのが好ですから、尙更氣忙しいのでございませう。新聞でも讀みますのは髮を結つて貰ふ時位で、一寸の間も用事の順序ばかり考へ、臥床に入りましても翌日の仕事の胸算用を立てゝ居ります。斯樣に忙しいのは私の身體に何よりの藥だと見えまして、今日まで患つた事はございません。

▲身體の良いのには感心

平生働く骨休めに一年に一度位子供と一緒に轉地したら宜からうと申して主人が勸めて呉れますが、私は身體が壯健ですから避暑や避寒の必要はないのでございます。夫れに別莊へでも參りますなら格別、膝兒を連れて襁褓を持つてわざ〳〵借宅へ出掛け窮屈に暮しますより、其間に宅の汚れ物でも片付けた方が餘程愉快なのでございます。食物も何一つ嫌ひと申す物はありませんし、又隨分多量に頂かれます。姙娠中から産後五ヶ月位まで朝夕牛乳を一合づゝ飲みますが、御飯前に一合飲んで直に御飯を普通に頂けるのでござ



います。それで毎日草臥れます所爲か、良い年をいたして良く眠ります。傍で子供がどれ程騒いで居つても眠る時間になれば直ぐに眠つて了ひます。『お前の身體の良いのには實に感心する』と申して是だけは主人から褒められて居りますが、是と申すも身體と精神が絶間なく働いて居る所爲でございませう。私のやうなものは本當にヒステリーなどを起こす餘裕が無いのでございますから、家事や子供に忙殺されて居る此境遇を深く感謝いたして居ります。

女の手紙

內藤千代子

一　箱根の友へ

久子姉さん、繪葉書有がたう

ほんとに御無沙汰しましたわね、實は私も貴女のお便り下さるまで、上げまいと思つて我慢してたのよ、オホヽヽヽ双方の意地がはからず衝突して……。

でもとう／＼勝をゆづつて下さいましたね。

一月の增刊御覽になつたの？　厭な方、

「このボートの主は靑柳樣の若さまぢやないかしら、それとも武明さまかしら？　誰やらがお胸の中も察せられてよ……」

隨分だわね、澤山よ、貴女はあまりお察しが好過ぎて困ります。私、それどころぢやありません、何だか自烈度つて／＼、自烈た紛れに母樣と喧嘩ばかりして居るの。每日ムシヤクシヤ頭は重いし、食もすゝまず、こんな事が永くつゞいたら狂氣になつて了ふ。いつそ貴女の裏の湖水へ身を投げに行かうかしらん、湖水の水が羨しいわ、夏は涼しい靑葉山、秋は紅葉のから錦、もしも私が水ならば、あはれつれなきかの君が、ボートをこゝに漕がむ時、オールの雫とみだれ散り、戀しのみ袖ぬらすべく、或ひは御手に掬はれて、熱き淚と化しぬべく、或ひは岸にたゞずみてめぐる思ひに笑み給ふ、戀しきみ影うつすべく、水とならばや我死なば……。思出多き蘆の湖はつひに我が終りの住みどこか……。



貴女の御上京や御緣談の事はどうなりまして。少しは聞かせて下すつたつていゝでせう隨分お案じ申して居るのに……。

皆樣はお變りもゐらつしやいませせんの？　つひ御見舞狀も差上げませんが、よろしく有仰つて頂戴ね。

御地は如何ですか、鵠沼はね、例年より大層あたゝかいのですよ、私の寒がりが綿入れと羽織とじゆばんだけで居られるんですもの。あら、それや肥つたせいだつて？　知らないわ。けれど雪は二三度ふりました。え、新年の雪？　駄目々々。あの……澄さんがね、お嫁にいらしつたんですつて。大原さん……とこへしらせて上げやうか、上げまいかと二三日前から考へて居るの……。

私だつて貴女が下さればすぐお返事書きますからね、お手紙頂戴、待つて居ますよ。今朝裏の梅が二輪咲いてよ。さよなら

二　夢に見て

正岡さん、お變りもなくて。

私は貴下に遇つたのよ、昨夜。夢の浮橋渡り來まして二年振

の對面……君は昔のまゝでした、例の金ボタンの制服に眞白のカラアを心持見せて、笑含まれた凛々しいお姿、あゝまだ目の前をはなれません。と共に沸き出づる涙の中からまざ／＼とあの初丸髷の和子さん……。

夢てふものをたのみ初めにき、と小町も云ひました、もし……もしあれが正夢なら、おかくしなさらなくてもいゝではありませんか、御結婚なすつ たつてやつぱり交際して下さるわれえ。奥さんに御紹介して頂 戴よ。ほんとに和子さんもどうなすつたでせう。優しい美しいしとやかさを紅梅姫とは誰が云ひ初めし、いづれ吹きもらしはあらぬ浮世の嵐に弄あそばれて、いまは都の空にどんな月日を送つて居らるやら、女の私でさへ忘れられないのに……。

あゝ今夜も胸に手を當て寝やう、思ひつゝ寝ればや人の見えつらん、夢と知りせばさめざらましを。さめずば夢のをかしからまし。思ひつゝ寝ればや人の見えつらん。

御身お大切にね…… さやうなら

三 絶交狀

岸さん？ 萩香は口惜しい。口惜しい。あゝ。

私、どうしたらいゝんでせう、貴下とはもう……貴下とはもう絶交です 昨日まで手箱に秘めた御文も思ひ切つて 幾度



かく／＼ためらつたがとう／＼ずた／＼に引破つて了ひました。詩歌の交換……清い文學上の交際……異性の問柄ではそれも許されないのね、岸さん。

果敢なきは女の身、弱きは乙女てふ名、早くも人の口の端に我が戀すてふ噂、相手は赤門通ひの文科大學生 …。岸さん、堪忍して下さい。みんな私が足らないからでした。まのあたり人に云はれた其夜、私は悔と不安におそはれて、終に一夢をも結び得ませんでした、心は麻の如く亂れたのでした。熱しやすい私のことですもの、差上げた手紙の中には筆が走つて隨分熱烈なのも御座いましたらう、大膽なのも御座いましたらう。が、情の子と あなたは許してお置きになつた。なぜ早く心づけて下さらなかつたの……。戀ならぬ純潔なる思想の情！無垢清淨なる可憐の友愛……、世間の人にはとても解せられないんだ、自分等の下劣な心に引くらべて、二人を墮落呼ばゝりするもうきつぱりと御交際を絶ちませう。私は口惜しい。口惜しいわ。一生決して忘れません、忘れられませうか、一度胸にきざまれた人の面影……。文通は絶えたとて、萩香の心、あなたは知つて、下さるわれえ

天晴未來の文壇に文豪家の名を待ちまする。

此間頂いた此お寫眞 、お返し申さなければならないのですけれど、これだけは許して下さい。おゝ笑つてゐらつしやる。

岸さん？ 多くは申しません、申せません、堪忍して頂戴よ。あゝ、清磨様となつかしい御名書く筆を執るのもこれが最後です。さらば君よまさきく在せ。可祝

でもれ、岸さん、もし御用がおありでしたら……あの差出人を神山京子として……。母の前はどうにでもしてつくろひます、京子さんのお手蹟をこゝに一枚入れておきますから。れ、

四　音信絶えし友の許へ

忘らるゝ身をも思はず誓ひしか……、行く雲に思ひをのせ、流るゝ水に愁ひをよせて、あゝ幾度か都の空を仰ぎけん。實に心にくきおんそぶりよ、そも此方への御消息を、何の御願望の たち物とはあそばされし、さぞな靈驗あらたかならむ。神罰の程恐ろしければ御返事は御無用に候へど、御安否の程も氣づかはれて、みけしき伺ひ上ら〴〵　かしこ

五　音信絶えし友の許へ

柳田さん、どう遊ばして。

私も御無沙汰致しましたけれど、あんまりです。否、一時はあんまりな方と恨んでも見ましたが、何と有仰つたつて御自分の故郷、たとへ石の下にでも父母君の眠ります所、女學校の四年生ときく從妹の君も在す家、柳田さんは故郷の人になつてお了ひなすつたのれえ。ったとへば我は路傍の花、君は春野に舞ふ胡蝶、花より花に飛びかへば、いみぢき歌も多からむ、今はた誰を恨むべき……。



昨夜も貴方へ送るため幾丈の手紙を書いた、併しそれは灰にした、何故か、あゝあとで悔ひぬため……。

どうせ私の手紙なんか「宮」の送つたそれのやうに、讀まれなくともいゝ、只なつかしの君の御門を潜ればそれで滿足する―御身體はお大切にあそばせ、

六　詩人の君へ

こなたよりこそ久しく御無沙汰致しました、お寒さのお障りも在しまさず、うれしうぞんじ上げます。

避寒に屹度……どのお約束は、また反古にあそばしますの、花咲く頃には京めぐり大和路の御旅とか、お羨ましうございますこと。ほんとに女はつまらないのれえ、年中家を世界として居なくつちやならないんですもの、せめてどうにか御都合遊ばして、ぜひ〳〵當地へも御立より下さいませ、久しぶりで面白いお話しでもたくさん伺ひたうございます。

木村さんは近頃木の葉俳壇で大分振つてゐらつしやいますのれ、花輪さんも何かお作を拜見させて頂戴なたまにはお歌でも下さいまし。

盆石と盆山

微笑庵主

歌人は居ながら名所を知るとかいひますが、居ながらにして天下の奇勝を探れるとすれば、お家にお籠り勝な御婦人方には相應しい御手藝で、家庭に一つの好い趣味を増す譯かと思はれます。それは外でもない、盆石盆山の事で、古昔から殿上人を始め、諸侯方の奥向には總て行はれたもので、下々でも多少趣味あるお家には、御祝儀とか、御來客のある節とかには、必ずお座敷の床飾となり、その棚下に風致を添えたものです。これには種々流儀があります。先づ重なものは東山流、遠山流、細川流、竹屋流、淸原流などで、白砂許を用ゐるのと、色砂を交へるのと、打方が流儀々々で變つてをります。

△盆石、盆山の起原

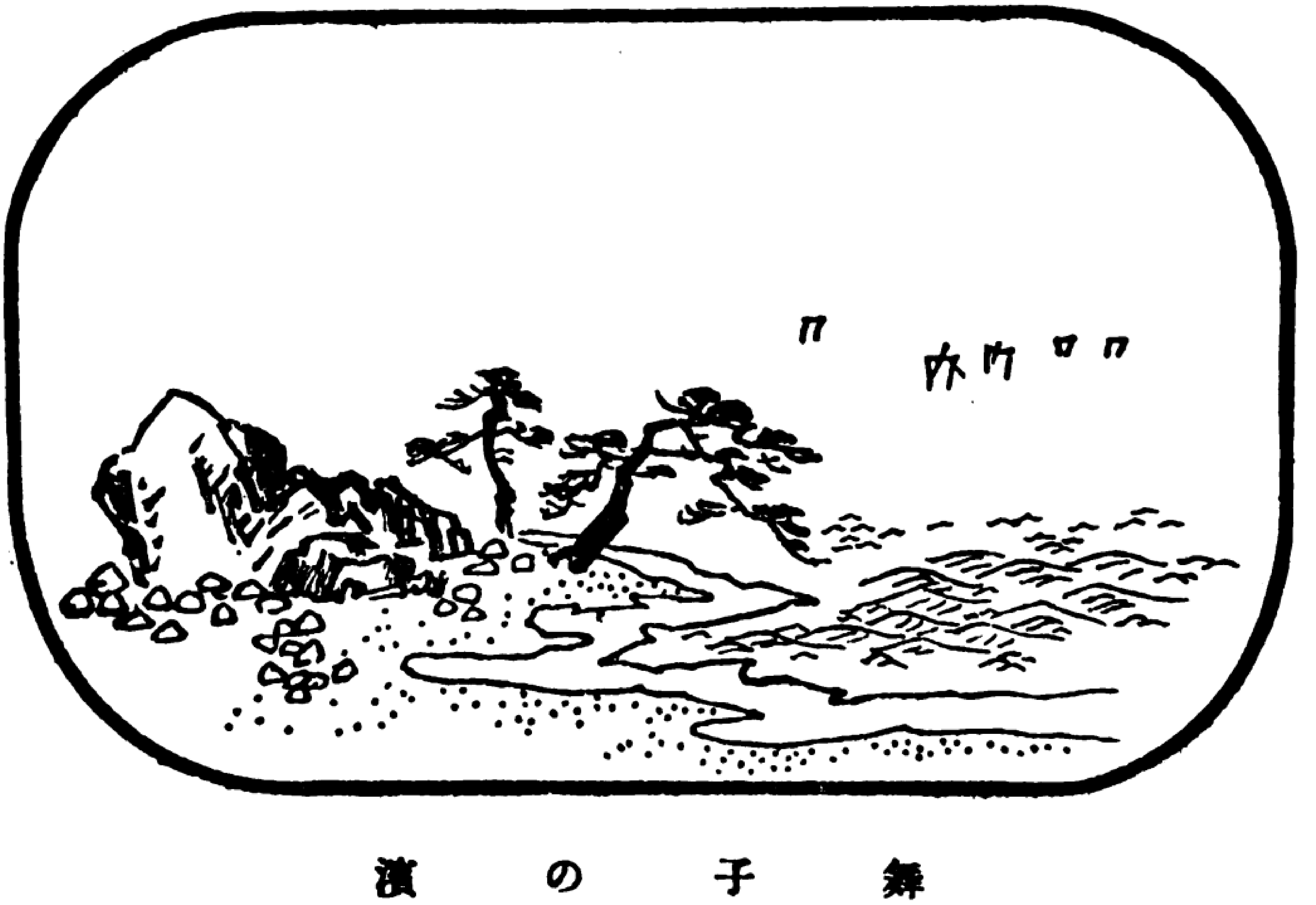
一體この盆石や、盆山といふことはもと支那で奇石などを集めて樂んだのが起りださうで、日本では東山義政の時相阿彌といふものに命じて、白砂を交へたり四季の打方などを研究せさせてから始まつたもので、盆石も盆山もと〳〵起原が一つで後來打ち方が多少變つて、區別を立てたものらしい。つまり盆石は白砂に形像を描くことが多く、平面に見る打方で、盆山は側面から見る仕立方である。それから盆畫などいふものも出來て、これは平面に花鳥山水を砂で描く樣になり自然を縮寫するとか、風情を寫すとか、壺中の天地の趣きはなくなつて、次第に俗化して來たのである。

△打方

ザット盆石盆山の打方をいふと、まづ二尺許の黒塗小判形の桂盆を前にして、霞板といふ巾一寸許に長四五寸ばかりで先の方が薄くなつてゐる板で、白砂を掬つてパッと盆の上に、その打つ可き景色に應じて撒くのです。それから玉匙だの、雲匙だの、浪匙だのを使つて砂を掬つて、適當のところに打ち、浪ならば浪匙

で浪の形を打つて、これに羽根で浪頭を描く、遠山ならば羽根で山の形を切る。月の時は三ヶ月、滿月、水の月などの型を置いて、砂を撒いてから除つてしまうと、跡に所要の形が殘るので、鳥も近ごろでは型が出來てゐるが、もとは皆描いたのである。

第一圖は、舞子の濱の景で、白砂青松の波打汀に遠く白帆の春霞に隠れ行く風情、小さな一寸した興を捕へ來たつて、その趣を偲ばせるところに、何とも知れぬ面白味もあり、雅趣もあるので、ゐながら吉野、初



舞子の濱

瀨の春に思を寄せ松島、象潟の秋を偲ぶ事が出來る。

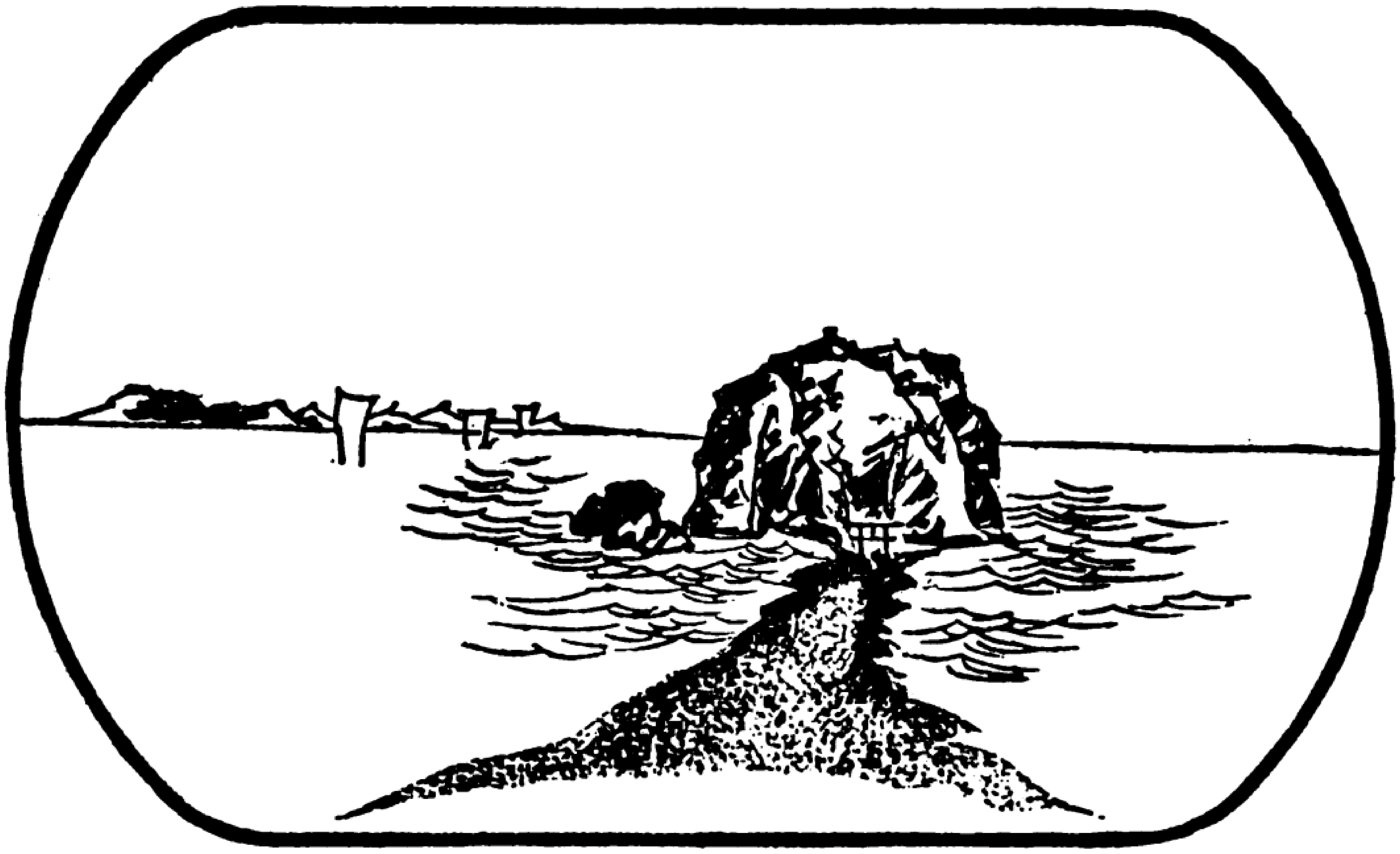
左の方前には岩石を排置ひ、磯馴の松二三本、右手へ掛け黑砂、波打汀は白沙それより向へ浪を見せて遠く、ボカシ向は霞を引きて白帆四ッ五ッを描く、手段は極めて簡單なれども、自から春色の通ふ樣な感を與へるのである。

第二圖は盆山で「春の江の島」中央は江の島に似通ふた岩石を使ひ、その左に一寸した捨石を置き、前に鳥居、それより手前に粗砂を敷く、左右は水色の砂、波打汀には白砂を以て浪を

描き、浪頭を少しづゝ見せ遠見には房相の山々に擬へたる長手の小石を排置ひ、白砂を盛合せてこれを補ふその間に白帆二三點、總て江の島海岸の景、その一局を捕へて「春の江の島」を偲ばしめたのである。

此様な風で打つには多少の手錬も要るし、工夫もしなければ、冴えた形は打てぬもの〻二尺許の盆の上に種々の景色を現し、その風光を偲び、悠々自適するを得ば、なか／＼一寸趣味のある婦人の手藝といはなければならない。

これを練習するには、そ



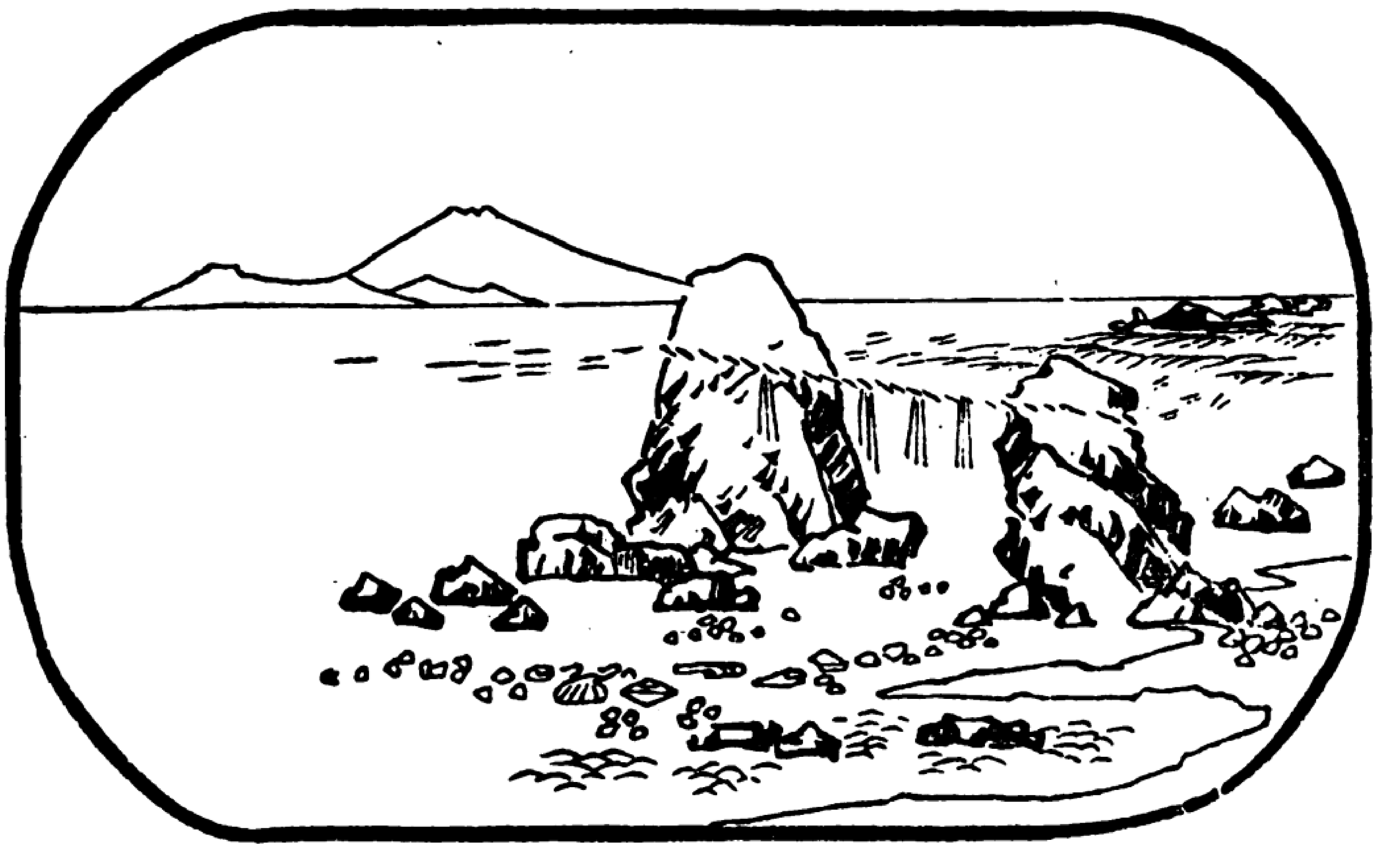
江の島

れぞれ手本もあり、使ひ方等も定まつてゐるのですが普通の打方さへ會得すれば後は御自身の着想次第で、穴勝に手本に縛られ、型に捕はれて仕舞はないでも好からうと思ひます。機に觸れ、想に從ひ、捕へ來つた即興其儘、之を盆の上に打つて見るも、なか／＼風情ある樂で、春雨の降頻る折の徒然を慰める枝折ともなるであらうと思はれる。

第三圖は盆石で「二見ヶ浦」潮の干潟に屹立した石二ツを排べ、捨石十數箇程好く排點ひ、右前の隅は陸地、黒砂で見せ、波打汀に

は白砂で長汀曲浦の様子を現はし、大粒の砂を干潟に撒いて、其間に貝類五六點、潮の干たるの模様、右手中段には、水平線に見切りて、白砂を撒き遠浪を描き、捨石二三點、左手水平線上には、白砂にて春の富士の遠見、遠山を排置ふ。總て春興の何となく盆の上に動くのが感じられる。

打上げた盆は、床脇の棚下中央に据ゑて置くのです倘は其景色に縁故ある古歌一首を添えれば、更に一段の餘韻があつて、盆石と相俟つて其趣を增すものである。



二見ヶ浦

盆の數は四季に分けて、百餘もあつて、其外に旅立とか、婚姻とか、手向とか特別なものがあり。石の大サとか寸法とかも規矩があるけれども、その規矩は盆の大サに釣合つた寸法で、それ以上では工合が惡いから、古人がいろ〳〵研究して定めたものらしい。

兎に角盆石盆山は活花、茶の湯、香合などゝ伴つて女の一の手藝として品格の好いもので、御自身の徒然を慰むる許でなく、一家の中に上品な趣味を增し、來客にも好き感を與へ、誠に奥懷しいものである。

寄宿舍の炊事日記

露　子

每度拜見致します食卓日記、和洋折衷の配合のいゝ事あんな御馳走召上る御家庭は私共の理想たるスウキートホーム？　私は今は懐しき我家を離れて遠く物學びする身でありますから、一家團欒の日記を作ることは出來ないのですが、特種の大家族制の行はれて居ます我寄宿舍（舍は校を去る一丁餘の處にあつて舍生十五名舍監一名で、食費一日十三錢、炊婦も何も居ません眞の自治團體です）の食卓日記をしませう。

△日　曜　日

今日は私の炊事當番、休日の當番はほんとに嬉しい、新しいお料理の仕方を覺え其上學校がないから氣が餘程樂だ。

朝	晝	夕
甘藷粥	ポークチャツプ	松茸
葉人參	マツシネポテトー	清汁
胡麻浸し	菜漬	味噌漬
梅干	別にお八ツ	芋ぼた餅

○甘藷の皮をむき五分位の賽形に切り水につけおくをぬき、前夜よくときて釜に入れある米の中に入れ水加減をなし（凡米二合に水一升の割合）、甘藷も米も煮えたる時火をひきむらし置



ぐ。

○葉人參をよく洗ひ根を切捨て沸騰湯の中に入れ茹でゝ後、直ちに冷水の中に入れ兩三度水を取換へ冷えて後取出し、適宜の長さに切り醬油に少し鰹節煮汁を加へたる汁をかけ暫くして皿に盛り炒りたる黑胡麻をふりかく。

女の好物といへば第一に指をおさつと折らるゝが、實に論より證據、米七合に甘藷七百匁のお粥をきこしめして倘物足らぬお顔なさる健啖家のお揃ー

○豚の脊肉を骨付の六片に切り骨につきし肉をこそげおろし、其骨を爼板の上にて肉の方を庖刀にてたゝき骨を柄としたる團扇の形につくり、鹽と胡椒とを撒りかけ置き。別にフライ鍋を火にかけ牛酪の小塊を入れ牛酪の溶けたるを待ち右の豚肉を入れ兩面褐色になる迄焼き皿に盛り、而して其フライ鍋へ水にて溶きたる片栗粉を垂らし込み薄きどろ〳〵の汁となし鹽と胡椒とを加へて味をつけ右の肉に注ぎかく。

○馬鈴薯の皮をむき茹でゝ其湯を捨て火にかけ鍋を振動かして煎り、馬鈴薯が粉を吹出せし時鍋をおろし裏濾にかけ、牛酪鹽牛乳各少量を加へて煉りよき程の形につくり皿に盛合す。

入舍當時は牛酪は臭い西洋料理は厭と仰せられし方々の此頃は喜んで召上る樣になりしこそをかしけれだ。午後三時には皆樣お待兼の芋ぼた餅をと、晝餐の後仕末を終ると共に取りか

かつた、口は餘程可愛ものと見える今日の一日をたべる事で暮して仕舞ふ、否々我のみではない滿天下の士といへば少し大袈裟だが皆衣食のために働いてゐるのだ。

○里芋の皮をむき水にてよく洗ひ米はよくとぎて笊にあげ里芋一升米一升の割合にて兩方一緒に普通の御飯をたく如くにしてたく、暫くむらし置きて鉢にとり擂木にてよくつき餅の樣になし適宜の大さに丸め、別器に豆粉と砂糖と鹽とを少々加へて其中に入れころがし皿に盛る。又別に小豆一升砂糖二斤鹽少量の割合にて餡をつくり其中に入れ十分餡をつけて皿に盛る。尙別に胡麻を炒りよくすり砂糖を加へたる物をも作り置きこれの中にも入れころがし右の三つを一つ皿に盛合す。

金曜に献立表見てより待ちに待ちたる芋ぼた餅の事とて我も人も胃の腑へとの輸送おさ〳〵怠りなしでしたが拵へし量は言はぬが花でありませう。呵々

○松茸の石付を切り捨て皮をむき水にてよく洗ひ薄くへぎ鹽水につけ笊にあげ置き、別に鰹節の煮出汁を作り適宜に醤油を加味し淸汁を作り置き前の松茸を入れ二三度煮立てゝ後鍋をおろし、そぎ柚子を添へ椀に盛る。

△月　曜　日

五時半の振鈴に目をさませば早や炊事當番の方はお臺所で



何かして居らつしやる、今日はお客樣分。一同食卓につくさしたる馳走はなけれども打解けたる友の集合語りつ笑ひつ山海の珍味にも增したる美味しさ、晝は皆お行厨持ちでお料理を朝一しよにするから中々に忙しい。

朝　いり豆腐　もみ海苔　菜漬

晝　蓮根から煑　奈良漬

夕　ぼら朝鮮燒　小蕪酢漬　菜漬

○豆腐を摑みくづして鍋に入れ豆腐の浮く程の水を加へ煑立て布巾の中にあげ水をしぼりとり鍋に入れ鷄卵を割込み金杓子にて混ぜ、鰹節の濃き煮出汁少量砂糖少量を入れよくまぜ又少しの醤油を注し豆腐のばらばらになる迄煎り冷めたる時皿に盛り炙りたる淺草海苔をもみかく。

○蓮の皮をむき六分位の輪切になし縱に算木にきりて水につけ置き鍋に醤油と砂糖を入れ煮立て、其中に蓮を入れ少量のとうがらしを入れかきまぜながらかりかりする樣に煮る。

○鯔を三枚におろして小骨をぬき去り適宜の大さに截つて醤油の中に浸け暫時にして串を刺して表裏を燒き、更に炒りたる黑胡麻をよく擂りほどよく醤油と煮詰めたる味淋を加へてどろどろに溶し生玉子少々を加へて右の魚肉に塗り付てあぶり乾かす。

○小蕪菁をよく洗ひ葉莖を少しつけたる儘竪に薄く切り鹽水

に暫くつけ置き水にてザット洗ひ搾り、これを酢一醤油八砂糖二の割合にて混ぜたる三杯酢につけ置き其酢をきつて右の韲に附合す。

△火曜日

今日の夕食には三木さん大好物の支那料理丁度お當番で出來上らぬさきから鼻うごめかしてゞおらうと思へば一人微笑まれる。

朝　八ッ頭芋　味噌汁　菜漬
晝　鰹節でんぶ　味噌漬
夕　溜鶏片　菜漬

○韮味噌を擂つて水を少し控目に入れよく混ぜ鍋に入れ鰹節の削りたるを適宜に入れ煮立て水嚢にてこし、八ッ頭芋は皮をむきよき程にきり沸騰湯の中へ入れ柔らかに煠で、これを右の味噌汁の中に入れ煮立てゝ用ふ。

○鰹節を削り鍋に入れ少量の水と砂糖とを加へザット煮擂鉢に移しよく擂り鍋に戻し火にかけ箸にてかきまぜながらばらばらに煎りあぐ。

○鶏の上肉を薄くそぎ身になし鹽を薄く振りかけ置き玉子の白身のみを少し混ぜたるかたまり紛を水にてかたく溶き肉の中に混ぜ、ラード油にて白くザット揚げ筍（細謫）と椎茸を銀杏形に切り揚鍋の油を外に移し其後に入れいためヽ此中に鶏肉を入れ混ぜスープを加へ鹽と酢少許とにて味をつけ煮上げ、おろし際にかたくり粉少量を水にてとき入る。



△水曜日

菜漬が昨夕でなくつた、日曜に漬けて置いた大根漬が今朝たべられるかどうかと思つて當番ではないが早く起きて出た、竈の前で井上さんがくしくく泣いてゐらつしやる、驚いて何事かときけば今朝はどうしても火がもえぬとの事、外の當番はと見ても誰もゐらつしやらない、早速手傳つてたいであげる、自宅に居れば多くの下女下男にかしづかれる身の嘸つらい事でおらうといぢらしかつた。

朝　小松菜　乾えび漬汁　大根切漬
晝　鶉豆　梅漬生姜
夕　スチユー　ビフテキ　松茸佃煮　大根切漬

○小松菜を水にて洗ひ沸騰湯の中に入れ煠でゝ直ちに水の中に入れあくをぬき取出してよき程にきり水氣を程よく搾り、乾えびは水の中へ暫らく漬け置きて水氣をきり煮立てある清汁の中へ入れ暫時にして右の小松菜を入る。

○鶉豆をよく水にて洗ひ前夜乾しおきたるものを鍋に入れ豆

の游ぐ程の湯を入れ煮立ちし時湯をすてかへ、豆の柔くなりし時砂糖を入れ又暫く煮、後醤油を入れて煮る。

○良き肉をとり鹽胡椒をふりかけ置き鍋の中に肉一斤につき二合の割合にて湯を注ぎ其中へ肉を入れ、文火で一時間程煮て後煮汁と一緒に燒鍋に入れ天火で鳶色になるまで燒くべし、併し燒く内に度々汁を肉にかくべし燒き上りたらば其肉を取出し殘りの汁の中にメリケン粉少量鹽胡椒を入れ一度沸立ちて後肉にかく。

○松茸を水にてよく洗ひ石付をとり一寸位の長さに切り鹽水につけ笊にあげ醤油にて煮つめ約一時間して飴を三斤に百匁の割合に入れ暫くして鍋をおろし瓶につめたるもの。

△木　曜　日

今朝はどうした事か四時前から目がさめてねられぬ今日一日の行事からさては我家の事を思ふ、親しき友のまとひにて愉快は愉快なれど生活が單純である、何とかして改良したいものと思へど良案がない、いつも先生から笑はれる空想だ、寄宿舎は單純なるべきものであらう。

朝	晝	夕
煮しめ	鹽鮭	刺身まぐろ
蒟蒻と里芋	燒物	わさび合せ醤油
大根切漬	味噌漬	大根切漬



○蒟蒻をよき程にきり沸騰湯の中に入れ二度煠でなして其湯を捨て、其跡へ醤油と鰹節の煮出汁少しと砂糖少しとを甘鹹の加減に加へ大抵煮つまるまで煮る、里芋は皮をむき小ならば其儘大ならば程よき大さにきり沸騰湯の中に入れ煠でゝ水にて洗ひ、鍋に入れ醤油と鰹節の煮出汁と少量の砂糖とを甘鹹加減に合せたる汁をひたひたに加へ火にかけ落蓋をなし煮つまるまで煮る。

○鹽鮭を水洗をなし適宜の大さにきり約二時間鹽出しをなし置き水氣を拭ひそれより餘り焦され樣にやく。

○まぐろの切身をとり皮をひき刺身庖丁にて少し厚加減につくり皿に盛り、わさびをよく洗ひ皮をむきおろし金にてすり肉の側に添ふ。合せ醤油は濃煮出汁二醤油一の割合に砂糖少々を加へて作る。

晝の鹽鮭は自分の發議で萬辨舍から取よせたものであるためか一層美味しく感じたとは餘り身びいきにも程こそあれですね。

△金　曜　日

今日は十五日規定の通り赤飯をたくのだから常より三十分早く起き身仕舞して後炊事に取りかゝつた。友達は御幣かつぎよと笑はれるが朔日十五日には必ず赤飯を神樣に供へねと一

日心地が惡るい、今日は特によく出來た神様に供へ拍手した時の心地よさ。

朝	晝	夕
小豆飯	初茸生姜煮	小鯛の菊葉蒸
椎茸と竹輪	味噌漬	むかご煮付
清汁		茶漬
梅干		

○小豆をよく洗ひ沸騰湯の中に入れ二三度煮立てゝ湯をかへ小豆の煮えたる時米をよく洗ひたるを入れ鹽少々を加へて普通の水加減をなしてたく。米と小豆の割合は米一升に小豆二合なり。

○鰹節の煮出汁にて作りたる清汁の煮立ちたる中に、椎茸をよく水洗ひし石付をとりたる中位のものと竹輪を輪切りになしたるものと共に入れ二三度煮立てゝ椀に盛りそぎ柚子を添ふ。

○初茸をよく水にて洗ひ適宜の大さにきり鍋に入れ、砂糖八分と酒二分の割合にして初茸にかぶる程に入れ中火にて鍋を動しながら煮込み、よく煮汁のつまりたる時ほどよく醬油をさし味の加減を試ておろし生姜の搾汁を混じて煮終る。

○小鯛を三枚におろして腹骨を去り小骨をぬき紙鹽をなし暫くして紙を去り一時間程酒の中へ浸け、菊の葉を水洗して蒸籠の中へしき其上に鯛をのせ二三分間程蒸す。

○むかごをよく擂鉢にすり皮をむき煮出汁と砂糖と醬油にて



煮付る。

先生は私の當番の時にはいつも面白いお料理をさして下さる小鯛の菊葉蒸し中々振つてゐる。食事がすむと來週の献立表が發表になつた、今回は我組の番でなかつたから何が出來るかと待つて居たが中々來週も有望だ。

△土曜日

今日から又四日間お客樣。午後は何處へ行かうか、保證人の宅へいつて御自慢のお手製菓子の御馳走にならうかアーソウソ明日は〇〇に行くのだと仰しやつたから御馳走になるより澤山徽發してかへらう、夕食は好物のチッキンライス、アア今日は愉快の日！

朝	晝	夕
銀杏大根	はぜの佃煮	チッキンライス
味噌汁	芥子漬	茶漬
ラッキョー漬		

○大根の皮をむき五厘程の小口切になし其丸きものを十文字にきり銀杏形になし、小鍋に入れごく少しの水を加へて火にかけ攪まぜながら柔らかに煮て其れを煮汁と一緒に煮立ちたる味噌汁の中へ入れて煮る。

○はぜをよく水洗ひして笊にあげ水氣をきり置き次に鍋に醬油を入れて火にかけ煮立てゝ後はぜを入れザット煮て其醬油

な他の器に移し入れ別の新しき醬油を注して汁が大抵つまる迄煑ろ。

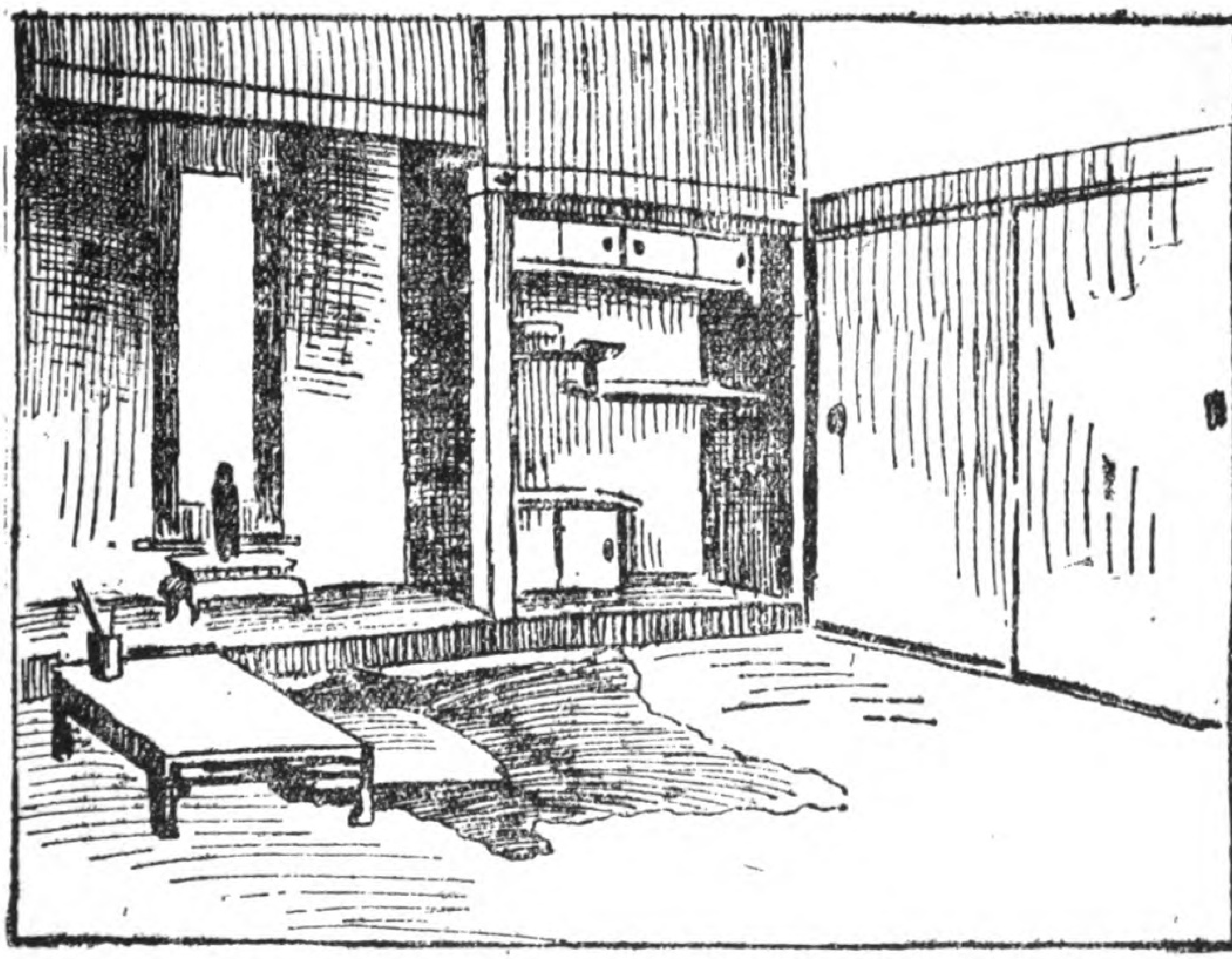
○先づ白米をよく洗ひ笊にあげ水氣をきり置き次第に鷄肉をよき程の片になし、鷄骨を細かにきり鍋に入れ一羽の骨に水一升を入れ一時間餘煑てスープを取り置く。次にせんに切りたる玉葱と人參とを牛酪にていため鹽と胡椒とをふりかけ味をつけおき、次にパセリを水にて洗ひ水氣をきりみぢんに刻みおき次にフライ鍋に牛酪を入れ火にかけ牛酪のとけろをまち右の白米を入れ攪きまぜながらよくいため右の鷄肉と一緒に釜に入れ、其れに右の鷄のスープをさし普通より少し強加減にし鹽と胡椒とを加味して文火にかけて炊き、而して飯を皿に盛り其飯の上へ鷄肉、人參、玉葱、パセリを色彩よい樣に上置して出す。

午後保證人の處へいつた、丁度初孫の誕生日で御馳走がある、是非とすゝめられて夕飯を御馳走になつた、一家團欒の宴は又格別である。

追手なき風をうらみてふな子らが
　からつかにきろかほのなかしる
ほとゝぎすみやこがたりのひまとめて
　いそ山かげに聲もらしけり

山縣有朋

東伏見宮妃殿下の御居間





九州一の大都會

福岡博多の社會觀察

白縫

○東海道列車の汽笛はピーと鳴る、九州線の汽笛はボーと怒なる、どこまでも獰猛なり。

○然かし博多停車場は白堊造りの美觀限りなし、樓上の洋食店は、印度風の裝飾なり。

○林檎は北海道より來れども割合に安し、一個三四錢位。

○洋菓子店や洋食店は少なし。

○饅頭の種類多きところなり、大學饅頭伏敵饅頭都饅頭東饅頭命名の種類多し。

○餅屋の多き所なり、にわか餅、かちどき餅など有名なり。

○東京のしるこをぜんざいといひざふにを具ざふにといふ。

○名物卵素麵は東京の素麵の如く茹でゝ食べるものならんと思ひしに大變な相違なりこれは卵にて製れる菓子なり其高價なる事驚くべし。

○松多き土地とて松茸は澤山あり松露も亦名産なり。

○醬油の釀造盛なり、千代醬油、春吉醬油、石堂醬油何々醬油と十何種の醬油あり組合を作り盛に改良しつゝあり。

○魚類にて珍らしきはアゴといふ魚なり、小鮎程の大きさにて鰭長く仙味あるものなり、燒き又は鹽にして販賣す、燒きたるは味噌汁等のダシにして風味よし。

○ハイといふ魚は一寸マグロに似たる味なり。

○蛤、アサリ貝等は大きなるものにても其價廉なり、佐賀より來るもの、蠣はカキボーと呼びて毎朝十二三歳の子供が賣り歩く。

○海苔は產せず、土地の人は海苔卷すしの外あまり海

苔を用ゐず、八百屋にて一帖と買ふ人は少し故に何枚御入用ですかと問ふ。

○鯛は一寸珍らしきものあり。一圓も出せば最上の大鯛を求むるを得。

○蒲鉾は東京の板蒲鉾もあれど其の外に麥藁にて卷ける蒲鉾あり、一本三錢にて美味なり。

○煮汁昆布といひて、吸物等の煮汁に用ふるものあり細く卷きて赤紙にて束ぬ。

○當地はかまどを用ふる家は殆んどなく、大概シチリンを用ふ、又いし炭といひて石炭の粗惡なるものを焚く、一俵三十錢前後、小家內の家にては一ケ月に十五錢もあれば充分なり、火力も强く經濟的なり。

○牛肉、豚肉は廉價なり、牛肉はロース四十錢位、豚肉は二十四錢位、(凡て百目なり)豚肉は長崎より來る。

○博多は飮料水惡しき所なり、故に東公園の大井戸より汲みて之を手桶に充たし、市設飮料水と記せる旗を立たる車に積み市中を配達す、雨の日も風の日も一年三百六十五日此車行かざれば博多市民は渴水に陷る。

○茶簞笥は蠅帳兼帶にて、戶はガラスの代りに金網を用ふ、簞笥は一疊敷位あり、多くは塗物なり。

○お玉杓子なく貝杓子のみを用ふ。

○よく酒を飮む所なり、やれ同年會、やれ老人會、やれ老婆會と宴會は絕えず。

○從て料理屋は繁昌し、大なる設備多し。

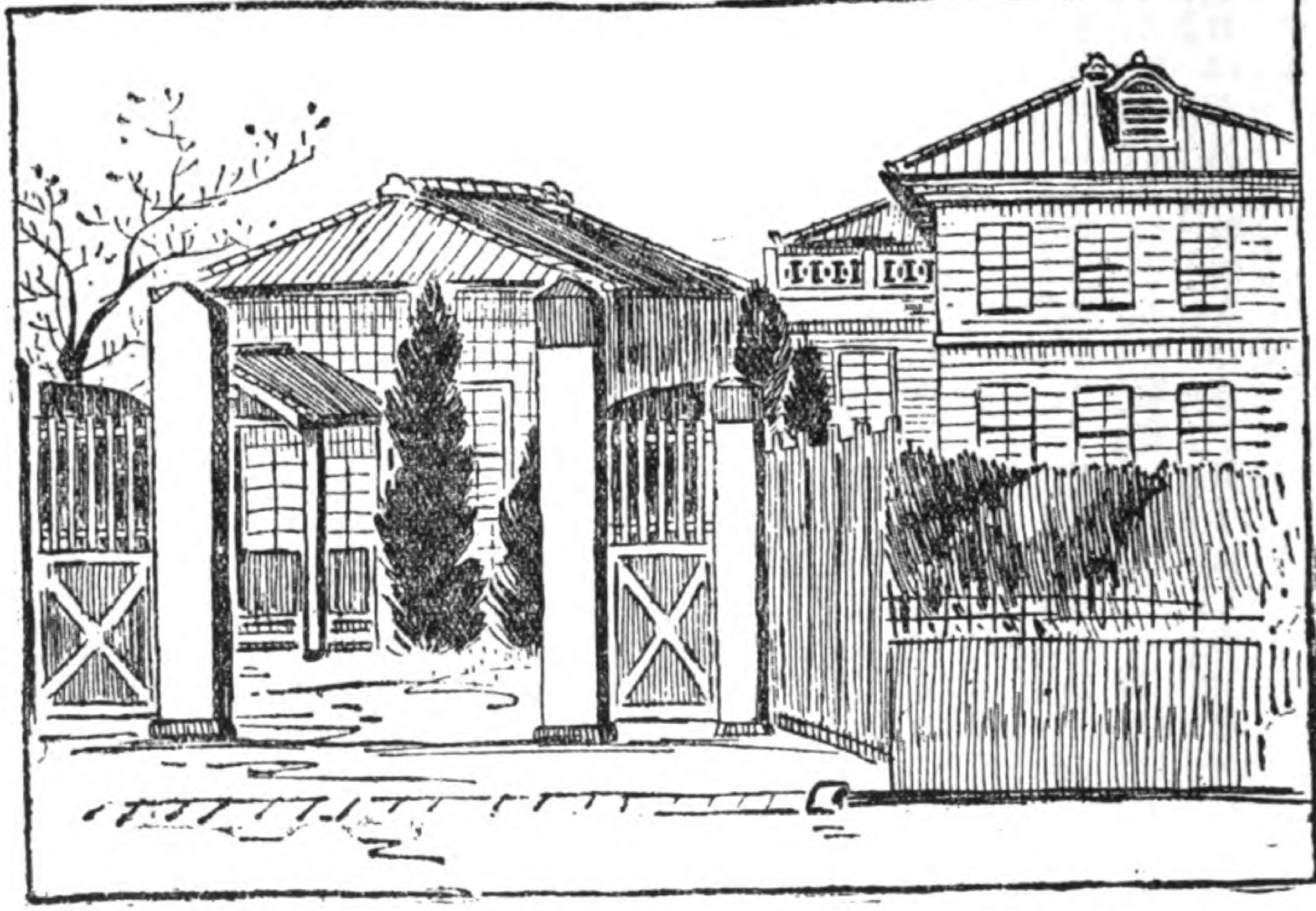
○當地の湯屋は多く人造石の風呂なり、又大なる湯屋多く、清心館、箱崎潮湯、等は有名なり多くは料理屋兼業なり。

○娛樂場としては玉突屋最も多く、いづれの家も常に一杯の盛況なり。

○小學校の運動會のときは、父兄家族が打連れて酒肴其他諸道具を車に積み、會場に至り各々定紋染め出したる幕を張り、盛に飮食し子供等の運動會をさかなに一日を樂しく暮す、かゝる奇風は一つの運動會に必ず五六組は見出さる。

○ドンタクと云ひて招魂祭の當日市中大々騷ぎをなす山車は各町より引き出され、種々の假裝したる男女は

跡見女學校　(小石川柳町)



三々伍々相携へて或は三味線或は琵琶各日頃の手腕を振ひつゝ、殆んど晝夜の別なく狂奔すイルミネーションは到る處に輝き、各戸は業を休み秘藏の金屏風立て回らし、酒肴を調へ何人にも酒を供す、其の盛況は博多人氣の一端を窺ふに足る。

○放生會は箱崎八幡宮の祭りなり、箱崎の濱に半永久的の市街出來、觀世物、娯樂場、飲食店、藝妓見番出張所出來、博多市民は家族一同此處に來りて吞めや歌への大騒ぎをなす、此の祭の時に限りチャンポンといふ玩具を賣る、ガラス又はブリキ製の長き管の先きに丸き球をつけ吹いては吸ひ吹いては吸ひ、繰り返せばチャンポンチャンポンと音する。

○振袖行列は陽春四月の花の頃、振袖を着た市中の娘達が、長き長き行列をなして町中を練り廻るなり、一説には娘の嫁入り口を求むるためとか。

○日蓮上人の銅像前には有難連が毎日集りて題目の聲高く、雪の日も雨の日も團扇太鼓の響絶えず、時には廂髮の美人も現はるゝ事あり。

○龜山天皇銅像前は御利益うすき爲か參詣人も少し。

○箱崎八幡宮博多人は信仰の中心なり、一度箱崎を過ぐるものは必ず宮に參詣せざるものなし。

○箱崎の濱の砂は諸病によろしとて、毎戸毎早朝取りに行き、家の戸口にある小箱に入れ置きて、出入には必ず體、手足にふりかく、大學病院の患者付添婆が、此の砂を待て毎朝ふりかけるとは一寸面白き對照也。

○一月には八幡宮の玉競祭あり箱崎町及馬出村の少年が玉を奪ひ合ふ祭なり、群集の中より時々水をかくるに湯氣立つ。

○正月の元日は朝より戸を閉めて休業し、午後は皆寢るために市街は至つて淋し其夜十二時より起き出でゝ賣初をなす、而かも此の正月は新舊二回づゝなす習慣なり。

○十二月八日には針供養とて、裁縫の先生のところに盛装せる娘連があつまりて饗宴を張り、一日の歡をつくし翌日は芝居見物等をなす、針子はこの日を一日千秋と待つなり。

○市民の服装は概してハイカラなり、中々流行に浮身をやつす。

○金廻りよき土地とて、寄附金などは比較的多く集まる、但し公共的のものは少なく、多くは神佛に關するものなり。

○博多織は工場的に織出すのは少なく、大抵は個人が織るなり、少しく裏町に入れば、機の音こゝかしこにきこえ、長安一片月。萬戸擣衣聲を思ひ浮ばしむ。

○名に負ふ博多織は呉服店頭の唯一の装飾なり、技巧を尊ばず丈夫向專一とするらし。

○呉服屋の陳列場は大抵三階概して大仕掛なり、定期の賣出しの外見切反物を賣出す。

○市街續きの箱崎町には箱崎縞出づ、木綿縞なれど田舍向きに賣れ行きよし、中等以下の娘の常用なり。

○筑前琵琶の本場とて琵琶は中々盛なり、雪ふる朝の寒稽古には、そこゝに琵琶の音と金切り聲きこゆ。師匠は婦人に多し。

○當地の物貰ひは多く琵琶を携ふ、東京にて三味線を

流して行くやうに琵琶を流して行く。

○月明らかなる宵などは、物好きの人々公園に琵琶かき鳴らして徘徊するはおもむきあるものなり。

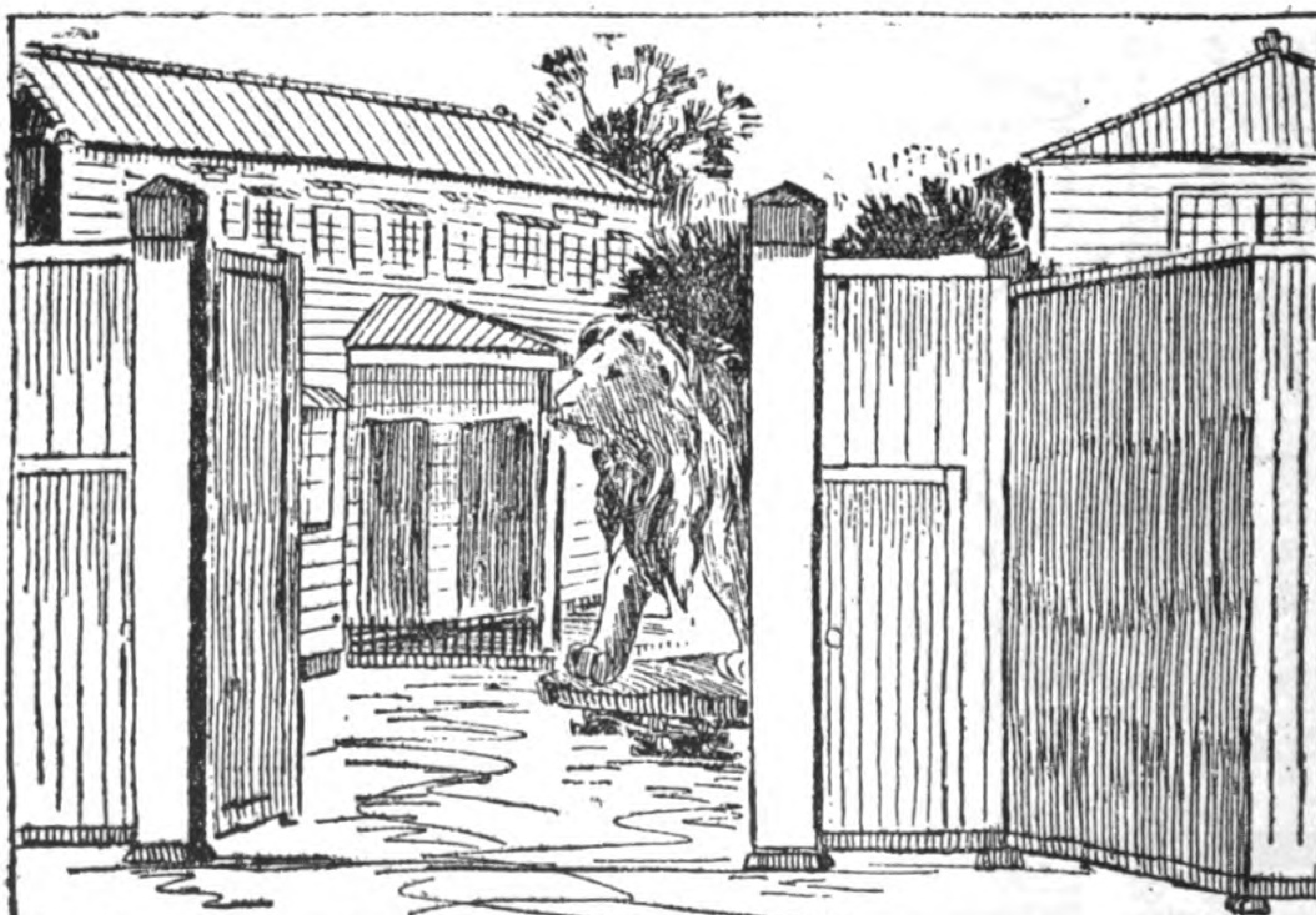
○琴も中々盛なり、一道の藝に通ぜざれば人にあらずといふ土地柄なれば、青年少女は爭ひて何かを習ふ。

○美人は少し、町を歩くを見るに顴骨の隆起せる婦人多し、九州タイプの特徴なり、少しく美人らしきは他國の婦人なり。

○女學生は勿論ハイカラならず、極めて質素なり、さしておきやんも見えず、女子教育は先づ發達せる方にて、縣立の外私立の女學校、技藝學校、裁縫學校等數多あり。

○道路非常に狹く、車一臺通れば人、之を避くるに苦しむ程なり、まして警察署願濟のふしん場の前などは混雜極まりなし。

○石少なく泥多き道路なれば、一度降雨あれば直ちに泥塗となる、其の上狹き道を飲料水運搬車、石炭運送車、人力車等、左右に通ふため、道は直ちに破壞せら



女子技藝學校　（校長子爵秋本興朝氏谷中初音町）

れ、店頭の陳列棚は泥濘に汚さるゝも市民は平氣なり旅の人が、博多人は泥の中を泳ぐといひたる事あり。

○商店の懸値は非常なり、他國の人と見れば三割は愚ろか五割位のかけねを吹く、糸場の買物は面倒なり。勸工場の正札にさへかけねあり、値切らずに買へば向ふから何くらか値引きす。

○看護婦にハイカラ多し、殊に大學、縣立病院抔には相當の地位の令孃ありしが今は少し。

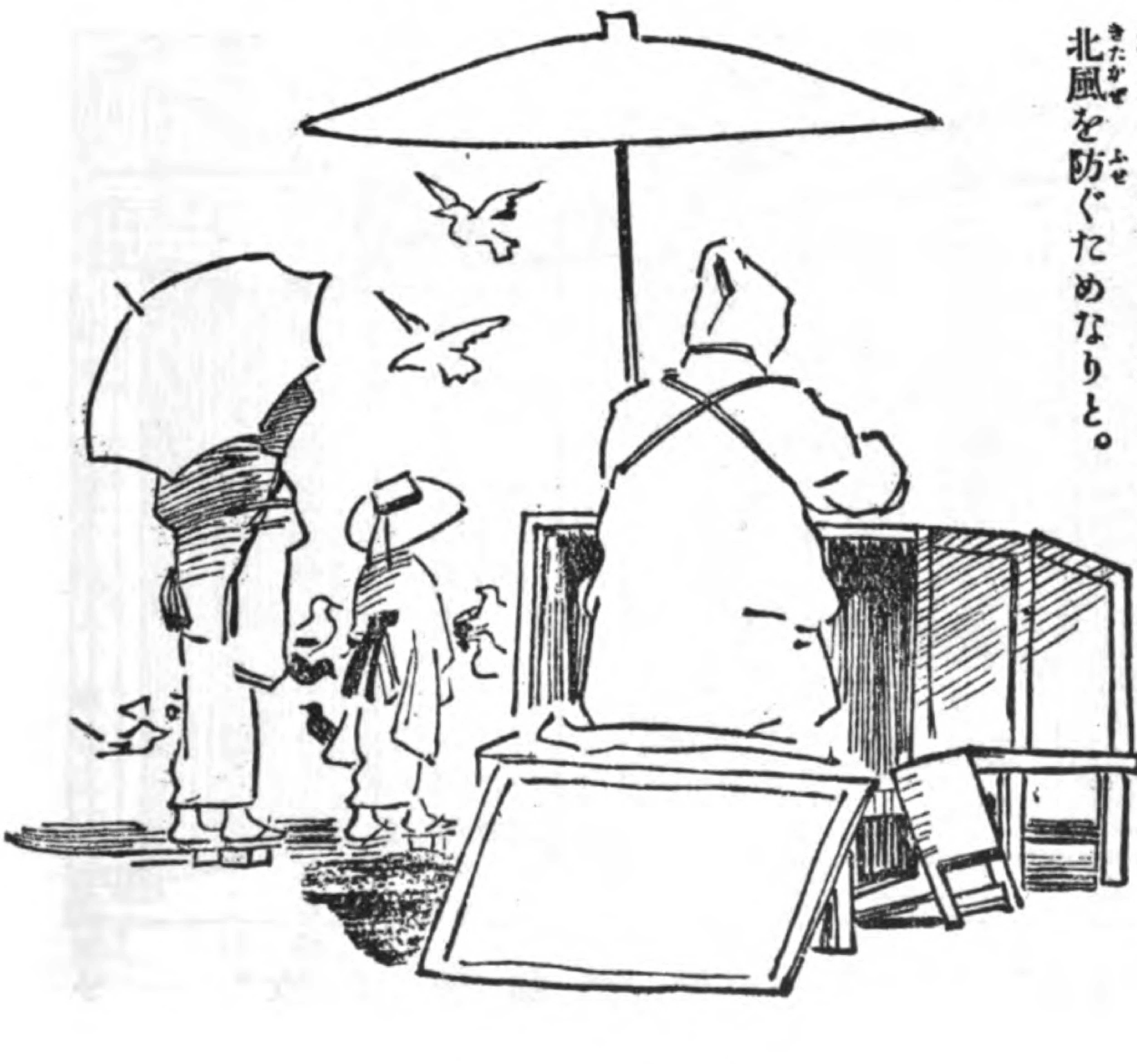
○醫科大學は海岸にあり、講堂にて波の音を聞き得るは此の大學のみと學生は誇る。

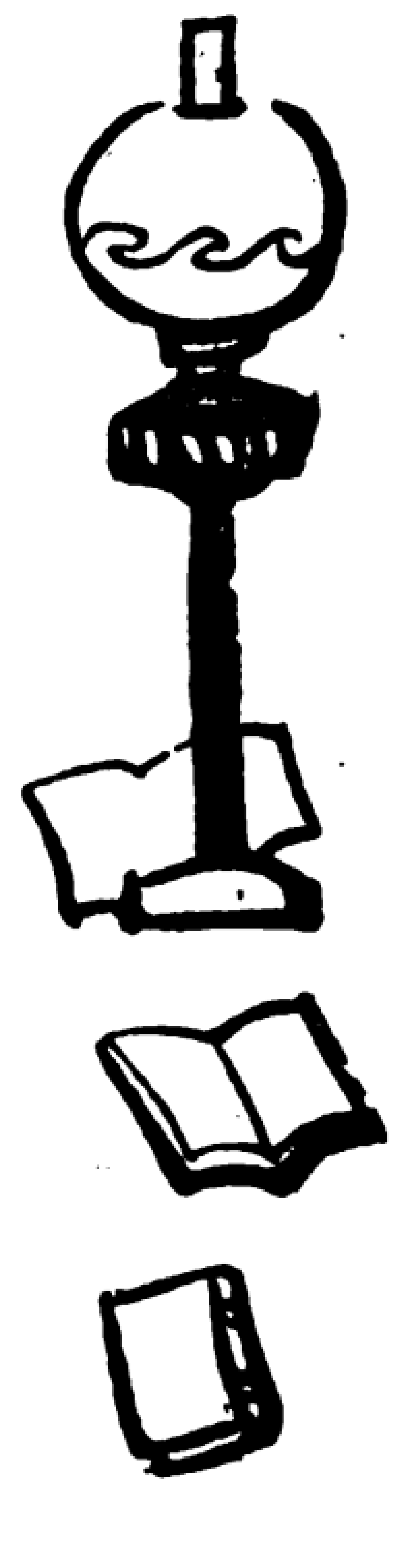
○大學の裏に利休の釜掛松あり。

○博多より一里ばかりの海濱の突出せる名島といふところあり、近く香椎潟をのぞみ、蜿蜒たる海の中道は其北をかぎる、辨財天祠ありて風光に富むむかし小早川氏の城址なりしと。

○多々良川はむかし蒙古の上陸せし所なり、今は寒村遠く隔てゝ蘆荻いたづらに繁く、時に多々良の鐵橋にとゞろく響を聞く。

○松の木多き土地、海岸は他の樹木育たず、博多より香椎にいたる延長三里の間、鬱蒼として晝猶くらき松林つゞく箱崎より名島にいたる間を地藏松原といふ、北風を防ぐためなりと。





北海道の山里

龍子

○思へば早き年月です、お父樣につれられて、北海道に來たのは、十年も昔となりました。彼の頃はほんとに、ひどい荒野原、見る限り寒帶のくらい木ばかり、細い小徑の兩がはから、熊笹が屋根の樣に蔽ふて、谷には、大木を切つて橋にかけ、いつ熊に出られるか、測られぬ山奥に、小さな小屋を立てゝ住つた。十年前が眼の前にうかむ樣です。

○細い小徑が、立派な國道となり、汽車さへも通じて其當時と思ひくらべると、なか〳〵よく開けたものです。

○四方山に圍れて、其中が又小山になつて、どこも取得のなき此所にも、今では、電信、電話、電燈に、アークの光り、無月の夜も清流に、銀波を漂せて、前には海拔六千尺、絕頂まで綠の色深き蝦夷富士が、清楚たる姿して、ぎせんと聳え、小山々々の林の間に、見えかくれに白樺の皮でふいた部落の小屋が白壁の家の樣に見えます。

○十年たつた、今もかはらぬは冬の寒さです、白樺の小屋。一般材木なんか幾何も有るんですから、立派な家を立てればよいのに、やはり昔のまゝの小屋に住で居るのは、あながち節儉と云ふのではなく、移住民にありがちの、永住の念にとぼしいのかもしれませんね。然し近頃は大分立派な家が出來たのでうれしい事。

○何しろ長い冬に短かい夏、此間に、冬の用意やら何かで一年一度のお祭も別に珍らしい事もなく、まつたく、休日なしですね。そのかはり冬は休日つゞきお寒ひから仕事も出來ず、五六尺も降つた雪の中にうもれて、家の内は眞暗で、毎日御飯拵への外は爐のふちに火をつゝいて遊で居ます。

○食物はまづくとも、多分にありますが、驚くのは色豆類で、副食物にはもとより、飯にも團子にも入れて

食べ北海道の米とも云ふべき、馬鈴薯又玉蜀黍に南瓜、それはたんと作ります。凉風そよぐ九月頃から朝も晩もパン〳〵とやきます。

○南瓜も赤靑と大小五六百も家へ持込で、庖丁ではだめなので、ナタや手斧で割つて煮えましたら、一寸鹽で味を付け水分をなくして食べますが其美味い事。北海道の方でなければ味ふ事が出來ませんね。

○魚は色々あつて、かすべに、鰈、鯡、鱒に鮭、價も安う御座いますが、內地の方が思召程今は獲れなくなりました。

○私等には缺く事の出來ない香の物が、寒中は凍つて食べられない時があります。

○朝起ると夜着の襟が一面の白妙で宛然起伏せる連峰が雪を戴きたるかの如く見えます又きせるなどは溫めてから口へ入れないと唇にすひ着て、其氣持の惡さつたらありません。こんな日に桶に水でも入れて置うものならピン〳〵と音がして、桶の輪が切れて了ひます

○外へ出ると下駄がギイ〳〵といつて、今朝は雪は少しも降らないつもりでも、立木には花がさいた樣に白くなります。又小川の水は湯氣が立つてそれをなゝめに連山から吹き下す風が嫌に痛寒く鼻の穴がピリ〳〵として耳は針で刺さるゝやうで、更に角底味のする寒氣です。

○然し流石住なれて見れば左程でもなく、着物の上にモンペをはいて、橇でつる〳〵した道の上をズーッと滑つては止り、止つては滑つて巧に凧などを上げて居ますが、これも三月頃で、それまでは毎日雪降りで外で遊ぶ日は幾何も有りません。

○こんな風で暮からお正月だつて、面白い事はなく、町で歌留多の聲が聞えても、寒村には鳥が淋しげに社の森にとまつて、しづかに雪が降つて居ますから仕方なしに炬燵の中で賑やかな都を夢見てる許りです。村の若い人達はつひ風儀の惡いかけ事に交じつて、切角貯蓄したお金をなくして了ふ方がいくらもあります。

○三月頃は固雪で何處でも通れますので、馬橇がチン〳〵と、鈴音勇ましく山から材木を賑やかに運搬

する。其内にそろ〳〵と、雪消の大きな南風が吹き初めて四月の中頃には、消殘つた雪のかたへや、小川のふちに、(やちぶき)の黄色い花が、一面にさき、林には秋にもをとらぬ若葉の赤や黄に、夕日の影美くしく、谷に咲く山櫻、名無し小草に至るまで、我先にと芳を競ひ艶を爭ふと云ふ有樣で、耳をすますと、清川に和して、のどかな鶯の聲が冴えて聞へます。

○七月から八月にかけては、綠り深き蝦夷富士に、高峰の花を尋ねんとて、小樽函館方面から、内外人が澤山來ます。朝まだき露をふんで、ふもと



から、トヾ松の林をぬけると、此處から上は小さな雜木林に、五葉の松、絕頂にお花畑とて、一面に珍らしい高峰の花、それは言葉につくせぬ眺です。今なほ世に知られぬ珍草もあるさうで、立つてはるかに望めば、夢の樣に霞だ噴火灣、眼下には、銀糸の樣に細い一河の碧流、鏡の如き洞爺の湖、四方山は幾百年を經たかと思ふ喬木が、鬱蒼と茂り、彼方此方に、つたかつらが這ひまはつて、秋の頃、早き流れに色付たる樣、實に繪にもかゝまほしき景色です。

○此處で一寸珍らしいのは、アイヌの熊祭で

すが、あひにくまだ一度も逢ませんので、たゞ宜い聲で追分節を歌ふのを聞きました。まつたく宜い聲ですね。あの流るゝ樣な月下にうちはで蚊を追ひ乍ら見渡せば、無數の切株の間に、十文字に切りたふされた、大木に青白い月の光りを浴びて、凄蒼たる光景が一層物凄い。おゝ何方かでふえの音がする。家の内へ這入ると、あんなに居た蚊が一疋もいません、妙ですね。晝は八十度位ゐ上つても夜は四十度も下りますので、朝まで、ぐつすりと一寸も寢苦しい事などありません。是れだけは樂ですよ。都の方が暑い〳〵と、お苦しみなさる時でも、下駄をぬいで川に足を入れると、ちゞむ程冷たうございます。

○一體新開地には樂しみが少くなく、山里は別してありません。お祭をのぞいては、春は山に筍取り、秋はぶどう取りで、こんな時熊に出あふ事があります。熊は人間の目を非常にニクむさうで、目さえ見せなければ、逃げて了ふとか、ある人が谷で熊の死だのを拾つて皮をむいて見ると、大へん腹がすいたとみえ、干た數子を、たんと食べ、谷で水を飲だ所がお腹の數子がふえて、腹がはれつしたのだと云ふ話がありました。

○こんなのが馬小屋を襲ふので女許りの時はほんとに心細くなります。

○農家は至つて宗教心が強く、寒い雪の降る日でも、遠方のお寺にお參りをして來ます。先年門跡樣のお出になつた時など泊りがけに出て來て、皆土下座して隨喜の涙にむせんで、お賽錢をなげる向も少なくありませんでした。

○ヤソでも町の方には熱心な方があると見え、日曜には教會が一ぱいで、クリスマスの、お祭など、夜の式場には、アークの光り、星の如く其間に、年少の孃さん達が嬉々として居る有樣は、なんとなく過しユダヤの、星の夜が思はれますね。

○言葉は皆異つて十人よれば十色で、自々に國なまりを使つて、中には少しもわからない方がありますよ。

○名物は山里には林檎位で、冬爐で燒いて食べますが、なか〳〵美味ですよ。又名物ではございませうが、ア

イヌが鮭の皮で靴を造しらへてゐますが、水がしみませず、強くて中に藁を入れてはきますが、温かで工合が宜しうございます、今はアイヌも其鮭年々少くなつて、生存競爭のはげしい、文明の世に進みつゝあるのです。

○私の家の横を流れる川を、親爺川と申ます。これはアイヌ仲間では、熊を親爺と申して、元此川に親爺が水をのみに出たので付けたとの事です。

倫敦の芝居

▲倫敦で有名な劇場は凡そ四十箇所程あります。其の中大別すると喜劇座三十、悲劇座十位の割合で、悲劇座の方が數が少いやうです。喜劇座の方は何時も見物人が澤山なのに引替へ、悲劇の方は淋れ勝です。彼の地では文藝に趣味を持つ人を除いては大抵喜劇が好きだと申します。悲劇は面白くない譯でもありませんが、精神を痛める事が強いので、心身の休養と言ふよりは却て之を勞する事になるからでせう、誰も一様に「氣晴に行つて涙を流す様な愚はしない」と云つて居ります。從つて喜劇の内にも多量に滑稽趣味を混へたのが評判がよくていつも大繁昌です。倫敦のゲーテー座は外國人間にも評判の高い座で、此ではお定りの奇抜な滑稽劇が演ぜられて、劇場前は恰度停車場の様に雜踏します。役者は見物人の笑を買はんと勉める所から、成る可く歐人の耳目に新しい東洋の事を材料に採ります。支那の某皇弟が皇妃を迎へて觀光旅行する模様なども致します。兎に角立錐の餘地なき程の大入りで異つた風俗を滑稽的に見せるのですから、見物人は皆抱腹絶倒の有様です。

寄席の數は大小四百ばかりあります。日本の様に浪花節とか義太夫などの情に訴へる類のものでなくて、俗謡とか、活動寫眞・[illegible]樂とか、舞踏など快活な分子の物が多いのです。然し娯樂の爲め遊びに行くからとて、日本人の様にお辯當を拵えたり、深夜まで興行して居ることはありません。彼の地では生存競爭が激しいので、活力を餘計に要すると云ふ意味から、娯樂の物にも沈痛な種類より快活の方を好むのです。之は東西娯樂の趣味の異同として研究すべき問題でせう。（フアーデー夫人）

四月の筍料理

桑原東浪

木々の梢も色附いて來て、花も今が眞盛り、輕風に一つ小袖の胸を吹かせて、何となく顔も上氣する樣な今日此頃の時候ですから、料理に致したところで、季節相應な見繕ひも致さなければなりませんが、如何いふものか花時分になりますと酸の氣のあるものが口に合ふもので、酸味噌とか、酸醬とかいつた樣なものがよろしい樣です。それに今月は筍の期節になつてまゐりましたから、お總菜には種々と形を變へて、筍を排びます。今一寸風變りなお手輕なところを申上げますと、

○筍の三杯酢

これは筍の成るべく若いのを選りまして、湯煮たら、その穂先の方だけを、薄く短册に刻み、又別に若布を好く水洗して、生の若芽なら尙更結構ですが、干したのなら前から水に浸して置いたのを、水を切つて、一寸沸湯を注けますと綠く色が冴えてまゐります。此を好き程に刻みまして、前の筍とお魚を拍子木形に切つたのとを交ぜて、三杯に致すので。お魚も當節は櫻鯛とか申しまして、鯛の多い時ですから、多くはそれを使ひます。これで先づ酸の物は出來たと申すもの、、筍の殘は何とか工夫致して、始末を附けなければなりません。そこで當時は味噌を材料に使ひましたものも、割合に食べられるものですからそれには、田舍風な異なお總菜があります。



○筍の味噌コロバシ

これは福岡あたりでも好く拵へますもので、見た割に滋味いものです。先づ白味噌に山椒の芽を丁寧に擂り込み、湯煮た筍を、拍子木なり銀杏になり恰好よく刻み、烏賊か何か肉の硬い魚を、五分位に切り、以上の三品を混合せて、砂糖と酒鹽で味をつけ、尙ほ水で少しく緩めて火に掛けて煮ますので、煮上つたら加減を試て充分材料に味が附いた樣なれば、下して鉢に移します。

それから筍を使ふもので、極滋味いものがあります。

○豚のソボロ

長崎料理といふと、直ぐ皆樣がお思出しになるのは、豚のソボロに、豚の角煮でせうが、いろ〳〵の雜誌や、料理の本に書いてありますのは、實際彼地で料理屋初め、各家で拵へてなりますのとは、全く違つてなりまして、彼樣な煮方では滋味い筈は御座いません。

之を作るには、先づ豚の肉の赤身と白味と交つたところを（別段ロースを使ふにも及びません）切らずに一片なり二斤なり人數に應じて買求めまして、其儘肉が隠れる位に鍋に水を満して湯煮るのです。充分に湯煮つて杉箸が刺さる様になりましたら、鍋から肉を出して、短册なり糸切なりに刻みます。之も生のうちから細かに刻んで湯煮るよりも、全部湯煮てから刻んだ方が、滋味がありますし、又肉が軟くなります。そして豚の香がお嫌の方は、湯煮ます時に葱なり、玉葱なり刻込んでおきますと、香が消えて仕舞ます。それから細く刻んだ肉を、別の鍋でチョット炒りつけ、それを、砂糖と酒鹽を入れ、水を加へ、それから醬油を注して、汁は成るべく多目にし、甘辛い位な加減に濃く拵しらへた中へ入れて一時間許好く煮るのです。酒鹽の蒸が消失て仕舞ひ、肉に充分味がついたら、豚の肉丈、別の皿に移して置き、別に筍の湯煮たのや、蒟蒻を短册か細切にし（蒟蒻は糸蒟蒻を使つた方が一層手綺麗で結構です）倘ほ豆の萠があれば、それも入れ、之を豚の肉を煮たお汁で煮て、煮上つたら、深目の皿に盛り、前の豚の肉を掛けて出しますので、カラ〳〵に煮ずに、少し汁氣のある様に致した方が滋味いのです。

○筍のうま煮



うま煮は別に變りはありませんが、筍を湯煮て細かに刻み、山の芋、鳥肉、木耳、銀杏などを入れて、味醂か酒鹽に、砂糖と醬油で味をつけて煮上げますので、これは汁氣のない様に煮込んだ方がよろしいのです。材料も種々で、蓮根や牛蒡などまでも加へても差支はありません。

以上の四品は皆筍を材料に使ひましたもので、之に筍のおすしでも加へまして、お汁には極淡泊としたものを拵へますと、一寸お膳の上が筍盡しで揃ひます。

○筍のお吸物

これは何方でも見繕ひで拵へるものですが、筍の穗のところを綺麗に賽切にして、勿論湯煮てからですが、一椀に鳥の肉二切の割合にし、之に白魚少しと、生海苔でも排つて、松魚節の出汁の澄し汁を拵へてつくりますと、なか〳〵淡泊としてゐてよろしいもので、見たところも綺麗です。

○筍ずし

これも世間で拵へてをりますのと、別段變つたこともありませんが、筍料理の一品だから、一寸申添へて置きましやう。

先づ筍や、牛蒡、干瓢、人参、蓮根等を湯煮て細に刻み、砂糖と醬油と酒鹽とで、お滋味く煮〆めて置きます。この材料は倘

種々其季節の品を入れてゝ宜敷いのですが、簾麩だの、湯葉だの高野豆腐だのを入れると汁氣を澤山含むんで、おすしに色がついて手綺麗に上りませんから、成るべく汁氣を含まないものを使つた方が宜しからうと思ひます。それに小海老も前の通りに煮附けて置きます。又鯛の身を薄くさしみの樣に卸したのを薄鹽にして、酒と白砂糖と交ぜたのに漬けておいて、御飯を交ぜる前に醋を加減します。始から醋に魚の身を漬けておくと、身が白くなつて見榮がしませんから、後で入れるので、これは一寸注意しておく可き事です。それから御飯を硬目に焚上げて好く冷したのに、御飯一升に醋二合、酒五勺、それに白砂糖を食匙で二匙許の割合で混合ぜたのを、少しづゝ御飯に撒布けて攪拌ぜます。此醋加減は決して定められません。醋によりましては、効が違ひますから、其時〳〵に加減を試なければなりません。それから煮上げてある筍小海老、牛蒡、千瓢、人参蓮根等を攪交せて、其時に魚を漬けてある二杯醋をも入れ交ぜて仕舞ひます。さうすると魚の出汁も利いて中々美味く食べられます。そして出來上つて皿に盛分ける時、魚の身を上に並べ、卵燒の千切を掛け、紅花生姜を添へて出します。

これで筍料理九品とおすしまで添へられますから、當季節のお知合同志の交際にはこれで充分ですが、御獻牛分に致すもので「筍の地獄煮」といふのが御座いますから、序に附加へて置きましやう。



○筍の地獄煮

櫻の花も咲匂ひ、天氣も殊の外朗といふ今日此頃は、家にばかりは、氣が鬱すとて、自然と郊外散歩にお出掛けになるでせう。さういふ時に御別莊とか、郊外の田舍屋などに立寄つて、御晝食をなさる折などに、好く筍の地獄煮をして見やうなどゝお獻牛分になさるものですが、これは孟宗籔あるところでなければやれません。其日にはこれに使ふ材料として大概蓮根、慈姑、牛蒡などを湯煮て少さく刻み、木耳、竹輪、銀杏など、それ〳〵煮る許にし、鷄肉も入れて、別に出汁も拵へて提げて行くのです。で先方へ參りましてから、竹籔の中で、大きさうに地面に龜裂を見せてゐる筍を探して、その周圍をぐるりと掘ります。それから竹の根につけた儘、筍の穗先に近いところを刳いて、皮を取らずに、上の方だけ横切にして、細身の庖刀か何かで、下の方の太い部分の節を拔くのですが、之も極下の硬いところは、其儘にしておくのです。そこで用意して來た材料を其の中に詰込んで、出汁に醬油や砂糖を加へて、味を試て注込みます。それから筍の穗先を元の通りに蓋にして、剝掛けてある竹の皮で包み、外れない樣に糸で縮り、さて斯う準備が整つたら、竹の葉の枯れたのが其の邊に澤山ありませうから、それな

筍の周圍に入れて火をつけて燃します。稍々二十分も燃やしてゐると、蒸氣が吹出して包んである竹の皮が焦げて來ますからそれを度として筍の根元からプッツリ切つて仕舞ひ、盆に移して座敷なり、牀几なり皆樣の待つてゐるところへ持つて來て、焦げた竹の皮を取除け、布巾に水を浸したので丁寧に拭き、其の詰つた儘小口から輪切にして、皿に盛つて出すといふ段取になりますので、散歩がてら慰半分の趣向には、一寸面白いものです。味もなか／＼美味くて、風味のあるものですが、何に致せ湯煮ずに、生まの儘蒸燒にするのですから、ちとアクが強う御座います。

筍料理も未だいろ／＼ある樣ですが、まづ此那事にして置きませう。

花見衣裳

今年の流行の模樣はドンナかと其の傾向を見ますると總じて以前の如く西洋化した自然を寫したものよりも昨年頃から流行し始めた歌舞伎模樣、謠曲模樣古代的の雅趣深き方へ向つて進んで居る有樣で花見時に羽織なんか要らないのですが、近頃は羽織をコート代用に着る風がありまして朝夕の露除又は塵除に用ゐます色合は先づ鼠がゝつた茶色がゝつた淡いものが勢力があります若い婦人は藤がゝつた色とか鴇色とか薄紫など云ふものを用ひます全體がアッサリと上品になつて肩からダラリと金鎖を懸けたり三ツも四ツも指輪をヒカつかせる樣な事は近頃餘り見えませぬ、指輪の如きも極く良い品を一つ位箝めて居ます。



◎帶は白茶とか少し赤がゝつてゐる東雲茶色などで織方は少し縮んだ金春唐織と云ふ樣なものが最新流行で◎着物は千代田縮緬だの吉野縮緬だのと云つた變り縮緬の紋無しが流行ます◎半襟は極めて薄い色か又は極めて濃い色例へば紺色の如きで何れも刺繍を施して餘程人目を注く樣にして居ます然し下卑てはゐない◎洋傘は昨年に比して淺くなりましたが、色合は藍鼠か空色で柄には球だのレースの房だの裝飾を施さないのが歡迎されます。

昨今關西地方で妙な蛇の目傘が凄じい勢を以て流行し始めました、骨は普通の雨傘の通り竹であるが其れを青色のまゝ磨きをかけて紙の代りに絹を張た優美なもので中には表を紙に裏を絹で張る等なか／＼凝つたものもあります。

辛き世の片影

乳呑兒を抱へて良人に死別せし寡婦の苦心

曾我部常子

△門に出て父を迎へられぬ子

世の中に何が不幸と申しても、幼にして親に別れる程の不幸はありますまいが、又其の子を育てる片親の苦心も大抵ではありません。其内にも男は幾程か氣も心も大きくて自分の腕に頼む力があるだけに、子の不幸を悲しむ事も幾程か少なからうと思はれますが、女となると寢ても覺めてもそればかりに氣をとられてみじめなものでございます。私は、今四歳になる女の子が生れて恰度五十五日目に、夫は病死致しました。そして子供は未だやう〳〵笑ふばかりのところで、親が何だか全く無心で居ましたが、其の無心で居るだけそれだけ母の自身に取つては餘計に辛らく思ひました。御隣の家の子供達が、朝はお父さん行つてらつしやい夕方には門に立つてもう御父さんが歸る時分だと言つて樂しんでゐるのを見るにつけ、聞くにつけ、あゝ此の子はあの味は知らないのだと、胸はかきむしられる樣になつて、いつか涙を流しました。

△世に人鬼はないとはいへ

こんな事で自分で涙を流しては自分で慰めて居ましたが、夫に死なれた後はもう直ぐ生活難の心配が起りました。で傳手を求めて或る會社へ事務員に出ましたが、子供をどうしても人に預ける氣にはなれないのです。父には死なれ、母に別れたら、子供は何と思ふだらうなどゝ、人から見たら愚にもつかない事を思つて……。で晝の内だけ預かつて呉れる處を探がし、夜會社の歸りに寄つて連れて來て、一日の勞れを此の子の顔を見て慰めて居ました。けれど世の中に人鬼はないと言ひますが、不幸な子はどこまでも不幸で、私の子

の参つた處は、子供を可愛想と思つて預かつたのではなくて、金が欲しいのだつたのです。追々に近處の人から知らせられて其を知つた時の私の驚き悲しみ、もうどうしてよいか分らなかつたのでした。一日でも其んな處へ置くは堪へられないし、と言つて直ぐ他によい口があるかどうか分らず、自分が其間守をして居れば勤めが出來ず、勤をよせば子供も自分も生き



る事は出來ない、女の手一つに子供を育てる事はとても出來ないものかと、つく〲途方にくれました。其内よい處があつて他へ遣つてやうやう安心をしましたが又一つ心配が出來ましたと言ふのは追々子供も大きくなつて一人で歩ける樣になり、口もきける樣になりますと、其の預けて置く家が車屋なので、世話はよくして呉れますが、商業が商業なので、女の子がき

いて悪い事や何かをどうしても覺えるのです。それで私ももう致し方がないと思つて、會社を廢して引とり、自分の手元で育てる樣に致しましたが、さうすると思ふ樣に事が出來ないので、其れは〳〵人樣に御話も出來ない樣な御恥しい事もありました。

△親子二人で入水の覺悟

實は夫に別れた當時夫の兩親は海の上を幾十里と離れた所に居て、年もまだ左程でないのだから、子供を他へ養子にやつて、自分は身の落付きを極ろと種々申されたのでしたが、私はどうもさう言ふ氣になれないので。自分の思ふ樣にすると言ひましたので、遂に心の折れる樣と誰れからも構つてもらへなかつたのでした、それで私は子供がある爲めにどうしても生きて行く事が出來ない時には、親子二人で水の中へ逝くつもりで居ました。會社をやめてからも、もう今日は此の世には居られないか、明日は果ての覺悟の通り仕樣かと思ひ乍ら、日一日と生きて送るのでした。足掛け四年の月日は隨分辛らい事ばかりでしたが、どうかかうか其の中を切り拔けてやう〳〵今日となりました。今は私が只一時の感情で此の子を育てるのでなく自分の身は亡いものとして此の子の爲めに働くのであります即ち眞の覺悟であると言ふ事が分つたので、此頃では再縁しろと言ふ人もないし、子を遣れと勸める人もない樣になつて全々不自由のないと言ふ事は出來ない乍らも、さし當つて困る時は親類で見て呉れる樣になりましたので、先づ其程の心配もなく、其日を送れる樣になりました。今は只々子供の成長するのを樂しんで居ります。

△もつと〳〵氣の毒な話

然かしどちらかといへば私共は幸福な方で、世間にはもつと〳〵氣の毒なのがあります。此頃時々納豆を買つてやる人があります。四十には未だならない位の女房さんですが、いつも私の家の人氣のないのを見て、御宅では旦那樣はときゝますから、亡くなつて居

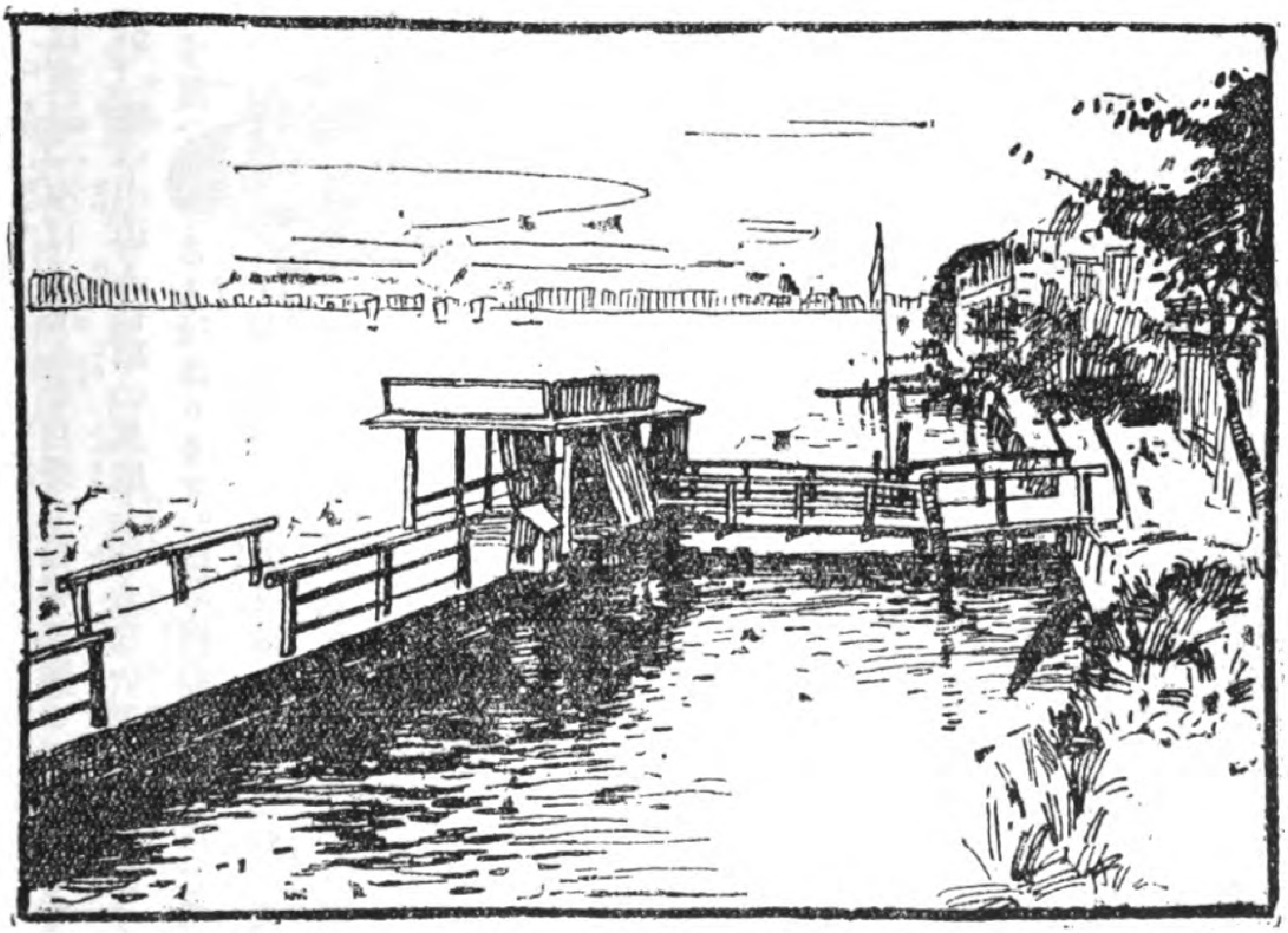
ないのだと申しました處、左樣ですか、其れは御氣の毒な事です、けれど私は亡くなつた方が羨やましいと申すのです。私は是や長病ひの夫でもあるか、さもなければ道樂者でもあらうと思つてきいて見ると、其の女房の言ふのに、貴女方は新聞も御讀みでせうから御存じでせうが、昨年の夏三輪の土方に人殺しがありましたのを御存じでせう、と言ふのです考へて見ますと覺えて居ます。持分の事から騷動になつて人を殺し、殺した者達は逃げて、其親分が自分に罪を負つて自訴したと言ふ事でした。ああそう〱知つてますと言ふと、私はあの自訴した者の家内ですが、あゝ言ふ譯で人の罪を負つて參つてからは、十一を頭に四人の子をかうして、朝は納豆、晝は煮豆、夕はうどんを自分て打つて賣つて歩くのですが、世の中の人は事の眞底も知らないで、人殺の子供だの何のと馬鹿にして子供達はいじめられ、ほんにもう辛い事ばかりですですから一層死別れをなすつた方を見ると私は羨しいのです、病氣でゞも死んだのなら少しは人から馬鹿にもされまいと思ひまして…、寒いのに家に私が歸るのはどうしても八時頃になるのですから、一番小さいのは乳を欲がつて何時も泣いて待つて居ます、負つて出樣と思ひますが、そうしちや商業が思ふ樣に出來ず困ります、と言ひますので、私は成程さうした身の上



では倚更辛からうと思はず涙を浮べました。

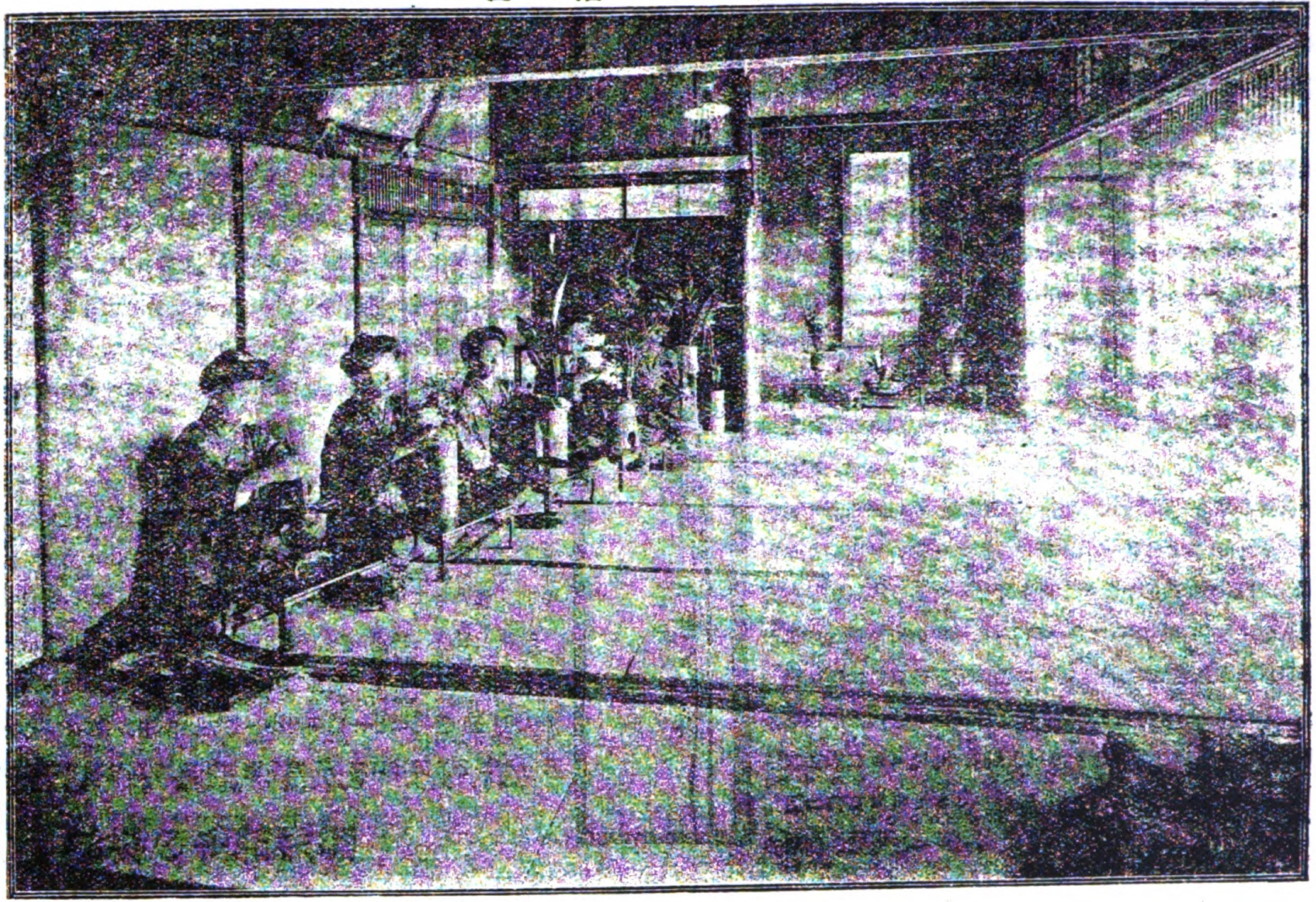
△物心ついた後の子供の悲哀

世の中に悲しい事は澤山ありますが、また別れて子供を育て樣とするときの其の辛さは他にはなからうと思ひます。其れも財産でも澤山あつて思ふ樣に子供を育てられる御方はまあ不幸中の幸ですが、食べる事から着物までの心配、さうして年頃が來れば人並に習はせ度い事もあるし、外を歩いても自分位の方の服裝などは目にも止まりませんが、子供の立派にしてお歩きなさるのや、お父さんの手に引かれて嬉しさうにしてお出の御子さんを見ると、自分の子はどうしてこんなに不幸なのかと思はない事はありません、今は未だ四つですから當人は何とも申ませんが、物心ついて父と言ふ事に憧がれる樣になつた時は、又どんなに泣かされませうかと思ふと、身を切られるより辛いのです。かう言ふ境遇にお泣なさるお方も多い事であらうとは思ひますが、意氣地のない私は人一倍の悲しさを覺えるのでございます。



東京名所（置岡の波）

生花の稽古



（女子大學生徒の挿花練習）

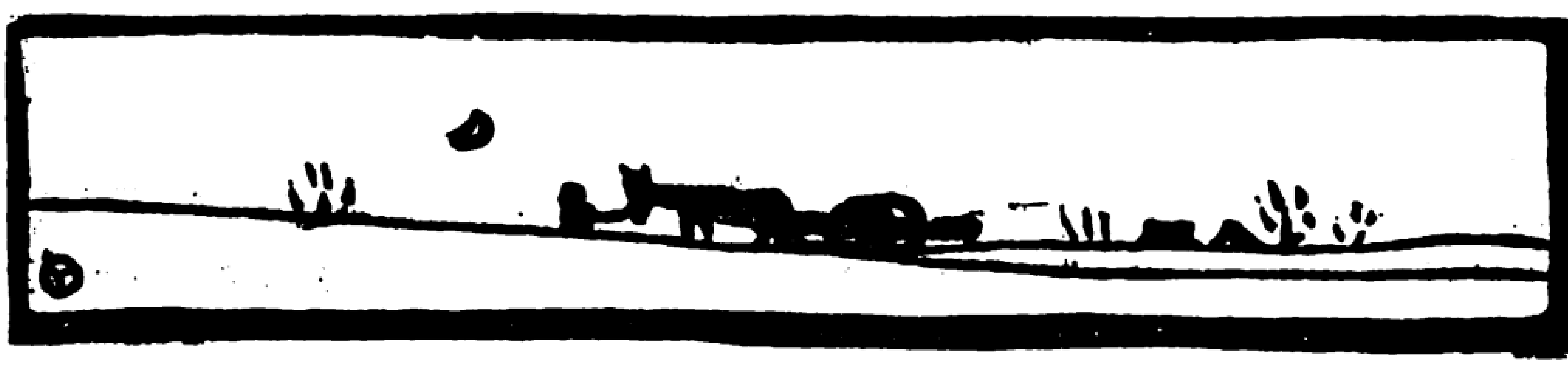
琉球の生活狀態

首里は地勢が高い、山水明媚の仙境、昔は、内地の京都といつたやうな處で、王公貴族の大きな家敷もあり、極閑靜なところであります。東に辨ケ岳聳え、虎頭、西森の兩山これに連なり、西方の那覇一體を脚下に瞰んで、崎山、赤田、大中桃原、寒水川、金城、當之藏、以下の十五ケ村から成つてゐる人口凡そ三萬餘の都會であります。即ち昔の王城の地で、現に周圍九町餘に渡る首里城址がそのまゝ殘つてゐます。

◎年中行事

昔からの習俗として、舊の正月には、十二日まで、年日の祝といふのが行はれます、子の日に生れた者は元旦から第一子の日に其人の年日のお祝として、方々の親類縁者から酒肴の珍味を持ち寄つて、男は舞ひ、女は歌ひ、面白可笑しく歌舞します

三月の節句には、女子が野原に出て、一日小鼓を打つて舞つて遊びます、四五十人の若い女が、むつちりとして曲線美のよく發育した胸を具合よく動かし、琉球貫物で拵へた簪を挿した黑髮を振つて、鼓の拍子に合はして、丸く輪なりに歩み歩み廻るのであります。それを土地の貴顯紳士や、淑女の方が三々伍々うちつれて見物に出掛けますので、春の長閑けさ春色駘蕩の趣があります。



四月にはアブシバライと言つて、男は酒肴を携帶して、野に山に出掛けますが、女は家内で色々の食物を拵へてお客を呼び合ひ茶を啜り乍ら四方山の話をいたします。

五月四日には俗に四日の日と言つて、首里那覇の市場に子供の玩具の市が立ちます、これはこの日に買ふた玩具で遊べば暑氣の爲めに重い病氣にかからないといふ迷信から出たもので、その日は朝から晴と着飾つて市場へ子供をつれ、老人をたづさへて買物に出ます、市場は押し合ひへしあひ、立錐の餘地もない有様です。

六月の吉日を卜して、綱引といふ壯快な遊びが催ほされます四五日前から、銅鑼を敲いて、各家から寄附金を集めて、其綱で二筋の大なる雄綱雌綱を拵へます。綱にはさま〳〵の飾物をこしらへ燈籠をともし、これに數十人つながつて宵から炬火を振りまはして引きはじめます、道の兩側には桟敷をもうけて、見物人が群集しなか〳〵賑ひます。

七月の盆踊も郷々で、十五夜の月を浴びながら、蛇皮線や俚歌をうたつてさわぎます。

毎年八月の十五夜に獅々舞がムいます。大きな獅子頭の内に男が二名這入つて踊るのであります。これは疫病を禦ぎ村中の幸福を祈るのであります。

序に琉球の婦人は禁止法令が發布されない前までは、婚姻いたしますと、直に節操を守る表章として、兩手の甲へ入墨をいたしましたが、今は全く廢れて了ひました。然し四十前後の婦人は大抵入墨をやつてゐるので、内地人には異樣に見えます。

◎言　語

沖繩現代の言語には、往昔大和民俗が使用した言語が大分殘つてゐて、源氏物語に用ゐられてある言葉が我通用語として使用されつゝあるといふ説は、琉球歴史に造詣深き文學士伊波普猷氏の研究の結果、いよ〳〵確實なる事を知るに至りました延いては、鎌倉時代の言葉も多く殘つてゐるさうで、言語上から見ても、琉球人の祖先は矢張大和民族の一部であるといふことが明瞭です。然し數百年間には轉訛した言葉も多くなつて、内地のお方には、さつぱり通じない別種のものゝやうになつてゐます。今左に其二三を

父（タールー（士族）スー（平民））　母（アヤー（士族）アンマー（平民））

姉（ウミー（士族）アンガー（平民））　兄（ヤッチー（士族）アッピー（平民））

嫉妬（ウハナリ或デンチ）　寡婦（ヤグサミ）　虹（ヌージ）　蜻蛉（アケヅ）

但し士族の男の方は父をよぶに「さい」を語尾につけて「ターリー、サイ」と謂ひ、女は「たい」をつけて「タークー、タイ」と言ひます。然し平民は一體に是を略して申します。沖繩の人はよく會話の中に俚諺を挾さんで申しますから、二三を記しませう



女のはてれば蛇なゆん（大膽なる女は蛇の如し）

錢とや笑らぬ子供とど笑れる（錢とは笑はれぬが自分の子とは笑ひ樂しむことを得）

くさ物言しゆすと躄小便とやあたらぬ（お世辭と寢小便とは合はない）

病やか外や大さすどまし（病氣の外は大きいのがよい）

言樣のあれば聞きやうもあん（立派に物言ひすれば聞かれもせよう）

鷹が舞れば烏も舞ゆん（鷹が舞へば烏も眞似して舞ふ）

顔貌や肝心（容貌は心の鏡である）

◎生　活　狀　態

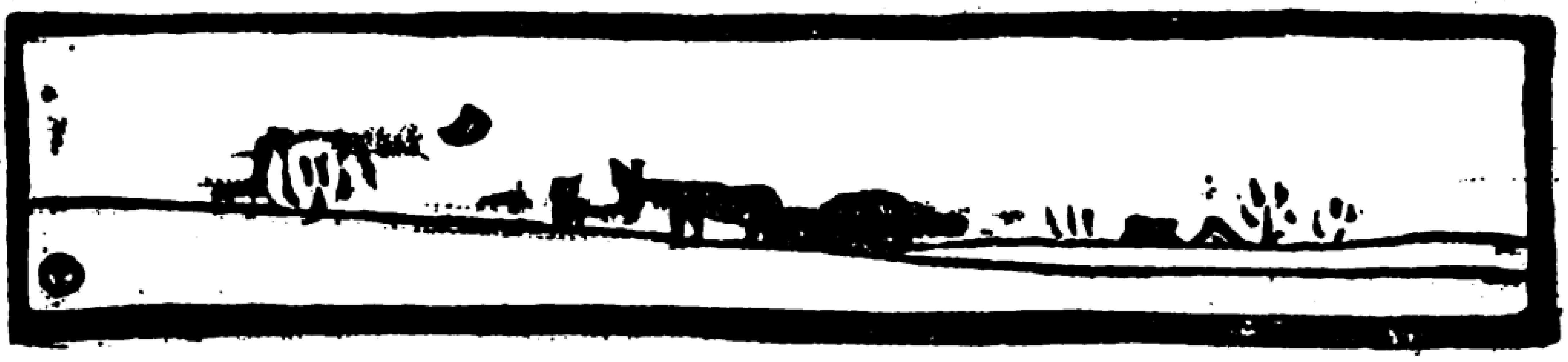
首里は家屋の構造が一體に低いから、内地から來た方は穴の中に入るやうだと仰やるのを度々聞きました。まことに軒のひくいこと、心もちじこまるやうな陰氣な造作です。

首里の町でも街道は田舍のやうな靜かさで、夜は軒燈がないので暗さは甚うムいます。俗謡に「琉球におぢやるなり草鞋を穿いておぢやれ、琉球は石原小石原」といふのがありますが、全くむかしの道は石の坂や、小石のごろ〳〵した道路で實に困難

でした。然し今の縣道は平坦な、すべりさうな、結構な道です。かういう險阻な道路を歩み馴れた土民は、家の低いこともさう氣にしない。平氣で跣足のまゝ往來してゐます。

不斷着は至つて質素で、手織物か內地からくる安價な絣を着ます。着物の仕立方は、よほど妙です、女は衣の上から帶はいたしません。ゆもじが丁度袴のやうに晒木綿でこしらへて着けてゐます。で、琉球といつて、衣裳の胴のあたりをゆもじに押し込んで、開けないやうにしてをります。那覇や田舍の女はゆもじの上から黒い紐できちんと締めてゐるので、夏の頃は紺の芭蕉布を着てゐますから、ゆもじの紐が透いて見えるので、色々の批評がムいました。

常食は中流以下になると、一般に唐芋で、直徑一尺三すばかりの芋に熟つたのが十錢から二十錢ぐらゐで買へます。米は唐米が多く內地米は大阪や鹿兒島から輸入するので、一升二十錢します。豚や牛肉は每朝市場へ澤山賣り出します。豚肉は一斤二十六錢、牛肉は二十二錢位、御承知の通り養豚業は日本第一でしかも風味が頗好で、內地のお方にもよろこばれます。一寸序でに豚の飼養法を述べませう。琉球の豚は便所に飼つてあります。即ち石で四角な箱形を拵へてそれを瓦葺や茅葺きにして、その中に豚を放して置きます。少なくとも各戸に豚小屋が一棟ありまして、數頭を飼つてあります。豚に與へる食物は



芋の皮や、酒糟、ひらうなお粗末ですが、人糞がすぐ豚小屋に落ちてくるやうになつてますから、人の足音がいたすと、皆なびくつかせて、食べに來ます。

魚類は俗に言ふイクブヰ、マンの類を糸満町から賣りに來ます。晴れた日、裾の短い衣ものを着た女が大きな笊を頭上にのせて賣りあるきます。四五人も打連れて「魚や買んちらよに？」と言ふやうな音調で、他の耳馴い糸満女が賣りますと、子供連中ががやがや騒いで、よく眞似をする。薪炭は貴人になりますと、松の林斑や榕樹の小枝等を焚いてゐますが、大抵は與那原から駄馬で運んで賣りに來ます。それが一駄七十五錢ぐらゐ。家賃は近頃よほど高くなりました。六疊二間に四疊と三疊の二間に勝手がついてゐて、六圓ぐらゐ。沖縄は未だ金融が公債になりませんのですから、醫者の藥代や商店の賣買其他の支拂は七月と十二月の二度で、盆や大晦日には掛取の提灯が、路次を駈け廻てゐるのを見ます。目下金利は一割八分から二割位です。

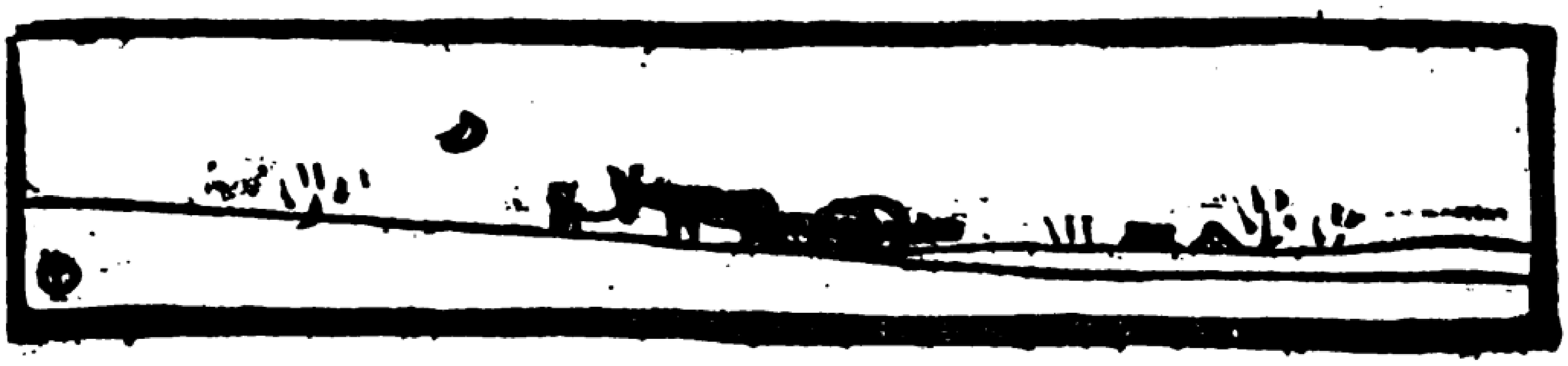
◎迷信と巫女の生活

一體に御開化でも、一寸聰な者でも見ると直ぐ易卜者や巫女の門を叩いて、占つてもらひ、時宜によつては祈禱をしてもらうといふ有樣ですから、狡猾な巫女が出て、さまざま嘘八百を並べ立て、迷信のつよい婦女から金錢を搾りとります。昔しあ

る王の時代に獸㕝太佛といふ巫女が出て、怪說をとなへました時の王樣は賢る名君であつたが、巫女が愚民を惑はす事を憂ひてある時箱に雌の鼠一疋を入れ是を封じ、この箱の中に何疋這入つてゐるか、それを誤らずに言つて見ろ、若し虛言をいふに於ては其儘生かして置かぬと嚇されますと、巫女は神色自若として三疋ゐますと答へました。すると王樣は忽ち眼をいからしてこの騙り奴、さア一擊に殺してしまへとあはれにも巫女は死刑に處せられました。其後箱を開いて見ますと、豈計らんや一匹の鼠は親子三疋になつてゐました。こゝに至つて流石に王も不愍に思召され、彼女は畏くも代々の御墳墓なる靈殿の正面に葬られ、太佛の稱名を與へられたといふ傳說があります。それが琉球の巫女の元祖ださうです。

さういふ迷信の甚だしいところですが、開けた宗教の信徒は至つて尠ないです。併し佛敎は相當に行はれてゐて家の靈棚には位牌が安置され、忌日や盂蘭盆や、春秋の二季の祭には種々の食物を供へ、佛事がなか〳〵盛んですが、併し旦那寺も持たなければ說敎を聞きにも參らず、別に勝手な神を信奉して、岳を祀り、山を祠り、家々には一段高く神棚を造り、香爐を置いて祈禱してゐるといふ妙な風俗です。琉球人は畢竟祖先敎國民です。

學校は市中に小學、中學、師範、高女、工業徒弟、及び女工藝等完全な校舍があつて、中學からは、年々四五十名の卒業生を出してます。



◎產業

泡盛は本縣の特種產物、又黑糖の產額も第一でせう。首里織工場からは琉球紬、木綿絣、芭蕉布などあつて內地へ輸出します。四五年前までは薪を使用してゐましたが二三年此方石炭を焚くやうに成りましてからは、數十の煙筒が物々しい黑煙を吐いて、風が颯と吹き廻すと、一天どんよりと煙が散つて、暗鬱たる雨の日のやうに霞んでみえるのであります。兩三年前から阿旦葉帽子製造も盛んで、數十の會社がありまして海外へも輸出します。

琉球は飯匙蛇の多い事、今更說くまでもありませんが、さう內地の方の恐怖されるやうに、路上や庭內に匍ひまはるやうなことはありません。

山縣有朋

いよのしま安伎のいそやまとり〳〵に
　追手のかせのおもしろきかな
ふるさとにちまきあやめをとりませて
　わかゆくたびをいはふなるらむ



美人は如何に化粧するか

日向欽子談

▲内部化粧法

人は眞に美しくなるには第一全身の健康を保つ事が必要です、そう申したら臺所のおさんどんには美人が多い譯だと仰られませうが、目は鯨式、鼻はおかめ式口は鰐式、と云ふ樣なのは別ですが、先づ十人並ならば、此法によつて佳人の仲間入は出來ません、いくら目鼻立が揃つて居ても、萎びたり、痩せたり、色つやが惡かつたり、眼球に赤筋が張つてたり、皮膚にたるみが出來たり、又は吹腫物がしたりして居ては、女としての温味とやさし味は見られません。是等の事は第一適宜の運動、第二充分の睡眠、第三飲食物の注意、第四精神の修養、等内部の化粧法とも申しませう、此第一第二第三の事が實行が出來れば自然と肉色は美くしく、皮膚に張と光澤が出て、吹腫物などは大概出來ません、第四の精神の修養と云ふのは目の輝きと、愛嬌と、品性と、擧止を整へる爲に必要な事で、いはゞ仕上げともいふべき大切な事だと思ひます。

▲外部化粧法

是は内部よりは方法も澤山あるだけに、一寸迷ふ樣な物ですが、要するに鉛を含んだ白粉や、餘り皮膚を刺戟する化粧水など用ひる事は全然やめて、目立ぬ樣にするのが何よりの事です、殊に脂肪の多い人は、朝洗面する外に、晝一度、夜一度、食前に洗ふ樣に心がけますと毛穴が塵やあぶらに塞がれる患がありませんから、にきびやあくねは出來ません、是は私自身も實行して大に效があるのをみとめました。

▲姿を善くする法

姿のよいのは何より望ましい事ですが、是も目鼻立と同じ事で、短い足を長く、いかり肩をなで肩にする

といふ譯にはまゐりません、けれど衣服の着こなしや帯の結び方で幾分かは見直す事が出來ませう、それは第一着物の仕立方にもよると思ひます。襟かたを少しあけて猪首に着れば、肩が角ばつていかつくなりますし、又澤山あけてぬき衣紋にすれば下品に見えます。これはその襟かたを縫ひます時に、廻しの處にまる味をつけて、少しくる樣に深目に致しますと、少し位ぬき衣紋にしてもぬいた樣に見えず、襟元がのびやかに形よく、肩も隨がつてなでゝ見えるやうに思ひます。何ですかから申ますと裁縫の御話の樣になつて終ひますけれど。それが姿に大關係があるのですから仕方がありません、羽織は後の袖つけを、前のより心持少なくつけますと、着物の襟にかぶつて參りませんから、肩の形がやさしくなります。褄下は思ひ切つて高くして、腰帯はなる丈け襟先の直下へ結ぶ樣に致しますと着物の前もはだからず、足も長くみえる譯です、それから着物を着ます時に、襟先の直下を持つて深く合せますと、いはゆる柳腰に見えて、俗にあんどんとか云ふばつとした形には決してなりません、或る人は柳腰は前世紀の美人だと云ひますが、日本服は如何しても下が細つそりする樣に着なくては姿はよく見えません

▲側面の美

婦人は殊に横向きに趣のあるものですからそれを自ら打壞さぬ樣に益々發揮させなければなりません、白いやさしい頸に柔らかい、烟の樣な黒髪がふうわりとかゝつたのなどは、何ともいへない趣を表はします。

▲髪容が大切

其側面の美をあらはすには第一に髪容を自分の横顔に似合ふ樣に調へなければなりません殊に其たぼの邊が生命です、其點から云ふと今流行のボアや肩かけや襟まきの樣なものは單に防寒用としてならば兎に角粧飾と云ふ方から云ふと、まづしない方が餘程美くしいです、昔はだての素足とか云ふのもあつたさうです。そんなのはほめた事ではありませんね。

▲色の配合

次は衣服と髪飾のとりあはせ。一口に云へば全體の色の調子を合せる事です是がやさしい樣で中々むづかしいのです。美術家などもこれには大に苦心するのですが、勿論一定の法則はあるもの、夫が人々の好き不好でいろ〳〵に變じます。故に甲の人がよいと見ても乙の人にはいやに見える樣な事があるのですから、一槪には申されませんけれど、私は或る一ッの色について其中に含まれた、即ちかくれた他の色を見出すと云ふ事が肝要だと思ひます、かう申すと大變むづかしく聞えますが、同じとき色でも、よく見ますと藍氣を含んだのと、黄色味を帶びたのとがある樣に、初め氣をつけて見ますと後には一目見てその隱れたる色の方が明かに見える樣になります。其かくれた色の系統を尋ねて、それと衝突しない色を撰ぶ樣にするのが一番容易な方法でせう、これは言葉をつくして言ふよりはただ感じ方によるもので、極めて美妙なものですから氣にしだしたら際限は、なからうと思ひます。此間ある雜誌で某婦人の說と云ふのを讀みましたが、薄色の着物を着る時は薄化粧をし、濃い色のを着る時は厚化粧せよと記いてありましたが、私は其反對の方がよくはないかと思ひます、お納戸とか勝色とか云ふ樣な色合は人の顏、殊に日本人の顏を一層黄に見せる傾向がある樣ですから、少し藍氣がおほい樣になります、そんな時にはとき色の白粉等を用ひたら如何かと思ひます何故かと申しますとかくれた色に藍を持つて居りますから、そして又着物の色が暗く少し硬い感じのある物ならば薄化粧でもよい加減濃く見えるかと思ひます。これに反して着物の色が薄色の柔い感じの物の時は少し濃い加減にしても着物の色に明るさを奪はれますからそれ程には目立ちません、かへつて餘り薄化粧では地色の白い人でも銅色に見える恐れがあります。口紅ですか？あれは私貧血症か何かで特別に唇の色の惡い人でなければ自然の色に委せて用ひない方がよいと思ひます、女には一番大切な柔い春の日の樣な調子があれ一つで合はなくなる事が多い樣に思ひます。

衛生顧問

糸左近

△食事中の時間

問 三度の食事は一食毎に何十分間宛要すのが衛生上宜しいでせうか、御教を乞ふ。(大阪の恭女)

答 普通の樣に三杯食べる方を標準にすれば、二十七分時間が丁度宜しい譯だと、胃腸病院長の長與博士が苦心研究の結果報告して居られます。其譯は一杯の飯を九分時間咀嚼してゐると、唾液が十分に分泌し、唾液中のヂアスターゼなども能く混り、食物は胃に入つてからも消化し易いからであります。

△乳汁離の小兒の食物

問 母の乳汁を離れたる小兒には如何なる食物より食べ始めさせて宜しきものに候か。(越後の將生次男婦)

答 牛乳、鶏黄、飴、粥(極めて稀薄なるもの)、白色魚の刺身、餡の入らぬ菓子などである。何れも可成少量より始めればなりませぬ。

△いぼを除く法

問 私は男の愛讀者ですが、両手にいぼ多く出て、色々の方法もやつて見ましたが効有りませぬ。何うか之を取る方法を御知らせ下され度。(甲府市のT人生)

答 外科醫に就き能く切れる剪刀でプツリと切つて貰へば、ヘツと思ふと同時に取れて何の事も無いが、それが厭なら、疣の周圍を絹糸で縛つておくこと二三日も經てから、疣の頂上へ發煙硝酸或は硫酸を塗けるのである、併し該藥は毒藥で、若しも他部分に附くとか、或は多過るとかすると腐蝕して疣の有つたよりも一層醜くなるやうな惡結果を來すものなれば、其の手際が上手で無ければならぬ。然らば何うするかと云ふに、竹楊子を針の如くに削りて此尖へ右の藥を附け、之を以て疣の頂上を輕く摩るのが最も宜い。

△腋臭の療法

問 撒里矢爾酸が腋臭に善いとのことで塗け候へば腫物出來申候、これは本藥の爲でせうか、又別のものでせうか、兎に角何か宜い御藥が有つたら教へて下され。(あはれ女より)

答 撒里矢爾酸の爲に腫物が出來た譯ではありますまい。腋臭は其の部を清潔にし、左の藥品を持續して塗けて試られよ。

ナフトール	一〇、〇	酒精	一七五、〇
コロン香水	一五、〇		

次に左の處方も妙である。

酒精	五〇、〇	安息香丁幾	七、〇

アニリン　○、○五　ヘリオトロピン　○、一五
香油　一滴
右一日一二回洗滌
(但し火の附き易い藥であるから火災を避くる注意を要す)

△にきびを去る法

問　私の顔ににきびが多く出來困り居り候之を取り去る持藥を教へ下され度、但し妊娠の身に害が無き藥を御教へ下され。(名無き冬枯女)

答　一旦發生したる面皰を取り除くには、器械的の方法を以てするが最も良い。即ち兩手の拇指の爪或は面皰挾壓子といふ器械を以て壓迫するのです。該器は上下に開いてる短い金屬製の小管で、其の側部に一つの小さな柄が着いてゐる。面皰の再發を豫防するには加里石鹼精を以て洗ひ淨め、或は硫黄と軟膏若くは乳劑と爲し、或はレゾルチンを應用するも可い。一二の處方を左に掲げておく。

沈降硫黄　一二、○　カンフル　一、○
アラビアゴム　六、○　薔薇水　一○○、○
石灰水　一○○、○

右の處方藥を瓶に入れておくと、上は水液になり、底に沈澱が出來る。乃で其の水液を晝間塗けて沈澱物を夜間塗り、翌朝洗ひ落すが可い。

レゾルチン　二、○　白色酸化亞鉛、小麥澱粉　各五、○　黄色華攝林　一○、○
右混和夜間塗布

△あざを除く法

問　「あざ」は除かれるものでせうか、除かれるものなれば其方法等を御教へ下され。(靜岡の千代女)

答　色々の藥液は有るとは云ふものゝ、確實なる療法とは無い、されど其の目的の藥物中で第一に數へらるゝ物は昇汞である。即ち2%の濃厚する昇汞水を屢々塗れば可い、併し其の患部の廣いのは布片を右昇汞水の中に四五日浸しおき、之を輕く搾つて患部に載せ、油紙をあて繃帶しておけば四五時間も經つと皮膚に灼けるが如く焦げるが如くの感覺を發し、苦痛を堪へて繃帶を取り除けば皮膚は火傷したかの如く所々水泡が出來る。そこで其の水泡の下部を針にて刺し、その液を漏し、それより亞鉛華軟膏を塗擦しておけば七八日經つと色素は全く消滅するのが普通である、されど消滅せねば更に前方を繰返すが可い、又全く消滅しても月日の經つ中に再び表はるゝことあらば、再び退却するまで其の塗布を續ければ如何に頑固なる母斑も遂に退くとのことなれど、余の經驗に依れば、効あるのもあるし、更に効無くて骨折損になるのもある、又結晶石炭酸を塗けて後の處置は前方と同じくする方法もある。何れにしても手際が宜く無いと瘢痕收縮になつて以前よりも尙一層の醜體を來すことがある。

△そばかすの療法

■ 姉妹よりも仲の善い友達の顔にそばかすがあるのですが、之を取り除く方法を御示し下され度。（東京露子）

■ あざを取る方法と同様である。併し手軽い方法を記せば。

硼酸加里 五、〇 硼砂 一〇、〇 倶里設林 二〇、〇 水 三〇〇、〇

右一日數回塗布

△運動の効と家庭平和と

■ 私の良人は或る役所の官吏、家庭は私、（三十二歳）と八歳の長女及び下婢と斯う四人暮でありますが、良人は役所より直に歸宅することは殆んど無之、或は宴會に出でゝ夜を深し居り、私は家にのみ閉ぢ籠り何の爲すことも無く、唯殘り少い金額を以て家計の處置を心配致すばかり、それかあらぬか身體は何と無く弱くなり、食慾も常に進ます勝。過日も良人の胃病を診察に參られたるお醫者に序に診て頂いたれば、運動の不足なる爲だ云々と。先生よ、人の妻たる身は如何なる運動を爲して宜しきか其の方法及び良人をして酒を厭はしめ、品性を高尚にする良藥は無いものでせうか、無理なる質問枉げて御答下され度。（麻布の憂鬱女）

■ 貴女は滔々として御問の如き傾あるは實に歎はしき次第である。されば滿腔の熱誠を籠めて運動法より答へませう。抑中等以上の妻女たる人が爲す可き運動としては何が宜しきかと云ふに、下婢を廢して下婢の仕事をするのが最も簡短なる良法と思ひます。下婢を廢すれば家の拭掃除、庭園の掃除、衣服の洗濯、飲食物の調理等、悉く貴女が爲さゝればならぬことになる。これ丈の仕事を爲されば女性としては實に身に適したる運動法で有つて此の外に別に鐵啞鈴を振つたり、體操をしたりする必要を認めませぬ。斯くて下女を廢すれば、朝は如何に寒くても、良人の役所の間に合ふやう色々準備せればならぬし、夜も相當の時間に寢ればならぬ所から、晨起就寢の時間も規則正しくなる道理、且又色々の仕事をすると、意志を轉換せしめる爲に憂鬱の氣性を除く種になるものです。斯くて良人が役所より直ちに歸られようと、歸られぬとに拘らず、兎に角晩の御膳には、相當なる料理を調へておき、早かれ遲かれ歸られたる時には、ニコヤカに出迎へ、例の御膳を揃へて御覽じませ、如何なる人も惡い氣持は致しませぬ。斯くして一日や二日で無く、幾月も〳〵熱心に續ければ、始は良人も惰性の爲に矢張歸宅の遲いことも有らうが、後には貴女の誠に感じ、家程樂しい處は無いと思ふやうになられます。斯うなれば良人も貴女一人にのみ苦勞をさせず、朝起れば或は雨戶を明けたり、或は庭の掃除でもしたりして、淡窓翁の詩句の如く、君汲ニ泉水ニ我拾レ薪といふやうに、其の平和實に外の見る目も羨やましくなるであらうと思ひます。下婢を廢しては、「世間に對して外見が惡い」と言はるゝかも知れぬ。去りなが

ら辯護士開業醫などの玄關を張られねばならぬ職とは違ひ、僅に三人暮し、お孃樣は既に八歳、少しのお使位は出來る、されば身體の健氣を犧牲に供へてまで虛榮を張る必要はありませぬ。餘りに臨んで倫繰り返せば妻君の不健康稍一家の平和を破る原因となるものは有りませぬ、妻君の不健康は不運動が大なる源をなし、運動法は下婢の職を務むるが最も善いと。尚次の問答をも參考にして下さい。

△家婦の衞生時間割

■ 家の主婦としては如何樣に身を處せば、理想の衞生法に適ひませうか、一日の時間割を簡單に御示し下され度。（小石川の不厭勞女）

■ 春夏秋冬の時節にも依りますし、又、家族の人數、御身分の如何等にも依るけれど、今茲には中等の生活で、家族は四人、而も四月を標準として左の時間割を記しておきます。

（一）午前五時、晨起

（二）五時より五時半まで、湯を沸し、室内掃除、冷水摩擦

（三）五時半より六時半まで、飯を炊き、副食物を煮、傍ら室内掃除の續。

（四）六時半乃至七時、朝食。

（五）七時より八時半に至る、飲食器を洗ひ、中食の準備及び新聞閲讀。

（六）八時より十一時まで、洗濯裁縫等。

（七）十一時より正午まで、中食の準備。

（八）正午、中食。

（九）正午より午後一時まで、飲食器を洗ひ、及び晩餐の準備。

（一〇）午後一時より四時まで、裁縫及び色々の雜務。

（一一）四時より五時まで、家の内外の掃除、入湯す可き日は入湯。

（一二）五時より六時まで、晩餐の準備。

（一三）六時、晩餐。

（一四）六時より七時まで、飲食器を洗ひ、明朝の食事準備。

（一五）七時より八時半まで、女學世界等閲讀及び學問技藝の練習。

（一六）八時半より九時まで、腰湯して暫時休憩。

（一七）九時、就寢。

斯くて來遊の御方は土曜日の晩御話し下され度と前以て吹聽しおかる可し。故に土曜日の晩は樂しく遊び、九時に寢られぬこともあらうし、又從つて日曜日の朝は五時より遲るゝことも有る可し。

（一）は太陽が地平線上に昇る刻よりも約一時間を早めたのである（二）先づ湯を沸す譯は、室内の掃除をして運動したる後其の熱い湯を一杯飲んで冷水摩擦をすると、冷水に堪へられ易いからである（三）は別に說明する必要も無い（四）の時間に朝食をすると、正午の中食までに五時間以上を隔てるから消化上に宜い（五）より（九）まではこれも說明する程の事は無いでせう（一〇）の雜務時間に外出しても可い（一

一)の時間に掃除をせぬ家もあれど、朝だけの掃除では不潔であるから〃非共行つて頂きたい(一三)の時間に晩餐をすると正午より六時間を隔てゝゐるから消化上には理想の時である(一五)雜誌の外に或は學問或は技藝を少し宛稽古して世の文明に後れぬやうにとの爲である。一日に三十分時間宛稽古しても絕えず學べば立派な智識を得られます(一六)は夏冬に限らず、大凡で十五分間科下半身を温めて寢る習慣を養ひますと便通月經が規則正しくなり、子宮病、胃腸病、不眠症等を豫防せられます(一七)は此の時間に寢ると、明朝の五時まで八時間あるから、睡眠の不足が無い譯である。

●質問書は端書にて女學世界質問の旨をしるして左記へ送られたし

東京市本鄕區弓町貳丁目八番地　糸左近

△家政女學校の新設

東洋幼稚園主任遠藤雄氏は、幼兒教育に從事する事十數年、其他長らく女子教育、家庭雜誌の經營等に與りて、此等の事には多くの經驗を有する人なるが、今回神田區北神保町十五番地に、東洋幼稚園と共に家政女學校を新築し、四月中旬より開校の由なり、女學校の教育方針は、快活勤勉の氣象を造る事を先にし、その上家庭の整理と子女を教養する智識を授けて實際の間に合ふ婦人を養成するにありて、尋常小學六年卒業者は普通科一年へ、高等小學二年卒業者は同二年へ、高等女學校卒業者、及び普通二年修業者は高等科へ、又入學試驗をなして各々相當の級へ入學を許すといふ。

△梅香女塾

小石川區原町百十一番地同塾にては、木村貞子女史、桑原謙藏氏等が主となりて、目下塾生の爲に、國語、漢文、英語、箏曲、其他裁縫、割烹等を授けつゝあるが、此度更に擴張して、割烹には井上春兵衛翁、裁縫には武田太郎吉氏等各々其の道の大家を聘して講習せしむる事と爲し、在塾生にあらざる通學者の入學をも許す事となしたりといふ。

△正派青山流活花會

去月十三日、東京美術倶樂部(江東、中村樓の跡)に於て、家元鄕琴松園氏門下生によつて催されたり、活花の數約二百瓶、おの〱盡きぬ趣ありしが、艷麗にして氣品に滿つるは、他流には見られぬところと見たり、特に來賓の注意を惹きしは花筏にして、本流にては最も重きを置くものと聞きぬ。茶席の設けもありて、貴婦人令嬢達の之に列なるもの多かりき、因に曰ふ、鄕氏は平常は日本橋區箔屋町十二番地の自宅にて門生に敎へつゝありと。

△碌々齋宗旦居士追悼會

去月二十日午前九時より、故表千家家元老師碌々齋宗旦居士追悼會を、廣尾祥雲寺中香林院にて擧行、當日京都より現家元千宗左氏も上京臨席ありて、會は嚴かに取行はれたり、來賓は何れも同好の名士貴婦人にして、別席にて點茶の饗應あり、午後四時に至りて散會。

△クラブ化粧品の發表

クラブ洗粉本舗中山太陽堂にては、今回京橋區鍛冶橋外に事務所を新設し廣告部及び庶務部、見本陳列所を設け、且つクラブ洗粉の姉妹化粧品としてクラブ歯磨及びクラブ白粉を發賣せる由なるが、發表草々非常の註文なる爲め同店にては製造に急ぎつゝありといふ。



いろいろの實驗

反動心の面白き利用

岡山　照子

土曜日の晩、母と兄と私と、三人が、火鉢を圍んでの雜談の序に、兄に向つて「私は兄樣がお歸りなすつてから、大層忙しくなりましたが自分ながら不思議な程よく勉强が出來るやうになりました」と申しますと、兄は「さうだらう、忙がしければ忙しい程、勉强が出來るものだ」と言つて、母と顏を見合せて、笑つて直ぐと書齋に引込んで了ひました。母は後でニコ〳〵しながら話されました「子供に惡戯を止せと言へば尙ほ爲たくなる、人を尊敬すれば、人も亦た自分を尊敬します、是は兄樣の口癖の樣に仰有る反動心から走るのですよ、兄樣がお歸りになつて…………今だから話すが……心理學の實驗にお前を使つたのだよ……人と云ふ者は妙なもので、勉强せよ〳〵と言はれて、多分の時間をあてがはれると、却つて時間の價ひが知れぬため、勉强は怠になります、そこでお前に用を吩附けては、時間を削いたのです、そしてお前には常々眞心、向上心等をよく說き聽かしてあるから、反動心の利用が遺憾なく出來ました」と、私は其以後好奇心に驅られて、總ての事に就いて何の程度まで反動心は利用が利くものかと、兄と一緖に實驗もし、且つ應用もして居ります、皆樣行つて御覽なさい、誰でも出來ますよ。

水汲み器に就いて

伊勢　角田政枝

井水を汲む器具としては私共では始めに綱を用ひましたが、綱は其兩端の釣瓶を釣した部分が直きに腐りまして、汚水を車の廻轉の度每に井戶の淸水中に混入します。其の上塵埃を落しまして不潔で御座います。そこで、次に金鏈を試みましたが、是れは暫らく使用しますと赤錆が生じまして、汲上の度に手が黃ばみます、奧樣方のお柔かな手では到底も長くは痛くて汲めません。第三にポンプを買ひまして吸上管に竹を使ひましたが、是れも始終管に水が滿ちて居る事とて、直きに腐りますので鐵管と換へました。是れは管の腐る心配もなく、管内を通ほる水は鐵分を含みますから、一方からは良好ですが、茶などの水としては有害であります。最後にバケツに竹の細い柄を附けて田畑に水を送る挺仕掛の道具と同樣の物を試みました。これは釣瓶の腐る憂が少なく、竹は安價で容易に汲上げられて誠に重寶でございます。

樣々の廢物利用

神戸　岡本朝子

○土瓶を強い火に掛けると直ぐ罅が入るでせう、するともう用ゐられません、さういふ時は生の白豆で罅を横に氣永く摺付けて御覽なさい、水ももらず永く使用出來ます又ランプのホヤの破れた時は、御飯つぶに砂糖を交ぜてねつて破目をつぐと又永く用ゐられます。

○玉子の殼を澤山ためておいて焙烙か何かで焙じて、粉引臼か何かで粉にしてお湯に溶る時、ぬかの中へ茶匙に一杯程入れて用ゐると、それは身體がすべ／＼して氣持がようございます。

○お茶の出殼は干して殘しておいて、枕に入れると、お頭を冷すのでいいさうです。

○それからリボンの古くなつたので、鼻緒を拵へて御覽なさい、美麗なのが出來て樂しみですよ。

食鹽保存の注意

大阪　小西うた

何鹽樣でも、鹽をお求めになりますと、後でおきましても、又器に入れて置きましても、其終り頃には、底がじけ／＼して、氣持が惡くなるものでございませう、私方でもいつも困つてゐましたが、いつでしたか其豫防法樣のものを始めました、それは鹽を入れる底へ、生灰をその底いつぱいの大きさの袋へいれたのをおきまして、それに鹽を入れますと、何日經ちましてもさら／＼致しまして誠に心地よく、結構でございます、これは鹽から出る水分を下の灰の中へ、吸入致すのでございます、もし同樣にお困りの方がありましたら、一つ試みてごらんなさいませ。

針と刃物の仕舞方

[illegible]　露子

私は縫物の時、一寸胸に針を刺して置いたのを忘れて妹の子供を抱き上げました、すると其子供が胸へ頭を擦り付けたので、大事な顔、而も眼の下に一文字形の傷を拵らへました、いまだに其痕が殘つて居ります胸へ針を刺す事は危險なことです。それから今一つは雨が降つた日、戸外へ出られなかつたものですから、家の中で子供が遊んで居りました、それで運惡く棚の下へ一人の子供が來た時、私がつひ小刀を其棚に上げて置いたのが落ちて來て、右の腕に怪我をさせました、かういふ事は子供のある家では餘程注意が要ります。

橙の食用法

和歌山　池田峯子

他樣では橙は漬け物にしたり、又は細かく切つて煮たりしますが、私共では橙の皮を一度よく煮て、お米の白水に漬けて、一週間程毎日白水を取かへては浸して置きます、而して後ちに出して一度雜と水洗ひし

ます、すると内側の白い部分は大方とれますから、其皮を適宜の大きさに切つて鍋に入れ、黒砂糖を甘い程入れて、框から出た汁の煮詰るまで煮ます、かくて煮えたらば笊に並べて水氣を切り、一日ほど風に當てます、それから之に白砂糖を混ぜ、また一日程置いて、更に砂糖を交ぜます、此樣に致しますと、カラ〳〵に成つて砂糖が解けぬ樣になり、一寸御茶菓子などに好くなります、之れに少し苦味を含ませ樣と思へば、白水に長く漬けぬやうにすれば宜しいのです、それから框の袋は絞ると好い酢が採れます、その酢に少し醬油を交ぜて、お刺身にでもかけますと他のお酢は喰べられません、皆樣お試し遊ばせ。

子供の躾け方

東京　夕顔

私は十六を頭に男女合せて六人の子持ですが、いづれも未だ腕白盛りの事とて、悪戯をするやら、喧嘩を始めるやら、殊に雨の降る日曜日などには外へ出られないので、夫は〳〵大暴れです、そこで私は此悪戯を矯正するためには一つの方法を考へましたそれは半紙を二寸巾位に切つて、下の方に銘々の名前を書いて、皆の見える所に貼つて置くのです、而して一日を午前と午後とに分けて、半日中温順しくして居つた者には其名の上に〇を一つ付け、悪戯をしたり、喧嘩をしたりした者には、×を付けるのです、ソレデ〇一つは一錢と定めて月末に其値だけの金を與へて、貯金させたのです、初の内は却々六ヶ敷かつたけれど、今は大變よい結果を示して居ります。其上、克己、忍耐、貯蓄等の心が養はれて大層宜しいやうに思はれます。

不意の變災時の氣轉

越後　野菊

或る夜のこと、不意の失火、而も大風で、火元は一軒隔いた北隣りで風下の私共の家は一番になめられる恐ろしい有樣、何うする間もありませんでしたが、子供ながらも慮を致して、奇效を奏しました、其は日頃親の言はれたことを咄嗟の間に思ひ出して、僅か八歳の妹と二人で重い大きな帳面二册を風呂敷に包んで、一生懸命に抱え出したのです、火事が鎭つてから父は私を見て「何より大事な物をよく氣が付いて出して呉れた」と言つて、大く褒めて下さいました。

應接の上手になつた事

兵庫　吉田みどり

私は寒い風に吹かれても見ず、極く樂しく温かな空氣の中に人と成りましたもので、唯今世帶は持つて居りますものゝ、家族は少いし、生活は簡單だし、用も無いので、恰と子供の儘事同樣です、そして他人樣と交際する機會もありませんから、談話が下手で、御世辭が言へないで、人と應接する事は大の苦痛です、其につき主人からも每度注意されますので、客のある每に私がお愛想に出て、應接の練習を致してゐるのですが

ある日、客が歸へつて後、主人から「大分應接が上手になつたね」とお褒めの言葉がありました聞けば障子の隙間から見て居たのだと、譯の無いことを言つて笑つて居らつしやる、けれど褒められるのは決して惡いものでなく、寧ろ大いに嬉しく思ひました。そして其度に六ケ敷い事でも、努むれば可なりに出來る樣になるものだと獨つくづく感じました。

子を持つて知つた事

相模　婦美子

私は二歳の折に、酷い風邪にかゝつて、已での事に命を奪られる所でした、其の所爲かして毎年暮から翌年四五月頃までにかけては風邪の引き通し、一日たりとて氣分の晴々した事は無い位でした、其爲、用心坊といふ綽名をとるほど、自分でも氣を付けて居るのですが、年々其季節になると屹度冒られるんです、それだのに何うでせう、今年は子持に成つて如何な晩でも二度三度は起きて、乳を哺せるので、オチ〳〵眠んだこともありませんのに……私はお乳が小さいので、人樣のやうに横に臥つてゐて哺ませる事が出來ませんから、其度に起き坐るので、隨分寒い思ひもしますが、分娩以來頓と風邪らしいものを引きません、姑樣に伺ふと、子供のある時は風邪は引かぬものだと仰有る、實際さうかも知れませぬ、一寸した事で母親が風邪を引き込むやうでは、子供の面倒は見られますまい、弱かつた私も此の子を産んでから、不思議な位丈夫に成つて血色までが好くなりました、御方便なものです。

薄給者の妻の料理

廣島　嘉壽榮

私共では湯豆腐を作るには、先づ上等の煮出し昆布の五寸位の長さのを二枚平鍋の底に敷いて水を入れ、其の眞中に猪口を置き、花鰹を入れ其上に醤油を入れ、猪口の外廻りに豆腐を金杓子で切りて入れ、蓋を致します、暫時して鰹醤油の煮えし頃網杓子で皿に盛り、湯をしたみ、其れに「チリレン」で鰹醤油を掛けて頂きます。そして私の家は三人暮しですから、豆腐二丁を求め、一丁餘を湯豆腐と致し、使ひ殘りし半丁餘りを鰹醤油の殘りを入れて翌日の淸汁といたします。その時には湯豆腐の時の御湯は別段不潔でありませんし、又昆布煮出しの味ひがあります。それも使用致します。又兩三日前からそら豆を水に漬け置き、先づ水煮して、それへ前の煮出昆布を小さくきざんで入れ、煮て醤油と砂糖を加えていたゞきます。最も鰹なりと魚の煮汁などをも入れます。上流の奥樣方は御笑ひでせうが、薄給者の妻はこんな事をしなければなりません。

前號に揭載せし文の中
△ふぢなみ女△桃園女史△石狩伊津子の三氏。並びに本號に揭載せし文の中△周防雪子△月來女史の住所を至急御報知あれ。



和歌

佐々木信綱先生選

一等

○　下野　片岡浪子

春來るや櫻の宮に花輪あむ少女のさまと世はみな笑める。

評　うつくしくたのしくのどかなる春をばたとへて、櫻の宮に花輪編む少女とやうにいへる、想像のたくみなるをもて天位に選びつ。

二等

○　越後　中野かず子

赤き花みどりの葉などいぢらしうなやみて細き春雨のふる。

評　可憐なる花の姿をよくうつし出られたり。

二等

○　信州　露子

おぼろ夜を雛の君が衣かりて蝶に嫁ぎし子が春のゆめ。

評　おとぎばなしを讀むやうにておもしろし。奇警。

三等

○　堺　酒井とみ子

一度は美き衣よそひ事もなく笑ひ興せし我れなりしかな。

評　人世といふものにふれて後、をとめなりし日を懐ふ女の情この三十一音の中によくあらはれたり。

三等

○　神戸　上野花子

いつはりも咎もあらぬ古郷に都をこひし少女なりしが。

評　都會の風にしみて、虚榮心にのみあこがるゝ女子の爲に、よき誡ともなるべき歌といふべし。

三等

○　豊後　菅原芳子

豊國の春ぞうれしき紺青の海の白帆を窓ごしに見る

評　かゝる窓の内にありて歌おもふむ境遇こそ、うらやましけれ。

秀逸

○　筑後　原田つる子

春の雨しづかにはれし筑紫野のぬれたる草を踏むこゝちよさ

○　信濃　平栗かつゑ

乘り馴れぬ馬に搖られて夕月の山吹多き里に着きけり

評「木曾にて」との詞書あり。木曾といへる感じ、いとよくあらはれたる歌なり。山吹多きの四句この歌の眼目なり。

○　安房　佐野綠子

蝶いくつ雪ふる如く散る花の中に交りて舞ふ美しさ

評　光琳などの畫を見るやうなり。うつくしき歌

○　北韓　山崎久子

冬の日の果敢なく暮れて入相の鐘は鳴りけり世の終るごと

○　橫濱　吉川香都子

琴賣りて淋しき春の雨の夜を病む弟の藥煮るかな

○　橫濱　川原田しん

淋しさに野に咲く花を取りきたり培へる身をあはれとおぼせ

○　長野　楠原たづ子

賺されて笑みしむかしの少女にてありえば或は君を頼まむ

○　駿河　丘靜子

ふとさめて我れを葬送のぞよめきと濤の音聽く春たけし夜半

○　麻布　あけぼの

ほろゝちる櫻月夜にむらさきの舞衣つけてあはんとぞおもふ

○　水戸　中根雅子

舞ひつかれ扇をすてゝ欄によりぬ花の香淡き春のおぼろ夜

佳作

○　大和　夕霞

馬醉木の花白くみだるゝ春日野に春の雨して若草もえぬ

○　愛知　村松光蓮尼

あゝ寂し花はわらへど春風はとけよとふけど如何にしてわれ

○　大阪　段谷秋子

しめやかに我傘を打つ春の雨きゝつゝひとり花の道ゆく

○　韓國　野村みつる

誘はれて闇に落ちたる紅の星に似し子といひたまはずや

○　秋田　波奈子

少女子よなれがほこれる花の笑やがては消えんかなしからずや

○　相模　富川嘉女子

萌つめる野邊の柏生の中にましろ若き草かももゆる心は

○　靜岡　清子

幾度か夢にかよひし古郷の山よ流れよ皆なつかしき

○　奈良　中富よしみ

深山木にいざよふ雲のうするゝを我が運命よと見る山の宿

○　芝　露香

うす紅のなごりつめたき山茶花や嫁がぬ人のおもかげに似て

○　横濱　小豆澤清野

春雨は若き女の悲しみを心にしめてなく如にふる

○　陸中　江田澄子

小雨して部屋も小暗きつれ／＼に妹とゝもに繪葉書を見る

○　下總　岩瀬千代子

ふるさとの森にしくればしかすがに胸やはらぎて木の香するかな

○　攝津　和久かつ子

森ふきて牧草ふきて羊ふきて春南歐の風やはらかき

○　福島　安達富久子

なき人のその面影ら見ゆる哉去年の春日を思ひ出づれば

○　芝　大塚しづ子

春の夜のあかき灯かげにわびげなるわが一時のさびしみぞよき

○　名古屋　千葉しげ子

春の日に夢みし花の香に過ひて母校忍びゐさすらひのわれ

○　下總　小澤まゆみ子

忍び音に泣かまほしけれ乳色の霧おぼろなる彌生の夕べ

○　越後　たつ子

雨煙る若葉の中に紅の花うすう見ゆ湯がへりの道

○　京都　藤井・常代子

春風よ氷に似たる憂き人の胸の思ひのとくるほど吹け

○　京都　福井ひで子

草餅に胡桃を添へて贈り來ぬ嵯峨の里なる乳母の家より

○　大阪　末摘花

淡路島かすみて見えしおも影は心のうちに今もうかべり

○　足利　桂一操子

美くしき花にひそめるまじものゝありとも知らず香に醉ふ君よ

○　宮城　沼倉龍子

闇の夜に一人み空を眺めつゝしみ／＼と知る星の清さよ

○　信州　あやこ

我里は松原がくれ家まばら菜の花三里はるの風吹く

○　飛騨　千代子

ふりはへのその夜の衣ぞ恨めしきさめ易してふむらさきにして

○　千葉　小出都留子

しめやかに雨の音きく花がめのあかき椿にわが思湧く

○　千葉　燕雨

ましろなる鳩のおりゐて紅梅のはら／＼とちるたそがれの庭

○　茨城　榊いち子

さらばとてわかれな惜む春の宵見おくる門に花ちりかゝる

○　北海道　梅野みき

思ひ出の淚ぞしげき春の夕淋しみふかく胸いたむかな

○　新潟　岩本芳子

つくし生ふる堤に立ちて細流の藍のうつれる春の霧みる

○　長野　西條梅子

稚の子が脊へる肩に一枝の椿の花あり心優しき

○　神奈川　笠原りん子

雪の日は爐のまはりなる故郷の父母のかほほの〻うかびぬ

○　三河　鈴木まゆみ

なつかしき思ひわきくるこの思ひ寛のあらはれてはまんとするや

○　但馬　井上美登子

ともすれば滴ゆく胸を抑へかれし物狂ほしの少女となりぬ

○　豊後　熊谷野菊

夕されば工夫の群れの歸りゆく木枯すさむ山の手の町

○　四谷　戸田道子

我窓の白梅匂ふたそがれにたゞ物思ふ柱脊にして

○　千葉　吉松香芽子

うつら〳〵琴の音きけばそゞろにも逝きし艶麗の君をしぞ思ふ

○　同　同

近江路やつかれていこふ掛茶屋に折々しきる遠音鶯

○　埼玉　新井りけい

萌え出づる蘆の汀に忘られて朽ちゆく舟に鴨のむれゐる

○　美濃　三田京子

遠町の灯のかゞやきに昔し見し我故郷の夜祭思ふ

○　伊豆　鈴木矢壽子

春雨は庭に餌拾ふ雛鳥の羽を濡らしぬ緋桃花散る

○　大和　野尻石野

古びたるうつし畫なんどとり出でゝ友と笑ひぬ故里の春

○　兵庫　小林ゑん子

霜ゆきをしのぎ萌え出る若草は花も咲くべく實もむすぶべし

○　牛込　藤澤銀子

物めぐむ神の心のいちじるしくさ木さか行く春の天地

○　長野　石上照子

宵の灯の黄ばめる空にほの白う舞いくる蝶をあはれとも見ぬ

○　廣島　兒玉露之

霜白く氷れる藪に曉の月は殘りてせきれいの鳴く

○　三重　西操子

この七日我にこもりゐる草の戸に繁とはず三月寒き

○　越後　明子

十六夜の月にうつれる梅が枝の少さくなるを見つゝねむりぬ

○　大和　内田孝子

ふるさとの古き家居を思出ぬべに椿などちりしく夕べ

○　若狹　後瀬花子

ひやゝけき墓によればこほろぎはこの世の外のさびしみを鳴く

○　本郷　まさ子

古き日記見れば咲かる亡き姉がくろきひとみを忘れ得ざれば

○　伊豫　山口多歌子

我友は柔く小さき唇に乳房ふくむる身とはなりにき

○　美濃　節島小枝

君は今いづこ來まさむなどおもひ不安に雨の空を見てたつ

○　相模　白露子

小羊の食むにまかせて牧童は若草もゆる野にうまいしぬ

○　丹波　上田鼎子

ともし火のほのかに匂ふ窓にして琴かきならす逝く春の人

○　松山　碌川廓子

一人すむ我が門の櫻さきて終日きこゆ臼きざむ音
○　山形　白鳥折枝子

大なる望かなひし昨日今日またなにものかれがふ心よ
○　四日市　通子

參差たる枝もる月のもとを行く小舟の様に我生は逝く
○　磐城　北郷輝

桃の花黑髮にさしほゝゑみてよきやと問ふがつれなりし君
○　宮城　小山田緑子

まぼろしの君が面かげなつかしみ夢の巷を今日も辿りぬ
○　肥前　熊本ゑい

霧のなかぬばかりぞ慣なるさえし月夜の白梅の花
○　播磨　つれ子

月出でぬ地の上なるはらからをこふとし開く花あるに似て
○　肥前　梅崎かり

師の君の病の床にゐますにそのどけき春もさみしかりける
○　布哇　淺海薫の人

入船と出船と黒き煙はき胸の想ひを語るさま見よ
○　讃岐　衣輪すゑ子

しのゝめの八重の潮路に似て煙る春朝晴のひばり鳴く空
○　門司　鶴吉はるみ

なつかしき情の人のみ言葉の様によせくる春の潮かな
○　栃木　鈴木いつ子

白き雲ゆるくはなれて故郷の山なつかしき雨あがりかな
○　信濃　山越悦子

紫に靄める空に紅の雲彩どりて春の日くれぬ
○　長崎　天野春子

きかまほし流れもゆるき紫の水にちりしく花の行方を
○　信濃　波星花子

花の山我が亡き君も驢馬召して忍び來らしも鐘あまたなる
○　鳥取　わかば子

うくひすのはつ音もきかずきさらぎの月も空しくすぎにけるかな
○　牛込　華子

何となく人なつかしき夕かなまばら星かげかぞへて居れば
○　大阪　中島麻子

谷かげのおとろがなかに咲き出でゝものおもひげぬ山菊の花。
○　小石川　山地岸子

六月のましろき花は乳の香と幼き戀の思ひ出を生む
○　美作　龍子

老いてなほ齢とりたゝす故郷の父母戀ひて泣かぬ日ぞなき
○　美作　田鶴子

生れし子は男子なりけりゆく末はつゝやとるべき筆やとるべき
○　本郷　壬生むめ

刺多き茨からたちたらの木も芽出しやさしき春雨の園
○　大阪　見花登美子

去年の秋亡せにし人のいまさばと袖をうるほすひなまつりかな
○　大阪　梅村薫花

戸によりてまたもうれひにしづむとき雲の流れぬ母ます國へ
○　韓國　大井柳子

吾れと吾が黑髮の香をなつかしみすく手たゆたふ朝化粧哉



書簡文

旅にある夫の許に

和泉　井上とみ子

暫く音信がございませんが、御機嫌好う入らつしやいませうね、母樣も私も夏子も至つて壯健で風邪一つ引かずに居ります。

夏子は御出立の際に比べて、見違へる程に生長しましたので、此次御歸宅の節どんなにびつくり遊ばすでせうと母樣とお噂致して居ます。

先日お送り下さいました人形は大さう夏子の氣に入りまして、始終抱いて遊んで居ります、

此の間ポチが鉢を壞したあの杏の盆栽は、枯らしてはならぬと思つて植由を呼んで手入れさせましたが、どうやら枯れさうなと申して居ます。どうも申譯がありません。この手紙の端を汚した墨の痕は、今傍に居た夏子が墨を弄つて指を汚した序に、お父樣にお見せといつて押させた手の形なのです。大きうなつたでせう。(一等)

都の友へ返し

堺　綿田梅香女

都の春は今如何に、山里はまだ梅の蕾堅うて、鶯も來鳴かず、日毎の寒さにちゞこまり居り候折柄お懐かしき御便り、嬉しく拜しまゐらせ候、御尋ねに預り候へど、まことにはづかしく存候、素より立派な目的もなき身なれど、さりとて此まゝ片山里にくち果てんも心ならず、ひたすら思ひ惱み居り候、あゝ實に世の柵はとりにくきものにて候よ、一人の兄は兵舍に起臥の身なれば、私が都に上り候曉は、老いたる父母を誰れか慰むべき、思へば學びの道に身をゆだれんはとても難き望みに候、あゝ多く書を讀まずとも品高ければ我は書を讀めりと　てすまして居るべきや、去りとは情けなき限り、お察し被下度候、かしこ、(二等)

北のはてより

牛込　平塚白百合

當地の冬は實際たまりません、オンドルたいて、十一月から三月まで半ヶ年は穴の中にでもゐるやうです。すべてが家の中で辨じられるやうになつてゐるからよいやうなものゝ、いざ外出となると眞毛のものをはなろやら大騷ぎ。鮪の刺身などは夢にも見られず、獸物も喰べられません川で取れた鮭を臺所の天井から下げて、燻煙したのを少しづゝ切つてたべてゐます。これから春になると、籠から出た小鳥のやうに、久しくこもつてゐた眼に、櫻も梅も桃も一時に見られて、まことに晴々とするけれど、夏は無い位で間もなく秋になつて了ひます。そして十月頃はもう手がかぢかむ程で、山はすつかり白くなります。こんなに春夏秋の短かい所で何が出來ませう。北海道は何處でもかうなんです。明るい華やかな都の御樣子を是非お知らせ下さいませ。此頃は郵便もとだえがちで細目に明けた窓から、樺の林が唯眞白に見えるのみです。(三等)

遠き姉へ

豊前　筑紫女

お手紙ありがたう。春ちやんのお齒が出たつてれ。嘸ぞ可愛らしいでせうれ。でも此時期には痒ゆがつて、乳首を嚙むんですつて。西野のお島さんは嚙み傷が原で、それから腫れて、大變酷い目に會つたさうです。御注意なさいよ。

お母さんの寫眞れ、お天氣が悪いからつて、未だ出來ないの。どうせ貴方のお言傳もあるし、道子樣御見舞の序に、日出軒ですから、病院からは近し、催促します。何本今しばらくの御辛抱を……。當地は唯今雨。寒がりのお父樣が今日は珍らしく、大王松の鉢を緣に上げたり下したして被在います。義兄さまに宜しく。左樣なら。(秀逸)

故鄕の母上へ

岡山　田　和　子

彼岸も近づきましたのに、何といふお寒い事で御座いませうれ。姉樣のゐらつしやる第五寮の窓からは、あの眞つ白い奈義の山がよく見えますのよ。私は朝夕それを見に參りますの。さうしますと、皆樣が、田屋さんの戀人は奈義さんだつてお笑ひ遊ばすのよ。だつてあの山の麓はなつかしい〳〵我が故鄕ですもの。姉樣もこんどは御卒業ですから、一層勉强してゐらつしやいますよ。アノ母樣、こんどの卒業生總代の答辭は姉樣がお讀みになるのですつて。皆樣がさう仰有つてゞす。私何だか嬉しいわ。けれども皆樣のお噂だけでよくはわかりません。私も今度は初ての進級ですし、それに姉樣に敗けてはと思つて一生懸命勉强してゐます。春さむの頃、御身御大切に(秀逸)

妹より大事の兄樣に

東京　君　榮

事とは全く名ばかりよ。庭の隅の方には未だザク〳〵と霜のしさうな霜柱が澤山たつて居るんですもの。でも皆丈夫ですから、御安心下さいまし。けれど織田樣の所ぢや大變よ、新聞でごらんになつたでせう、よく兄樣と少さい時から遊んだ方れ、その御兄弟三人が一緒に亡くなつてしまつたの。思へば禅つて恐ろしいものれ。天命とは云ひながらあたら青年を十一人も一緒に飮んでしまつて、そんな事を考へると私何だか心配になつたわ。兄樣も學校を御卒業なすつたら、始終舟にばかり乘つてゐらつしやるのでせう。でも耳縱なら大丈夫でせうか。……あゝ其んな事云ふの止めませう、又兄樣にしかられるから。けれどお身體を大切にして、餘りボートにばかり乘らないで頂戴よ、一生のお願ひですから。

初產を祝する文

伊勢　安井らく子

昨日花子さんからの御手紙で、和子樣をお擧げ遊ばしたと承りました、どんなにお可愛らしいでせう、近ければお喜びに上つて抱かしていたゞきますものを、それにしてもなぜ早流私にお知らせ下さらなかつたの、おかくし立てなさるのをおうらみ申します、これは手樣ですが、おれまきにでも仕立てゝ上げて下さいまし、母よりもよろしく、先はおよろこびまで。

仙臺の兄に

小石川　て　い　子

いつもより暖かい故か今年はまだ母樣の例の御病氣が出ません。太郎

はそれはよく勉強してゐてよ、而して相變らず元氣で、よく笑はせるのけれども世間は母樣と私と二人限りでせう、淋しいわ。私は最うすつかり快くなりましたけれども、母樣は先達頭痛がして二日程お臥りになつたの、細かい雨の降る寒い日よ。私、此頃いろんな事考へるの、それで教會へ行くのよ、いけないでせうか？
私、何んにも信仰がないでせう、ほんとに淋しいこと。女つてものは意氣地のないものれ、矢つ張り兄樣がたよりだわ。御身體を御大事にれ、而して面白い御手紙待つて居ります。

病みて歸國する折

京都　ひさ子

私歸國につき途中御館にて休めよとのやさしき御玉章、嬉數拜見致候、されど此度は傳染の性質をおぶる胸の病にて候へば公徳を重んじてわざとどなた樣へも御立寄申上げざる覺悟、決して他意あるには無之候まま何卒不惡思召被遊度候、世の進歩につれ今は全治する例もありとは聞けど、曾ては不治とさへ稱へられし病の、けふ別れてはいつの日にか再び樂しきホームの人となるやらんなど思へば、此北陸の婿家を出立するにも、轉た感慨惜く能はず候先は右御申譯まで。

旅の空より都の友へ

阿波　西野いさを

千代子樣、お見送り下さいまして、難有う御座いました。冷い風は汽車の窓に吹き込んで、病める身につらき動揺、空氣枕に額を埋めて、ひとり旅の佗しさを、しみ〴〵味はひました。都は未だ春のおとづれなきに國府津のあたり梅はもう盛り過ぎて、藁屋の庭に坐る老媼の背に白く光がこぼれてゐました。此處より近き熱海は嘸や暖く、梅林の花も今は散つてゐるでせう。あゝ千代子樣、都の春を後にして南國の片田舍に、老いたる母の膝に、病める身を投げかけねばならぬ私の胸中をお察し下さいまし。私は今日疲れた身を梅田に降しました。又これから汽船にゆられるのです。

新茶をおくる文

攝津　美　紅女

手前共にて製造したる新茶、一瓶じ程なれど、小包を以てお送り致し候もとより黑人の拵へたるには比ぶべくも候はねど、父が手づから鍬とりて培ひ、私が手拭うちかぶりてつみとりたる程を思召して、御風味なし下さらばうれしく存じ候。
當地は此頃宇治川の清流、朝日山の新緑を浮べ、折々は時鳥のしのび音をもらし候など、自然の風物まことに見すてがたく、これのみは都會の御方にも誇るに足るべしと存じ候。茶摘のおもしろきをも聞こしめしがてら、この程過さず御遊びに御越し下され度かゝる折に御好みのスヰトホームなど承らば、如何ばかりたのしく候はむ。床なるヴアイオリンも友まちがほに候。(三等)

故鄕の友へ

丹波　上田艶子

風いと寒かりし冬も、いつしか過ぎ去りて、長閑けき春は來り候。おわたりには定めてもえ出でし、青草の中に笑む菫たんぽぽ、恰ら花毛氈にも似て限りなく美しう候はん、

去年の春、君と別れし鎮守の森の、櫻は開き候や、吹くとしもなき風にハラ〳〵と櫻の花散る下こそ、こよなう、懷しくは候へ。春雨の淋しき月、さては朧の月影てらす夜每、寮舍の寂寞にえたへぬ妾は、只一人窓邊によりて、せめてもと、長き〳〵默想にふけること度々に候。あはれ故鄕こひしと偲ぶ子に、都の春景色もらし給へかし。

北國なる鄕里の友に

小石川　田村、波津子

もう都では櫻が散つてしまつたのに、御地では今眞盛ですつて、さぞ御宅の離れの紅梅の香り床しい事でせう。每朝可愛らしい鶯が來て啼くでせうれ、貴孃はそれをきゝつゝあの床しい丸窓で詩想に耽つて居なさるでせう、目のあたり見えるやうですわ、それに引きかへ私共は卒業試驗で每日ノートと首引き、芙蓉峯の梅の枝との御事恐れ入りました、セネアスなき私故一筋の毛につながつて卒業出來れば大出來です、今日は多忙故、此の次また、さようなら。

世話になつた禮

羽後　金まつえ

御地滯在中は一方ならぬ御厄介に相成り誠に忝けなく存じ候、元より不案內の私共とて萬事につけ御世話にのみ相成り御禮の申しやうも無之候、初旅の事とて嬉しく珍らしからぬは無之候へどいまだに不思議なは知恩院の叢張、さては尊く床かしき昔ながらの紫宸殿、可笑しきは金閣寺にて、御茶の御馳走にあづかりしも、其心得なき私は叔母樣を見てそのまゝ、盜といはれても怒られまじと一人ほゝゑまれ申し候、淸水觀音に詣うでゝ途すがら買ひ求めし一輪挿は文机の友と致すつもりに候、母の話は花か人かとまがふ都踊と、西陣織の帶、友禪染の小袖、出しては眺め度の出來しなほこり居り候、私のみ嵐山嵯峨の古蹟、桃山御殿等、繪端書の說明に忙しう候、いづれゆる〳〵申し上ぐべく、先づは取りあへず御禮のみ。

夢二畫集（花の卷）

竹久夢二著

さきに春の卷を著はしたる著者は、此度又花の卷を著はしたり、袖珍形の淸楚なる册子にして、內容は春の卷と等しく、從來諸雜誌にかゝげたるものなり、此の卷は著者獨得の瓏ともいふべき若き女、花、少女等に因めるもの多く收めたれば、ことに趣味の深きを覺ゆ、定價金參拾五錢　麴町區麴町洛陽堂發行。

婦女界（第一卷第一號）

此度新らしく發行せらる、內容は大隈伯の「政治家は斯る妻を擇ぶ」諸家の意見、成瀨仁藏氏の「將來女子の爲すべき什事と學ぶべき事柄」、鳩山春子夫人の「二人の子供を育て上げた私の苦心」、山脇房子夫人の「婦人は今後ますます交際社會に出なければならぬ」等面白き記事多く、挿畫も美しく、近來新らしく刊行される婦人雜誌中ではよく出來居る方なり、定價金拾五錢、神田區表神保町同文館發行、

花

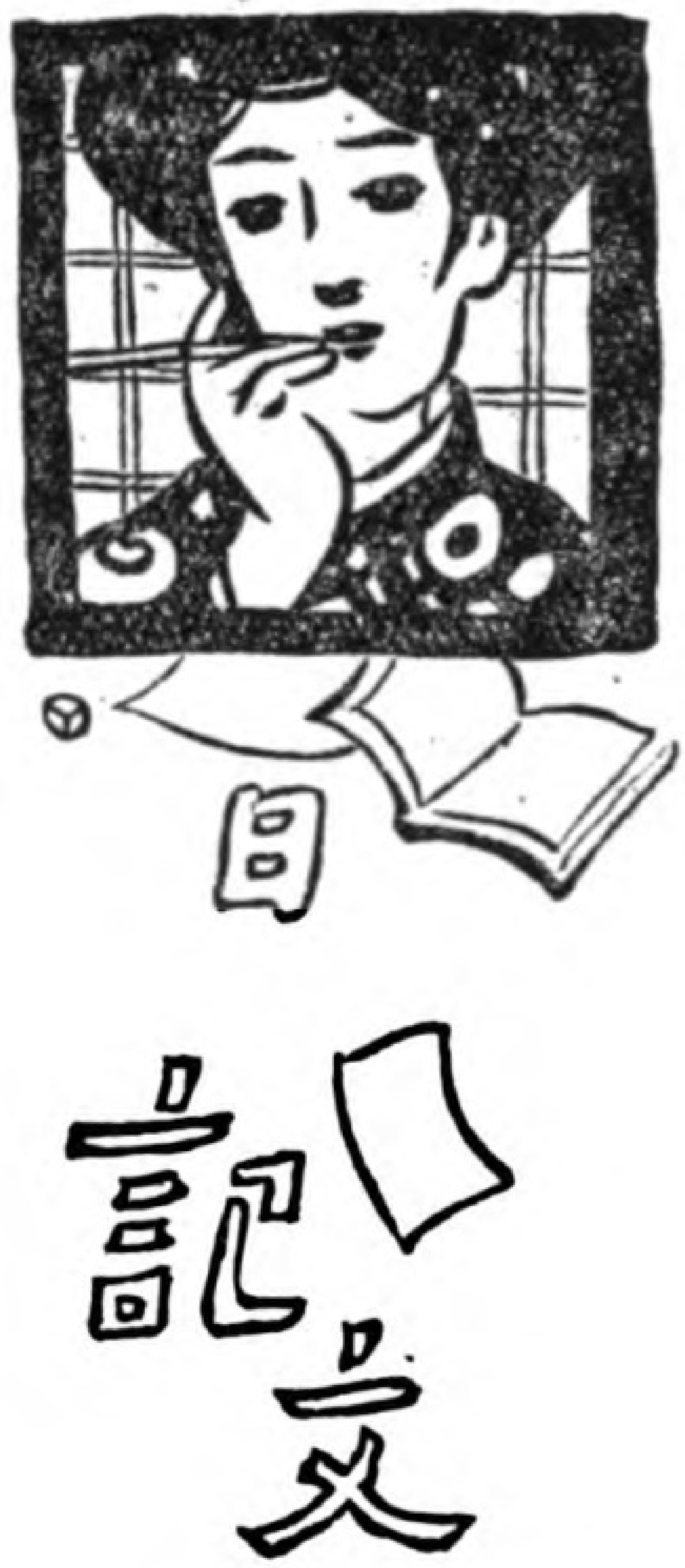
江南文三・與謝野晶子著

本書は草木に關する詩歌、神話、惡口、傳說、その草木の表す意味、異名俚諺、故事、熟語等を書き集めたものである草花に人事を寓し非情の草木をして有情的ならしめ花をして生命あるもの、思想あるもの、意志あるものとして讀まれるやうに書いたもので、科學より割り出した草木の說明よりも、よほどおもしろい歌や詩をつくる人には必要かも知れぬ神田誠文館發行

現代才媛文範

久保天隨著

文學に志ある女流として、最近文界の趨勢を知らしめむが爲に編爲されたものにて上代より明治に至るまで、代々に輩出せし名媛の詞藻の一斑を叙述して時代の變遷を知らしめ、文範としては德川時代の國文學勃興の盛世に現はれた才媛井上通女、弓屋じつ子、荷田蒼生子を始めとして明治年間にては故中島湘煙、稅所篤子、樋口一葉、若松賤子、現代にては三宅、小金井、大塚、下田、三輪田、等諸名流の文章を集めてこれに評註を加へたれば作文に裨益する大なるべし定價一圓金刺芳流堂發行



歸郷日記の一節

神奈川　岸なみ子

卒業試驗を濟ませずに新橋へと急いだ、出入の人波にもまれて、自分を見送つて下さるお友達が五人、後ろから大聲に、濱さん、濱さんとは後れ走の琴子の君、いつもながらお元氣な方、赤毛布の東京見物が一組つゞいてホーネームンの新郎新婦がくる。誰れか私の袖を引いた。濱さんもあの方の樣にと花子の君はのたまふ。乘つたのは九時の下り列車窓を隔てゝ友と吾、試驗休みには良人(ハス)を拜見に參りますよとは濱子の君、豐子の君は、新郎新婦の寫眞を送つて下さいなですつて。知らぬ他人も居るものを、さりとはあまりにお口の惡いこと、發車までわづか五分の待ち遠しさ、そつと、頰に手をあてゝ見ると、燃える樣、思出多き吾れを乘せた汽車は、間もなく進行を始めた。途中の安全(フェアーウエル)を祈ると皆樣の呼び給ひつゝ、切れよと許り手布を振り給ふ、呼びつ呼ばれつ、一秒毎に離れゆく友と吾、憎くや風曲りし軌道は友の姿を隱して了つた。

島田髷の一日

牛込　華子

生れて始めて島田に結ふ。何だかいやに頭が重くて、梅ヶ谷の提り拳でも、乘つてゐる樣な氣がする、晴れて好いお天氣なので、散歩でもしたらと思ふけれど。此髮ではいや〳〵。洋館へ行つて、オルガンのふたを取ると、又例の「水や空」といふ大好きの歌が出る。此室には誰も居ないからと、島田にも恥ぢず、大聲に歌ひ出すと、お隣の窓が細目にあいて、誰か覗いて居る樣子。アツキリ砲兵大尉の新夫人と思つたから、私も少々皮肉に「スイートホーム」を思ひつきりアクセントつけて彈き出した、先方は流石にはづかしかつたか、ハタと障子のしまる。音がする。私ゝ隨分人がわるい。夕方兄樣が、天一見に行かうとおつしやる。天一と聞いては、島田でも何でも、我慢が出來ない。とう〳〵ついて行く。何度見ても面白い。種を見破つてやると、力んで出かけた兄樣迄が餘程殘念だと見えて、ウン〳〵唸つてゐらつしやる。本統に可笑しかつた。十時半歸宅。(貳等)

土曜日の朝と晩

駿河　丘靜子

第二時修身。今日より新任の山村先生の講義をうかゞふ。先生お年は三十五六、まだお若いのに御勉强が過ぎた爲めか、額が廣く禿げ上つてゐらつしやる。大きなお目は恐しく光つて、赤い太い髯を無雜作に伸してゐらつしやるが、お聲は割合に優しい。けれど妙な節があり、其上お鼻をクン〳〵と鳴らす癖があるので、それが氣になつて、肝心の御講義

が耳に入らなかつた。丸尾さんが其クン〳〵を勘定したら半時間に四十何回とやら。

晩七時。兄さんは十時迄に歸ると言つて出て行かれた。私は朝の埋合せをしやうと、修身の本を開いたが、よく分らない。風もないのに溝の音が微に聞え出した。春が來たなと思つて、うつとり聞いてゐると、「御免なさい。」といふ聲。吾に返つて立ち掛けたが、ふと氣がついて坐つて了つた。此前、兄さんの作聲に欺された事があるので「御免なさい。」と復た。圖々しいと思つて態と咳拂ひをして知らん顔してゐた。と、暫く音もしない、何か考へてゐる樣子。少し變だと思つてゐると、「丘さんは此方でしたれ。私は藤田ですが……。」と、確に其の人の聲!。はつと驚いて起つて行くと、「ハッハッ……」と仁王立。「あれッ。口惜しいッ!」思はず叫んで。その腕に取りついた。(秀逸)

訪問の記

東京　雅子

今日は君子樣と御一緒に幸子さんの御宅に伺ふ御約束がしてあるので、急いでお化粧に取りかゝる、日本髮を束髮に直して淡紅色のリボンを確乎と結ぶ。兄樣が御覽遊したらリボンが歩いてる樣だなんて屹度仰有るのよ、今日のまつ子の扮裝は……なんてオホヽヽ講釋師みたいね。縞御召の着物に藤色縮緬の被布、ウオッチ、チエーンを胸にかけて、右手にはリングが光つて居る、オヤ門があいた、あゝ君子樣よ、急いで駈けて行くと、美しう笑んで立つて居らつしやる思ひきり前の出たマガレットにして、御召の着物に紋羽二重の御羽織、「まあよく御早くれ、一寸御上り遊せなつて申上ると、えゝ有難う、幸子さんが待つてゐらつしやるでせうからつて、仰有るので私は直ぐと二人お揃ひに買つた空氣草履を穿いて、番町の御宅に伺つた。するとお子さん飛んで出ていらして、例のロマンチックの眼に物言はせて、きつく二人の手をお握り遊した。幸子さんの御書齋で例の雄辯を振つて、づん〳〵騷いだ揚句、牛込見附の處まで送つて頂いて、江戸川端の街燈にあかりの點く頃我家へ歸つた。(秀逸)

卒業前の日曜日

福岡　八島小枝子

車井の軋に曉知らぬ眠を破られて、起き出で見れば、花曇りと云ふにはちと早いが、空はドンヨリと春らしう曇つて居る。風でも干やうと、昨日土だらけにした足袋を二足持つて、白桃の咲く背戸の小川へ洗濯に行く。石鹼つけてパシヤ〳〵水玉を飛し乍ら、卒業式も愈々明後日だなと種々空想に耽つた、人一倍に別れを悲しむ私は險しい學の山路を上り得て首尾よく春の花を摘み得た嬉しさよりも、年月馴れた學舍を後にして、みなさけ深い師の君と袂を分たればならぬ悲しさの方が先だつて涙がにじむ。蚤き節々を語つては慰められつ慰めつ、春秋睦みあつた友垣は樂ある鄕を慕ひて、白雲隔つ故鄕へ去つて了うのも二三日の中だ、あゝ、いつの日か又逢ふことが出來るであらう。

ポッリン、向岸にある一重椿が僅かに溫むだ水面に落ちて、浮きつ沈みつ私の方へ流れて來る。噫、此時私はあの幼うして世を捨てた黑潮の道子さんが何とはなしに偲ばれた。(秀逸)

初產日記

千葉　山口秋子

陣がひきつれる樣で、お腹の樣子が變だ、姑樣は其れと察してか產褥を展べて下すつた。私は姑樣に扶けられて寢て見たり起きて見たりしたが、腹痛ははげしく成るばかり、產婆の來た時分は、まるで夢中でした。

ふと目が覺めて見ると、私の側には赤い布團に包まつた、赤ン坊がスヤ〳〵と眠つて居る。私は珍らし相に見た、旦那樣に似て居るとも、自分に似た處があるとは思はれない、只だ眞赤な子とばかり思つた、十代で母と成つた私はお人形と寢て居る樣な氣がした。

作州の山家に居る母は昨日も案じてよこした、早く安產を知らせて安心させたい、其れにしても四時には歸へられる旦那樣の御歸へりが待ちどほしくて仕方が無い。二時頃卵のお粥を頂く、何とも言へない程美味かつた。

お祝のお酒に陶然となつた旦那樣は、餘り大きな腹だつたから三人位飛び出すかと思つたと嬉れし相に語られた、小人數で淋びしかつた私の家も、これからは笑ひ聲がお門の外迄も洩れる樣に成るでせう。(壹等)

風の夜の記

兵庫　春子

柱時計がチン〳〵鳴る、數へるともう十一時。數學の宿題に、さんざ惱まされた頭を擡げて、もう止さうと机の上を片附けた。兄樣は、と見ると、まだ一心にペンを走らして被居る。奧は疾うに眠まれたとみえてお話聲もしない。折々父樣の鼾聲が微に聞こえる。ゴーゴーと松が鳴る。風の荒れ狂ふ音。鼠の天井を走る音。すべてが物凄い私は無言で、火の氣のない火鉢に、そつと手を翳して耳を澄すと、ミシリミシリと、風が當る每に雨戸が鳴る、怪しい人でも來たやうに。と、何處からともなく冷たい風が這入つて來て、私の體を包む。私の胸はもう、恐怖で滿ち充ちて居る。目に見えぬ、或恐しいものが、この六疊の書齋を圍んで、今にも押し寄せて來さうな感がして、恐しくて堪らなくなつた。「兄樣!」と低く呼んだ。「まだ起きて居たのか構はずに先へお眠み」と優しく仰有て、復たペンを持たれる。私は此室を一人出るのが恐しい。氣のせいかミシリ、ミシリと、時々怪しい音がする。風は却々止みさうにない。

寂しき日

小石川　てい子

二十九日、くもり、あたゝか、何うして母樣はかうお弱くなつたんでせう、今日も亦お頭が痛むと仰有つて終日お床を離れなかつた。お父樣が亡くなつてから二年、どうも御元氣がない。人樣は未だお若い〳〵と仰有るけれども、それはお愛想よく御客と咄す時のお母樣を見るからで自分とお母樣とたつた二人ぎりでゐる多くの時を知らないのだ。

夕方から細かい雨になつた、御臺所も早く片付いたので、少しお習字をしやうと机に向つたが、何だか妙に悲しくなつて來て、噛んだ筆を擱いて了まつた。自分までがかう弱くなつたのだらう。

可愛い赤さんを產まれた初枝さんや、女子大學を卒へられるつゆ子さんなど、斯うしてゐる私を何と思つてゐらつしやるだらう。違つても元のやうにお話が合ふか知ら、私は此の先き何うなり行くのだらうと思ふと淋しい。(三等)

曇つた日

大和　みさを

曇つてゐるので、殺合がない騷がしい中に御飯が濟んで、妹や弟は學校に行つて了ふやうやく靜かになつた。やれ〳〵と胸を撫で卸して新聞を見る、お蜜頃山形縣の何とやら云ふ方がいらつしやる。一寸も知らぬ人だけど、故郷の人に逢ふやと思ふと何となくなつかしい、本屋に行くと今日漸く女學世界が來た。田舍は是だから厭になつちまふ。是で本屋に三ヶ日の日参だもの空模樣が降り出しさうになつて來たので、急いで歸つて女學世界を見る。まあ内藤さんのが出て居ない、何だか物足りない樣だ彼の方は壇上の女王れ、みんなチヤームされてるんだもの。お客さんがいらしつたけど途中でよすのが厭さに知らぬ顔してゐたところ、後でさん〴〵妹にこぼされた。今日は曇つて居るもんだから甞屋の影も見えぬ。

姉様の病ひ

福島　安達富久子

姉樣は、お産遊ばしてから、ヒステリーに冒された、亂れ髮をダラリと垂れ蒼白い面を壁に擂り付けて、ひとり平然と座敷の片隅にゐなさる、私は何うしていいやら分らない、細い手を引いて、靜にベツトへお連れ申すと、嚙み切つた口を潰すとも無く、潰して、どうせ、死ぬんだから、打捨つて置き、と凄い眼を反向けて、お床の中へ潛り込まれた、力のない私の手は、涙に濡れて、袂を顔に當てる外なかつた。

お正月が近い去年の末肩に痛を感ずるやうな、ひどい風に吹かれて、某病院へ入院した、病室の檐端に囀づる雀の聲を聞くのみの寂しい生活を七十日餘も續けた。

其のお蔭で、嬉しや、星にも似た眼差、黒髮結つて、元の姉様に、おなり遊ばして、と喜んだのも束の間、退院して程なく、打つて變つての御樣子。病氣はまだ癒えない。今日も母樣の頬に熱い涙が零れてゐた。

ながい袖

佐賀　草露

三日、好天氣、日當の良い緣側に座布團持ち出して縫物を擴げる、袖を一寸あたつて見ると一尺九寸、不圖私は之を裁つた時の事を思ひ浮べた。三年前‥‥女學校‥‥寄宿舍‥‥自習室‥‥と思ふと、我れ知らずほゝゑまれる、裁つたのは裁縫室で、傍に春野さんが居らしたつけ、あの方が良い柄ですれと、言葉少なに褒めて下すつたのまで、覺えて居るからなかしい。日暮迄かゝつて大急ぎで縫ひ上げたのは、翌日の會にと思つたからであつた。其頃の校内の流行は袖を馬鹿に長くすることであつたが、私もいつかこの流行にかぶれて、つい、こんな袖にこしらへたのだ、翌日の學藝會に之を着て出たが、幹事役の私は斡旋に忙しく何うしても多くの人々の前を通らればならぬので、何だか氣恥かしく、始終顔のほてつたことも記憶して居る。

此長袖の似合つたあの時分、華やかな樂しみに滿ち充ちて居たあの頃の事を思ひ出すと、まるで夢のやう。

さるにても次第に袖の短くなるのが、何となくかなしい。

草刈日記

みどり

麗らかな好い日、真白な手拭を姉様かぶりにして、着物の裾を端折つて、雪の様な素足に赤い鼻緒の草履をはいて籠を片手に畑へ行く見渡す限り青々と何處を見ても若い〳〵思ひが胸に湧く、あゝ春、あこがれ多き春よ、氷がとけて若草が萌えて、花が咲いた、熱い血汐の全身に漲る私達の今は春だ花の盛りだ。やがて春逝き、花の散る時は、私達も結婚といふ名の下に實を結ばればならぬ。あゝいつまでも〳〵、散らず衰へず、此儘の春であつてほしい、

思へば世の中はまるで、謎みたいだ昨日も榎本の叔母様がいらしつてのお話に、文さんももうだつて、このもう〳〵が氣にかゝるわ。

聞けば名栗の加藤さんに、同級生であつた仙波の船津様が花嫁候補者の任にあたつて、來る×日か見合ださうな、「モシ草苅さんの孝事は禁物です、手の方がお留守になります」と、まあ憎らしい兄様、いつか後に立つての惡口オホホ……アハハ……。(三等)

花子の日記

北海道　露子

四月六日、寝過して學校の時間の間に合はなかつたが、運よく先生に叱られなかつた。修身の時に、お行儀が宜いつて、お丸を貰つて嬉しかつた。學校から歸つて、錦屋町迄お使に行つて、歸りに犬に吠えられて青くなつて逃げてきたら、途中でおつりをなくして了つた。お母さんに謝まつたら却つて褒められた。

今夜のおかずは私の大好のとろゝ汁なので慾にたくさん食べたら、夜中になつてお腹が痛み出した。

四月八日、今日はお釋迦様の日なので學校から歸ると、すぐ姉ちやんを誘つて明法寺へ、甘酒買ひに行つた。お釋迦様の銅像を甘酒の桶の眞ん中に置いて、頭からバチヤ〳〵甘酒をかけた。二人は瓶の中へ貰つてきて太ちやんに分けてあげた。

夜姉さんと小間物屋へ一緒に行つたら、巾の廣いリボンを買つて下すつた。そして姉さんはチエリーオイルを下さいと仰有る、小間物屋に英語の本があるのかと思つたら、番頭さんは瓶を持つて來た。

お祖母さんが風邪をひいたので、今夜は姉さんと寝るのだといふ。日記をつけて居たら、姉さんが後に立つて見てゐたのできまりが、惡かつた。

鎌倉なる友の許へ

駿河　丘　靜子

あゝ思出多き鎌倉の地よ、由比が濱の波の音、晴れたる空の大佛、大いなる寺、社、とり分け朝まだき宿屋の庭下駄はいて貴女と手を取合ひ八幡宮社前の椿林を逍遙した、あの時の事はとても忘れることはできません、あゝその椿は丁度今は盛りでせう、貴女は今思ふまゝに是等の親しみに再び浴してゐらつしやるかと思ふと、ねたましいほど羨しくて。

先月の末に、修身の大矢先生は、愛知縣へ轉任なすつて、代りに出口といふ先生が來られましたが、此の先生は鼻をクン〳〵させるのがお癖で、一口言つてはクン、一時間に七十回以上、大抵の時間それればかり數へてゐてとんだ眠氣醒しができます。

去年の旅行を思ひ出して寂しさに。



上野の樂堂

牛込　つげ枝子

水色江戸褄のはなやかな装ひ、やゝ頰に紅をみなぎらせて、山櫻たわわに活けた卓の傍、ピヤノのしらべゆるく、ほとばしり出づるソロの肉聲は、人の魂を自由にあやつつて聽者も奏者もたゞ美しいうたごゑの中にこめられて息する者もない。うたはこまかにメロデアをすべつて、人々はよへるやう。やがて急霰のごとき拍手、樂を終へておもむろに去りゆく美しき人、山櫻はそのうるしと黒い髮の上にヒラ／＼と花片を落した。

かすかな衣づれの音、さゝやきの聲、たえなる香は若き女の身をはなれて輕く樂堂をめぐる。

かなたにひかへられた肉色の洋裝美しき〇〇妃殿下も靜かに供の者にまもられてしづやかれた。（一等）

戻り路

東京　英子

乳母が心づくしの大根、さつま芋、さては蓮根などみな、新しきが自慢の山里の美味は、かず／＼膳に上る。「さあ御遠慮なく」と云はれて乳姉妹の初枝さんと三人樂しく晝飯を始めると、庭に鶯がきてさゝなく。「あらよい聲だこと」とそつと障子を引かうとすると、「逃げますよ」と初枝さんがとめる。「珍しいのですか。此家に被居ればうるさい程聞かれますから、もう一晩泊まつてゐらつしやいませな、そして夕方太一が戻つたらあのお望みの紅梅を折つて貰らひませう」と乳母がいふ。私も歸るのは厭だつたが、母が心配するから、皆して引止めるのを無理に辭して外へ出た。乳母は干柿と蜜柑を持つて、初枝さんは梅の枝を荷なつて、送つてくれた。此里は梅の名所である。（三等）

朝往く途中

京都　西村いし子

毎朝私は八時ん打つて家を出て行く。目の惡い下駄直しの爺さんは、町の曲り角で定つた樣に出逢ふが少し遲いと思ふと、「なな……し」と呼ぶ聲を、仕度しながら聞く事もある。それから二條へ出る角の車屋の前を通ると、必と日出新聞が配達人の投入れたまゝに地上に横はつてゐる。官吏、男女の學生、職工等にも大抵定つた所でいつもの人に逢ふ。口でこそ挨拶はせぬが、心ではお互に知己のつもり。而して學校近くに來ると、こゝでも亦いつもの見なれた兒童に取りまかれて、おじぎを受けながら新築の門をくゞる。其時は大抵九時に十分程前だ。（秀逸）

正輪寺の櫻

よしか

門を入ると、廣い〳〵御庭は、眞に咲も殘らずちりも初めぬ花盛り。ゑならぬ花の色香に醉つて了つた。「花は彼方からが又一しほで御座りますさうで」と云ふ聲に振り返へれば、十二三のお小僧さんはもう先に立つて行く。案内せられたのは唯一つ止めないお茶室。折から正普院様は床に向つて御花を活けていらせられた。どうして此墨染の御衣にと、一糸亂さぬ高髷に振袖姿の昔が忍ばれて つい涙がこぼれた。浮世離れた御話に何時か我を忘れて居たが、日がくれてはと御いとま申上ると、正普院様は御庭迄下りて、ようこそ御訪ね下されましたと御丁寧な御言葉。かへり見勝に門迄出ると、ゴーンと暮の鐘がなり初めた。(秀逸)

似た後姿

淀橋　菅　愛子

櫻の美しく咲き匂ふ間を潜り〳〵して漸く一巡した頃、ちらとすれ違つた後姿。よく似てゐると思つて行き過ぎたが、何だか後へ引かるゝ心地がして、二三度振返つて見た。何うしても千代子様だと、自分定めにした時、足は早ひとりでに前に進む。餘に懐かしさと嬉しさに満たされて夢中になつて後を追ふた。其人は足音に驚き、立ち止つて私を見たが、すげなゝ直ちに歩き始めた。けれど若しやと今一度馳け寄つて見たが、やはり私の思ひ違ひであつた。(秀逸)

濤の音

駿河　丘　靜子

濤の音はゴロ〳〵と石臼を曳くやうだ。あゝ春だ！ 春が來たのだ！ そよとの風もないしんとした夜に、ゆつたりと、調子をとつて、ザーザと、寄せては返し、返しては寄せる響は、人の心を沈默に引入れ、眠りに導く。

うつとりとして耳を澄す。

あゝ、小波白き渚の彼方には、ほんのりと富士の峰は聳えて ゐるであらう。花の蕾はまだ固いが、暖かい宵である。

氣の合ふ同志

東京　若　紫

「ねえ、三日のお節句には是非いらしつて下さいましよ、何もありませんけれど、お豆煎り位は出來ますさうですから、是非ねえ」「はい有難う御座います、お孫さんが澤山で結構で……、私も一人でも欲しいと思ひますけれど、それはつかりは自由になりませんでね」「ほんにねえ、孫と云ふ者は全く可愛いゝものでしてねえ」「昔は子供が出來ないと離縁したものでしたが、今は全る變つてしまひましたから、さうもなりませんし」「えゝえ私等の若い時とはすつかり違ひますでねえ、老人はまあ引つ込んで居るのが一番ですよ」「まあお謙りでもして居れば、何も彼も忘れて、本當に氣樂でござんす」「お互様にねえ」と手に掛けてある數珠をつまぐりながら、南無阿彌陀佛々々と杖に力を入れて急ぎ歩るく、二人の年寄の顔には平和な色が満ち〳〵て居る。

かき寄せ

新潟　岩本芳子

一

夕陽は今し、しづまんとして、雲の色眞紅に、み渡せば佐渡ヶ島は淡く、紺青の海波、銀色のかもめ、くしき獅子岩、はるけき沖には白帆の三ッ四ッ二ッ、首をめぐらせば彌彦、國上、角田山峰は、長く〳〵北東に、あゝ崇高なる寺泊、海岸の夕暮よ、

くれなゐの波美しや夕日いま海原とほくしづまんとして

二

鷄二三羽餌をあさりつゝある藁屋の裏に、紅白の椿ちらほら、ゆふべの霜はまだ消えやらで、日の光にきらめいて居る、目白や、山雀が、たのしげに鳴く、げに、田舍の春こそ樂土なれ、仙境なれ、あゝ美しきは田舍の朝なるかな

三

三十五反の帆をまき上……げて磯路はなれりや佐渡が島……、

餘韻は長く低く水を渡つて、川下の方へ消えて行く、舟は花嫁を滾る一むれをのせて、刈谷田川の岸をはなれた、清くてる月の影、黄金色の水、棹とる翁の頭の霜、汀の青柳は川風にゆら〳〵として、

あゝ何等の風韻！　何等の詩趣！

美しきは河畔の春の月夜かな（秀逸）

土曜日

越後　羽賀はな子

コンパスの長い二人の先生の後から後れまいと全力を注ぎながら村を通り抜けると、一すした橋下はだいぶ深さうで、萬草がユラ〳〵とゆれてゐる。其からダラ〳〵坂をチョコ〳〵走りで上ると、見晴らしの好い場に出る。花は今を盛りと咲き亂れてゐる。やがて二人の先生に別れたが、私の家迄はまだ半道もある。私の步調はグッドゆるくなつた。家の白壁の見える頃は、もうねぐらに歸る鳥のかげも見えない。小川に錢やもゝ引を洗ふ村の雌義が、「おかへり」と云ふ。其かほもおぼろであつた。

寄宿舍の一夜

京都　一宮きよ

恐しく風が吹く、揺り起す人があるので目を開く、と京子樣は「あの音を聞いて？」と仰有る、ジッと耳を澄すと、風の音に混つて廊下の扉が開いてる樣な音がする、「ホラ、ネ、何でせう」と、とう〳〵皆を揺り起して、年長の淑子樣が蠟燭を持つて、一同可怖々々其方に行く、誰かゞ「一すこゝを」と云ふのを見ると、拭きぬいた板間に人の足跡がある、泥棒に違ひない」「どうしませう」と年少の綾子樣はおびえて縋りつく、ドッと吹く風は硝子窓の隙から入つて蠟燭の火を危く消さうとした、私達は水を浴びた樣な心地になつて思はず聲を立てた。

山里の趣

羽前　犬飼春子

私の村は町迄八町のところで、縣道に沿ふて五十戸ばかりあります。村の前面には可成りに廣い田圃がつゞいて、わきは最上河の急瀨、背後は一帶の連峯で松の翠が見事です。

私の家は村の中央よりすこしく東方にあつて、小高いみはらしのよい

位置にあります。朝早く外を眺めると、地平線には霞が仄かに罩めて、その淡々しい上に他の村里がかすかに浮んで見えます。此頃は雪がすつかり消えて、田の面に鴫の聲を朝に夕に聞かれます。

新世帶

千あき

夫は今迄下宿生活、自分は田舍から出たばかり、それでもどうやら貸家も探し當てゝ、今日はごたくさの大騷動、簞笥から長火鉢、勝手道具の主なものは、道具屋から一臺の荷車で運ばれて來る、手傳ひに來た友人と連れ立つて買物に出た夫は、小半日も費して歸つて來た、古道具屋で非常な掘出し物をした、と頗る得意に、袂から、懐から、其處へ並べた品は、埋れ木の卷煙草入れ、眞金の一輪ざし、煤竹の筆立、それは〳〵大したもの。(秀逸)

袖ケ浦の夕

長野 清水あや子

天も地も寂として聲なく、唯岸うつ波のみ轟々と凄まじく夕暗の空氣を破つてゐる。

見れば、彼方の磯松に身をよせて、じつと沖の方を見つめて居る乙女がある。歸へる漁船を待つのであらうが、しよんぼりと立つ姿が妙に果敢ない感じを喚起させる。

白い鳥が弱々しい翼を張つて暗い空に消えてゆく。波は絶間なく岩に激して碎けてゐる。

京都驛の一時間

京都 ひさ子

午後六時、奈良行に乘り後れて、プラツトホームに待つて居ると、丁度新橋からの最急行が着いた。京都驛で下車した人は五十一名。皆洗行の身成りで、品格も備はつて、態度はさすがに物なれたもの。ほとほと感心して見て居ると、次に下關からの三等急行が着いた。二十世紀の今は只形容詞にのみ殘つて居るものだと思つた赤毛布をくる〳〵とまいた田舍者。本願寺參りの道者、禮儀も何もあればこそ、人をつきのけ我先に出ようとあせる樣、京都の町は永久に逃げはしないと注意してやりたい心地がした。(二等)

朝寒

千葉 中村康子

チユツ〳〵と雀の騷ぐ聲に目を覺まして、戸を一枚開けると、朝日がパツと流れ込んで、暗い空氣を何處かへ押し出して了ふ。龍の樣な庭の松が黒く鮮に障子へ浮び出る。長い尾の鳥の影がその枝の間を縫ふて飛び廻る。ギーギーと井戸で水くむ音が聞える。床から出るとまだ皆は寢て居る。無邪氣な弟や妹の顏、痩せた祖母の顏を見ると懐しさが犇と身に迫る。皆が目を覺まさぬ樣に靜に床を納つて勝手元の方へ行つた。水桶の中には薄い氷が張つて居る。眞白な霜が雪の樣に降つてゐる。遠くの方で豆腐屋の聲が聞える。妾は祖母さんが昨晩洗つた米を釜へ入れて炭火を起した。音のせぬ樣に瀬戸物を洗つた。

鬼子母神

小石川 川崎やよひ

雑司谷の鬼子母神へ出かけた。春と はいへど、風はショールの間から袖口から、冷く吹き込む。風は梢を揺び、地を荒して、只さへ人氣の少ない森が、尚更寂寞である。吹き晒しに立ち塞す仁王様には、處きらはず投げつけられた紙が、灰色に何のうるほひもなくひからび付てる。力瘤入れて振り上げて居る手は枯木も同然だが、誰の惡戯か赤い襷がかけてあつた。それでも用水桶には苔が青く、ボーフラでもわいて居相な水には青空のかげが映つて居る。

下駄の音

千葉 赤荻政子

靜かな春の夜で、月はほのかに朧つてゐた。風呂から出ると、私は縁へ出て一人でずつと方々見まはした。遠き山、近き森など皆眠つたりと眠むつてゐる様だ。遠くの方で下駄の音がする。私はぢつと耳をすました。段々近かくなつてくる。からんからんといふ音が靜かな夜氣をゆるがして四方へ響びく。

私は音の主が來ないうちに、あはてゝ家へ這入つた。月はほのかに朧つてゐた。

思ひ出の涙

芝 野村くに子

英語を敎へて入らつしやる熱心な お聲は手にとる様にきこえる。次の部屋で仕事をしてゐる私は、思はずも懐舊の感に打たれた。五十餘名の友と共に學び共に遊んだのも、一級の花とよばれて得意がつてゐたのも、はや三年前の夢とはなつた。理想が嬉しうして居たのも、あゝ机上論に過ぎなかつた。夫婦差向ひに猫一匹ゐないこの家庭、樂しいと云はうか、將た淋しいと云はふか。私はたゞ茫然とした。

去年の今日

千葉 ローズ

兄は幾度かの注射にも、更に感覺なきかの様に、たゞ青白い御顔をベッドに横たへ給ふ。ぢつと見入つた私は、もしやと思うてもう胸がはりさけさう。此の瞬間に等しく顔見合せた二人の醫者は沈痛顔で傍なる父に「誠に御氣の毒で……」父は「とう／＼だめですか、どうも仕方がありません」と口では仰つたが、がつかりうなだれた顔には いふにいはれぬ苦痛がよまれた。

婦人問題談話會

本會は婦人雜誌の記者を始め一般新聞の家庭部記者並びに女子敎育界の有志相寄つて婦人問題、家庭問題について種々なる研究をなし、各自の意見を交換するを目的とするものにて先月九日駿河臺霞亭に於てその第一會を催したり來會者は婦女新聞の福島氏、女子敎育の下田氏、婦人世界の高信氏、女學世界の松原氏等なりしが、今後毎月一回第一金曜日を以て例會を開く事となりたれば、會の模様並びに特種なる研究の問題はその都度本誌に記載することあるべし。



天

雨斜鐘にひたつく落花かな　東京　竹内とみ子

地

鐵橋に女の影や春の月　愛知　三浦しの子

人

春水に石置いて渡る女哉　埼玉　伊藤時子

秀逸

人住んで春まだ淺し梅の花　福井　中村浪子

風呂敷に包みし梅の匂ひ哉　赤坂　藤井かすみ

傘たゝむ袷に冷たし春の雪　伊豫　美智子

水仙に遣るや化粧のあまり水　下谷　安藤泉子

亡國の民うら〳〵と牡丹かな　美濃　酒井登美子

髪結ふて合せ鏡や春寒し　信濃　恒子

人はたれ堤の上の櫻かな　上野　高平かめ子

化粧する鏡にうつる桃の花　佐渡　河原夕日

卯の花や尼になる子の片鬢　伊豆　大谷たま子

子寶に富みて泣く婦や貧世帶　大阪　木村とく子

胸病める弟と聞きぬ鹿の聲　大阪　愛花

麥二寸棒には早き里居かな　茬原郡　しゝよ

行燈に衣かけたり宵の春　大阪　芦田いく子

餅なうろ茶店も古りて姥櫻　大阪　沖ふく子

歌麿呂の版木洗ふや春の水　陸中　柴田とも子

ほすあみに花のふゞきや春の暮　三重　鐵寛

春雨に女同志の長湯かな　神戸　松室義久子

馬市の中にたちたる柳かな　長野　小林勝子

白き桃緋桃の花や春の川　牛込　酒井輝子
梅白し琴柱にたまる日の埃り　東京　長谷川かな子
石楠花の雨に濡れ居る雉子一羽　東京　むかご女
庫裡はまだ人聲高し梅月夜　栃木　波多野嘉子
初蛙慶寺夜ふけて朧なり　奈良　向山きよ子
稲妻や湖心に浮ぶ舟一つ　島根　荒木秋子
青麥の海を小蝶の白帆かな　横濱　小豆澤清野
はくはげし羅漢の顔に花吹雪　長崎　天野春子
春雨に歌の會あり小町寺　下野　片岡濱子
東風吹きて鳥のすり餌の上かはき　越後　岩本芳子
きさらぎや大佛の背に花寒し　下谷　玉香女
沖はしぐれ松原はれて千鳥鳴く　石川　星花女
雨の町傘下くゞる燕哉　大阪　西田保子
沖走る舟や千里の春の海　仙臺　佐々とつ子
鯨待つおぼろ月夜や江差海　渡島　千葉幸子
朝の山語り行く人霞けり　大阪　矢部清子
しばし橋ほしき小川の櫻哉　東京　吉田直子
花よめやまだ醉さめぬ頬の色　越後　とみ子
朧月古き都に入る夜哉　出雲　久眞子
兎馬の耳春寒ううごきけり　釜山　朱雀とし子
山吹や閼伽桶さげし若き尼　麻布　まり子

山門の緋桃こぼせり堂の雨　三河　きみ子
奥城に法師振りする土筆かな　北韓　板井かた子
何の罠空しく殘る雪解かな　長崎　大丸貴美子
緣に摘草させて詩集かな　札幌　本間うさ子
牛叱る聲すみ渡る寒さ哉　京都　吉村芳子
業なりて母校を去る日春盡きぬ　伊豫　かもめ
ほころびて某の名の付く櫻かな　福岡　花田雪子
乘ものゝ重く走るや春の雨　神奈川　角田武子
活花の水捨つる日の餘寒かな　對馬　磯の人
蝶々や馬上の人の笠の上　本郷　青木楓江
野道行く法師二人や揚雲雀　兵庫　石谷具子
八重櫻舞臺の軒に醉しけり　下總　石原清子
棹させば船揺々と春の水　成田　大木文子
土掘れば龜の玉子や春の風　千葉　大木蘭子
日もすがら山焼く草のにほひ哉　長門　小島絹子
摘草やリボンに蝶がひいらひら　愛知　黒田た子
春の夜や小鼠走る琴の上　伊豫　清水貴子
雨煙り海棠を傷む女あり　芝　三橋峰子
太陽のまばゆくもなし春の海　廣島　三宅時雨
春雨や京に一夜を明しけり　伊勢　池上美織子
古寺に乞食晝寢や春の雨　高岡　戸田輝子

笑話

○ほんとうの造花

芙城　眞家光子

娘「母さん、あたし今日造花の先生にほめられてよ」、母「なんと言つて」、娘「あなたの櫻はほんとうに造花の櫻ですつて」、(秀逸)

○彗星と椽星

信州　すみえ

無學の人の子、彗星を見て「御父さん、あの星は何と云ふの」、父「あれは椽星よ」、子「面白い名だなあ、どう云ふわけで云ふの」、父「あの尾がスイ〳〵と出で居るから」、(秀逸)

○暦なしに日を見る法

福岡　許斐文子

「郵便切手十二枚を送れば暦なしに日を見る方を教ふ」と有つた廣告を見て切手十二枚を送ると、其の答に、「前々日の日附を見つけ出して是に二を加へよ」と有つた。(秀逸)

○若夫婦の寫眞

備後　しづ子

寫眞師「さう御兩人共兩端にお座りでは困りますよ、まん中があいてしまひますから」、若夫婦「これはわれ〳〵の新發明です、かうして寫しておけば、若し離縁した時には、二つに切つて互に自分の肖像だけ取つて置くに都合がよいので」、

○ハイカラ令孃

福岡　竹石はるよ

友「此寒いのに、ナゼあなたは手袋をおはめでないの？」令「だつて、リングのダイヤモンドが知れませんもの」、

○窮した慰言

福岡　許斐文子

囚人「終身懲役とは随分苦しいです」、辯護士「愉快にして居るサ、老少不定と言ふから早く死ぬかも知れぬぢやないか」、

○風の子

四谷　加藤幸子

弟「姉さんは母ちやんの子れ」、姉「さうよ、あなたわ」、弟「僕は風の子だい」、

○海底電信

北海道　北川靜子

或時皆あつまつて海底電信の話をして居ると店の小僧はさも不思議さうに聞いて居りましたがやがて眞面目に、「そんな事をしたら電報も何も濡れてしまひませう」、

○着かなかつたら

芙城　石井武子

富子さんのお母さんが、米國にゐらつしやる富子さんの兄さんに小包を送らうとして、若し着かないと大變だれと心配げに仰しやると、側にゐらしやつた富子さんは、「そんなに心配なさらなくとも、小包の表に「若し着かなかつたら御返事下さい」と書いて上げればよいでせう」、

○兵士の頓智

岩代　宇月すゑ

「なんぼ上等兵だつて近頃少しひどいぢやないか」「何あんなもの人間と思はないといゝのさ」と二人の新兵が話してゐると、恰度上等兵が通りかゝつてこつちを見て居るので、大聲で「神樣と思つて居るとよい」と云つたので、苦笑して行つてしまつた、

○土産

岩代　小林なみ

都見物に出た男、電氣燈を見て、「之は重寶だ、一つ土産に買つて行かう」

○御前じるこ゛と御飯

横濱　荒井たか子

汁粉屋に行き何を取らうかと考へてゐると、隣りにゐた人が「御前を持て來て下さい」と云ふ、其れをきいて、「私しにも飯をくれ」、

誌友倶樂部

▲御やさしい姉君達の內で、昨年發行の嫁に行く人を御持の方は御惠み下さいませんか、御讀には他の婦人雜誌か、みにくいけれど私の寫眞を差上升。(神奈川縣足柄上郡川村向原、岩田小春)

▲名高い內藤千代子樣は何處の御方ですか、そして萩香と云ふ號は御自分がおつけになつたのですか、お年は何歲で入らつしやいますか、記者樣一生の御ねがひでございますから千代子樣の御寫眞誌上で拜見さして下さいな。(愛讀者、椿花)

▲內藤千代子さんの事を皆樣は女性のうち若い方のやうに思はれてをりますが、決してさうではないと私は思ひます。確に男性で世に知られた文士の方です、千代子とは世を忍ぶ假名に與ひありません、筆づかひをよく御覽なさいまし(原町、かもめ)記者曰く內藤千代子氏は其の名の如く女性です、そして年齡も決して二十歲以上ではありません、それ丈けは確かに保證しますが其他の事は今申しません。

▲三月號の口繪、春の庭は大層愛らしうございましたこと、晶子樣の雜記帳も誠に興深く拜見致しました、今後毎號掲げて下さいますさうで嬉しうございます。(富山、秋園女)

▲芳子樣、八重樣、操樣(千葉滑川遊樂園主御令孃?)朝顏種をありがとう、私方よりお返し致しましたのは手長性です御愛養を願ひます、園藝の好季節になりました、此際一層種苗の交換を望みます、記者の君よ！園藝に御趣味をお持ちならば何かお目に懸けませうか。(信濃國三留野驛、青木恒子)

▲大阪市のなでしこ樣、私の住所は室町六角下ルで御座います、毛髮も近眼も食療法は私方でわかつて居りますから、ドレ〳〵と御申下さい、すぐに御報申上ますよ。(京都、神谷都子)

▲前號と本月のに萩香內藤樣の御作が出ていないので、何だかもの足りない心地が致します、來る五月の增刊にはどんなのが出るかと思つて今から樂しむで居ります。(馬關、こほろぎ)

▲內藤千代子樣はとちらでも大評判の樣ですれ皆樣大層崇拜遊ばして入らつしやる御樣子、でも私は文才こそ羨しうございますが、あの方は嫌でございますわ。(さわらび)

▲私は髮に練油パールを用ひて居りましたが、大變髮が赤くなつて毛先が二ッに分れて困ります、皆樣は何油をお用ひになりますか、御敎へ下さい。(山口縣、紫山)

▲酒田の具谷都子樣、東髮には西洋香油のブリアンチインがよろしう御座いますよ、つけたてには少し毛がこはくなる樣ですが、赤くもならず少しも毛がいたみません(相州、白ばら)

▲戀しき〳〵內藤千代子樣、私はもう貴女が戀しくつて、お懷しくつて、お作物拜見します度、縋り付きたいやうな氣が致しますのよ、あゝこんな御姉樣が有つたらどんなに嬉しいでせう、こんなお友達が有つたならどんなに喜ばしいでせうと思はぬ時は御座いません、私もひよつとしますと鵠沼へ參るか知れませんが、その時はもう鵠沼中さがして歩くつもり、でも心配なのは千代子樣がこんな田舍娘には御あひ下さらないでせうといふ事ですのよ、御逢ひ下さるか知ら？お逢ひ下すつたらどんなに嬉しいでせう、あゝ床しいお姿拜見したい事、私はどうしても貴女は十七八の令孃と信じます。(田澤京子)

▲前號には「岡山の後樂園」をお投書遊ばした藤浪女樣憚りながら岡山の女學生はお化粧に許りこつて二十ケ男の御きげんとる爲に學校にいつてるのでは有りません、野暮でも何でも實力があれば宜しいでせう、リボンはなくつても心の花をかざします、それから女子師範は近來女學校に併置されたなど、いはゞ居候、それなのに附屬女學校とは餘り失敬でございませう。(岡山、兩

田しゆう子）

▲京都同志社女學校の宮川しづ江様、私の母も同志社の出身ですのよ、御なつかしいわ、只今と母の居りました時分とどんなに樣子が變りましたでせう、校風や生徒の氣質など承り度いわ。(北見國、信太英子）

▲客觀の中に生きよとか、締らめよきらは云々とか、よく承知しては居ますものゝ、嗟私は晴い寂しい家庭、炎によれる朝顔にも例へつべき身の運命を嘆ぜずには居られません、死度いと願つた事も幾度でございませう、今は僅かに文藝によつて慰藉を得て居ますけれど、あゝ來し方行く末を考へると、闇から闇へ辿る心地せられて……、末ながら私の唯一の友たる本誌の懐かしき愛讀諸嬢よ、健かに在しませ。(萩子）

▲皆様よ、御裁縫事でも讀書でも餘り御ふけり遊ばすと、御肩がこりませう、その時は里芋と生姜とをすりまして、その中にうとん粉をまぜてよくかきまわします、それを日本紙にのばして貼りますと妙になをります、皆樣やつて御覧遊ばせ、それから凍傷には其生姜だけ入れずに同じ樣にやつて御覧あそばせ、右は故石塚先生の御療法で私方も度々實驗しましたが、實に奇妙ですよ。(藤將）

▲近頃は内藤千代子樣とやらの評判で殆んど持切りではありませんか、オホ……皆樣餘りおかぶれ遊ばすな、私も最初の程は、あの流暢な一種獨得の御文章には舌を卷いて居ましたのですが、靜に考へますと、如何に天性の御文才がおありなさると致しましても、僅か十七歳や十八歳の少女にあれだけの社會人情の觀察眼があらうとは幾程ヒイキ目に見ても思はれませんわ、之は屹度今少し年の行つた御方の作でせう。(岡山、多實子）

▲地方の誌友諸姉樣よ、何卒各所繪葉書の交換を願います、妾きつと御禮として當地の名所繪葉書を差上ます。(東京々橋區越前堀町一の四岩本方、大澤文子）

▲布哇馬哇島ラハイナ市にゐます大塚樣よ、先日は美はしき繪葉書下さいまして有がとう、ほんとにホノルルはいゝところでございますれ、いづれその内長い／＼御たより致しますからどうかあなた樣もおひまの時には御手紙下さいませ。(京都、神谷郁子）

▲何が樂しいといつても私は机に向つて熱心に本誌を讀む時程樂しい時は御座いません、私は三四年前から愛讀して居ますが、その間本誌は母となり姉となつて私を導いてくれました。(宮城野白露）

▲繞條そめ子樣、私は三月號を繙いて圖らずもあなたが愛讀者となつたことを知り非常に喜んで居ります、私も昨年から本誌愛讀者の一人となりました、どうぞこれから御交際を願ひます、それから一寸御願申しますがあなたは京坂ちよ子樣といふ御方を御存じないでせうか、私はちよ子樣の最も親しい友達です。(茨城、くれかし女）

▲二月號で繪葉書の交換を御願申ましたら早速御送り下さいまして深く／＼感謝します、一人も洩なく御返しする考ですが、何分にも數多き事ですから、自然遅れ勝になりまして、申譯しありませんが、何卒御宥し下さいませ、未だ御返しの濟まないのが澤山ありますが、追々御返ししますから御立腹のない樣に御願申ます。(信濃、丸山操子）

▲京都神谷郁子樣、毛髪の衛生法御指導下さいますとの御親切な御言葉本欄で拜讀致しましたが、私はひどく困つてゐますから、何卒化學的食養會とやらへ御紹介下さいまし。(福岡、手島敏子）

▲記者樣、私の「從妹」にあざの出來て居るものがあるので、そのなほし方を御きゝ申したいのですが、糸左近先生は私や父などでもすぐ御面會下さるでせうか。(春かすみ女）今度先生の衛生顧問欄を設けましたから、そこへ御聞き下さい。

懸賞募集　世渡り上手

（〆切四月二十五日）

一と口に世渡り上手といへど、世渡りの巧拙は何を標準として言ふべきにや、これは人々の見方、考へ方、即ち解釋次第によりていろ〳〵あるべし、世には上手な敗北者あれば、下手な様で勝利を得し人あり、結局何が上手といふ事は容易に斷定し難し、大體人に好かるゝ氣質は上手な世渡人と考へらるゝも、嫌はれながら押し通す人もあり、榮ゆる人に何の美點あるか、衰へる人には何の缺點あるか、而かも亦世渡り上手は好ましき事なるか、彼女は何故不運に泣きしか、彼女は何故に幸運に向ひしか、學窓に將來を語る處女、母にかしづく娘、夫を助くる妻、彼女のえらき處は何か、或者は何故失敗せしか、利口さうで纏りのつかぬ人もあれば、ぼんやりして鍵を握つてゐる人あり、働らかぬ様で働らいてゐる人あれば、要領を得ながら結局不得要領に畢る人あり、人事繁多の世の有様、人の性情、これを現代的に観察し、處世的にながめ、これを趣味眼に寫してその人物の特色を活現せしめなば、人間處世の上に至大の暗示を與ふる事なるべし。

賞金

賞金は一等より八等に別ち、左の割合にて總計二十五名に呈す

△一等金參拾圓△二等金貳拾五圓△三等金貳拾圓△四等金拾五圓△五等金拾圓二名△六等金七圓三名△七等金五圓五名△八等金參圓十名

規定

△原稿は二十字詰二十行にて十枚内外とす、

△原稿の終りに住所氏名を明記すること、

△宛名は博文館女學世界とし封皮に種類を記すこと、

△當選の文は五月中旬發表す

△賞金は發表の當日現金にて發送す

六人の妻を離別した工學士の家庭へ嫁ぎし最後の妻の告白

記者曰くこの告白文はあまり名文にはあらず、恐らく女學世界始まつて以來の駄文なるやも知れず單に文章の拙きのみならず、その事柄が又甚だ奇怪至極なるものにて、到底尋常家庭の風上には置けない樣な馬鹿らしき事柄なり、故に常識を備へた人が見てはこれはと思ふて眉を顰むべし、心ある人が一讀すれば直ちに唾棄すべし、然かもかゝる文章を忍んで掲ぐるに至りし記者の深意は又賢明なる讀者の大に諒察せらるゝところならんと信ず、蓋し世のあらゆる沒義道、あらゆる沒常識、あらゆる非人情を備へたる、並びに冷淡、薄情、偏癖、ゑこぢ、我儘、意志の薄弱などいふ人がよくも斯く揃ふて一家を成したる事よ。と、我等は唯呆れ果てたる次第なり。思ふに人の品性の砥礪、意志の鍛錬は人間第一の必要件なり、方今天下に喧しき家庭問題、舅姑問題乃至、親子別居論の如き、そのこれを議するに先つて、まづ人々各自心の修養をなすこそ大切なれと思ふなり。論より證據、否、この告白文によつて事實の如何を知りたまふべし。

記者又曰くこの文を一讀して而してこれを印刷に附せんとする時圖らずも記者の胸憶に一疑念を喚起せり、即ち本年一月下旬、東京各新聞の三面雜報中嫁を虐待したる工學士の家庭のありし事に思ひ當れり。依つて當時の新聞紙を探りしに、一月廿六日の誌上に左の如き記事ありたり。

●現代と離れた家庭

△迷信の犠牲となれる六令孃

舊思想と新思想との過渡時代とも云ふべき今日では、些とした意志の衝突から家庭の圓滿を破つて了ふ例、其處にも此處にも少なからねど、これは又其極端に走つたものゝ殊に甚だしき一例にて、偏狹な舊思想の犠

種となつて、幾多の令嬢が不幸の運命を喞つに至りし哀れな物語あり。

▲不思議な一家

本郷區臺町二の六〇寄留工學士正六位鈴木博氏(四十二)は、茨城縣猿島郡森戸村の生れにて、去卅三年工科大學を卒業し、職を内務省に奉じて東京土木出張所の技師となり、目下利根川改修工事の監督として千葉縣印旛郡安喰町に住し、母悦子(六十四)長女澄子(九つ)二女延子(八つ)と共に下婢二人を使ひて、表面には何不足なき家庭の如く見ゆれど、悦子と博、この母子の胸に始終懊惱の絶えざるは、今に一家の主婦たるべき婦人の定まらざればなりけり。

▲六回妻を離縁

夫人の定まらぬと云ふは、博氏の配偶となるべき女のなきを云ふにはあらず、幾度か迎へても此家に永く居附くものゝなき事なり、大學を卒業してより四十年迄の八年間に、妻を娶ること實に六回に及びたれど、長くして一年、短きは僅十餘日にして何れも離縁となりぬ、これが世間に能くある姑の意地惡とか、夫の不身持とかに原因するならば、さして怪しき節はあられど、悦子は至つて律義な昔氣質、嫁を虐待せんなど云ふ考へは露ほどもなく、博氏はまた沈默寡言の君子にて、職務に勵精するより外に何の道樂とてもなき男なり、嫁の居附かぬ理由は何うしてもない筈なるに、扨も不思議な事もあればあるものよと、親戚朋友の間にさへ、是れが一つの疑問となつて居たり。

▲大庄屋の家柄

工學士鈴木博氏と、其母の悦子とは、共に現代とは頗る飛離れたる思想に囚はれし人なり、鈴木家は代々森戸村の大庄屋を勤め、苗字帶刀御免の名門なりしと云ふ事、世間知らぬ悦子の身に取りては、唯一の誇りなりし處へ、一人息子の博が大學を卒業し工學士と云ふ肩書を得てよりは一しほ我家柄を貴ぶ念を起し「わが倅の嫁とならんほどの者は」と豫て心に鑄型を作り、之にしつくり嵌まつたものこそ合格と、博氏の夫人を試驗するに至りぬ、大庄屋的家柄を眞額に翳して、現代的の教育を受けた學校出の令嬢を試むるに至つては、誰れか首尾よく合格するものやあるべき。

▲花嫁は七人迄

博氏の夫人として先づ第一に娶りたるは、本郷區西片町十工學士大河内正敏氏の令妹なりしが、固より姑が胸に描ける理想に適し得べくもあらねば、僅か十日間にて落第して實家に歸りぬ、二回目には千葉縣東葛飾郡布佐町の豪商松岡某の令嬢蝶子(三十二)を娶りしが、これまた廿日を出でずして不合格となりぬ、三回目に迎へしは新潟縣古志郡長岡町女子師範學校長廣瀬吉彌氏の長女にて三木枝(二十八)と云ひ、實踐女學校出身の才媛なり、昔氣質の姑に事へて能く辛棒するを一年中の長きに及び

お澄、延子と云ふ二人の嫁まで擧げたれば、今度こそは大丈夫と悪ひ居たるに、悦子は一日賣卜者に占はせて「七人目の嫁でなければ家の爲にならぬ」と云ひたる言葉を神の豫言のやうに信じて了ひ、此事を我子と語りし處、博氏も最高の學府を出でたる者に似氣なく、極めて迷信深き質なりしかば、輕々しくも賣卜者の言を信じ、何の罪もなき三木枝を「家風に合はぬ」と云ふ淺薄な條件の下に離縁して了ひたり、これより繼母の手にかゝるべき二人の可愛兒を、學士は哀れとも思はぬと見ゆ。

▲哀れなる犠牲

悦子は七人目に達するまで嫁を追出すと云ふ恐ろしい主義を以て、更に緣談の口を求めぬ、此不幸なる運命に因はれて四回目に學士夫人となりたる茨城縣眞壁郡眞壁町松本君子(二十四)は十數日にして離緣となり、五回目なる大學病院の看護婦長安松蝶子(三十)は二十餘日にして追拂はれぬ、六回目に來りしは下谷區徒士町三の七八益子右馬之助氏の長女禮子(二十八)なり、悦子はこれを直に離別せんとしたるに「理由もないに去られる覺えはござらぬ」と益子氏の憤怒甚しく、强硬の態度を執つて嫁を引取ることを肯んぜざるより、悶着中に一年を過ごしつゝ、離緣に至りて漸く離婚の話纏り、目下屆出での手續中なりと聞くが、姑悦子は滿願成就の嬉しさたとへんに物もなく、今度こそは七人目なれば必ず滿足な嫁を得らるゝことゝ、諸方へ緣談の口を求めつゝあれど、是まで の評判四方に廣がりて、今は誰れとて世話する者なきに困じ居れりとか裏店住居の土方人足ならばイザ知らず、苟も高等官の家庭にして斯くも數多の令嬢を迷信の犠牲として之を弄び、恬として恥ぢざるに至つては淺ましき限りならずや(一月廿六日萬朝報)

記者は元より神ならぬ身の知る由なけれど、この告白文と右の雜報との間には何等かの因緣はなきかとの疑念を生ずるの止むなきに至れり。もしや右の工學士鈴木博氏と告白文中の春志なる男とは同じ人にはあらずや、又告白文の執筆者にして稻の落葉といふ女性は新聞記事にある所謂迷信の犠牲になつた令嬢の一人益子右馬之助氏の長女禮子にはあらずやとの疑念を生ずるの止むなきに至れり、勿論これは不敏なる記者の勝手に想像したるもの故或は間違つてゐるかも知れねど、その工學士の家庭であるといふ點、場所の千葉縣なりといふ點、及び六人目の妻であつたといふ點など兩者恰も符節を合した樣なところある故、斯く想像し斯く疑念を抱くも無理ではあるまじとおもふ、乍去世間は廣し、似寄の事柄も澤山あることなればこれは全く記者の推測の謬りなるかも知れず、果

して然らば鈴木工學士並びに禮子の君には甚だ御迷惑千萬の事故謹んで御詫び申上ぐべし。

離別された妻の告白

稻の落葉

丁度四十一年の九月でした、學校から歸るといつも來る世話好のお婆さんが一人の男の人をつれてきて居ました、茶の間へ這入りますと母が明日春志（夫の名）さんと見合をしてくれといふのです、最もこの話は前に一寸ありましたが、私はこれまでさほど氣に止めませんでした、媒介をする男の人といふのは護謨會社の理事で花村と云ふのです、私が挨拶をすると春志さんの効能を並べたてました、春志さんは○○省の技師で七級俸で三十三年の工科土木出身で家族は母樣一人、子供が七歳と六歳の二人で先の奥樣が三十六年の暮におかくれになつてから六年間獨身で入らつしやるさうで、その又お母樣がよい方で、家の事などには一寸もお構ひなさらないで、男の樣な捌けた方でといふ、例の媒介人口、親子の寫眞迄添えて下すつたが、拜見するとその母親といふのはドウも氣六ケ敷さうな方とおもひました。けれど兎に角見合する事丈は承知しました。

▲三宜亭の見合▼

その翌日（九月二十九日）まだ申上ませんでしたが私は一度良人を持つた身ですが、死別れたもので、一時は終世嫁入らぬつもりでしたけれども、種々な事情はとても私を獨身で置きません、これも私の意志の弱いのであつたかも知れません。

でその晩六時頃上野の三宜亭へ行きました、車がとまると、今まで座敷に居た人は便所へたつ氣配がして媒介人の花村さんが玄關まで迎に出られました。

四疊半の座敷に電燈まばゆく、春志樣は碁を打つて居らした所とみえて、碁盤が置いてある、女が茶を運ぶ春志さんの出て來られた樣子を見ると、中脊のデツプリ肥つた、土木の技師だけに色は隨分黑い方、金縁の眼鏡をかけて鼻が大きく、さうして少し尖つたやうな額には一種の憂愁がきざみ刻まれたやうな、で當時は千葉縣香取郡津宮村に工事の監所があつて、そこに住つてゐるとの事、利根川で鮭のとれる話や何かして花村さんとは大分話も賑かになつてきました。

すると春志さんが急に私に向つて「家を御持になつた事はありますか」つて御きゝでしたから「ハア」と答へるとそれではようございますねと仰有つて、七時過私と兩親とは一足先にかへりました、あとで媒介人の話に春志さんの氣に入つても、母樣の氣に入らねば治まらぬ故一應母にもみせた上で極めたいといはれたさうです、その晩は大洪水で大變なさわぎでした、今から思へばあれは今日のあることを前の夫が地下で泣いてくれたのでせう。

▲氣六ケ敷姑との見合▼

四五日經つて春志さんの母親といふのが花村さんと一緒に來られました其時一寸見して私はさう思ました丁度昔の法印さんの樣な頭で、小紋の紬の袷に黑の紋羽二重の羽織中々元氣で六十四とはみえません、初對面の挨拶がすみますと簡單な話の内に先の奥樣は自分から身を引取られたさうな、そしてその時お子さんがお腹にあるのを自分で荷物を取纒出られたさうです、春志さんと云ひこの母親と云ひどうも氣六ケ敷さうではあるけれど、さう譯の分らないやうな人とも見えませんでしたさして父などは至極溫厚な君子であると認めて居ました。

その晩花村さんが折かへして來て姑樣の仰には「行儀といひとりなしといひ申分はないから是非共極めてもらひたい」と早急な御話、私の方では即答が出來兼ると申せば、それでは十分お考へ直しといつて夜十時頃に又入らして何でも早くきめて呉れとの話でした、そこで私方では實は一寸傍から聞きましたら春志さんは既にこれまで三人迎へられたとの事、如何なる理由かと問ひましたら、それは三木さん（前々の妻で二人の子の母）から入らしつたあと二人貰ひましたが一人は農家の娘で手足の格好わるく、一人は看護婦で腕が惡かつた故かへしましたとのあいさつ、どうも手足の格好が惡いなどゝいつて苦情が出る樣では困るから一層の事斷つてしまはうかと思ひましたが、不義盜賊以外の事では決して離縁はしないといふ事で

▲神の前のちかひ▼

麻布の出雲大社の分祠で式を擧げましたのは、十一月の二日こゝで結婚式をあげたものは決して破鏡の憂いないとのとで式はなか／＼莊嚴でした、この誓を破つたら各自とも神の罰を受くるとのみことのりでしたその晩は本郷のある旅館へとまりました、私が便所へ行つて歸つて來

ると、春志が紙にかいたものをみせました、

妹と我二人添寢の今宵には
　餘りにせまき褥也けり

よりそひてねよとの神の心には
　今宵の室のせまくもある哉

よりそひてねよとの神の心ぞと
　思へばうれしせまきしとねも

かりそめの言の葉なれど後の日の
　思出草になりぬべきかも

とかういふ歌をかいてくれました、マア私恥しくつて耳の根まで赤くなつて返歌一つ出來ませんでした、その翌朝姻戚の柳　濟男さん(これは法制局の參事官で文學者)やその兄君の屋下忠大さん、醫學博士で歌人で入らつしやる方の御話が出ました、此日馬喰町へ嫁いだ姉の子と小石川に居る杉山の長男冬樹とが參りまして初對面の挨拶しました。

▲三日目に不覺の泪▼

旅館に二晩泊りまして三日目には、布佐の杉山早苗へ(春志の姉の夫)方へ泊りましたその時離れ座敷へ出て夫が「ホントはお前で六人目だよ、最初に貰つたのは易者に見てもらつたらこの人は死で居るといつたが、成程今からおもへば棺桶へ片足入れてる樣な人間だつた、お前だつてさうだ人事をつくして天命を俟つのだから、七人目でなければ治まらんといふ易だから又今に別れるかも知れない」

　まあ何といふ言葉でせう私は此詞を聞いてつく〴〵後悔しました冷血男子とはよくもいつたものとそゞろに不覺の泪がこぼれました、又「明日は家へ行くが子供は二人とも怜悧だからその積りで取扱はなければいけないよ」と成程私しの不束なのを見て暗に諷諫したのでせうが、さりとはあんまりな。

▲笹川視察の留守の夜▼

　宅では姑が腸胃が惡いので夕飯は六時ときまつて居ました。すると夫はこの日三時に歸る筈のが風の強い故かまだ歸りませんので私はすこし御待申ませうからと申すと何とも返事はなくて勝手の方に向ひ、かういはれました、こゝで斯樣な事を申してもすみませんが姑は學士の母でありながら平常の言葉はまことに野卑でございまして人樣の前で申上ぐる事の出來ない位でございます。

『おめたち、出たものと死んだものはあてにならんから旦那にかまはず先へめしくへよ」と仰しやるので私

何だかお氣の毒ですから『もう三十分もお待してお歸りがなかつたら頂きませう』と申ますと、目に角たて『イヤ決してお上りなさるな、』と晩でも夫を待ち明すがよろしい』とひどく御不興の體です、『ア、どうしたらよからうと困りましたが、九時過夫が歸りました、すぐ御飯を上げましたが、私は母様の御許しがないから頂きませんでした、御飯焚のあさといふのが『奥様御察し申升、御嬢様の御母様もやつぱり是でね』と少さい聲『イエ私氣分が惡いの』とごまかしました夫は今日の事何もしらないから。

▲犬猫と何の選ぶ處ぞ▼

五月十四日の夜中二女の縮子を姑が抱寢しましたが川流が出來たので私起きて行つてふとんを取り代へんとしましたら、姑は大變に憤つて手足は澤山にあるよお前に一々手を下ろしてもらはなくてもいゝよと仲働の秋を起して片づけさせました、その翌朝姑は春志に向ひ『アンナ嫁は人間ではない、早く追返んでおしまひ、お前達は日増に情が深くなるやうだがそれぢや私はつまらぬ、彼女の屆かぬのは皆お前のさし金だ、おれはお前に飯位喰はしてもらつても更に何とも思はんよ日本中母を養はぬ子はないから』と寄つてもつけぬ御小言私あとで夫に詫ましたら『東京へでも何處へでも勝手に行け』との詞明日引移ると云ふのにどこへ行かれませう。

▲第一回の東京行▼

五月二十八日二晩東京に泊つて歸りました用は姑が夏物を强請つて來いとの命で……、

翌日朝から母は工合が惡いとて床につきました夫は津宮へ行きましたので電報を打つて熱田醫士と共に菊號にて來ましたその夜父から貰つた短刀を出して見せました處、姑と二人で怒りました。

『親や夫を殺せとてその短刀を持來りしならん、それあるが爲めに枕を高くして我等は寢る事が出來ぬ、我が家に居る氣なら早く返してしまへ』との詞、人を殺すために貰つたのではなし父が士族堅氣を先方ではわるくとつたのでせう。その翌日早速小包で送り返しました。

（斯る誤解の生じ易き場合にかゝる擧動をなすは不注意にはあらずや）

▲饂飩一杯で一夜の詫▼

七月十九日姑は寄佐の杉山家へ一夜泊りでゆき、歸つた翌晩汽車の都合で六時には夕飯を上る譯にゆきませんので、姑が行水使ふて散歩に行かれたあと、命ぜられた饂飩(何日も煮て上るのでそのやうにしておくと)七時頃歸られて、あさが給仕に大そう御不興で「何だこのうどんはイヤだら喰ふなといふ扱ひか、好い加減に人を馬鹿にしろ、私が車夫や馬丁の婢ぢやあるまいし、大抵にするがよい」と叱りつけて居ますので、その前へ行つて「私まことにすみませんでした、どうぞ御免下されませ」と詫りましたら

「イヽエ私は一切詫は受けません、あやまる位なら何故そんな事をしました」「ハイ何日もの通りで召上るのかと思ひまして」と申すと夫が側から「思ふから悪い、アヽだらう、かうだらうと人に物尺をあてゝはかるそんな失敬な事があるものか」と怒り出す、一夜詫ても中々解けませんので、遂には姑から「身を引け」と申されます、夫に詫ても「しらん」とのみ「テハ仕方がございません御暇を頂きませう」と申しましたら、姑が身を引けとは云ふたが何も歸れとは云はぬと申しますので、その夜はヤツト家へ寢ることが出來ました。

▲姑が嫁へ手をついての頼み▼

その翌日出勤して後、姑は私に向ひ「とてもお前は一生こゝに居られるものではないのだから、今の内に覺悟をきめなさいよ、どうぞ御頼み申ますと」、煙管で疊をたゝき〳〵、しまひには手をついて私へ叩頭なさるので、私はどうしていゝのだか、こんなに困つた事はありませんでした、下女は氣の毒さうな顔をして私を見て居ました。

「夫れではお姑樣、縁あつて參りましたもの、どうぞ御世話になりたいと思ひますのですが、それ程の御にくしみでしたら、どうも止むを得ません、相當の順序を持て御話下さいまし」と申したら「ハイさうしたらお前は都合がよからうが、こちらの都合が悪いので、さう氣がついたらそちらから身をおひきなさい、誰も可愛一生です、一度しか一生には生れてこぬのですから、その可愛い一生を、ましてや老先みじかい私は御前と住むはいやだ、どうぞかみわけて身を退いて下さいよ」との御頼み、姑が手をついての頼みをとう〳〵きくことの出來ませんでした。

▲飛んで火に入る夏の虫▼

八月二日の夕私は夫の脊を洗ふて居ますと、姑が秋やとよびますので、秋は丁度勝手に立つてあさと話して居ましたので「ハイ只今」と姑に返事して置いて、「秋や早く行つてごらん」と申ました、夜食後姑は私

に向ひ、是迄六人も貰つた嫁の内、お前の樣な女はない、專門の學問をした女は夫れだから駄目だ、もうこういふ女と一時も一所に居るのはイヤだ、春志さん私は隱居するから御前はこの人と一所に御出で、それとも世間は廣いのだから返してあとを探してはどうです
春志「とにかく今夜はおそうございますから明日にしませう」と取成してくれましたので、その夜はすみましたが、翌朝になると姑が「春志さん昨夜のつゞきをやつておくれ」と申出しましたので、夫も遂に「東京へ行つて新方面を開いて來い」と申ました、私はやむを得ず荷造をして居ますと、雪子が泣き出しました、で共に手を取つて泣きましたら、夫が一所につれて行けと申しますので、二人して家を出ましたが、フト布佐の杉山へ通り路故、寄らうと思寄りましたら、東京から迎が來たのでなければ二三日泊つて行けと申され、杉山に逗留して居る內に、早苗樣安食へ御出下さつて話をまとめて來られましたのでその時早苗樣仰に「一旦云出したことは通したがる母の氣性としては又隱居の件を持出すかもしれぬが、相當の處ならきくもよし又下女をつけて月に五十圓の七十圓のと云はゞその時は又私の量見があるからと云ふてくれましたので、一旦早苗樣の奥樣におくられてかへりました、この時から姑も夫も置かぬと決心したのでした。

▲第二回の東京行▼

雪子(先々妻の子)が修學旅行の爲八月二十二日出京しまして、二十六日夫病氣の電報に接して歸りました、此時から姑は每夜襖を明けて寢ました、そして每朝春志に「ホントに決心の遲い男だね、自分の理想に叶ふ女のある迄何遍でも取り代へて見るものだ」と申してせめますので、夫は「エ、さうするとよいのですが年を取ると氣力がなくなりますので」と辯じて居ました、スルト姑は「決して世の中に是限り嫁がないなぞと云ふ事がある筈の者ではない、例へばこの人より惡くつても、それが天命である、七人目でなければ治まらんと易にあるものを、年をとらぬ內に早くきめなければ損だよ」と、口を酸くして云ふて居ました。

▲青森出張の留守▼

九月二十一日夫は青森へ十日の豫定で出張しました、その留守に私は障子を張らうと思ふて糊を煮て居ますと、姑はだまつてそれを見て居ましたが、やがて障子の紙を切りはじめると、いきなり大聲あげて「佐々木

の家には佐々木の家風がある、何故私に一言のことはりもなく障子に手をつけた、人に斷らずに手をつける位では、定めし本職も及ばぬ程上手であらう、サア見事に張つて見よ、第一コンナ糊の實方で張れば春志が歸つて來て、皆片端からはがしてしまふそんな障子を張つて何になる」との御怒り、マアとんだ事をしたと思ふても急にはできませんのが私の氣性「ヘイ夫では今日はやめませう」と申ますと「ソンナ無責任な話があるものではありません、やりかけた事はやりなさい、ドンナ手際か、こゝで拜見します」「イヽエ御母樣決して上手だから張るのではございません、たゞ穴さへ塞げばよいのかと思ましたので」と申ましたら「私はまだこの年になるけれどコンナ嫁に出逢つた事がない、家の中の事を一つも相談しないで、自分勝手にする、マルデ私は宿屋を泊つてあるく樣なものだ、ホンニ此處は寄合身代、一名合名會社だからね」さる深川の叔母に當る人が八月から來て居てその側から「ホントに姉さん私は側で見て居て齒痒い樣ですよ、だめですよ、コンナ人置いたつて」とかう仰るので、私は只自分の至らぬのに泣きました。

その翌日何か祭りがあるので、下女二人は二里許先の村へ遊びにやりました、お晝に鰹魚のさしみを作りました處、姑と叔母と二人で召し上り乍ら、三木枝（三人目に來た方）はさすが本職に就て習つた丈にさしみは上手であつた、誰の前へ出しても恥しくない、コンナさしみは喰べられるものではない、來年からは料理人を東京から雇つてさせなければ駄目だアー」と嘆息なさるので、又一層煩悶いたしました。

夕方下女二人歸つて參りまして「今日は奥さん逢ふ人ごとに（これは重に工夫）ドウシテ今度の奥樣はまだ居るかと聞かれて私共は挨拶に困りました」と申しますので嫌な女には困りました。

晩になりますと姑が「何の彼のと云ふても廣枝は足掛三年も居たから隨分實家から氣をつけて、何かよこしたよ、それも澤山でなければ春志の氣に入らんから、澤山づゝよこしたれ」と仰有る、私の里は子供も多し再婚ではあり、送り物が少くつて、お氣にめさないのは知つては居れど有福ならぬ實家などではトテモ届きません。

▲いよ〳〵離別▼

十月二日夫は歸りました、杉山の二女が縁付く祝物を買つて歸宅早々夫れを出せと申しますので、私風呂敷をとくが早いか、姑が奪ひとつて勝手の方へ持つて行き、下女達に見せてサッサと仕舞つてしまひました夫の貌には云ひしらぬ憂愁の雲が見えました。

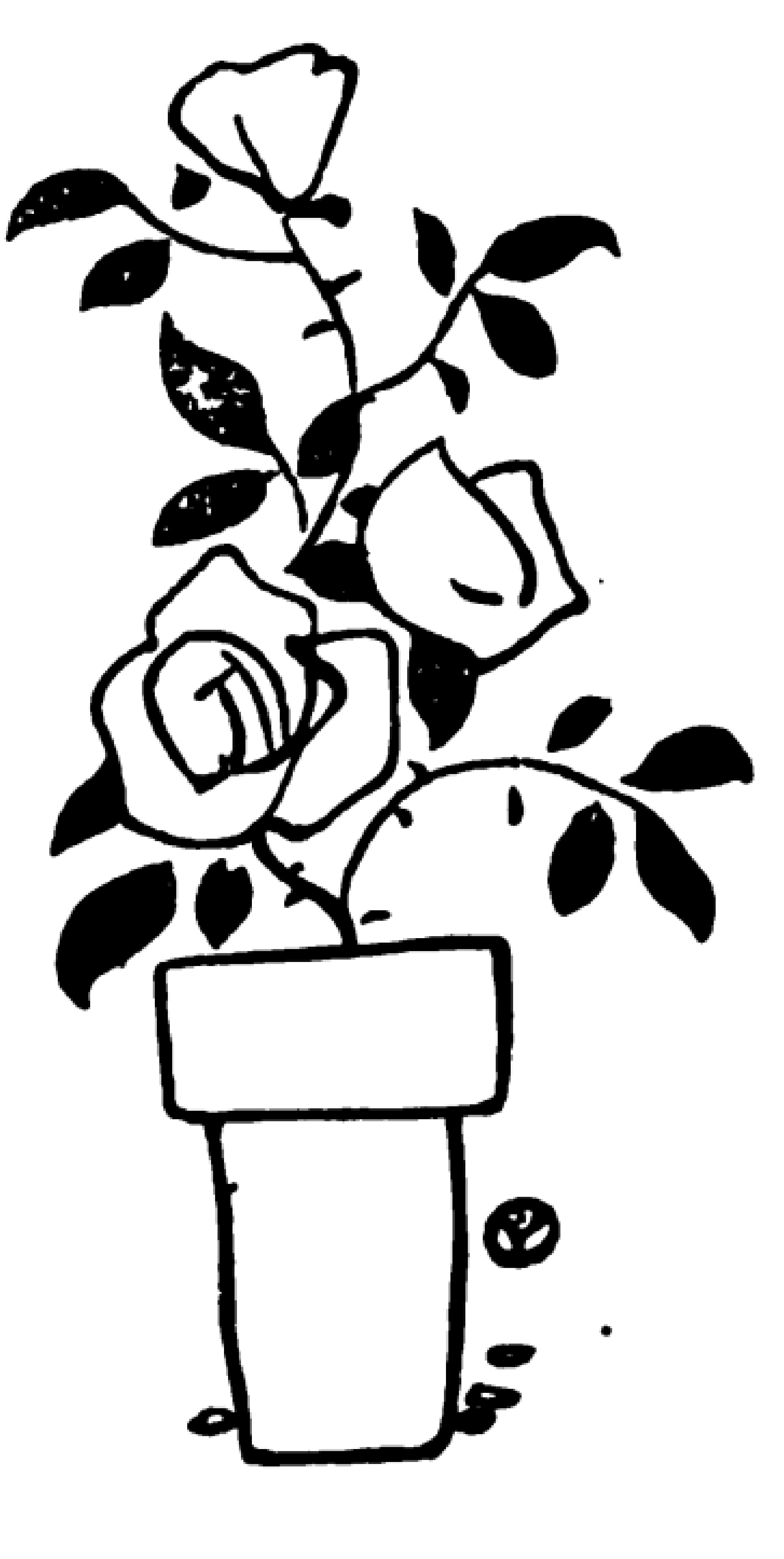
その翌日叔母と母と布佐の杉山へ行きました、多分此時早苗さんに夏以來私の事につき何か言はれたのでせう、その夕方から夫の態度がガラリと變りました、それでも夫はまだ別れる氣はなかつたのでした、スルト姑が翌朝又々隱居云々の件を持出しました、夫は絶對に不承知でした、夫れは經濟が許しませんので、處

が母はドウしてもきゝません、遂に『云ふことをきかなければはり倒す、私の息子だからはり倒してもよい』と申ますと、孝心深い夫の事とて『どうも困りましたな』といふ『ソンナラ親を捨てるか』と威丈高になつて申しますので『イヽエ親なんぞ捨てやうたつて捨てられるものぢやありません、さうなれば自分の身を捨てます』あゝ夫は私故にかく迄の御心勞、どうしても身を引かねばなるまいと、心から泣いて夫に謝して居ました、それから夫も決心して私をかへす氣になりまして、モウ一切私には何にもかまはずお客樣扱にしてゐました、さうして辛くしたらば私から身を引くだらうと、一週間許りつらくしました、デモ私には自分から云出す勇氣はありませんで、生ける心地もなく過しました、二十四日の日曜に東京へ來て、媒酌人に話しまして、二十六日にそしらぬ風で歸つて來ました、私は多分さうとは察して居ました、姑が『嫁にきて三年や五年はいつでも夫には捨てられるのだからねえ』とさも愉快氣な面持、アヽ私は勿體なけれどその時許りは殘酷な姑樣だと思ひました。

モウ別れるとなつては口にこそいはね、心ではさすがに氣の毒に思ふと見えて、歸る四五日非常にやさしく、折柄の風邪で床につき居りまして、一寸も側を放しませんでした、私もそれと知つて看病するつらさ云ふ譯にも行かず夜半は煩悶の爲汗もしとゞになりまして夫の君は如何にと見れば、矢張り悶えて居らつしやると見えて、寢卷が絞る程の汗、二晩といふものお互にマンヂリとも致しません、言はぬは云ふにまさるとやら、たゞ御察に任せます。

かくして遂に十月三十一日の朝、姑に手強く談じられて、夫は私に宣告しました『親だからねえ』とのみ枕に貌を打ち伏せて、暫くすゝりなきの聲がきこえました。そして握手をしつゝ、一時十二分の汽車にて實家に歸つて參りました。

こゝに至つて一年間の煩悶は遂に何等の効を奏せずに終りました。



才媛文壇懸賞募集（四月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十行以内）

▲日　記（二十字詰十行以内）

▲書簡文（二十字詰十行以内）

▲いろ〳〵の經驗（十行以内）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲笑話　▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞貳圓、地賞壹圓、人賞五拾錢

△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△いろ〳〵の經驗（賞壹圓）

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二册
内　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	…	…	…	五十錢
四半頁	…	…	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	…	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年三月廿六日印刷納本　第拾卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番 千十八番
本局　二千六百二十番 三千二百二十九番

千載之好機＝特價提供＝四月十五日限

帝國百科全書

全部貳百册

菊版紙數每編三百餘頁

定價　並製一册四拾錢　特製一册五拾五錢

〔製本二種〕●並製　菊判洋裝並綴　全部二百册　定價金八拾圓　●特製　菊判總クロース金文字入美本　全部二百册　定價金百拾圓

帝國百科全書全部貳百卷完成す。是れ實に**我出版界**に於ける**未曾有の大事業**なり。本書每卷三百有餘頁全部六萬參千餘頁より成り、**著者は盡く專門の博士學士**にして、其編述の旨は、政治行政、法律經濟、農工商業、歷史、地理、文學美術、理科、哲學、教育、語學等の各種に亙り、方今世界の思想界と物質界とに於ける總ての最も進步發達せる理論と事實とを網羅す。大英百科全書が世界に於て萬種の事物を網羅せる圖書なりとせば、**帝國百科全書**は少くも**我日本帝國**に於ける唯一の「エン**サイクロペヂア**」なりと稱するも誣言にあらざるを信ず。蓋し卷帙の浩澣と、內容の精選と、各學科の具備とに加へて、**其代價の極めて廉**なることに於て、**前古無比**なるべし。宜なる哉此等の各編が、何れも**數版乃至數十版**を重ねて嘖々たる世上の好評を博せしことや。

若し夫れ本書を座右に備へんか、恰かも一個の圖書館內に入るが如く、百般の學科は求むる所として得られざるはなく、千様の疑義も立ろに決せざるはなし。之を裝飾の上より見るも、四段詰高さ四尺幅三尺有餘の書架を塡め、書齋の光彩を添ふる幾何ぞ。而かも此六萬參千頁を藏する全部貳百卷並製の定價は僅かに八拾圓、特製百拾圓、是れ既に至廉例類の罕なる所なるに、更に今回是れが**完成紀念**として**並製**は六十圓、**特製**八拾圓の無比の大廉價を以て此浩澣にして有益なる大寶典を提供せんとす。

本館は斯く**破天荒の特價を提供**すると共に、特種の科目に屬する各編のみを購讀せんとする人々の爲めに、更に**各專門書**を蒐めて之を**拾四部類**に分ち、各科目に對し**各大割引特價**を設け、更に又讀者の**撰擇取捨**に便せんため別に**册數割引法**を作りて、諸彥の高需に應ぜんとす。

實に本書は、各種の學科を詳述せる最精最良の百科全書なり。殊に他の類書に比し本書の特長とする所は、各編分册なるが故に、或一科目に就て調査若くは研究せんとするに、携帶に便に、繙讀に容易く、机上にも燈下にも、行住座臥の間、何處にも自在に繙き得るにあり。斯る便利にして裨益多き空前の大事業が、今や完成するに至りたるは、實に昭代文運の隆盛に因らずんばあらず、**今回本館**が**其大成**を**期**として**特價販賣**の**便法**を設けたるは、一に昭代の恩澤に酬ゐ、以て國家の文化に貢獻する所あらんとするに外ならず。

江湖各位、幸に此好機を逸せず、速かに御註文あらんことを切に希望する所なり。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館

女（後付の一）

完成紀念 帝國百科全書

政治行政……十四册

(編次)	(書名)	(著者)
三三	日本帝國憲法論	法學士田中次郎君著
六八	國法學	法學士岸崎昌君 中村孝君 共著
一四四	國家學	法學士南弘君著
一四五	政治學	法學士南弘君著
四七	政治汎論	法學士永井惟直君著
四六	政治史	法學士森山守次君著
一三五	政治學史	法學士津田欽一郎君著
八〇	議會及政黨論	法學士菊池學而君著
一〇三	議院法提要	法學士工藤重義君著
八七	行政法汎論	法學士小原新三君著
九一	行政法各論	法學士小原新三君著
八六	行政裁判法論	法學士小林魁郎君著
一八五	都市經營論	法學士矢田七太郎君著
一八四	殖民政策汎論	法學士山內顯君著

法律……十四册

(編次)	(書名)	(著者)
一六	法律汎論	法學士熊谷直太君著
二七	法理學	法學士丸山長渡君著
三五	國際公法	法學士北條元篤君 法學士熊谷直太君 共譯
三三	國際私法	法學士中村太郎君著
二〇	民法總則篇物權篇釋義	法學士丸尾昌雄君著
四四	民法債權編釋義	法學士丸尾昌雄君著
二二	民法親族篇相續篇釋義	法學士上田豐君著
六六	民事訴訟法釋義	法學士梶原仲治君著
九六	刑事訴訟法論	法學士溝淵孝雄君著
一〇〇	刑法論	法學士島田鐵吉君 法學士宮城長五郎君著
五一	日本法制史	文學士三浦菊太郎君著
一〇四	支那法制史	文學士淺井虎夫君著
一七三	獨逸法	法學士宮內國太郎君著
一七四	英米法	法學士永井亨君著

財政經濟……十册

(編次)	(書名)	(著者)
三一	財政學	法學士笹川潔君著
一八二	會計法論	法學士工藤重義君著
一九五	國債論	法學士工藤重義君著
一九六	國債史	法學士工藤重義君著

女(後付の二)

特價提供の期限は本月十五日を踰えず

商科……十一册

編次	書名	著者
七〇	經濟汎論	法學士池袋秀太郎君著
一六四	經濟學史	法學士小川市太郎君著
一二四	經濟政策概論	法學士守屋源次郎君著
一七八	法制經濟概論	法學士大原彌一郎君著
一六六	世界產業制度論	法學士相良維男君著
四〇	最新統計學	法學士夏秋龜一君著
二九	商法汎論	法學士添田敬一郎君著
四九	運送法	法學士菅原大太郎君著
三八	船舶論	法學士赤松梅吉君著
一八一	海上保險法	法學士秋野沆君著
一八五	海損法	法學士秋野沆君著
九九	保險通論	理學士奥村英夫君著
三八	商業經濟學	法學士清水泰吉君著
四四	稅關及倉庫論	法學士岸崎昌君著
九〇	銀行新論 附外國爲替	法學士野口弘毅君著
一九九	金融論	法學士佐々木雄次郎君著
一六五	外國貿易原論	法學士野坂晉治君・法學士辻宏吉君共著

農科……廿九册

編次	書名	著者
一〇	農學汎論	農學士恩田鐵彌君著
六九	農業經濟學	農學博士横井時敬君・農學博士澤村眞君共著
七五	農政學	農學士石坂橋樹君著
三九	氣候及土壤論	農學士佐々木祐太郎君著
八一	土地改良論	農學士上野英三郎君・農學士有働良夫君共著
一九一	農業土木學	農學士鈴木敬策君著
六一	農用器具學	農學士西村榮十郎君著
四	肥料學	農學士木下義道君著
一四	植物營養論	農學博士稻垣乙丙君著
一二四	植物病理學	農學博士大森順造君・農學士山田玄君共著
一三	栽培汎論	農學博士横井時敬君著
六八	改訂增補 栽培各論	農學士田中節三郎君著
一一〇	稻作改良論	農學博士横井時敬君著
九四	園藝通論	農學士高橋久四郎君著

女（後付の三）

完成紀念 帝國百科全書

編次	書名	著者
一一九	園藝各論	農學士高橋久四郎君著
五三	畜産汎論	農學士高見恒長君著
四四	畜産各論	農學士田口晋吉君編
九二	家禽學	農學士月田藤三郎君著
一二六	獸醫學汎論	獸醫學士小倉鉀太郎君著
八八	養蠶及製糸論	農學士井上正賀君編
五七	黴菌學	農學士井上正賀君著
七六	農藝化學	農學士井上正賀君著
二八	日用化學	農學士井上正賀君編
七	農産製造學	農學士楠巖君編
二〇	食物論	農學士井上正賀君著
三〇	森林學	林學士奥田貞衛君著
三七	提要造林學	林學博士本多靜六君著
五五	森林保護學	林學士新島善直君著
一〇三	水産學	農學士塚本道遠君・農學士井上正賀君共著

工科……六册

(編次)	(書名)	(著者)
四二	分析化學	工學士内藤游君・工學士藤井光藏君共著
三九	應用化學	工學士蜂屋貞興君著
七一	應用機械學	工學士重見道之君著
一一三	新撰應用重學	理學士刈屋他人次郎君著
一二七	應用定量分析	大阪醫學校講師須田勝三郎君著
三一	工業政策	法學士鹽田隆次郎君著

理科……二十册

(編次)	(書名)	(著者)
六三	有機化學	理學士龜高徳平君編
六五	無機化學	理學士眞島利行君編
六九	衛生化學	大阪醫學校講師須田勝三郎君著
一四一 一四二	普通物理學(上下二册)	理學士福井政一君著
七二	植物學新論	理學士飯塚啓君著
九七 九八	新撰動物學(上下二册)	理學士會田龍雄君著
一五二	動物發生學	理學士飯塚啓君著
一三二	鑛物學	理學士大築佛郎君・理學士八谷彪一君共著
一八	地質學	理學士佐藤傳藏君著
一二五	地文學	理學士吉田弟彦君著
一四〇	高等天文學	理學士一戸直藏君著
六〇	星學	理學士須藤傳治郎君著
七二	近世氣象學	理學士岡田武松君編

女(後付の四)

特價提供は大なる好評を以て迎えられたり

数學……七册

(編次)(書名)(著者)

- 一〇七 最新電氣學 理學士萩原拳吉君著
- 一三九 普通人類學 文學博士坪井正五郎君閲 人類學專攻八木奘三郎君著
- 一八 應用生理學 醫學士酒井谷平君譯
- 一九三 一九四 自然科學 上下二册 理學博士齋田功太郎君著

(編次)(書名)(著者)

- 六 新撰算術 理學博士高木貞治君著
- 一七 新撰代數學 理學博士高木貞治君著
- 一九 新撰幾何學 理學士林鶴一君著
- 一一九 近世幾何學 理學士藤田外次郎君著
- 六三 新撰三角法 理學士松村定次郎君著
- 六六 新撰微分積分學 理學士松村定次郎君著
- 七七 新撰解析幾何學 理學士松村定次郎君著

地理……六册

(編次)(書名)(著者)

- 二 日本新地理 理學士佐藤傳藏君著
- 八 萬國新地理 理學士佐藤傳藏君著

歴史……十四册

- 一三四 韓國新地理 文學士田淵友彦君著
- 一五三 清國商業地理 法學士勝部國臣君著
- 二六 商工地理學 法學士永井惟直君著
- 一〇七 政治地理學 法學士山本信博君著

(編次)(書名)(著者)

- 一 世界文明史 文學博士高山林次郎君著
- 三三 支那文明史 文學士白河鯉洋君 國府犀東君 共著
- 一〇一 日本文明史 文學士大町桂月君著
- 一三三 印度文明史 文學士常盤大定君著
- 一五 日本歴史 文學士木寺柳次郎君著
- 一四一 西洋歴史 文學士吉國藤吉君著
- 八五 東洋歴史 文學士幸田成友君著
- 一三九 朝鮮史 文學士久保天隨君著
- 一六三 北米合衆國史 法學士山本信博君著
- 四八 日本風俗史 文學士坂本健一君編
- 一〇六 最近外交史 法學士原田豐次郎君著
- 一二三 世界殖民史 法學士山内正瞭君著
- 一〇五 露國侵略史 法學士須崎芳三郎君著

女(後付の五)

女(後付の六)

特價提供は既に豫想以上の注文を得たり

- 一四 倫理學史 文學博士 蟹江義丸君譯
- 三 東洋西洋倫理學史 文學博士井上哲次郎君校 文科卒業木村鷹太郎君著
- 一九二 日本倫理史 文學士 有馬祐政君著
- 一三一 社會倫理學 文學士 德谷豐之助君著
- 一四九 佛教倫理學 文學士 蜷川龍夫君著
- 八九 心理學 文學士 速水滉君著
- 一三 兒童心理學 文學士 松本孝次郎君著
- 一四六 近世心理學 文學士 德谷豐之助君著
- 一九九 社會心理學 文學士 小林郁君著
- 三五 哲學汎論 文學士 藤井健次郎君著
- 三 西洋哲學史 文學博士 蟹江義丸君著
- 一五六 最新西洋哲學史 文學士 岡島誘君著
- 九三 支那哲學史 文學士 中內義一君著
- 一七五 一七六 純正哲學（上下二冊） 文學博士 井上圓了君著
- 五 宗教哲學 文學博士 姉崎正治君譯
- 一四三 處世哲學 文學士 杉谷泰山君著
- 一三〇 佛教哲學汎論 文學士 石原即聞君著
- 一七二 儒教哲學概論 文學士 蜷川龍夫君著
- 一〇〇 世界宗教制度論 法學士 工藤重義君著
- 一六二 比較宗教學 文學博士 南條文雄君著

- 一六 比較神話學 文學士 高木敏雄君著
- 八〇 世界宗教史 文學博士 加藤玄智君譯
- 一一八 日本佛教史 文學士 石原即聞君著
- 一一七 日本儒學史 文學士 久保天隨君著
- 一七三 近世儒學史 文學士 久保天隨君著
- 一九〇 基督教史 文學士 藤谷深勵君著
- 一六九 認識論 文學士 淀野耀淳君著
- 一三三 進化論 文學士 十時彌君編
- 一二八 宗教進化論 文學士 融道玄君著
- 一八九 社會進化論 文學士 小山東助君著

教育……四冊

（編次）（書名）（著者）

- 四五 東洋西洋教育史 文學士 中野禮四郎君著
- 七四 教育學 文學士 熊谷五郎君編
- 一四七 最新教育學 文學士 中村寅松君著
- 一六八 教育原理 ドクトル 尺秀三郎君著

以上……全部二百冊

女（後付の七）

特價發賣方法

（甲）各位御購求上ノ御便利ヲ計リ全部二百巻ヲ大別シテ十四部類トシ各部類ニ應ジテ特別大廉價ヲ提供仕候、尤モ分類中或ハ其當ヲ得ザルモノ無キヲ保セザレバ是等ハ册數ニ變動ナキ限リ各位ニ於テ彼此取捨セラル、モ妨ゲザル次第ニ御座候

（乙）部類ノ如何ヲ問ハズ御好ミノ書目御撰擇ノ上御購求相成候方々ノ爲メ更ニ册數立大割引特價ヲ提供仕候

▼特價期限

四月十五日限り

（御注文は必ず前金に限る）

（甲）（乙）共御註文の册數に應じ左記の郵送料御添附被下度候

郵稅　●並製　一册八錢（平均百二十匁以内）
●特製　一册拾錢（平均百五十匁以内）

多數の御註文は小包送りの方御便利に候へば前記平均重量を御算當の上送料御送附ありたし

（甲）……部類別特價表

類別	册數	並製の部 定價	並製の部 特價	特製の部 定價	特製の部 特價
●政治行政	拾四册	五圓六拾錢	四圓五拾錢	七圓七拾錢	六圓拾錢
○法律	拾四册	五圓六拾錢	四圓五拾錢	七圓七拾錢	六圓拾錢
●財政經濟	拾册	四圓	參圓貳拾錢	五圓五拾錢	四圓四拾錢
○商科	拾壹册	四圓四拾錢	參圓五拾錢	六圓五錢	四圓八拾錢
●農科	廿九册	拾壹圓六拾錢	八圓八拾錢	拾五圓九拾五錢	拾貳圓
○工科	六册	貳圓四拾錢	貳圓	參圓參拾錢	貳圓七拾錢
●理科	貳拾册	八圓	六圓貳拾錢	拾壹圓	八圓四拾錢
○數學	七册	貳圓八拾錢	貳圓參拾錢	參圓八拾五錢	參圓拾錢
●地理	六册	貳圓四拾錢	貳圓	參圓參拾錢	貳圓七拾錢
○歷史	拾四册	五圓六拾錢	四圓五拾錢	七圓七拾錢	六圓拾錢
●文學美術	拾七册	六圓八拾錢	五圓參拾錢	九圓卅五錢	七圓貳拾錢
○語學	拾四册	五圓六拾錢	四圓五拾錢	七圓七拾錢	六圓拾錢
●哲學	卅四册	拾參圓六拾錢	拾圓參拾錢	拾八圓七拾錢	拾參圓八拾錢
○教育	四册	壹圓六拾錢	壹圓參拾錢	貳圓貳拾錢	壹圓八拾錢

（乙）……撰取册數立特價表

▶並製◀

册數	價
五册迄	壹册金參拾七錢
六册以上十五册迄	同金參拾五錢
十六册以上三十迄	同金參拾四錢
卅一册以上五十册迄	同金參拾參錢
五十一册以上百册迄	同金參拾壹錢
百一册以上二百册迄	同金參拾錢

▶特製◀

册數	價
五册迄	壹册金五拾錢
六册以上十五册迄	同金四拾八錢
十六册以上三十册迄	同金四拾六錢
卅一册以上五十册迄	同金四拾四錢
五十一册以上百册迄	同金四拾貳錢
百一册以上二百册迄	同金四拾錢



柳清香油
けいしかう油
GIYA
RYUSEIKO
柳清香
瓊姿油
美術小間物
香水化粧品
其他流行品種々取揃置候間御狂駕奉願候
柳屋本店
東京日本橋通二
電話本局二二一

女學世界
（毎月一回廿六日印刷納本）
明治四十三年三月廿六日印刷納本
第拾卷第五號
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

婦人の三大誤謬を訂す

第一、急病と見ると、胃痙攣の樣なものでさへ、醫者よ藥よと大騷ぎをやる、それがあの所謂婦人病になるとどうです、病人自身もわきに見る人も、重く見ない樣です、是は婦人病の病勢が徐々であつて、急病に見る所の顏をそむける樣な、苦みは、即座に來る事が少ないからでもありませうが、此病勢の徐々であるといふ事が、そも〱病魔が勢力を逞ふするに最も都合がよいので、皆さんが起きて笑ひ興じて居る時に、寢て樂しい夢を貪つて居る間に、病魔は一歩一歩手を擴げ、日一日と勢を得、數年の後には恐るべき結果を生むのであります而して婦人病は、婦人一人の病氣のやうであつて實はさうでないのです、たとへば、此に五人の子供をもつべき體質の婦人が、たま〱婦人病の爲めに、一人もなかつたとして御覽なさい、此婦人は五人の子供を自ら手にかけて殺したと同じ結果になりはせぬかと存じます又生む子も生む子も弱いと云ふ樣な母がありますが、何も知らずに、母の因果を脊負つて、生れた子こそ憫然と云はねばなりません、此點に付ては、婦人病は四百四病數ある中に、絕えて無い處の害毒を流すので御座います。

第二、一度のモルヒネ注射で胃痙攣を止める樣な甘い療法は多くはありませぬ、婦人病なども、一日や二日の賣藥で、必ず結果が現はれるものとはいへかねます、病院に這入つてもさうではありませんか、一ヶ月位はすぐかゝつて仕舞ひます、大體賣藥は便利過ぎます、病院に這入つたとなると、第一病人の決心がちがひ、醫者の手前我儘がいへぬ、それが賣藥となると、すぐ勝手が出る折角治りかけた病氣も元のヨリに戻る樣になるから中將湯を用ふる、婦人は一つ病院に這入つた、覺悟で、根氣よく服藥を御續けなさい、病氣は誓つて治ります

第三、世人は往々賣藥の効果を疑ふ樣にも見えますが若し理由ありとすれば、それは一藥萬能の弊でせう、然し津村順天堂は決してそんな事は申しません最も進歩した學理と多年の實驗とにより、十數種の加減藥を作つて居ります、皆さんが自己の病狀を詳しく東京日本橋通四丁目津村順天堂に御報知になれば病狀に適應した專門藥が得られます、而して中將湯の効能は●子宮病にて下腹痛み又は白帶の下る人●腰足冷えて頭痛する人●逆上性にて脊肩のこる人●ヒステリー症にて氣のふさぐ人●血の道にてぶら〱惡き人●月經滯り又は月經不順の人●子宮病にて懷姙せざる人●懷姙して安産を望む人●産後の肥立あしき人等に特効あります

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）